
トラベル・トラベル・ポケモン世界
グレイグレイ

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

トラベル・トラベル・ポケモン世界

【作者名】

グレイグレイ

【あらすじ】

ポケットモンスターシリーズの二次創作です。

オリジナルの主人公が、オリジナルの地方を旅する話です。

「トラベル・ポケモン世界」の続きの物語です。

最初にあらすじがあるので、前作を読んでいなくても大丈夫です。悪の組織との戦いで、ポケモンが人間を攻撃する描写があるかもしれません。

苦手な方はご注意ください。

ゲーム本編とは大きく異なる技など

この小説では、技の威力や命中などを定量的に扱っておらず、ターンも存在しないため、必然的にどの技にも作者の独自解釈が入ることになります。

しかし、その中でも特にゲーム本編とは大きく異なった解釈をしている技がいくつかありますので紹介します。

紹介した技が全て小説内で登場するとは限りません。

「まもる」

・ポケモン不思議のダンジョンのように、無敵状態がしばらく継続し、無敵状態のまま相手に攻撃することも可能。

・ただし1度使うと、無敵状態が終わった後しばらく経たないと再び使えない。

「じこさいせい」、「タマゴうみ」、「こうごうせい」、「はねやすめ」、などの回復技

・回復技は、1度使うとしばらく使えない。

「みだれづき」、「みだれひっかき」、などの連続攻撃技。

・連続攻撃技は、基本的にどれも強力な技として扱っている。

・ポケモン不思議のダンジョンのように、1発ごとに普通の攻撃技と同じくらいの威力があると解釈。

「ふういん」

・ポケモン不思議のダンジョンのように、相手を一定の時間動けなくする技として扱っている。

「つるぎのまい」、「コットンガード」、「こうそくいどう」などの能力上昇技

・ゲーム本編では『能力を上昇させる』という効果だが、この小説内では『能力が上昇した状態にする』という効果で扱っている。

・例として、ゲーム本編では「つるぎのまい」は攻撃力を上昇させる技なので、技を使用すればするほど攻撃力が上昇していく。しかし、この小説内の「つるぎのまい」は攻撃力が上昇した状態にする技なので、技を1回使用して攻撃力が上昇した状態になった後は、それ以上に技を使用しても効果は無い。

・また、小説内の扱いでは、自身の攻撃力が下がった状態で「つるぎのまい」を使った場合も、同じく攻撃力が上昇した状態となり、元々下がっていた攻撃力は無視される。

・（この小説内の能力変化の扱いは、加算ではなく代入ということである。）

・まとめると、能力上昇技は1回使うだけで十分ということである。

「オーバーヒート」、「インファイト」などの攻撃後に能力が下降する技

・ゲーム本編では攻撃後に『能力が下降する』という効果だが、この小説内では攻撃後に『能力が下降した状態になる』という効果で扱っている。

・例として、ゲーム本編では「オーバーヒート」は、使用後に特攻が下降する技なので、技を使用すればするほど特攻が下降していく。しかし、この小説内の「オーバーヒート」は、特攻が下降した状態になる技なので、技を1回使用して特攻が下降した状態になった後は、それ以上に技を使用してもさらに特攻が下降することは無い。

・また、小説内の扱いでは、自身の特攻が上がった状態で「オーバーヒート」を使った場合も、同じく特攻が下降した状態となり、元々上がっていた特攻は無視される。

・（この小説内の能力変化の扱いは、加算ではなく代入ということである。）

その他の雑談など

この小説内では「遠距離攻撃」という表現がたびたび登場し、技に射程があるような扱いをしています。遠距離まで届く技と届かない技との明確な基準はありません。何となく技の名前と、ゲーム

内の技のエフェクトから連想して、遠距離まで届きそうな技を作者が独断と偏見で選んでいます。

また、この小説内では、同じ技でもポケモンごとに繰り出し方が違うと解釈しており、放つポケモンによっても遠距離まで届くかどうか変わります。ぶっちゃければ全て作者のさじ加減ということでもあります。

この小説内では、ゲームシステムの数値はほとんど無視していきますので、ゲーム的な議論はあまり意味がありません。この小説内の技「はかいこうせん」は、あくまでも「凄まじい威力の光線」であり、「威力150」ではありません。タイプ相性の有利も、あくまでも「効果が抜群」であり、「ダメージが2倍になる」とは言っていない。ポケモンの能力についても「カビゴンは動きが鈍いけど体力があるポケモン」というだけであり、「HP種族値が160、すばやさ種族値が30」という訳ではないです。

ポケットモンスターのゲーム本編をがつりやり込んでいる方にとっては、この小説の世界はムズムズするかも知れませんが、どうぞよろしく願います。

1 話目～10 話目（前作）のあらすじ

トラベル地方のコキョウシティ。そこにグレイという名の少年がいた。

ジュニアハイスクールを卒業して義務教育を終えたグレイは、家出するために相棒であるビビヨンというポケモンと共にコキョウシティを旅立った。（1 話目）

グレイは、サイショタウンでエレナという少女に会う。エレナはグレイと同じコキョウシティ出身で、同じジュニアハイスクールの卒業生であった。

グレイはポケモンバトルを通じてエレナと知り合いになった。（2 話目）

グレイはツギシティという町に着いた。ツギシティが気に入ったグレイは、しばらく滞在することにした。

ツギシティに来て2週間程度が経過したある日、グレイはコイキング売り一行と出会う。コイキング売りとは、弱いポケモンであるコイキングを秘密のポケモンと偽って売る商売である。

グレイはコイキング一行からコンビを組まないかと提案される。グレイの役割は、コイキングの進化後のポケモンであるギャラドスを使って町のトレーナーとバトルすることで、コイキングを宣伝するということであった。

グレイは、コイキング売り一行とコンビを組むことを決めた。（3 話目）

最初は借りたギャラドスで戦っていたグレイだが、宣伝効果は薄いと実感する。

話し合いの結果、グレイが自分で育てて進化させたギャラドスで戦うことになり、そのために商品のコイキングの中から一番好戦的な個体を選んで育てることにした。

しかし選んだコイキングは好戦的を通り越して戦闘狂の域であり、グレイは今後どのように育てるか頭を悩ませた。（4話目）

1週間が経ち、コイキングはギャラドスに進化した。

グレイはギャラドスの力を試すために他のトレーナーとバトルをした。

グレイが育てたギャラドスは予想以上の強さを見せるが、グレイの言うことを無視する場面があるという課題もあった。（5話目）

その後2週間が経過した。戦闘狂なギャラドスの成長速度は驚異的であり、このままではギャラドスを制御できなくなると感じたグレイは、新たな戦力としてチョロネコというポケモンを捕まえた。チョロネコで他のトレーナーとバトルしたグレイは、チョロネコとギャラドスの力の差は大きいと感じた。（6話目）

次の日、グレイは偶然にエレナと再会した。

グレイがコイキング売りの仲間になったと知ったエレナは、グレイを批判する。

そんな中、グレイとエレナの財布が盗まれる事件が発生。財布を取り返すために、2人組の犯人をグレイとエレナは2手に分かれて追った。

グレイは、直接盗んだ訳でない自分は悪くないという犯人の主張に対し、コイキング売りで同じような事を自分もやっているのだと思いい、反省し、コイキング売りをやめる決心をした。

一方エレナは、犯人からの言葉で、自分が恵まれた環境にいるのだと気がつく。(7話目)

次の日、グレイとエレナは再び会い、お互いに和解した。

グレイの挑発により、2人はバトルすることになった。

町外れにて、2人は壮絶なバトルを繰り広げたのであった。(8話目)

バトル後、グレイはエレナからジムリーダーに挑戦してみてもどうかと提案された。ジムリーダーを倒すことで貰えるジムバッジを所有する者は、ポケモンに関する品物を割引で買える事実を知ったグレイは、ジムリーダーに挑戦することにした。

また、エレナとの壮絶なバトルを繰り広げたグレイは、エレナに負けたくないという対抗心が芽生え、エレナをライバルとして意識し始めるのであった。(10話目)

登場人物の紹介

グレイ

手持ちポケモン ビビヨン／ギャラドス／チヨロネコ

・本作の主人公。15歳の少年。

・家出して最初は目的なく旅をしていたが、エレナと死闘を繰り広げる中でエレナに対してライバル意識が芽生える。

・家出しているため、資金源は旅先の町でのアルバイト。お金に苦
労していることもあり、旅に出てから少しお金にがめつくなった。
・戦闘狂で言うことを聞かないギャラドスを持ちポケモンに連れ
ており、扱いに手を焼いている。いつかギャラドスの戦闘欲求を満
たせなくなった時、クーデターを起こされるのではないかと強く警
戒している。

・大雑把な性格で、ポケモンへの指示にもその性格が現れている。

エレナ

手持ちポケモン ジュプトル／アブソル／チルット

・グレイと同じ町の出身、同い年の少女。

・グレイとは違い、一流のポケモントレーナーになることを目標に
旅している。

・ラボ・チルドレンという、ポケモン研究所から最初のポケモンを
もらって旅立ったトレーナーの1人である。

・キツチリとした性格で、ポケモンへの指示も細かく的確に行う。

グレイの手持ちポケモン

名前 ビビヨン

外見 きれいな翅はねをもつ蝶のようなポケモン

タイプ 虫／飛行

技 ちょうおんぱ／しびれごな／むしのていこう／サイケこうせん

特性 ふくがん（命中率が上がる）

性別 ♀

・グレイの相棒であり、とても素直で従順。

・戦闘スタイルは、相手を麻痺させたり混乱させたり、遠くから一方的に攻撃したりと、正面からぶつかる事を避けるような戦い方。

・弱点は、非力で打たれ弱く、強力な攻撃をくらえばすぐに倒れてしまうこと。

名前 ギャラドス（ニックネーム：KK）

外見 長い胴体をもつ、青い龍のようなポケモン

タイプ 水／飛行

技 にらみつける／たいあたり／かみつく／りゅうのいかり

特性 いかく（場に出た時に相手の攻撃力を下げる）

性別 ♂

・戦闘狂で、常に強者との戦いを求めている。暴れることが好き。

自分の戦闘欲求に極めて忠実で、グレイの指示や命令よりも自分の欲望に従う場合がある。

・戦闘スタイルは、攻撃技の他にも自分の体を使った肉弾戦でとにかく相手と殴り合う戦い方。

・弱点は、防御や回避などの攻撃的でない指示を無視するので、相手から必要以上にダメージをくらってしまうこと。

チョコネコ

外見 紫色の猫のようなポケモン

タイプ 悪

技 なぎごえ／すなかけ／みだれひっかき／おいうち

特性 じゅうなん（麻痺にならない）

性別 ♀

・悪戯好きでグレイをよく困らせる。ただし戦闘中はグレイの指示

にちゃんと従う。

・戦闘スタイルは、速い動きで相手を翻弄し、隙について攻撃する戦い方。

・弱点は打たれ弱いこと。グレイの他の手持ちポケモンに比べると未熟で弱い。

8話目～9話目で戦ったエレナのポケモン

ジュプトル

外見 二足歩行するヤモリのような緑色のポケモン

タイプ 草

技 リーフブレード／タネマシンガン／にらみつける／れんぞくぎり

特性 しんりよく（ピンチの時に草タイプの技の威力が上がる）

性別 ♂

・エレナの相棒。エレナがポケモン研究所でもらった最初のポケモン。

・グレイのビビヨンとの戦いの中で、「リーフブレード」と「タネマシンガン」を同時に操る事ができるようになった。

アブソル

外見 白い体毛に覆われ、刃の形をした角と尻尾をもつ四足獣のポケモン

タイプ 悪

技 にらみつける／でんこうせっか／かみつく／かげぶんしん

特性 きょううん（攻撃が相手の急所に当たりやすい）

性別 ♀

・エレナのエース。エレナへの忠誠心がとても強い。

・「かげぶんしん」は、素早い動きで残像を作って相手を惑わす技であるが、このアブソルが使う「かげぶんしん」は虚像を生み出すことができる。

チルット

外見 空色の丸い体に雲のような綿のようなフワフワな翼をもつ鳥のポケモン

タイプ ノーマル／飛行

技 つつく／うたう／みだれづき／しんぴのまもり

特性 しぜんかいふく（モンスターボールに戻ると状態異常が治る）

性別 ♀

・「しんぴのまもり」による状態異常の無効化により、グレイのビヨン退かせた。

・グレイのギャラドスと戦ってダメージを与えたが、倒すことはできなかった。

11 話目 成長（前）

△ i 6 0 7 9 | 3 8 3 1 1 ∇

△ i 6 0 8 0 | 3 8 3 1 1 ∇

エレナと激しいバトルを繰り広げた翌日。

グレイはヒトツシティにあるポケモンジムの前にいた。これからグレイはジムリーダーに挑戦するのである。

昨日、エレナと別れたグレイは、すぐにヒトツシティ行きのバスに乗ってヒトツシティに到着した。しかし、その日の内にジムリーダーに挑戦することはできなかった。

ポケモンジムには多くのトレーナーが挑戦しに訪れる。当然、挑戦者の中にはジムリーダーに全く勝てる実力なく挑戦する者もあり、それらを全部ジムリーダー1人が相手にするのは時間的な都合もあって不可能である。

そこで、挑戦者はジムリーダーの門下であるジムトレーナーと戦い、勝った者だけがジムリーダーに挑戦できる仕組みになっている。昨日グレイはジムトレーナーと戦い、ジムリーダーへの挑戦を認められた。そして今日、バトルの日時として指定された時間に間に合うようにジムの前に着いたのである。

グレイはバトルの手続きをするために、ジムの受付の者に話しかけた。

手続きの途中、受付の者に訊ねられる。

「バトルに使用するポケモンは何体に致しますか？」

「え？」

何のことだか分かっていない様子のグレイに、受付の者が説明を加える。

「1対1、2対2、3対3、好きなルールを選ぶことができます」

グレイは少し考える。グレイには圧倒的な強さを誇るギャラドスがいる。1対1のルールでギャラドスを出せば、負けることは考えにくい。

（だが……ポケモン関連の商品10%割引が目的とはいえ、人生初のジム戦でビビョンを使わないで突破するってのも微妙だよな……）

グレイは、自分と一番付き合いが長いビビョンを無視して何かを達成する事に抵抗感を覚えた。

（ビビョンよりも強いKKを戦闘に出さない選択肢はない。でも……2対2のルールでチョコネコだけ仲間外れっていうのも微妙だな……）

お忘れかもしれないが、『KK』はグレイがギャラドスにつけたニックネームである。

グレイは考えた末に、

「3対3で」

自分の手持ちポケモンを全員参加させることにした。

ジムの受付の者に案内され、グレイはバトルフィールドに案内された。

フィールドの横に、トレーナーの立ち位置らしき高台があった。

グレイは高台に立ち、フィールドを見渡した。

バトルフィールドは建物の中とは思えない程に天井が高く、面積も広大であった。フィールドの地面は全域にわたって、硬く乾燥した土とゴツゴツした岩で固められていた。水平な場所ばかりではなく傾斜のある足場も多く存在し、岩場によって高低差のある地形が広がっていた。

（デコボコした地形……工夫次第で色々な戦い方ができそうなフィールドだな）

グレイはそう思うと同時に、トレーナーとして未熟な自分が地形を最大限に利用することは無理だ、とも思った。

（エレナだったら、この地形を生かして上手く戦ったりできるのかもな……）

そんなことをグレイが考えていると、グレイとは反対側の高台に1人のお爺さんが現れた。

「お待たせして悪かったのう。君が挑戦者のグレイくんて間違いないのじゃな？」

現れたお爺さんはグレイにそう問いかけた。

「オレがグレイです」

「そうかそうか。ワシはこのヒトツジムのジムリーダー『ゴン』なのじゃ。知っておるかもしれんが、ワシが使うポケモンはドラゴンに關係するポケモンじゃ」

ジムリーダーのゴンと名乗ったお爺さんは、ちらっとフィールドを見渡して言葉を続ける。

「審判の準備も整ったようじゃ。早速じゃが、始めるとしようかの」
ジムリーダーのゴンはそう言って、モンスターボールからポケモンを出した。ゴツゴツしたフィールドに、ミニリュウが現れた。

ミニリュウ、ドラゴンポケモン。ドラゴンタイプのポケモンで、

へビのような細長い姿をしており、体は青色で腹は白色。愛くるしい瞳のせいで、全体的にかわいい印象をもつポケモンである。

ちなみに、一般的なミニリュウは高さが1・8 mであると言われるており、かわいい見た目の割には大きい体をもっている。

「さてグレイくん。君はどんなポケモンを使うのかのう？」

「オレが最初に使うポケモンはこいつです」

そう言い、グレイもポケモンを出した。

フィールドに、蝶ちょうのようなポケモンのビビヨンが現れた。

（ビビヨン、まずは最初の1体は頼むぜ）

グレイはそういう意思をこめてビビヨンと視線を合わせた。ビビヨンからも気合の入った意思を受け取る。

グレイは、直前に考えた大まかな計画を思い出す。

（相手の最初のポケモンは1番弱い奴だろうから、ビビヨンで確実に倒せるだろう。相手の2体目もビビヨンでなるべくダメージを与えて、あわよくば倒す。もしビビヨンが2体目に負けてもチョロネコで倒す。チョロネコは未熟だから2体目に負ける可能性もあるが、KKなら弱った2体目と無傷の3体目をまとめて倒せるだろう）

グレイは考えを続ける。

（例えばチョロネコが何もできないまま倒されても、KKの強さで何とかなる。エレナはこの爺さんに勝ってる訳だし、流石にエレナより強いって事はないだろ……）

グレイは思考を終えて、視線を目の前のバトルフィールドに戻した。

「考え事は、もういいのかのう？」

まるでグレイの考えを見透かしているかのようにタイミング良くゴンが声をかけてきた。

グレイの無言を肯定と受け取り、ゴンが審判に合図した。

審判の合図によって、戦いの幕が開けた。

「ビビヨン、むしのていこう」

ビビヨンは、虫タイプの特殊攻撃技「むしのていこう」を、遠くにいるミニリュウに次々に放った。「むしのていこう」がミニリュウに迫る。

「ミニリュウ隠れよ」

ゴンが指示すると、ミニリュウは高低差のある岩場の谷に入りこんだ。「むしのていこう」は岩場に阻まれる。

「ビビヨン、もっと上空！」

グレイに指示され、ビビヨンは高い位置から角度をつけて「むしのていこう」を放つ。

「近づいてはこないのじゃな。ならば「りゅうのはどう」じゃ！」

ミニリュウは、ドラゴンタイプの特殊攻撃技「りゅうのはどう」を放った。

ドラゴンタイプの攻撃技の中でも高い威力を誇る「りゅうのはどう」が、ビビヨンの「むしのていこう」とぶつかり合い相殺される。ビビヨンは自慢の機動力で「りゅうのはどう」を避けながら「むしのていこう」を放ち続ける。しかし相手のミニリュウは岩場に上手く隠れながら避けるので、なかなか当てることができない。

互角の戦いを繰り広げる状況に対して、ゴンが口を開く。

「すまんのうグレイくん。君のビビヨンは確かに強い。じゃが……ジムリーダーとは、自分のポケモンよりも強い相手のポケモンと戦う事に関してはプロなのじゃ」

グレイのビビヨンと、ゴンのミニリュウ。地力言えば、強いのはビビヨンの方である。ビビヨンの方が特殊攻撃力も、動きの速さも勝っていた。

しかしミニリュウは、弱い特殊攻撃力を強力な技を使うことで補い、遅い動きは地形を利用して補っているのである。

再びビビオンが「むしのていこう」を放つ。しかし、ミニリュウは飛び出た岩を盾にしてそれを防ぎ、ビビオンに向かって「りゅうのはどう」を放った。「りゅうのはどう」がビビオンの翅^{はね}をかすめた。

（もっと破壊力のある技があれば、少しでっばった岩を破壊できるんだけどな……）

グレイがそう思っていると、

「もっと高レベルな戦いになれば、強力な技でデコボコの地形を更地にしてしまう者もいるのじゃが……バッジを持っていない君には、そんな芸当はできないじゃろうて」

まるでグレイの考えていることを見透かしているような言葉を投げかけてきた。

（落ち着けオレ。いつもみたいに相手を麻痺させたり混乱させたりして有利に戦えばいいだろ）

グレイは次の作戦に移る。

「ビビオン、地面スレスレを飛んで、横から相手に近づけ」

グレイは、相手を麻痺させる技「しびれごな」を当てるために、ビビオンを相手のミニリュウに近づかせることにした。

グレイの指示により、ビビオンは低空を飛んで移動し始めた。ビビオンの「むしのていこう」はますます岩場に阻まれるが、相手のミニリュウの「りゅうのはどう」も阻まれる。

ビビオンとミニリュウ。両者の距離が近づいた。

「アイアンテール」じゃ！」

相手のミニリュウが、硬い尻尾で相手を叩きつける鋼タイプの攻撃技「アイアンテール」を発動する。

「避けるビビヨン！」

鋼鉄のように硬くなったミニリュウの尻尾がビビヨンに襲い掛かるが、ビビヨンは自慢の機動力で避けた。

「まだじゃ！　「アイアンテール」」

ゴンが再びミニリュウに攻撃を命じた。ミニリュウが「アイアンテール」でビビヨンを攻撃しようとする。

グレイが新たな指示を出さないので、ビビヨンは『避ける』の指示の継続と判断し、攻撃をせずに回避に徹した。

ミニリュウの「アイアンテール」は空振りに終わった。

その後ミニリュウの「アイアンテール」が3回目に空振ったその瞬間、

「今だ！　麻痺！」

グレイが叫んだ。

ビビヨンは「しびれごな」を使うため、技の準備に入った。「しびれごな」には物理的な破壊力はないので、相手の「アイアンテール」とぶつかり合えば一方的に負けてしまう。グレイは相手の「アイアンテール」が派手に空振るのを待っていたのである。

「「でんじは」じゃ！」

ゴンも、相手を麻痺させる技「でんじは」を指示した。

グレイはビビヨンに「しびれごな」を中断させて回避を命じることもできたが、それをしなかった。あわよくば自分だけ技を当てて逃げられればと考えていた。

また、両者とも麻痺して動きが鈍くなった場合にも、有利になるのはビビヨン側だとグレイは考えていた。

ビビヨンの「しびれごな」がミニリュウに命中し、ミニリュウは麻痺した。

少し遅れて、ミニリュウの「でんじは」が逃げるビビヨンに命中

し、ビビヨンも麻痺した。

（当て逃げは無理だったか……だが、ビビヨンは元々動きが速いから、少し動きが鈍くなくても上空に逃げれば相手の攻撃は避けられる。あの遅いミニリュウが麻痺したら、岩場に隠れるのが遅くなくてビビヨンの攻撃が当たるようになるだろう）

グレイはそう考えており、作戦成功に内心喜んでいた。

「ビビヨン、上空！」

「ミニリュウ、岩場の影に隠れるのじゃ！」

「ビビヨン、むしのていこう」

再び上空に移動したビビヨンは「むしのていこう」をミニリュウに放つ。しかし「むしのていこう」が当たる前に、ミニリュウは岩場の影に隠れてしまった。

ビビヨンは少しずつ移動しながら「むしのていこう」を放つが、ミニリュウは岩場に隠れたまま姿を現さない。

ビビヨンは途方に暮れ、グレイに『どうすればいいの?』と言いたげに視線を送る。

視線に気がついたグレイはビビヨンに言う。

「別に無理に攻撃しなくても大丈夫だ。相手が攻撃のために姿を現すのを待とうぜ」

グレイの言葉に対して、ビビヨンは安心したような表情をグレイに返した。

ミニリュウが岩陰に隠れ、ビビヨンもそれを無理に追わないため、しばらく試合の流れが止まっていたが、

「ミニリュウ、アレを決めてみようかの」

ゴンがそう言ったことによって、試合が再び動く。

ミニリュウが隠れている岩陰から光が漏れ、大きいエネルギーが

発生しているような気配があった。

不安そうな視線をグレイに送るビビヨンに対し、グレイが励ます。
「大丈夫だ！ 相手は麻痺しているハズ。奇襲攻撃はできな——」

次の瞬間！ ミニリュウが岩陰から素早く顔を出し、口から凄まじい威力の光線をビビヨンに向けて解き放った！

ビビヨンは麻痺しているせいで一瞬動きが遅れ、ミニリュウが放った光線の餌食となった。まるで全てを破壊するかのような凄まじい光線はビビヨンをたちまちボロボロにし、ビビヨンを天井に向けて強く吹っ飛ばした。

吹っ飛ばされたビビヨンは天井の照明器具に衝突し、照明器具をバラバラに碎き壊し、それでも勢いは止まらず天井にめりこんだ。

一瞬の間があってから、天井からビビヨンが落下し始める。

ゴンはミニリュウに指示することなく静かにその様子を見守っていた。

グレイには何が起きたのか一瞬理解できなかった。しかし、落ちてきたビビヨンを見て分かった事が1つだけあった。

ビビヨンは戦闘不能になっていた。

「一体、何が起きたんだ？」

半分は独り言、半分はゴンへ解説を求めるような言い方で、グレイはそうつぶやいた。

「今のは、ミニリュウの“はかいこうせん”じゃよ」

“はかいこうせん”とは、ノーマルタイプの特殊攻撃技である。全てを破壊する凄まじい光線を相手に放って攻撃する技である。“はかいこうせん”を撃った後は、反動でしばらく動けなくなる。

ミニリュウが“はかいこうせん”を撃ち、ビビヨンがそれを避けられなかった。それは理解したグレイだが、疑問はまだ残る。

「なんで……そんなに素早く岩陰から出て“はかいこうせん”を撃

てる？ 麻痺してたハズだろ？」

「それはミニリュウの特性だっぴ、の効果によるものじゃ。特性だっぴの効果は、時間が経つと麻痺などの状態異常が自然に治るというものなのじゃ」

ゴンの解説を聞いたグレイは、ミニリュウに視線を移した。麻痺させたはずのミニリュウは、確かに麻痺が治っているようにグレイには見えた。

再びゴンが口を開く。

「すまんのうグレイくん。君に解説している間に、ミニリュウの“はかいこうせん”の反動が無くなってしまったようじゃ。しかし、解説を求められて無視する訳にもいなくてのう、許してくれぬかのう？」

ミニリュウが“はかいこうせん”の反動で動けない間に、新しいポケモンをさっさと出して攻撃をすれば良かったのである。

しかし今のグレイにとっては、ミニリュウに攻撃するよりも、ゴンの解説を聞くことの方が価値あることであった。

グレイは、自分の無知のせいで無駄に痛い思いをさせたビビヨンに対して罪悪感が湧き、反省すべき点が多いと感じた。そして同時に、

（麻痺させて動きが鈍った所を“はかいこうせん”で決める……見事にやられたな）

グレイは相手の戦略に驚嘆した。

「頼むぜチョロネコ！」

岩場のフィールドに紫色の猫のようなポケモンが現れた。グレイは2体目のポケモンとしてチョロネコで戦うことにした。

「チョロネコ！ 気楽にやれよ」

グレイは今までのチョロネコの戦績を考え、チョロネコにあまり期待はしていなかった。そういう理由もあり、シビアに戦うのではなく気楽に戦うようにチョロネコに指示したのである。

（さて、どう戦う？ チョロネコは特性じゅうなん、のおかげで麻痺しないから相手のミニリュウの“でんじは”は効かない。一番気をつけるべきは相手の“はかいこうせん”だな。まあ何にせよ……）

グレイは思考を中断した。

「じゃあいくかチョロネコ！ まずは相手に近づけ！」

チョロネコは遠距離攻撃できる技を覚えていないため、近づかなければ何も始まらない。相手に近づくようにグレイは指示した。

ゴンもミニリュウに新たな指示をだす。

「ミニリュウ！ “りゅうのはどう”じゃ」

相手のミニリュウは、近くの岩場で最も高い場所に陣取り、“りゅうのはどう”を放ってきた。

「チョロネコ隠れろ！」

相手のミニリュウが一方的に攻撃できる状況である。ひとまず隠れるようグレイは指示した。指示通りにチョロネコは岩陰に隠れた。岩が盾となり、“りゅうのはどう”は届かない。

相手のミニリュウは高台に陣取り、チョロネコが姿を見せ次第いつでも射撃できるように狙っている。

（相手のミニリュウは動きが遅い。チョロネコに近づかれたら二度と距離を離すことはできないだろ……1回近づけば、後はずっと接近戦でやれるはず）

グレイは、相手のミニリュウに近づく方法を考え始めた。

（あの“りゅうのはどう”の威力じゃ、チョロネコの“みだれひっかき”で防げないだろうし……相手の“はかいこうせん”も怖いし……）

画期的なアイデアを特に思いつかないグレイは、

「チョロネコ！　なんか良い感じにうまく近づけ！　相手が攻撃しようとしたら教えるから」

近づき方はチョロネコの判断に丸投げした。

チョロネコは岩場に隠れながら相手に近づいていく。しかし途中に岩の壁が途切れていて、相手に姿を見せなければ通れない場所がある。

ちょうどチョロネコが岩の壁が途切れている場所にさしかかった時。

「チョロネコ！　くるぞ！」

グレイが叫んだ一瞬後、相手の「りゅうのはどう」が放たれた。グレイの言葉で一時停止したチョロネコの目の前の地面に「りゅうのはどう」が直撃する。

「今だ！　行け！」

グレイの指示で、チョロネコは急いで移動し、2発目の「りゅうのはどう」が放たれる前に、再び岩陰に入った。

このような駆け引きを何回か繰り返した後、チョロネコはミニリュウのすぐ近くまで辿り着くことができた。

岩場の高台の上にいるミニリュウと、高台の下の影に入ったチョロネコ。いつ接近戦が始まってもおかしくない状況であった。

「よし行け！　チョロネコ」みだれひっかき」

「ミニリュウ」アイアンテール」じゃ」

グレイの指示を合図に、チョロネコが一気に跳んで高台に降り立ち、接近戦が開始された。

相手のミニリュウの「アイアンテール」を、チョロネコは「みだれひっかき」で威力を抑える。威力を減らした相手の「アイアンテール」がチョロネコに当たるが、チョロネコも「みだれひっかき」

の連撃を続ける。

接近戦を展開する中、相手の「アイアンテール」がチョロネコに直撃して押し出され、両者に距離が開いた。

「りゅうのはどうじゃ！」

「やべえ！ 逃げろチョロネコ！」

距離が開いた一瞬に、ミニリュウの「りゅうのはどう」が放たれる。チョロネコは高台から落下することで相手の攻撃を避けた。

チョロネコが高台の下の方影に隠れたことで、再び高台の上と下での睨み合いとなった。そんな状況の中、ゴンがグレイに声をかけてくる。

「グレイくん。君はもっとチョロネコに期待しても良いのではないじゃろうか？」

「え？ チョロネコに期待する……ですか？」

「そうじゃ。君のチョロネコは、君がもっと厳しい指示を出したとしても、きっと指示を実行できるはずじゃ。しかし君がチョロネコにあまり期待せずに甘い指示しか出さぬせいで、チョロネコの力を引き出せずにいるのじゃ」

グレイはゴンの言葉に思い当たる節があった。

グレイがチョロネコを仲間にした最初の頃、グレイはチョロネコを、ギャラドスに対抗できる戦闘員として育てようと思っていた。

しかし、厳しく育てようという思いは早い段階で消えた。戦闘狂のギャラドスに比べるとチョロネコがそこまで戦いを欲しているようには見えなかったし、1日ごとに……というよりも1回の戦いごとに成長していくギャラドスに比べてチョロネコの成長速度は並であり、戦いの才能が高い訳ではないとグレイが思ったからだ。

才能が高い訳ではない者を厳しく育てるのは気の毒だ。グレイはそう考え、それは戦闘においてチョロネコに出す指示の内容にも現

れていた。グレイはチョロネコに無茶な指示をあまりしない。

（せっかくのジムリーダーからのアドバイスだ。チョロネコの底力を試してみるか……）

そう考えたグレイは、チョロネコに対して無茶な要求を始めた。

「チョロネコ！ 相手の「アイアンテール」は全部避ける！ かするのもダメ。お前の技で相殺するのもダメだ！」

そしてグレイは鬼のような言葉を放つ。

「もし相手の「アイアンテール」に1回当たったら、お前の今日の夕飯は無し……もし2回当たったら……明日の朝食も無しだ！」

グレイの悪魔のような言葉を聞いたチョロネコは、『冗談よね……？』という視線をグレイに送る。

「冗談じゃねえから」

グレイは真顔でチョロネコに言葉を投げつけたのであった。

「ほっほ……今のを聞いておったかミニリュウ？ 相手のチョロネコに、何としても「アイアンテール」を2回当ててるのじゃ！ これは……面白いことになったのう」

高台の上にいるミニリュウは気合の入った鳴き声で、ゴンの言葉に応えた。もう既に尻尾をブンブンと振り回している。

四面楚歌となったチョロネコはしばらく絶望の表情を浮かべていたが、覚悟を決めたのか勢いよく高台に飛び出し、ミニリュウに「みだれひっかき」をくらわす。

ミニリュウも「アイアンテール」を放つが、チョロネコはそれを避けて連撃を加える。

自分の命がかかっているチョロネコは、圧倒的な動きでミニリュウの「アイアンテール」を避けていく。

（すげえなチョロネコ！ あいつあんな動けたのか！？）

チョロネコの動きを見て、悪魔のグレイの方が逆に驚いた。

なおチョロネコは素早い動きで「アイアンテール」を避けていく。ここで相手のミニリュウは、正面に回ったチョロネコに頭突きをくらわした。

「あ、チョロネコ。相手の技でなくても攻撃を受けたら罰な。今度攻撃をくらったら夕飯は半分」

突然に追加された死の宣告。チョロネコはもうヤケになったように限界を超えた動きを始めた。

チョロネコにとって地獄の時間は終わりを告げた。

チョロネコはあれ以降、1回も相手の攻撃を受けることなくミニリュウを倒しきった。チョロネコは見事、自分の生命の危機を脱したのだ。

「チョロネコすごいぞ！ まさか本当にできるとは！ じゃあ次の相手も無傷で倒せるよな？」

グレイの言葉に、再び絶望の表情になるチョロネコ。

「冗談だチョロネコ！ 冗談！ そうだチョロネコ、ちよっとこっちに来てくれ」

チョロネコは素早くグレイの方へ近づき、勢いよく跳んでグレイの立つ高台に降り立った。

「チョロネコ、よくやった！ お前にそんな底力があるなんて、今まで気がつかなくて悪かったな」

そう言いながら、グレイはチョロネコを優しく撫でた。

グレイの言葉に笑顔を見せたチョロネコだが、突然動きを止め、強く光り出した。グレイはこの光景を他のポケモンで3度見たことがあった。

「進化か」

強い光が収まった時、チョロネコの姿は変わっていた。チョロネ

コは進化して他のポケモンになったのだ。

グレイの目の前には、紫色で豹ひょうのような引き締まった体に、猫のような少し可愛い顔をもったポケモンがいた。れいこくポケモンのレパルダスである。

「おめでとうチョロネコ！ レパルダスに進化したんだな！」

ふとグレイは、呼び方をどうするか悩む。

（試合中にいきなり慣れない呼び方するとお互い混乱するし、この試合中は『チョロネコ』って呼べばいいか。いっそ、チョロネコもビビヨンも、KKみたいにニックネームつけるか？）

グレイがそう考えていると、

「グレイくん。なかなか感動的な場面じゃったよ。しかし、そろそろ試合を再開してはくれんかのう」

ゴンがそう声をかけてきた。

「ああ、ごめんなさい」

グレイはそう言って、レパルダスにバトルフィールドに戻るよう指示した。

（そうだ、試合はまだ終わっていない……相手の2体目のポケモンは何だろうか？）

グレイはゴンの繰り出そうとしているポケモンに注意を向けた。

グレイとゴンのバトルは続く……。

グレイ側

ビビヨン（戦闘不能）

レパルダス「ニックネーム：チョロネコ」（小ダメージ）

ギャラドス「ニックネーム：KK」（無傷）

ジムリーダーのゴン側

ミニリユウ（戦闘不能）

未登場（無傷）

未登場（無傷）

12話目 成長（後）

「では、試合を再開しようかの」

そう言った gon は、2 体目のポケモンを繰り出した。

現れたポケモンは、二足歩行で、大きな羽と尻尾が生え、顔には頑丈そうなアゴをもっている。顔は鮮やかな赤色で、腹部は白のよ
うな色、その他の体や手足や羽や尻尾は青色である。体にあちこち
にある大きいトゲは鮮やかな赤色である。

全体的にみると、怪獣や恐竜のような雰囲気をしている。

ほらあなポケモンのクリムガンである。ドラゴンタイプ。一般的
には、高さ 1・6 m、重さ 139・0 kg と言われている。

対峙するグレイのレパルダス（ニックネームはチョロネコ）が一
般的に、高さ 1・1 m、重さ 37・5 kg であることを考えると、
クリムガンは重量級のポケモンである。

（あのゴツそうな巨体、力が強そうだな……でも不器用そうだし、
遠距離攻撃は無いんじゃないか？）

グレイがそんな考えをもっていると、

「クリムガン」あくのはどう「じゃ」

クリムガンから悪タイプの特殊攻撃技「あくのはどう」が放たれ、
邪悪な波動がレパルダスに迫った。

（あんのかよ！ 遠距離攻撃！）

レパルダスは後ろに跳んで、攻撃を避けた。

「チョロネコ！ 素早く近づけ！ 多少なら当たっても大丈夫だ！」

グレイの指示で、レパルダスは距離を詰める。相手の「あくのは
どう」が多少命中するが、気にせず進む。悪タイプの攻撃技は悪タ
イプのポケモンには効果がいまひとつである。相手の「あくのはど

う”はレパルダスにあまり効かない。

レパルダスがクリムガンとの距離を詰めた時、

「クリムガン！　”ドラゴンクロー”と”アイアンテール”」

ゴンが2つの技を同時に指示した。

「チョロネコ回避に徹しろ！」

グレイは、ゴンが2つの技を同時に指示したのを見て、様子見のためにレパルダスに回避を指示したのだ。

”ドラゴンクロー”は、ドラゴンタイプの攻撃技であり、巨大な爪で相手を切り裂いて攻撃する技である。

相手のクリムガンの右手から”ドラゴンクロー”が繰り出された。凄まじいパワーと勢いで右手が横に振るわれる。

回避に全神経を集中させていたレパルダスは、その場に伏せることで相手の右手の一撃を回避した。

相手のクリムガンは全力で右手を振るった勢いで体が横を向いた。そして横を向いた勢いのまま後ろを向き、鋼鉄の尻尾による一撃”アイアンテール”を繰り出した。

避ける場所がないと判断したレパルダスは、思いっきり後ろに跳び、距離をとった。すると相手のクリムガンは前を向きなおし、今度は”あくのはどう”で遠距離攻撃を決めてくる。

再びレパルダスが近づくと、

「”ドラゴンクロー”と”アイアンテール”じゃ！」

再びクリムガンは、爪の一撃と尻尾の一撃を繰り出してくる。レパルダスはなんとか回避した。

「チョロネコ！　頑張って避けて頑張って攻撃しろ！　お前ならできる！」

グレイの根性論全開な言葉で、今度は別に自分の命がかかっている訳ではないのだが、レパルダスは再びヤケクソになって相手の攻

撃を回避し始めた。

「どうしたチョロネコ！ 避けてばっかじゃなくて攻撃しろ！」
レパルダスは、『カンベンしてよ……』と言いたげな視線をグレイに送ったが、どうにか攻撃を回避しながら「みだれひっかき」の連撃を相手のクリムガンに当てた。

しかし、レパルダスは一瞬苦悶の表情をし、攻撃を中断した。

グレイがその様子に疑問をもっていると、ゴンが口を開く。

「ワシのクリムガンは、特性さめはだ、なのじゃよ。自分に触れた相手を傷つける特性なのじゃ」

（相手からの攻撃をいくら避けても、チョロネコが相手を攻撃するたびにダメージを受けるのか？ だったらチョロネコはやめてKKに変えるか？ でもKKも主な攻撃方法は直接相手に触る攻撃だし……）

グレイは勝つために決心し、レパルダスに指示を出す。

「すまんチョロネコ！ 痛いとは思うが、頑張って耐えて攻撃してくれ！」

グレイの真剣な視線にレパルダスは納得し、再びクリムガンに攻撃を加える。レパルダスは攻撃する度に痛みに襲われるが、我慢して攻撃を続ける。

レパルダスは相手の爪の一撃と尻尾の一撃をなんとか避けて、再び「みだれひっかき」で攻撃を続ける。「みだれひっかき」の連撃で相手のクリムガンはあっという間に体力を削られていくが、レパルダスも相手の特性さめはだでダメージを受けていく。

もう少しでクリムガンを倒せる。そのような状況で、

「クリムガン！ もう1つの方じゃ！」

ゴンがそう言った。

相手のクリムガンは、例のごとく「ドラゴンクロー」によって右

手を横に全力で振り、レパルダスに対して横を向いた。

（その後は、後ろを向いて尻尾で攻撃……だろ？）

グレイはそう思ったが……クリムガンは後ろを向くことなく、今度は左手で「ドラゴンクロー」を繰り出した。「ドラゴンクロー」を放つ左手は横には振られず、上から振り下ろされた。

突然の動きの変化に戸惑ったレパルダスは、一瞬反応が遅れてしまった。

相手の「ドラゴンクロー」がレパルダスを切り裂いた——と思われたが、ギリギリの所でレパルダスは思いつきり体をそらし、相手の「ドラゴンクロー」は直撃せずに体をかすめるに留まった。

「見事じゃ！」

ゴンはそう言葉にした。しかし、攻撃はまだ終わっていないかった。なんとか体をそらしたレパルダスに対し、クリムガンは巨大なアゴをもつ口を開けて、レパルダスに噛みついた。相手のクリムガンの牙がレパルダスをとらえる直前、クリムガンの牙が炎に包まれた。炎タイプの攻撃技「ほのおのキバ」である。

突然の「ほのおのキバ」にレパルダスは驚き怯んで、体が動かない。さらに炎に焼かれ、レパルダスは火傷を負った。

レパルダスが怯んでいるうちに、クリムガンは再び「ドラゴンクロー」を放った。技はレパルダスに直撃した。

特性さめはだ、によって元々体力が削られていたレパルダスは攻撃を耐えきれず倒れた。

レパルダスは戦闘不能となった。

「チョロネコ……お前は本当によく頑張った！」

グレイはレパルダスをモンスターボールに戻しながら、そう声をかけた。気絶しているためグレイの言葉はおそらく届かないが、グ

レイはそう声をかけずにはいらなかった。

（あとで何かご褒美あげよう。そのためには、お前には頑張ってもらわんなK K！）

グレイはギャラドスが入ったモンスターボールを握りしめた。

「頼むぞ！ K K！」

言葉と共に、グレイはギャラドスを出した。

長い胴体をもつ青い龍のようなポケモンが、岩場のフィールドの空中に現れた。

ギャラドスは相手のクリムガンを視界に捉えるや否や、クリムガンを睨みつけて咆哮をあげて威嚇した。クリムガンは驚いて力が抜け、攻撃力が下がった。これはギャラドスの特性いかく、によるものである。

「おお！ 君の最後のポケモンはギャラドスかう！」

何故か嬉しそうにゴンはそう言った。

「さて、君のギャラドスがどれ程強いのか、見せてもらおうとしようかの！ クリムガン「あくのはどう」

「行け！ K K！」

相手のクリムガンは、空中にいるギャラドスに「あくのはどう」を放った。

クリムガンに一直線に向かうギャラドスに、「あくのはどう」が直撃するが、ギャラドスはお構いなしにそのまま一筋に伸びる邪悪な波動の中を通り抜け、クリムガンに突っ込みながら「かみつく」をくらわせた。

一般に139・0kgもあるクリムガンの巨体だが、そのままギャラドスに押し出されて岩場の谷底に思いつきり突っ込んだ。

クリムガンは戦闘不能となって倒れた。

「ほっほっほ……君のギャラドスは随分と勇敢なものじゃのう！」
笑いながらゴンに声をかけられたグレイは、内心ではさっきの事は無かった事にしてやり直せないかと思っていた。

（なんでわざわざ相手の「あくのはどう」の中を通り抜けるんだよ……ちょっと横に避けてから相手に向かえばいいだろうが……）

「君のギャラドスも早く戦いたくて仕方のない様子じゃし、ワシも最後のポケモンを出すでしょう……さあ、いくのじゃ！ ギャラドス！」

ゴンが繰り出した3体目のポケモンは、もはや説明不要、青い龍のようなポケモンのギャラドスだった。

ゴンのギャラドスは、グレイのギャラドスを威嚇した。特性いかく、によってグレイのギャラドスは攻撃力が下がった。

「ではグレイくん。ギャラドス同士の戦い。準備はよいかの？」

「こっちはとっくに」

「では始めようかのう」

まずグレイのギャラドスが、ゴンのギャラドスに「かみつく」をくらわせようとする。

「ギャラドス！ 「かみつく」じゃ！」

「かみつく」は、悪タイプの攻撃技であり、名前の通り相手を牙で噛みついて攻撃する技である。グレイのギャラドスを使う「かみつく」よりも威力の高い技である。

両者とも互いに、技で相手の胴体に噛みつき合っている。この勝負で相手により多くのダメージを与えているのはゴンのギャラドスであった。

（うおお……KKが力で押されるとは、なんか久しぶりの光景だな……）

このままでは勝てないと思い、グレイは新たな指示を出す。

「KK！　　たいあたり！」

「たいあたり」は、ノーマルタイプの攻撃技で、全体重を使って相手に体当たりして攻撃する技である。

「ギャラドス！　　かいりき！」

「かいりき」は、ノーマルタイプの攻撃技で、力づくで相手を殴りつけたり投げ飛ばしたりして攻撃する技である。技の威力は「たいあたり」よりも高い。

グレイのギャラドスが「たいあたり」をくらわし、お返しにゴンのギャラドスが「かいりき」をくらわす。

この勝負もゴンのギャラドスの方が、相手により多くのダメージを与えている。

「KK！　　りゅうのいかり！」

グレイはダメで元々という気持ちで「りゅうのいかり」を指示した。

「ギャラドス　　りゅうのいかり　　じゃ！」

ゴンも同じ技を指示した。

両者の「りゅうのいかり」がぶつかり合い、相殺された。当然の事であった。「りゅうのいかり」は、強い者でも弱い者でも誰が放っても威力が全く同じになるという性質をもっているのだから。

グレイのギャラドスとゴンのギャラドス。地力としては勝っているのはグレイ側であった。しかし、ゴン側はグレイ側よりも威力が強い技を覚えており、さらにグレイ側は特性いかく、の影響で攻撃力が下がっている。地力は上にもかかわらず勝てないのは、そういう理由であった。

ところで、あまり戦いに関係ない話であるが、グレイは自分側とゴン側の２体のギャラドスをどう見分けているのだろうか？　その

答えは、目つきで判断している、である。グレイ側の方が目つきが悪いので、目を見れば判断可能である。また、目を見なくても動きでも判断できる。グレイ側の方が激しく動いており、無駄な動きが多いのだ。ゴン側はとても落ち着いた態度であり、無駄な動きをしないのである。

関係ない話はこれまでとして……。

2体のギャラドスはお互い技を当て合うだけでなく、肉弾戦も展開している。肉弾戦においてはグレイ側が多少有利に展開しているが、技同士の勝負で勝てないので戦況をひっくり返す手段としては弱い。

グレイは目の前の状況に頭を悩ませる。

（肉弾戦で少し勝っても、"かみつく"では負けるし"たいあたり"でも負ける。"りゅうのいかり"は全く引き分けになる……あと残るのは……）

グレイにとっては、あまり指示したくない技が残った。しかしこの際仕方がない。

「KK"にらみつける"！」

"にらみつける"は相手の防御力を下げる技である。直接の破壊力は無いので、グレイが指示しない限り、破壊好きのギャラドスが自主的に使うことは無い。

グレイは"にらみつける"を指示したのだが、グレイのギャラドスは指示を無視し、"にらみつける"を使おうとしない。

「ほっほ、ずいぶんと扱いに苦労しているようじゃな」

ゴンがそう声をかけてきた。

「……KK！"にらみつける"！」

グレイが言葉を強めて言った。ギャラドスは露骨に不機嫌そうな顔をしたが、しぶしぶ技を発動しようとした。

「ギャラドス」たきのぼり」じゃ！」

「たきのぼり」は、水タイプの攻撃技である。水を体にまとい、まるで滝を登るかのような勢いで相手に突っ込んで攻撃する技である。

グレイのギャラドスが「にらみつける」を発動するが、ゴンのギャラドスがまとう水に打ち消されてしまう。そのまま「たきのぼり」が直撃し、グレイのギャラドスが吹っ飛ぶ。

（「にらみつける」はダメだな……例え使うチャンスがあったとしても、今のままじゃKKが嫌々に使うせいで発動が遅いから間に合わない。もし「にらみつける」を使いたいなら、KKに好きなだけ暴れさせて機嫌を良くしてからじゃないと無理だな……）

グレイは、自分のギャラドスに好きなだけ暴れさせることを決めた。どのみちグレイには、「にらみつける」で相手の防御力を下げたから戦う以外に状況を打開する策は思いつかなかった。

グレイはしばらくの間、自分のギャラドスが好きに暴れるのを見守っていた。ギャラドスの機嫌を良くすることで「にらみつける」の指示をスムーズに聞いてもらうためである。

「君はギャラドスに指示をしないのかのう？」

自分のギャラドスを見守るだけのグレイを見て、ゴンがそう声をかけてきた。

「今はまだ、チャンスを待っているんですよ」

「何か狙いがあるという事かの？」

その問いに対してグレイは答えない。するとゴンは違う話を始める。

「それにしても……君はとてもすごいトレーナーじゃよ」

グレイはゴンの話の意図が分からず考える。

（すごいトレーナー……？　まだ勝負に勝ってもいないし、ギャラドスには指示を無視されるし……あの爺さんは何を見てそう思ったんだ？）

そんなグレイの思考を読んだように、ゴンが口を開く。

「あれだけ暴れるのが好きで、自分の欲望に忠実なギャラドスは中々おらぬよ。しかし、君はそれを制御しておる。中々できることではないのう」

「……制御できてないですよ。言うこと聞いてくれないし」

「いやいや、あのギャラドスのトレーナーが君だからこそ、あの程度で済んでいるのじゃ。もしトレーナーが君でなかったら……最悪の場合あのギャラドスに殺されているかも、しれんのう……」

続けてゴンは物騒なことを言い始める。

「もっとも……これから君がそうならない、などという保証はどこにもないがのう」

ギャラドスに殺されるなんて大袈裟だろ、と思ったグレイは反論する。

「なんでそんな事が言えるんですか？　もしかしたら、バトルでは言う事を聞かないけど、普段はおとなしくて静かなポケモンかも知れないじゃないですか？」

「ワシには分かるのじゃよ。ワシはドラゴン使いじゃからな」

「ギャラドスはドラゴンタイプのポケモンじゃないですよ？」

「ワシが言うドラゴン使いのドラゴンとは、なにもポケモンのドラゴンタイプを指して言っている訳ではないのじゃ」

ゴンは戦っている両者のギャラドスを一瞥した後、再びグレイに語りかける。

「グレイくん。本当はポケモンに『タイプ』などという属性は存在しないのじゃよ……言うなれば、ポケモンの種類と同じ数……いや、

ポケモンの数だけ『タイプ』があるのじゃ」

ゴンは語り続ける。

「ポケモンの『タイプ』というものは、ポケモン同士の複雑な相性関係を分かりやすくするために、似た性質を持つポケモンや技を同じ『タイプ』に分類しただけじゃ。同じタイプのポケモンでも種類が違えば、効きやすい技、効きにくい技、が微妙に違うのじゃ」

黙って聞いているグレイに、ゴンは問いかけをする。

「グレイくん。君はポケモンのタイプが何種類であると習ったかの？」

「ええっと確か……18種類です」

「その通りじゃよ……現在のトラベル地方では、の話じゃがのう」
ポケモンには18種類のタイプがある。ノーマル、炎、水、草、電気、氷、格闘、毒、地面、飛行、エスパー、虫、岩、ゴースト、ドラゴン、悪、鋼、フェアリー。の18種類である。

ゴンが続けて言う。

「タイプの数はのう……時代や地域によって異なるものじゃ。フェアリータイプのポケモンが生息しないために、タイプは17種類と定めておる地方もある。昔、とある地方では、生息するポケモンの種類が150種類程度と少なかったために、タイプが15種類しかなかった所もあるそうじゃ。悪、鋼、フェアリー、の3タイプが存在しないのじゃ」

さらにゴンは続ける。

「ワシらは、ゴーストタイプの技は、鋼タイプに普通に効くと思っておる。しかし地方によっては効果がいまひとつ、となっておる場所も存在する。さて……これだけ言えば君も、ポケモンの『タイプ』が絶対的なものでは全くなく、曖昧でポケモンの性質を表すものとして不十分なものじゃと、分かるじゃろう？」

ゴンの講義を真剣に聞いていたグレイは、ゴンに質問する。

「タイプが絶対の基準じゃないなら、どういう基準で戦えばいいんですか？」

「データや分類などではなく、ポケモン自身の本質を見抜くことじゃ……さて、話はこれくらいにしようかの。どうやら……戦いに少し動きがあるようじゃ」

ゴンの言葉で、グレイは戦いを続ける2体のギャラドスを見る。

（好きなだけ暴れさせたし、そろそろ〃にらみつける〃の指示を即座に聞いてくれるんじゃないか？）

そう思ったグレイは、戦いの流れが変わっていることに気がつく。

（あれ？ さっきまでKKが微妙に力負けてたんじゃなかったか？）

グレイのギャラドスとゴンのギャラドス。

グレイ側が〃かみつく〃攻撃をして、ゴン側が〃かみくだく〃攻撃をする。さっきはグレイ側が力負けしていたが、今は互角である。

さらにグレイ側は積極的に肉弾戦を仕掛けていく。グレイ側が長い胴体で巻き付いてゴン側を締め上げる。ゴン側も負けじと締め上げるが、グレイ側の方が力が強い。

一瞬、グレイはどちらが自分のギャラドスか分からなくなり、急いでギャラドスの目を確認した。目つきの悪い方がグレイのギャラドスである。

（さっきまでは動きを見ればどっちがKKか一瞬で分かったのに、なんで今分からなくなった？）

そう思ったグレイは、すぐに答えを見つける。

（KKの動きと、相手の動きが似ている！？もしかしてKK……相手の動きをマネしてるのか？）

そして、両者の技の力比べにおいて、さっきはグレイ側が負けていたのに今は互角になっている理由にも思い当たる。

（そうか……相手の動きを参考にして、自分のものとして取り入れ

ているのか。まさに、今この瞬間に成長している訳だな」

グレイのギャラドスは、進化してから一度も他のギャラドスと戦った経験がない。自分と同じ種類、つまり自分と体の構造が同じ相手と初めて戦ったことで、自分の体の使い方について新たな発想を得て急激に成長しているのだ。

両者の肉弾戦が続く中、グレイのギャラドスの尻尾の一撃が強烈に決まった。ゴンのギャラドスは岩のフィールドに勢いよく墜落した。

グレイはすかさず指示する。

「KK！　＼にらみつける＼！」

追撃するグレイのギャラドスは、すんなりとグレイの指示を受けて＼にらみつける＼を素早く発動した。

＼にらみつける＼の効果で、相手の防御力が下がった。

相手の防御力を下げたこと、グレイのギャラドスが試合中に急激な成長をとげたこと。これら2つの理由で、残りの試合はグレイのギャラドスが相手を圧倒して勝利した。

「グレイくん。これがヒトツジムのジムバッジじゃよ」

「ありがとうございます」

グレイはジムリーダーに勝った証としてジムバッジを受け取った。ここでゴンが1つ提案する。

「グレイくん。もし君が望むなら、君のギャラドスに＼たきのぼり＼を教えてあげようと思うのじゃが、どうかのう？」

グレイは、先ほどの試合でゴンのギャラドスが使ってきた＼たきのぼり＼を思いおこす。水を体にまとい、まるで滝を登るかのような勢いで相手に突っ込む技である。

グレイは悩む。＼たきのぼり＼を覚えればギャラドスは間違いな

く今よりも強くなる。しかし強くなれば制御できなくなった時のリスクは高まる。

グレイはギャラドスのトレーナーとして先輩であるゴンに、率直にたずねる。

「オレは……ギャラドスとうまくやっていけるんでしょうかね？」

ギャラドスを制御し続けられるんですかね？」

「それはワシには分からぬことじゃよ」

gonは即答でグレイの問いを退けた。そしてgonは言葉を続ける。

「君は、自分のギャラドスをどう思っておるのじゃ？」

「どう思うか……？ 戦闘狂で困った奴、あるいは恐ろしい奴……ですね」

「ほう？ 困った奴で恐ろしい奴とな？ ならば1つ質問しようかの」

質問、そう言ってgonはグレイに問いかける。

「君がどうしてもギャラドスの扱いに困っているのなら、ワシらのジムで引き取って面倒を見ても良いぞ……と言ったら、君はどうするかね？」

グレイは少し考える。

確かに、グレイにとってギャラドスは困った奴であり、同時に恐怖の対象でもある。しかし、ギャラドスという存在をリセットしたいか？ と問われてみると、それは違うような気がするのである。

（言う事は聞いてくれないし、正直に言えば怖いが……手放したいとは思わない。なんでだ？ 愛着があるからか？ トレーナーとしてのプライドが、ギャラドスを育てられない自分を拒否してるのか？ もしや捨てられるギャラドスがかわいそうと思ってるのか？）

自問自答するグレイだが、出てくる答えはどれも違うように思えた。

「オレは、ギャラドスを手放したくないです。でも、そう思う理由が分かりません」

「ほう？ 君はその理由に気がついておると思ったが……ならばヒントじゃ、君がジムバッジを手に入れることができたのは誰のおかげじゃ？」

「そりゃあポケモン達。ビビヨン、チョロネコ……今は進化してレパルダスだけど、そしてKK……あ！」

「なにか分かったかの？」

「KKは、戦闘狂で困った奴、そして恐ろしい奴。だけど強くて頼りになる奴でもある。KKはオレに多くの悩み事を作り出すけど、代わりにオレもKKに力を貸してもらってるんだ」

グレイの答えに、 gon は満足そうにうなずいた。

gon が口を開く。

「君がギャラドスを制御し続けられるか、それは分からない事じゃ。しかし、ギャラドスの怖さばかりに目をやっていては、君のギャラドスの本質を見失ってしまうのじゃ」

そして gon は再びグレイに問いかける。

「君のギャラドスに“たきのぼり”を覚えさせるかの？」

「はい！ お願いします」

ギャラドスが強くなれば、制御できなくなった時のリスクは強まってしまう。しかしギャラドスの力が強くなるという事は、同時にトレーナーのグレイの力が強くなるという事でもある。

力あるポケモンの反逆は確かに怖いことである。しかし反逆を常に恐れながらポケモンと接するというのはポケモントレーナーの姿として間違っている。グレイはそう思い、自分のギャラドスが強くなれる選択をしたのであった。

13 話目 本質

『データや分類などではなく、ポケモン自身の本質を見抜くことじや……』

グレイは、ジムリーダーのゴンに言われた言葉を思い出していた。（本質ってなんだ？ あの場合では自分で納得した気になってたが、もっと質問すれば良かったな……）

グレイには、ゴンに言われた言葉が消化できないでいた。

（データや分類ではない……本質？ ビビオンは虫タイプで飛行タイプのポケモンだけど、実はオレのビビオンは突然変異で虫タイプではない……とか？ そういえば、あの爺さんはポケモンのタイプは曖昧で、ポケモンの本質を表してない、って言ってた気が……）

グレイは自分の手持ちポケモンを例に考え始めた。

（ギャラドスは凶暴なポケモンって思われているが、中にはとても優しいギャラドスがいるかもしれない。もしかしたら、どこかに空を飛ぶレパルダスがいるかもしれない……いや、流石にそれはないか……）

グレイの思考はしばらく続いたが、ポケモン自身の本質とは何か、その結論は出なかった。

グレイがゴンに勝利してジムバッジを手に入れてから、2週間が経過した。

この2週間でグレイは数多くのトレーナーと積極的にバトルし、グレイのポケモンは確実に強くなっている。

グレイが積極的にバトルするのは、ギャラドスの戦闘欲求を満た

すというノルマがあることの他にも、エレナに勝つためにポケモンを鍛えるという理由があった。

現在グレイは、次の町を目指して野原の道を歩いている。

グレイがふと道端に視線をやると、そこには木陰で休憩している1人の男がいた。若い男である。

男の隣には、羽をたたんで休んでいるチルタリスがいる。おそらく男のポケモンだろう。

チルタリス。ハミングポケモン。雲のような綿のような白くてフワフワした翼に、空色の体をもつ鳥のようなポケモンである。ドラゴンタイプと飛行タイプのポケモンである。

（チルタリスか……）

グレイは、エレナと2回目のバトルをした時のことを思い出した。エレナの手持ちにいたチルット。その進化後のポケモンがチルタリスである。

（進化したポケモンを連れてるんだし、多分強いんだろうな。バトルを挑むか）

バトルを挑むべく、グレイは男に話しかけた。

「1対1ならOKだよ」

チルタリスを連れたトレーナーからは、そのような返事があった。バトルができそうな広い場所を求め、2人は木陰から移動する。後ろからチルタリスが歩いてついてくる。

適当な広い場所を見つけ、グレイと相手トレーナーが向かい合う。

相手トレーナーの前にはチルタリスが立っている。どうやらチルタリスで戦うらしい。

「行け！　KK！」

グレイはギャラドスを出した。

ギャラドスとチルタリスが対峙する。

グレイは相手のチルタリスを見て思う。

（あのチルタリス、なんか貫禄があるな……）

戦う相手が目の前にいる状況。しかし相手のチルタリスは、鳥ポケモンであるはずなのに翼を広げて飛ぶ様子がなく、足で地面に立ち、翼をたたんで悠然としている。

「おいKK！　ナメられてんじゃねえの？　1発かましてやれよ」

グレイはギャラドスを煽って攻撃を指示した。

ギャラドスは、水をまとして相手に突撃する水タイプの攻撃技「たきのぼり」を使いながら、相手のチルタリスに向かう。

「チル！　ドラゴンクロー」

相手トレーナーに「チル」と呼ばれたチルタリスは、巨大な爪で相手を切り裂いて攻撃するドラゴンタイプの攻撃技「ドラゴンクロー」を当てるため、ギャラドスに近づく。しかし、その近づき方にグレイは違和感を覚えた。

相手のチルタリスは、走ってギャラドスに近づいてくる。翼をもつ鳥なのに、走って近づいてくる。

その姿はまるでダチョウのようであった。ポケモンで例えるならドードリオか。

チルタリスはジャンプして足の爪から「ドラゴンクロー」を放った。ギャラドスの「たきのぼり」とチルタリスの「ドラゴンクロー」が激しくぶつかる。

技がぶつかり合った衝撃で両者とも弾き跳ばされるが、相手のチ

ルタリスはやはり翼で飛ぶことはせずに地面に着地した。

グレイが相手トレーナーに声をかける。

「あなたのチルタリス、飛べないんですか？」

「いや、そんな事はないよ。チルは飛べない戦い方が好きなのさ。

実際、チルは強いだろ？」

相手のチルタリスが強いことはグレイも認めざるを得ない事である。グレイの手持ちポケモンの中で最も強い、戦闘狂ギャラドスと互角に戦えているのだから。

相手のチルタリスが空を飛ばないのは、決して手を抜いている訳ではない。全力で戦う時の戦闘スタイルが、あの飛ばない戦い方なのである。

ギャラドスが再びチルタリスに突撃する。

「チル！　「コットンガード」だ！」

相手はそう指示した。

（「コットンガード」？　確か、大量の綿毛で自分を包み込んで、防御力を超大幅に高める技だったな）

グレイはそう思ったのだが、相手のチルタリスを見る限り、綿毛で全身を覆う気配はない。むしろフワフワした翼がすごく硬い動きになっていく。さらに相手のチルタリスはギャラドスに狙いを定めるような動作をしている。

次の瞬間、チルタリスは勢いよくギャラドスの方へ跳び、自分の翼をギャラドスに向かって振りかぶった。どういう訳かガチガチに硬くなったチルタリスの翼で殴りつけられたギャラドスは弾き跳ばされた。

「それ！　「コットンガード」じゃなくて「はがねのつばさ」じゃないですか？」

グレイは思わず相手に声をかけた。

「普通の「コットンガード」とか「はがねのつばさ」とか、よく知らないけど、これは真正正銘の『チルの「コットンガード」』だよ」
相手トレーナーの返答はこのようなものであった。

（『チルの「コットンガード」』ねえ……）

グレイは、その言葉が妙に印象に残った。

再びギャラドスが突撃する。

チルタリスは勢いよくギャラドスの方へ跳び、今度は自分の翼をギャラドスに振りかざした。チルタリスの翼で殴りつけられたギャラドスは、今度は地面に墜落した。

「KK！　「たきのぼり」だ！」

すかさずグレイが指示した。

墜落してダメージを受けたギャラドスだが、即座に態勢を立て直し、真上のチルタリスに向かって「たきのぼり」を放った。

相手のチルタリスは、ギャラドスの水をまとった突撃に押し上げられ続け、天高く吹っ飛んだ。バトルの初めにギャラドスが1発放った「たきのぼり」よりも強烈な一撃であった。

相手トレーナーは、その威力の高さに驚いた様子を見せた。そんな相手を見ながら、グレイは内心でガッツポーズをする。

（見たか？　これがKKの「たきのぼり」の本当の威力だ！　「たきのぼり」はな、上方向の相手に攻撃する時に、特に威力が高くなるんだよ！）

水をまとって相手に突撃する攻撃技「たきのぼり」。グレイが、自分のギャラドスが使う「たきのぼり」に、そのような特殊な性質がある事に気がついたのは数日前である。

ふと、グレイは考える。

（「たきのぼり」は上に向かって攻撃すると強い……これって、全

てのポケモンに当てはまることなのか？ ギャラドスの使う「たきのぼり」だけに当てはまるのか？ もしかして、KKの「たきのぼり」だけに当てはまることなのか？

ここでグレイは、先ほどの相手トレーナーの『チルの「コットンガード」』という言葉が頭をよぎった。

（つまりこれは、『KKの「たきのぼり」』って事か？ 『KKの「たきのぼり」』は、上方向の相手を攻撃する時に威力が高くなる……って事なのか？）

そして、ふと思う。

（これこそが、あの爺さんが言っていたデータや分類ではない『本質』なんじゃねえか？）

グレイは、ゴンの言う『本質』という言葉が少しだけ消化できた気がした。

グレイは我に返り、目の前の戦いに目を戻す。

ギャラドスが、上空からチルタリスに向かって隕石のように迫っていた。

「チル！ 「アイアンテール」」

相手トレーナーがそう指示した。

（「アイアンテール」ね。硬い尻尾で相手を叩きつける鋼タイプの攻撃技だろ？ ジムリーダーの爺さんのポケモンが使ってきたから分かるぜ）

グレイは、2週間前に戦ったジムリーダーのゴンのポケモン。ミニリュウとクリムガンを思い出した。

しかし、相手のチルタリスが使う「アイアンテール」は、グレイの記憶とは何か違うように思えた。

チルタリスの尻尾が不自然に伸びて、変形し、急に尻尾の面積が

大きくなった。チルタリスの体の後ろから巨大な盾が生えているような不自然な光景が広がっていた。

相手のチルタリスは、尻尾が変形した盾で、ギャラドスの突撃を防いだ。

（あれも、『チルの“アイアンテール”』っていうことなんだろう？）
グレイには自然とそう思えるようになった。

突撃を盾で防がれたギャラドスは、尻尾を巻き付かせてチルタリスを捕え、そのまま上空へ放り投げた。そのまま上方向にいるチルタリスに“たきのぼり”を放つ。

チルタリスは盾で防ぎきれず、ダメージを受けて天高く吹っ飛んだ。

ギャラドスは追撃するためにチルタリスの上に回り込んで攻撃するが、それは相手の盾で防がれる。

「チル！ “コットンガード”だ！」

再び、グレイの知っている“コットンガード”とは違う謎の攻撃『チルの“コットンガード”』が放たれた。ガチガチに硬くなった翼で殴られ、ギャラドスは落下する。

「チル！ “ドリルくちばし”」

（はあ？ “ドリルくちばし”！？ チルタリスは“ドリルくちばし”を使えるポケモンじゃないだろ！？）

相手トレーナーが指示した技に、グレイは動揺を隠せない。

チルタリスは、クチバシを中心に体を回転させて相手に突撃する飛行タイプの攻撃技“ドリルくちばし”で、落下するギャラドスを攻撃する。

地面に墜落したギャラドスに、なおも“ドリルくちばし”を続ける。

ギャラドスの体の上で、突き刺したクチバシを中心に回るチルタ

リスは、まるでコマのようである。

（チルタリスなのに「ドリルクちばし」を使うとか……あいつ、もう何でもありだな……そのうち地面の中を移動し始めるんじゃないか？）

そんな事をグレイは思った。

ギャラドスは素早く体を揺らし、相手のチルタリスを振り払う。そして上空へ飛び立ち、チルタリスを押しつぶそうと落下する。

「チル！　「ドリルクちばし」で穴を掘るんだ！」

相手トレーナーの指示で、チルタリスは「ドリルクちばし」で地面に穴を開け、穴の中に隠れた。

ギャラドスの攻撃が外れたタイミングで、チルタリスがギャラドスの横の地面から現れ、そのまま「ドリルクちばし」を当てる。

（マジで地面の中を移動しやがった……）

グレイは驚き、そして相手のチルタリスの可能性について考えるのをやめた。これ以上に考えると、考えてしまった事が実現しそうで怖かったからである。

「君のギャラドスは強いね。チルが1対1のバトルで負けたのは久しぶりさ」

「あなたのチルタリスも、強かったですよ」

バトルの後は互いを称え合う。

バトルはグレイのギャラドスの勝利に終わった。

相手のチルタリスは、上に向けて放たれる「たきのぼり」を防ぐ有効な手段を持っていなかった。これがグレイの大きな勝因であった。

グレイは思った事を率直に言う。

「あなたのチルタリスって、本当にチルタリスなんですか？ 空を飛ばないし、「コットンガード」と「アイアンテール」もなんか変ですし、なぜか「ドリルくちばし」を使えますし」

「よく言われるよ。君のポケモンは本当はチルタリスじゃないのでは？ とね。でもね、本当はチルタリスじゃないとか、鳥ポケモンなのに飛んで戦わないとか、そんな事はどうでもいいんだよ」

そして相手トレーナーは言葉を続ける。

「チルは鳥ポケモンなのか？ チルはチルタリスというポケモンなのか？ そんな事は関係ないんだよ。だって、チルはチルなんだからね」

相手トレーナーのその言葉を聞いた時、グレイはゴンの言葉を消化できた気がした。

（この人はチルタリスを、チルタリスというポケモンの種類として見ているんじゃないって、目の前にいる生き物をありのままに見ているんだ……これこそが本質。きっとそういう事だ）

そしてグレイは、目の前の男が倒れたチルタリスをモンスターボールに戻さずに、自分で背負っている姿を見た。そのトレーナーとチルタリスの関係は、人間とポケモンの関係というよりは、人間と人間の関係に近いようにグレイには思えた。

グレイの目の前に広がる光景は、試合に負けた格闘家の選手と、それを介抱する格闘家選手のコーチ、そのようなものであった。

（この人にとっては、『ポケモン』という分類すら意味の無いものなのかもな。あの人にとってチルはチル以外の何者でもないんだろうな……）

グレイは、常識外れなチルタリスを使うトレーナーとのバトルを経験し、新たな考え方を多く得たのであった。

14 話目 漆黒の者（前）

グレイが旅を始めてから、はやくも4ヶ月が経過した。

エレナと2回目のバトルをして、その後ヒトツシティのジムリーダーからジムバッジを手に入れた時期が、グレイが旅立ってから約1ヶ月後の事であったので、あれからは約3ヶ月が経過していることになる。

グレイは、打倒エレナを目指してポケモンを鍛えるべく、数多くのトレーナーと積極的にバトルしている。もはや、ギャラドスの戦闘欲求を満たすノルマなど自然に達成できてしまう程である。

繰り返されるバトルにより、グレイのポケモンはさらに強く成長した。

ちなみに、エレナと2回目のバトルをしてから今日までの約3ヶ月間、グレイは何回かエレナにバトルを挑んだが1回も勝てていない。2回目にはバトルした時には互角に戦っていたハズなのだが、グレイとエレナの実力差は存外に大きいらしい。

決してグレイとポケモンが成長していない訳ではない。その証拠に、グレイは約1ヶ月前にフッタツシティのジムリーダーに勝利し、2つ目のジムバッジを手に入れている。しかし成長しているのはグレイだけではない。エレナも日々成長しており、中々に追いつけないのである。

現在グレイは、山奥にあるポケモンの保護施設『幸運の家』に滞在している。

幸運の家は、捨てられたり虐待を受けたポケモンの心の傷を癒す場所である。

人間の補佐として、ラッキーというポケモンが多く働いていることが、幸運の家の名前の由来であろう。

ラッキー、たまごポケモン。ピンク色で、たまごのような丸っこい体に、小さな手足がある。お腹にはカンガルーのようにポケットがあり、たまごが入っている。幸せを運ぶと言われているポケモンで、弱った者にたまごを分けてあげる心優しいポケモンである。

幸運の家は保護施設であり、本来は旅人の宿泊施設ではないのだが、道に迷ったグレイを快く受け入れてくれたのである。

幸運の家があるブライ山は、普段は比較的安全な山であり普通は迷うことはないが、ごく稀に深い霧が発生することがある山である。グレイは運悪く深い霧と遭遇し、いつの間にか登山道を外れて獣道を歩いていたのである。

登山道が存在する山で迷った場合、頂上を目指すのが良いと一般的に言われている。グレイは一般論に従って頂上を目指し、そして幸運の家に辿りついたのだ。

グレイは今まで知らなかったが、この幸運の家は業界では有名な施設であり、数多くのポケモンの心の傷を癒して更生させた実績をもつという。

グレイがこの施設に辿り着いてから2日が経った。この施設に漂う優しい雰囲気はグレイにとって居心地が良く、最近はバトルばかりしていたグレイの心を安らかにしていた。

しかし、いつまでもここに居ることはできない。施設の人に迷惑をかけ続ける訳にはいかず、戦闘狂のギャラドスのストレスをためる訳にもいかない。この辺りに生息する野生のポケモンは弱い者ばかりで、ギャラドスが満足できる相手など皆無だった。

イスに座りながら、グレイはぼーっとしていた。

（今日中には絶対に出ていこう。ただ……今はこの平和な空間を満喫したい……）

グレイがそんな風に考えていると、1体のラッキーがグレイの方へ歩みより、グレイの前に座った。

「おお、どうした？ 仕事は終わったのか？」

そう言いながら、グレイは目の前のラッキーを撫でてやる。グレイの手がフワフワした感覚に包まれた。

グレイに撫でられて、ラッキーは嬉しそうな表情をした。

「ずいぶんと、そのコに気に入られているみたいだね」

1人の男がそう言いながら、グレイに近づいてきた。男の名前はゼン。この施設の長である。ゼンが続けて話しかける。

「普段は人に甘えるようなコじゃないんだがねえ、どちらかと言うと、面倒見がよくて、しっかり者で、ラッキー達の中ではリーダーのような存在なのだが、何故か君には甘えるんだねえ」

目の前のラッキーが施設の人間たちに『姐^{ねえ}さん』というニックネームで呼ばれている場面を、グレイは何度か目撃している。

（なんか、気が合うんだよな……このラッキー）

グレイは、施設で働くラッキーの個体を見分ける事はできない。しかし、目の前の撫でている個体だけは、なんとなく他のラッキー

とは区別がついた。

（ラッキーを撫でると、なんか幸せな気持ちになれるな……）

そんな事を考えながら、グレイは平和な時間を満喫していた。

そんな平和な空間を乱す事件は、突然に起こるのである。

ビライ山の中腹で、森が開けた場所に建つ幸運の家。

静寂に包まれるその場所の上空に、轟音と共に突如として巨大なヘリコプターが数機現れた。幸運の家の上空で静止したヘリから、次々と黒い服の者たちが降り立ち、1人1体のポケモンを出して幸運の家へと向かってくる。

「なんだなんだ!？」

突然の轟音に驚いて外に出たグレイは、こちらに向かってくる黒い服の集団とポケモンを見て、そう声をあげた。

グレイの隣には、様子を見にきた施設の長と、さっきまでグレイが撫でていた『姐さん』^{ねえ}と呼ばれているラッキーもいる。

「君たち、いったい何者だね？ この施設に何の用かね？」

施設長のゼンが、黒の者たちに向かって問いかけた。

「我々はライフ団！ 生命の力について研究する者だ！」

ライフ——つまり、命。

『命』と聞いて、何色を想像するだろうか？ ハートの形を連想し、赤色やピンク色を思い起こすだろうか？ 植物を連想し、緑色を想像するだろうか？

想像には個人差はあるだろう。しかし、命と聞いて黒色を連想する者は少数派だと思われる。

グレイの目の前にいるライフ団を名乗った者たちは全員、漆黒色

の制服を着ている。漆黒色は死を連想させる色である。

命を名乗りながら、死を連想させるその姿。その不一致を見たグレイは直観的に、目の前の者が善悪で言えば悪側であると思った。そしてその直観は、ライフ団と名乗る者の次の言葉で確かなものとなる。

「我々ライフ団は、生きる力を分け与えるというこの施設のラッキーに興味がある。おとなしくラッキーを渡してもらおうか」

つまりは強盗の宣言である。ライフ団の発言により、その場を緊張感が包んだ。

ゼンがグレイに真剣な表情で声をかけてくる。

「なんの冗談かは分かんが……グレイくん、君はトレーナーなんだろう？ 頼む！ 一時的でもいいから、あいつらを止めてくれんか？ 私たちの活動にラッキーは必要不可欠な存在なんだ。ラッキーを失う訳にはいかないんだ」

「分かりました。飯と寝床の恩がありますしね」

グレイはゼンの願いを聞き入れた。

目の前に広がるライフ団と多数のポケモン。一般的なトレーナーならば、これらを相手に1人で戦うなど不可能な話である。しかし、トラベル地方のジムバッジを2つも所持しているグレイは、一般的なトレーナーの側の人間ではなかった。

「私は警察と連絡を取る。応援が来るまで、何とか頼むよグレイくん！」

ゼンはそうグレイに言い残し、建物に入っていく。

ラッキーがグレイに心配そうな表情を見せた。

「大丈夫だ！ なんとかなる！」

グレイの言葉を聞いて、ラッキーもゼンと共に建物の中に入った。

「ビビ！　KK！　レパ！　頼むぞ！」

グレイはそう言って、ビビヨン、ギャラドス、レパルダス、を出した。

お察しの通り、ビビはビビヨン、KKはギャラドス、レパはレパルダス、のそれぞれのニックネームである。戦闘中に名前を呼びやすいように、グレイは自分のポケモンに短いニックネームをつけたのだ。

戦う意思を見せるグレイに、ライフ団の団員が声をかけてくる。

「お前１人で戦うつもりか？　子供１人として容赦はせんぞ！」

その言葉を合図に、相手が一斉に攻撃を仕掛けてくる。

「KK！　レパ！　突っ込め！　ビビはここから狙撃だ！」

グレイの指示で、まずギャラドスが相手の集団の真ん中に突っ込み、遅れてレパルダスが続く。ビビヨンはその場で「むしのていこう」や「サイケこうせん」などの特殊攻撃技を使って遠距離攻撃をする。

激しい戦いが始まった。

「我々が……こんな子供相手に……」

ライフ団の１人がそうつぶやいた。

グレイとライフ団の間には惨状が広がっていた。

ビビヨンに狙撃されたポケモン……レパルダスに一瞬でやられたポケモン……ギャラドスに絞められたポケモン……ギャラドスに投げられたポケモン……ギャラドスに埋められたポケモン……ギャラドスに突き落とされたポケモン……などの多くのポケモンが戦闘不能となって倒れていた。

相手は集団で、個々でもそれなりの力をもったポケモンであった。しかし、それなりの力程度ではグレイのポケモン、特にグレイのギヤラドスには勝つことはできない。

グレイのポケモンは、ジムリーダーのゴンに勝った時よりもさらに大きな力をつけているのだ。

「なんだあ？ 幸運の家にガードマンなんかいないって話じゃなかったのか？」

そう言いながら、ヘリから新たに男が1人降りて来た。男の年齢はグレイよりも少し上のように見える。

グレイは直観的に、降りて来た男が強いトレーナーであると感じた。

男がグレイに声をかけてくる。

「随分と好きにやってくれたな？ だが、それもここまでだ」

一呼吸おいて、男が続ける。

「俺は、ライフ団所属の戦闘員アーク。これ以上に俺達を邪魔するつもりなら、俺は全力でお前を消さなきゃなんねえ。どうだ？ おとなしく引き下がるつもりはないか？」

アークと名乗った男の忠告に対し、グレイは強気に言葉を返す。

「この惨状をよく見ろよ。オレのポケモンの強さが分かるだろ？ それにオレはジムバッジを2つ持っている。子供と思って甘く見るなよ」

グレイの言葉を聞き、アークは笑いだした。

「惨状だあ？ 笑わせんなよ、そのぐらい俺にもできるさ！ ジムバッジ2つ？ それがどうした？ ライフ団の戦闘員である俺を、ジムバッジ2つ程度の実力で止められると思ってるのか？」

そう言い終わると、アークは素早くモンスターボールを5個取り出し、まず3つのボールからポケモンを繰り出した。

アークの前に3体のポケモンが現れた。

短足4本で歩行し、体は緑色、背中に巨大な葉と花をのせている、という外見。草タイプかつ毒タイプで、たねポケモンの『フシギバナ』。

黒い犬ドーベルマンのような姿で、角^つや尻尾の形が悪魔を連想させる外見。悪タイプかつ炎タイプで、ダークポケモンの『ヘルガー』。

ゼリー状の緑の体をもつスライムのような姿で、大きな両手が体から生えている。エスパークタイプで、ぞうふくポケモンの『ランクルス』。

さらにアークは残り2つのボールからもポケモンを繰り出す。2つのボールからは同じポケモンが現れた。

スターミーが2体、地面に立った。

スターミー。五芒星の形のヒトデを2つ重ね合わせたような外見。水タイプかつエスパークタイプで、なぞのポケモン。

こうして、ライフ団のアークの前には5体のポケモンが現れた。

アークの出したポケモンを、グレイは注意深く観察する。

（巨大生花フシギバナ、黒犬ヘルガー、緑液体ランクルス……そして、五芒星スターミーが2体か。どれも強そうだが……まさか1人で5体のポケモンを同時に指示なんかできないだろ？ 他の奴に指示を分担するのか？）

そう考えたグレイだが、アークは他の団員を下がらせている。どうやらグレイの予想とは違うらしい。

「ビビ！ 攻撃開始！ KKとレパはまだ待て！」

先手必勝。アークが他の団員を下がらせている隙に、グレイは遠距離攻撃ができるビビヨンにだけ攻撃指示を出した。待ての指示にギャラドスは不満そうである。

ビビヨンの特殊攻撃技「むしのていこう」が遠距離の相手に放たれた。

「なっ！？ テメエ！ フシギバナ受け止めろ！」

ビビヨンの放った「むしのていこう」は、敵の巨大生花フシギバナが全て受け止めた。巨大生花フシギバナはダメージを受けてよろめいた。

「フシギバナ！ いつも通り「やどりぎのタネ」だ！」

「やどりぎのタネ」とは、相手の体にタネを植えて、時間が経つごとに相手の体力を奪う技である。「やどりぎのタネ」が命中したポケモンは、モンスターボールに戻すまで永続的に体力を奪われ続ける。

（「やどりぎのタネ」だと？ あんな遠距離からここまで届くはずないだろ？）

相手の指示を聞いたグレイはそう思った。

しかし、巨大生花フシギバナの「やどりぎのタネ」は、グレイのポケモンではなく、緑液体ランクルスと2体いる五芒星スターミィに向かって放たれた。

緑液体ランクルスと2体の五芒星スターミィは、体中に植物の蔓^{つる}が巻きつき、巨大生花フシギバナに体力を奪われる。

3体のポケモンから体力が供給される巨大生花フシギバナは、ビビヨンから受けたダメージをあっという間に無かったことにする。

目の前の光景をグレイは分析する。

（なるほど、1人で5体も同時に指示出せる訳ないとは思ってたが、要するにランクルスと2体のスターミーは、フシギバナの体力供給機ってことか……あの供給機の破壊が優先だな）

ライフ団のアークが新たな指示を出す。

「ランクルス〃めいそう〃！ ヘルガーとフシギバナは相手に突撃！」
緑液体ランクルスは、自分の特殊攻撃力と特殊防御力を上げる技
〃めいそう〃を使った。

そして5体いる敵ポケモンの内、巨大生花フシギバナと黒犬ヘルガーの2体が、グレイのギャラドスとレパルダスに迫る。

「レパ〃ねこだまし〃と〃みだれひっかき〃！ KKは〃たきのぼり〃！」

ビビヨンは狙撃手として使うためにその場に残し、ギャラドスとレパルダスに突撃命令を下した。

△ i 6 1 4 3 | 3 8 3 1 1 ∇

ギャラドスとレパルダスが攻撃の姿勢を見せると、突如相手の黒犬ヘルガーは巨大生花フシギバナを盾にして後ろに隠れた。それにより、ギャラドスとレパルダスの攻撃は全て巨大生花フシギバナが受ける。

レパルダスは「ねこだまし」で相手を怯ませ、その隙に「みだれひっかき」の連撃をする。その後遅れて、ギャラドスの水をまとった突撃技「たきのぼり」が直撃する。

「ヘルガー」あくのはどう「！」

盾にされた巨大生花フシギバナはその場によろめく。その後ろから無傷の黒犬ヘルガーが顔を出し、「あくのはどう」をギャラドスとレパルダスに放つ。

「ビビ」むしのていこう「！ あのレストランとスターミーに！」

黒犬ヘルガーにギャラドスとレパルダスが吹っ飛ばされている時、グレイはガラ空きになった体力供給機である、緑液体ランクルスと2体の五芒星スターミーに攻撃するために、ビビヨンに狙撃を命じた。

△ i 6 1 4 4 | 3 8 3 1 1 ∇

ビビヨンは、無防備と思われる体力供給機たちに攻撃を開始した。
しかし、

「ランクルス〃サイコキネシス」

ビビヨンの狙撃は、緑液体ランクルスの〃サイコキネシス〃に防
がれる。しかも、それだけではなかった。

なんと、ただの体力供給機と思われていた緑液体ランクルスの〃
サイコキネシス〃は圧倒的な威力でビビヨンの狙撃を打ち消してビ
ビヨン自身にまでダメージを与えた。

（マジかい！ 遠距離戦でビビが勝てないのかよ！？）

すぐさま作戦を切り替えたグレイは、前衛で戦う者たちに指示を
出す。

「KKはそのまま戦え！ レパは相手をすり抜けて奥へ行け！ ラ
ンクルスを攻撃しろ！」

「ヘルガー〃あくのはどう〃！ フシギバナ〃ギガドレイン〃」

巨大生花フシギバナは、ギャラドスの〃たきのぼり〃を受け止め、
レパルダスを奥に行かせないように草タイプの特殊攻撃技〃ギガド
レイン〃を放って妨害する。

レパルダスは〃ギガドレイン〃を避けるが、盾の影から姿を現し
た黒犬ヘルガーの〃あくのはどう〃をくらってしまふ。一瞬怯んだ
レパルダスに、黒犬ヘルガーと巨大生花フシギバナの攻撃が迫る。

しかしギャラドスの〃たきのぼり〃が相手2体の攻撃からレパル
ダスを守った。レパルダスはそのまま緑液体ランクルスがいる方向

へ進む。

「ビビ」むしのていこう」

「ランクルス」サイコキネシス」！ フシギバナ「ギガドレイン」！
ヘルガー「あくのはどう」！」

巨大生花フシギバナと黒犬ヘルガーは、ギャラドスが1体で食い止めている。

緑液体ランクルスに対して、今度はビビヨンとレパルダスの2体がかかりで攻撃する。近くにいる2体いる五芒星スターミーが、水タイプの特殊攻撃技「ハイドロポンプ」を放ってレパルダスに攻撃するが、レパルダスに簡単にそれを避ける。

五芒星スターミーの攻撃はとても雑で、攻撃の訓練がされているように見えない。どうやら五芒星スターミーは、本当に体力供給機としての存在のようだ。

緑液体ランクルスが「サイコキネシス」を遠くのビビヨンに放つが、レパルダスがそれを受け止める。タイプ相性的にレパルダスには「サイコキネシス」は全く効かない。

「ランクルス！」「サイコキネシス」は止めて「シャドーボール」で攻撃しろ！」

緑液体ランクルスは、ゴーストタイプの特殊攻撃技「シャドーボール」での攻撃に切り替える。これによりレパルダスに攻撃できるようになったが、得意技でない「サイコキネシス」を封印したことで、今度はビビヨンとの遠距離攻撃の撃ち合いで勝てなくなる。

「レパ！ ランクルスよりも無防備なスターミーを狙え！」

「スターミー！ "リフレクター"と"ひかりのかべ"！」

2体の五芒星スターミーは、1体が物理攻撃の威力を半減する技"リフレクター"を、もう1体が特殊攻撃の威力を半減する技"ひかりのかべ"を、それぞれ発動した。

五芒星スターミーに攻撃するレパルダスだが、"リフレクター"の効果で攻撃は威力が半減する。

さらに、遠くからビビヨンが放つ特殊攻撃も"ひかりのかべ"で威力が半減される。

「レパ！ 構わず攻撃！」

いくら半減されようと、攻撃し続ければいつか倒せる。そう考えたグレイは攻撃の続行を指示したのだが……

「スターミー！ ランクルス！ "じこさいせい"だ！」

ライフ団のアークの指示により、緑液体ランクルスと2体の五芒星スターミーは、自分の体力を回復させる技"じこさいせい"を使った。レパルダスとビビヨンから攻撃された分、そして巨大生花フシギバナに提供した分、失った体力を全て回復した。

（マジかよ！　だが1回「じこさいせい」を使うと、しばらくの間は使えないはずだ！　次に「じこさいせい」が使えるようになる前に一気に殺す！）

そう考え、グレイは指示する。

「レパ！　スターミーに全力攻撃！」

しかし、

「スターミー！　「まもる」！」

次にアークが下した指示は、またしてもグレイには都合の悪いものであった。

2体いる五芒星スターミーは、「まもる」によって無敵状態になった。無敵状態が解除されるまでは、少し時間がかかる。

「くそっ！　レパ！　ランクルスに攻撃！　ビビも援護！」

「ランクルス！　レパルダスに「シャドーボール」だ！　ビビヨンの攻撃は無視しろ！　そしてスターミーも「ハイドロポンプ」！　だ狙いは適当でいい！」

緑液体ランクルスは、レパルダスに攻撃を開始する。さらに無敵状態の五芒星スターミーも「ハイドロポンプ」で援護する。

五芒星スターミーの「ハイドロポンプ」の命中精度はとても低く、レパルダスも緑液体ランクルスも関係なく両者にダメージを与える。しかし、回復技がある緑液体ランクルスと、回復技が無いレパルダスでは、ダメージを受けることの意味の大きさが全く異なる。

（このままじゃ負けだ！　どこか戦況を動かさないと……）

グレイは戦況を分析する。

△ i 6 1 4 6 | 3 8 3 1 1 ∇

現在の状況。ポケモンは大きく分けて3つの地点で戦っている。

まずはグレイの近く。ここにはビビヨンがいる。

ビビヨン：遠くにいる緑液体ランクルスに向けて「むしのていこう」で攻撃している状況である。

ビビヨンを攻撃する者は今はいない。

次に真ん中。ここにはギャラドス、巨大生花フシギバナ、黒犬ヘルガー、の3体が戦っている。

黒犬ヘルガー：巨大生花フシギバナを盾にしながら、ギャラドスに攻撃している。盾のおかげで無傷である。

巨大生花フシギバナ：何度もギャラドスの攻撃を受けているが、先ほどの「やどりぎのタネ」により緑液体ランクルスと2体の五芒星スターミーから体力が供給されるため、ダメージはほとんど溜っていない。ギャラドスへの攻撃もしている。

ギャラドス：2体から攻撃を受け続けて体力が減っている。

総括的に見れば、体力供給がある巨大生花フシギバナを倒すことは不可能で、ギャラドスが倒れるのは時間の問題である、と言える。

それからアークの近く。ここにはレパルダス、緑液体ランクルス、2体の五芒星スターミー、の合計4体が戦っている。

2体の五芒星スターミー：“まもる”の効果で現在無敵状態である。また、レパルダスと緑液体ランクルスに無差別に攻撃している。さらに、“やどりぎのタネ”の効果で、巨大生花フシギバナに体力を供給している。

緑液体ランクルス：主にレパルダスと戦っている。遠くのビビヨン、さらに味方の五芒星スターミーから攻撃を受けている。しかし、“リフレクター”、“ひかりのかべ”、“めいそう”の効果で受けるダメージを少なくしている。また、巨大生花フシギバナに体力を供給している。

レパルダス：主にランクルスと戦っている。近くの2体の五芒星スターミーからも攻撃を受けている。攻撃され、体力が減っている。総括的に見れば、レパルダスと緑液体ランクルスで体力比べをすれば、先に倒れる方はレパルダスである、と言える。

（戦力は相手の方が上だ。1点集中で確実に相手の戦力を減らした方がいいな）

グレイは結論を出し、指示を始める。

「レパ！そこは諦めて、真ん中の戦いに参加しろ！ビビは相手のランクルスを攻撃して牽制！」

グレイの指示により、レパルダスは真ん中の戦場へと引き返した。レパルダスと戦っていた相手の緑液体ランクルスは、遠距離のビビヨンに向けて再び“サイコキネシス”を放つ。

「ビビ！ まともに撃ち合うな！ 回避が優先！」

ビビヨンと緑液体ランクルス。攻撃の威力が高いのは相手側であるのは先の小競り合いで分かっていることなので、逃げ気味に撃ち合うようにグレイは指示した。

両者の遠距離攻撃の撃ち合いが再開されるが、ビビヨンが戦いから逃げるので、お互い攻撃がほとんど当たらない。

その間に、レパルダスが真ん中の戦場に到着した。

再び、ギャラドス&レパルダスVS巨大生花フシギバナ&黒犬ヘルガー、の戦いが始まる。

「ビビ！ お前も真ん中の戦場を援護！」

グレイの指示により、グレイのポケモンは3体全員が真ん中の戦場に攻撃することになった。

「ランクルス！ お前も真ん中を狙え！」

アークの指示により、緑液体ランクルスも真ん中の戦場に攻撃を放つ。真ん中の戦場は、4体のポケモンが戦いながら、さらに外側の2方向から遠距離攻撃が飛来するという激戦地区となった。

しかし、これはグレイにとっては都合の良い状況であった。グレイの狙いは、まず攻撃能力が圧倒的に高い黒犬ヘルガーを倒すことであった。戦場が混沌とすれば、黒犬ヘルガーにダメージを与えやすくなる。

グレイの狙い通り、あらゆる攻撃があらゆる方向から黒犬ヘルガーに飛来する。攻撃の全てを巨大生花フシギバナを盾にして防ぐ事が難しくなり、黒犬ヘルガーは少しずつダメージを受けていく。

（このままいけばヘルガーを倒せる！ まずは1体だ！）

作戦が当たったことに、グレイは内心で喜んでいた。しかし、

「フシギバナ！ ねむりごな」

アークは、相手を眠らせる技「ねむりごな」を指示した。

「避ける！ K K！ レパ！」

グレイは慌てて指示するが、混沌とした戦場で回避指示は意味がない。

相手の「ねむりごな」はギャラドスに命中した。ギャラドスは眠ってしまった。

「レパ、お前だけじゃ勝てん！ 逃げろ！」

「逃がさねえよ！ フシギバナ！ ヘルガー！ 全力でレパルダスを攻撃！」

ギャラドスが眠った事により、真ん中の戦場の戦力は完全にアイク側に傾いた。

ビビヨンも遠くから攻撃し続ける。しかし相手は、ビビヨンの攻撃の直撃も気にせずに2体とも全力でレパルダスを攻撃する。

圧倒的な敵の暴力を受け、レパルダスはなす術なく戦闘不能となって倒れた。

「おい！ 奥のビビヨンに攻撃しろ！」

アイクがそう指示を出した。

眠っているギャラドスを放置し、巨大生花フシギバナと黒犬ヘルガーが、ビビヨンの方に向かってくる。緑液体ランクルスも、ビビヨンへの遠距離攻撃を再開した。

（マジかよ！ これ、どうすればいいんだ……？）

一気に不利な状況となったグレイは、体中から冷や汗が出るのを感じた。頭はいつになく冷静で、冴えわたる感覚がするのにな、何も打開策は思いつかない。

頭が真っ白になる、とは、意外にも冷静な時に起こる現象なのかもしれない。

∧ i 6 1 4 7 | 3 8 3 1 1 ∨

今、グレイが戦っている相手。ライフ団は、施設のラッキーを強奪しようと行動している。彼らは間違いなく裏世界の人間である。この戦いは、ポケモンバトルではなく、ポケモンによる武力行使である。この戦いに敗れた者に、次の機会は存在しないのである。

迫りくる巨大生花フシギバナと黒犬ヘルガー。

ビビヨンが、黒犬ヘルガーに「むしのていこう」を放つが、黒犬ヘルガーは巨大生花フシギバナを盾にする。

攻撃を受けた巨大生花フシギバナは、3体のポケモンからの体力供給により、あっという間に体力を回復した。

（KKはまだ起きないのか？）

グレイはギャラドスの方を見るが、ギャラドスは今も眠り続けている。

敵はさらに距離を詰めた。

それに加え、緑液体ランクルスが、「サイコキネシス」を放ってビビョンの上空への逃げ道を塞いだ。

アークが、ビビョンにとどめを刺すべく指示を出す。

「ヘルガー！れんごく！」

炎タイプの技は、虫タイプであるビビョンには効果抜群である。

さらに「れんごく」は、炎タイプの中でも威力が高い技である。当たればビビョンは耐えられないだろう。

凄まじい威力をもつ炎タイプの特殊攻撃技「れんごく」が、ビビョンに向かって容赦なく放たれた。

15 話目 漆黒の者（後）

ビライ山。

その山奥にあるポケモンの保護施設『幸運の家』。幸せを運び、分け与えると言われるポケモン、ラッキーの力を借りていることから、その名がついた。

幸運の家で施設長を務めている男、名前をゼンという。

ゼンは、施設に預けられているポケモン達の様子を見るために、施設内を巡回していた。ふと見ると、1人の少年が1体のラッキーを撫でている光景が目に入った。

少年の名前はグレイ。彼はこの施設で働く人間ではない。山で迷ったらしく、2日前にこの施設へと辿りついた者である。

ゼンは、ラッキーを撫でている少年グレイに近づき、話しかける。「ずいぶんと、そのコに気に入られているみたいだね」

話しかけられた少年グレイは、ゼンの方に視線を向けた。ゼンは、撫でられているラッキーを見ながら、グレイに続けて話かける。

「普段は人に甘えるようなコじゃないんだがねえ、どちらかと言うと、面倒見がよくて、しっかり者で、ラッキー達の中ではリーダーのような存在なのだが、何故か君には甘えるんだねえ」

施設の者からは『姐さん』などというニックネームで呼ばれているラッキーである。他のポケモンから甘えられる事はあっても、甘える姿などゼンは見た事が無かった。

グレイと、『姐さん』と呼ばれるラッキー。ゼンには、なんとなく両者が意気投合しているように見えた。

事件は突然起こった。

幸運の家は山奥にあるため、普段は静寂が支配する場所である。そこに突如として巨大なヘリコプターが数機、轟音と共に現れたのである。

ゼンは突然の轟音の正体を確かめるために、グレイと『姐さん』と呼ばれているラッキーと共に外へ出た。そこには、ヘリから降りて来た漆黒色の服を着た者たちが、1人1体のポケモンを連れてこちらに向かってくる光景が広がっていた。

状況がよく分からないゼンは、漆黒の者たちに向かって問いかける。

「君たち、いったい何者だね？ この施設に何の用かね？」

ゼンの問いかけに対し、漆黒の者たちが答える。

「我々はライフ団！ 生命の力について研究する者だ！」

ライフ団、と名乗った者たちは、さらに言葉を続ける。

「我々ライフ団は、生きる力を分け与えるというこの施設のラッキーに興味がある。おとなしくラッキーを渡してもらおうか」

ラッキーの強奪を宣言したライフ団。この平和な空間は、突如として暴力の世界へと変質したのだ。

（ラッキーを奪う？ そんな事が許されるはずがない！）

ゼンは強く思った。施設には、心が弱り、ラッキーの力を必要としているポケモンが多くいるのだ。

ゼンは、隣にいる少年グレイが、トラベル地方のジムバッジを2つも所持する実力あるトレーナーであることを思い出し、グレイに頼み事をする。

「なんの冗談かは分かんが……グレイくん、君はトレーナーなんだろう？ 頼む！ 一時的でもいいから、あいつらを止めてくれんか？ 私たちの活動にラッキーは必要不可欠な存在なんだ。ラッキーを失う訳にはいかないんだ」

「分かりました。飯と寝床の恩がありますしね」

グレイは、ゼンの願いを聞き入れた。

トレーナーとは言え、この危険な場面を子供に任せることに對して、ゼンは心苦しく思った。

しかし、ゼンには他に方法が思いつかなかったのだ。

「私は警察と連絡を取る。応援が来るまで、何とか頼むよグレイくん！」

そう言って、ゼンはラッキーと共に施設の建物に入った。

「施設長殿。現在この地域では、ライフ団を名乗る者が森を破壊しており、そちらの対応に追われている。そのライフ団を名乗る者は、治安組織のトレーナーでも鎮圧できないほどに強いポケモンを連れていて、そちらの応援に人員を割いている。直ぐの対応はできない！」

警察に応援を要請したゼンだが、警察の応答はそのようなものであった。

焦るゼンだが、後ろからラッキーの鳴き声が投げかけられた事で我に返る。

ゼンの後ろにいるラッキーは、先ほどからゼンと一緒にいる『姐さん』と呼ばれている個体である。

ラッキーは、ゼンと視線を合わせた後、施設の入り口の方向——現在、戦闘が繰り広げられているであろう場所——に向かって走り

だした。

「姐さん！ どこに行くつもりだ！？」

ゼンは慌てて追いかけた。

△ i 6 1 4 8 | 3 8 3 1 1 ∇

グレイは、突然の状況変化に驚いていた。

敵の黒犬ヘルガーが、ビビョンに向かって強力な炎タイプの技“れんごく”を放った。しかし、突然に現れたラッキーがビビョンと黒犬ヘルガーとの間に割って入り、“れんごく”を受け止めたのだ。

苦しそうな表情をするラッキーだが、次の瞬間、強く輝く不思議な光を放ち、黒犬ヘルガーを弾き跳ばした。

驚いたグレイだが、即座に冷静になって周りを見渡し、

「たきのぼりだ!!」

そう叫びながら、敵の黒犬ヘルガーを指でさした。

一瞬前までは眠っていたギャラドスは、弾き跳ばされて空中を舞っている黒犬ヘルガーに向かい、水をまとめて全力で突っ込んだ。

巨大生花フシギバナは黒犬ヘルガーの盾になろうとするが、ビビヨンとラッキーに攻撃されて足止めされた。

ギャラドスの「たきのぼり」が、黒犬ヘルガーに直撃した。

水タイプの攻撃技「たきのぼり」は、炎タイプをもつ黒犬ヘルガーに効果抜群である。

攻撃面では非常に強い力をもつが防御面では弱い黒犬ヘルガーは、ギャラドスの「たきのぼり」を受けたことで大きなダメージを負い、遠くへ吹っ飛んだ。

ライフ団のアークが声をあげて指示する。

「ランクルス！ ギャラドスに「サイコネシス」だ！」

黒犬ヘルガーを追撃するギャラドスだが、遠くのランクルスから放たれた強力な「サイコネシス」が命中してギャラドスは墜落した。

巨大生花フシギバナが、墜落したギャラドスに「ギガドレイン」で攻撃するが、ギャラドスの「たきのぼり」により相殺される。

巨大生花フシギバナと、ギャラドスの殴り合いが始まった。

「KK！ 攻撃は「こおりのキバ」を使い！」

草タイプの巨大生花フシギバナに、水タイプの「たきのぼり」は効果が薄い。草タイプに効果抜群な氷タイプの技「こおりのキバ」をグレイは指示した。

素早く指示を終えた後、グレイは施設の入り口に目をやる。入り口には施設長のゼンが立っていた。

「施設長！ 姐さんが使える技は!？」

突然現れたラッキーも戦力として数えることにしたグレイは、ラッキーが覚えている技を訊ねたのだ。

「タマゴうみ」、リフレッシュ、「うたう」、「マジカルシャイン」、この4つだ！」

施設長の答えを聞き、グレイは自らの知識を引き出す。

（体力を回復する「タマゴうみ」。麻痺や火傷を治す「リフレッシュ」。相手を眠らせる「うたう」。フェアリータイプの特殊攻撃技「マジカルシャイン」だな）

施設長のゼンが、グレイに声をかける。

「グレイくん！ そのまま聞いてくれ！ 警察に応援を要請したのだが、すぐに来ることはできないと言われた！ すまないが、そのまま耐えてくれないか？」

グレイは施設長の言葉を聞きながらも、ラッキーをどのように使おうか考えるためにラッキーを観察していた。すると、先ほどの「れんごく」を受けて、ラッキーが火傷を負っている事に気がつく。

「姐さん！ 「リフレッシュ」を使うんだ！ その後「タマゴうみ」だ！」

ラッキーを「姐さん」と呼ぶことにしたグレイ。指示を受けたラッキーは「リフレッシュ」を発動して、自分の火傷を治した。

その後、「タマゴうみ」を発動したラッキーは、自分の体力を回復する——とグレイは思ったのだが、実際は違った。

「じこさいせい」と「タマゴうみ」。2つの技はどちらも体力を回復する技である。しかし両者には決定的に違うことがある。「じこさいせい」は自分しか回復できないが、「タマゴうみ」は自分以外の者を回復させることができる。

ラッキーは「タマゴうみ」を自分ではなくビビヨンに使った。

敵の緑液体ランクルスとの遠距離攻撃合戦で消耗したビビヨンの

体力が、「タマゴうみ」によって回復した。

（「タマゴうみ」で自分を回復して欲しかったんだが……まあ、姐さんらしい行動と言えるか。ハッキリと対象を指示しなかったオレが悪いな）

グレイは、敵のポケモンの状況を素早く見る。

巨大生花フシギバナは、ギャラドスと戦っている。

緑液体ランクルスは、遠くからギャラドスを攻撃している。

遠くにいる2体の五芒星スターミーは、現在何もしていない。しかし巨大生花フシギバナに体力を供給しているので、仕事はしていると言える。

黒犬ヘルガーは、ギャラドスに彼方に吹っ飛ばされて、現在は離れた位置から帰ってこようと走っている。

（作戦はさっきと同じだ……まずはヘルガーを潰す！）

グレイは指示を出す。

「ビビ！ 姐さん！ ヘルガーを追ってくれ」

黒犬ヘルガーの盾を務める巨大生花フシギバナは、現在ギャラドスに釘づけである。さらに、黒犬ヘルガーは大きなダメージを負っている。潰すなら今しないとグレイは判断した。

ビビオンとラッキーが、黒犬ヘルガーの方向へと向かう。

これにより、戦況はまた新たなものになった。

ギャラドスVS巨大生花フシギバナ、及び援護の緑液体ランクルス。

ビビオン&ラッキーVS黒犬ヘルガー。

フシギバナに体力を供給する五芒星スターミーたち。

△ i 6 1 4 9 | 3 8 3 1 1 ∇

グレイはギャラドスと巨大生花フシギバナの戦いに目をやる。

ギャラドスはかなり消耗している。対して相手は、体力を供給を受けているので消耗はない。

（なんとか食い止めてくれKK！）

グレイはそう強く願った後、自分の意識をビビヨンとラッキーと、黒犬ヘルガーの戦いに向けた。ギャラドスが再び眠らされては困るが、今はこちらが優先だった。

黒犬ヘルガーは、ビビヨンとラッキーの攻撃を、自分の攻撃で相殺したり避けたりして上手に立ち回っている。

戦況を動かすべく、グレイが指示を下す。

「姐さん！ もっと相手に近づいてくれ！ ビビはそのまま攻撃！」
指示を受け、ラッキーが相手に距離を詰める。

体力が減っていて、これ以上ダメージを負うことができない黒犬

ヘルガーは、ビビヨンからの攻撃を防ぐことを優先し、ラッキーの接近を防げない。

「今だ姐さん！　「うたう」！　ビビも近づいて攻撃！」

相手に近づいたラッキーは「うたう」を発動した。敵の黒犬ヘルガーは、眠ってしまった。

とどめを刺すために、ビビヨンが一気に距離を詰めて攻撃を放とうとするが、

「ヘルガー！　「あくのはどう」！　そして「れんごく」だ！」

眠ったはずの黒犬ヘルガーに向かって、ライフ団のアークがそう指示した。

すると、ついさっきラッキーが眠らせた黒犬ヘルガーは既に目を覚ましており、「あくのはどう」を放った。

黒犬ヘルガーに近づいていたビビヨンに、「あくのはどう」が直撃した。ビビヨンは大きなダメージを受けただけでなく、突然の相手の攻撃に驚いて怯んでしまった。そこに、強力な炎の技「れんごく」が決まった。

「姐さん！　「マジカルシャイン」」

黒犬ヘルガーが短時間で目を覚ました理由も、圧倒的な炎に焼かれるビビヨンの心配も、気になる事は色々あるが全て無視して、グレイは今必要な事を冷静に指示した。

ビビヨンに「れんごく」を放っている黒犬ヘルガーは、ラッキーの攻撃を避ける余裕が無い。

ラッキーの「マジカルシャイン」が黒犬ヘルガーに直撃した。

黒犬ヘルガーは軽く吹っ飛び、地面に落ちた後、2度と立ち上がることは無かった。黒犬ヘルガーは戦闘不能になったのである。

「れんごく」によって発生した炎が散った場所にはビビヨンが倒れていた。ビビヨンも戦闘不能になっていた。

その場には、ラッキーだけが立っていた。

黒犬ヘルガーが短時間で目を覚ました理由。それは、ヘルガーが持つ特性はやおき、の効果であった。眠ってしまったても短時間で目を覚ますことができる特性である。

「姐さん！ 急いでギャラドスを「タマゴうみ」で回復させてくれ！」
グレイの指示で、ラッキーはギャラドスと巨大生花フシギバナが戦い、遠くからは緑液体ランクルスの攻撃が飛んでくる戦場に向かい、ギャラドスを回復させた。

「KK「こおりのキバ」！ 姐さんは「マジカルシャイン」を頼む！」
「フシギバナ！ 「ギガドレイン」だ！」

ラッキーが「マジカルシャイン」を放ち、ギャラドスは「こおりのキバ」で攻撃すると共に、得意の肉弾戦をしかけて巨大生花フシギバナを攻撃する。

敵の巨大生花フシギバナは、草タイプの特殊攻撃技「ギガドレイン」でギャラドスとラッキーを攻撃する。

ところで、「ギガドレイン」は単なる攻撃技ではない。この技には、相手に与えたダメージに応じて自分の体力を回復させる効果がある。

これにより、巨大生花フシギバナは、相手に攻撃しながら自分を回復できるのである。

ギャラドスとラッキーの2体がかりでの全力攻撃は、巨大生花フシギバナへの体力供給よりも速いペースでダメージを与え、巨大生花フシギバナの体力が少しずつではあるが減ってきた。

（このまま押し切れるか……？）

グレイは慎重に状況を見守る。しかし、

「フシギバナ！ “こうごうせい”」

ライフ団のアークが指示した“こうごうせい”は、自分の体力を回復させる技である。その時の天候によって回復量が異なるという特徴もある。

敵の“こうごうせい”により、ギャラドスとラッキーが徐々に与えたダメージも全て無に帰した。

敵の巨大生花フシギバナ。

相手に攻撃しながら自分を回復できる“ギガドレイン”。自分を回復させる技“こうごうせい”。そして、緑液体ランクルスと2体の五芒星スターミーから体力の供給を受け続ける事を可能にする“やどりぎのタネ”。

体力を供給している側も全員が「じこさいせい」で体力を回復できるため、体力の供給量に限界がない。

まさに永久機関である。

さらに、巨大生花フシギバナの「ギガドレイン」だけでなく、緑液体ランクルスから強力な「サイコキネシス」が飛んでくるため、グレイ側はダメージがたまっていく一方である。

ラッキーにも回復技「タマゴうみ」があるが、敵側の「ギガドレイン」と「サイコキネシス」のダメージに対して回復が追いつかない。

（このままじゃ、いずれこっちの体力が尽きる……なんとかしないと）

状況を見たグレイは、そう思った。

ポケモンバトルではなく、例えばポケモンを用いた武力行使であったとしても、戦い方はその者の性質を表す。

ライフ団。命を名乗る者たち。

味方から体力を貰いながら、敵から体力を奪いながら、時に自分で体力を回復しながら、自らを永らえさせる。

異常な程の生への執着。命の永久機関。その戦い方がライフ団の性質を表している。

命を名乗る彼らは、他人に命を与える者ではない。彼らは、自分の命を得るために努力し、他人の命の力を奪う者である。

グレイは、敵の体力供給機の破壊、つまり緑液体ランクルスと2体の五芒星スターミの撃破を目指すことを決心した。

巨大生花フシギバナを直接破れない事が分かった以上、供給機から破壊するしかない。不安な要素が多いが、グレイには他に選択肢

が無かった。

もし供給機の破壊もできないならば、そもそもこの状況の時点で既に詰んでいた。という話である。

「姐さん、悪いが1人でフシギバナを抑えてくれないか？」

グレイの問いかけに対し、ラッキーから決意の表情が返ってきた。

「よし！ KK！ あっちの奴らに突撃！」

グレイは五芒星スターミーたちの方を指さして指示した。

ギャラドスは勢いよく、五芒星スターミーたちに向かっていった。

ライフ団のアークは、ギャラドスを阻止しようと指示を出す。

「フシギバナ！ まずはそのラッキーをどうにかしろ！ 〃ねむりごな〃だ！」

「姐さん！ 〃うたう〃」

両者とも、相手を眠らせる技を放つ。

ラッキーと巨大生花フシギバナは、共に眠ってしまった。

敵の緑液体ランクルスは、向かってくるギャラドスに攻撃対象を移した為、眠っている両者を攻撃する者は存在しない。つまり外部から起こす者がいないのである。

（誰にも攻撃されないんだから、お互い目覚めるまで時間がかかるだろ）

そう思ったグレイは、ギャラドスに指示することにした。

「KK！ 〃あまごい〃」

〃あまごい〃は、天候を雨に変える技である。

直接の破壊力が無い技は、ギャラドスが嫌う技である。しかし、移動中でやる事がないギャラドスはグレイの指示を実行した。

ギャラドスの〃あまごい〃が発動し、辺りに急激に雲が発生し、局地的な雨が降り始めた。ちょうどそのタイミングで、ギャラドスが敵の体力供給機たちの元へ到着した。

「スターミー！　「まもる」」

「KK！　ランクルスに攻撃！」

敵の五芒星スターミーたちは、「まもる」で無敵状態になった。
ギャラドスはそちらを無視し、緑液体ランクルスに攻撃を開始する。

「スターミー！　「リフレクター」！」

五芒星スターミーの片方が、味方の物理攻撃を半減する技「リフレクター」を発動した。これによりギャラドスの攻撃は半減するが、ギャラドスは構わず攻撃する。

ギャラドスが「たきのぼり」を発動する。ギャラドスが水をまとって敵の緑液体ランクルスに突撃する。ギャラドスがまとう水は周囲の雨粒を吸収し、より威力が増した状態で「たきのぼり」が敵を直撃した。

あまりの威力に緑液体ランクルスは怯み、「サイコキネシス」が不発に終わる。

「ランクルス！　「じこさいせい」だ！」

緑液体ランクルスは「じこさいせい」を発動し、ギャラドスから受けて減った分、巨大生花フシギバナに提供した分、これらの体力を回復した。

（「じこさいせい」を使った！　しばらくは「じこさいせい」は使えないはず！　一気に決める！）

そう思い、グレイは指示する。

「KK！　全力で攻撃！」

ライフ団のアークは、緑液体ランクルスへの指示に集中している。そんな中グレイは、ラッキーと巨大生花フシギバナとの戦いに目を向ける。先ほど目を覚ました両者は、戦いを再開した。

「姐さん！ 無理に攻撃する必要はない！ 相手の攻撃の回避が優先だ！」

グレイの指示で、ラッキーは攻撃をやめて回避の姿勢をとった。敵の「ギガドレイン」はラッキーには当たらなかった。

ここで、グレイはある事を思い出す。

（あれ？ 姐さんの「タマゴうみ」、そろそろ使えるんじゃないか？）
巨大生花フシギバナとラッキーが共に眠っていた時間があるので、前に「タマゴうみ」を使ってから時間が経っている。

「姐さん！ 「タマゴうみ」で自分を回復してくれ！」

グレイの指示に対して、ラッキーは力強い視線と身振りを送るだけだ、
「タマゴうみ」を使おうとしない。

「もしかして、KKの為に取ってある分ってことか？」

グレイの問いかけに対し、ラッキーは力強くうなずいた。

（取っておくって言っても……姐さんが戦闘不能になってしまったら「タマゴうみ」を使う事すらできないし……どうするか）

グレイは少し考え、ラッキーの熱い思いを尊重することにした。

「姐さん！ 分かったよ！ ただし条件がある。相手の攻撃に3回当たるまでだ。攻撃に3回当たった時点で、「タマゴうみ」を自分に使ってもらおう！ 「タマゴうみ」を届けたかったら、相手の攻撃を避けることだ！」

グレイの言葉にラッキーはうなずいた。

ラッキーは、ギャラドスの体力を回復させたいという強い思いで、巨大生花フシギバナの攻撃を避けていく。

「今！ 「うたう」」

グレイの指示で、ラッキーは「うたう」を使った。技は見事に巨大生花フシギバナに命中し、眠らせた。

「いいぞ！ しばらく休憩しろ」

時間稼ぎが目的であるため、眠った相手をわざわざ攻撃して起こす必要はない。眠った相手は刺激せず、ラッキーは休憩にはいった。

グレイは、ギャラドスの方へ目をやった。

グレイから見て、ギャラドスはかなり体力が消耗しているように見えた。しかし嬉しい光景もあった。敵の緑液体ランクルスが倒れて動かなくなっていたのだ。

ギャラドスは現在、2体いる五芒星スターミの片方に攻撃している。「まもる」の無敵時間は終わったらしい。

雨が降っているせいで、敵の五芒星スターミの「ハイドロポンプ」の威力も上がっているが、緑液体ランクルスが倒れた今、そんなものは大した脅威でなかった。

ギャラドスは、あっという間に五芒星スターミにダメージを与

えていく。

グレイは再びラッキーの方に目をやる。巨大生花フシギバナはまだ眠っている。ラッキーは体を休めながらも、注意深く敵の目覚めを待っている。

ラッキーが何かに反応した。巨大生花フシギバナが目覚めたのだ。巨大生花フシギバナは「ねむりごな」を放った。

「姐さん！　「マジカルシャイン」！」

「ねむりごな」は攻撃技ではないので、直接的な破壊力はない。ラッキーが放つ直接的な破壊力のある「マジカルシャイン」に打ち消された。

ライフ団のアークは、五芒星スターミの指示に集中しており、おそらく巨大生花フシギバナの事は意識から外れている。

トレーナーの指示がない巨大生花フシギバナと、グレイの指示があるラッキー。さらにラッキーは、「タマゴうみ」をギャラドスに届けるという熱い思いがある。

指示の有無と熱い思い。これによって、ラッキーは相手との大きな実力差を打ち消している。

しばらくラッキーに指示していたグレイは、奥からギャラドスが帰ってくるのを確認した。かなり大きなダメージを受けたようで、ボロボロの状態でこちらに向かってくる。

奥を確認すると、そこには倒れて動かなくなった五芒星スターミが2体いることが確認できた。

この場に残っているポケモンは、ギャラドス、ラッキー、巨大生花フシギバナ、この3体だけとなった。

「KK！　「こおりのキバ」」

ギャラドスは、巨大生花フシギバナに全力で突撃しながら「こおりのキバ」で攻撃する。ギャラドスの攻撃で巨大生花フシギバナは吹っ飛んだ。

その隙に、ラッキーが「タマゴうみ」でギャラドスを回復させた。「姐さん！　ありがとう！　あとはあいつに任せてくれ！」

グレイに言われ、ラッキーがグレイの元へ戻ってくる。

ギャラドスと巨大生花フシギバナの、1対1の戦いが始まった。

ギャラドスの凄まじい攻撃により、巨大生花フシギバナの体力が減っていく。

最初、巨大生花フシギバナには3つの回復手段があった。

1つ目は、「やどりぎのタネ」。これによって3体の味方ポケモンから体力が供給されていた。

2つ目は、「ギガドレイン」。相手に与えたダメージに応じて自分の体力を回復できるこの技を使うことで、攻撃しながら回復していた。

3つ目は、「こうごうせい」。シンプルに自分を回復させる技である。

それが、今ではどうなっているのか？

1つ目の「やどりぎのタネ」は、3体の味方ポケモンの消失により、体力の供給はストップ。

2つ目の「ギガドレイン」。これは攻撃と回復を同時にできる強力な技だが、1つ落とし穴がある。それは、相手にダメージを与えなければ自分を回復できない事である。グレイのギャラドスは耐久面でも非常に強く、「ギガドレイン」を1発当てても中々ダメージ

が通らない。よって、回復効果も減少しているのだ。

3つ目の「こうごうせい」。これについては……

「フシギバナ！　「こうごうせい」だ！」

ギャラドスにみるみる内に体力を削られる巨大生花フシギバナを見て、ライフ団のアークは回復技を指示した。

巨大生花フシギバナは「こうごうせい」を発動した。しかし、回復効果はあまり得られなかった。

天候は雨。上空には局地的に厚い雲が存在し、日差しを遮っている。これにより「こうごうせい」に必要な太陽光が十分に集められず、回復量が落ちているのである。

回復の切り札となる「こうごうせい」の効果が薄く、巨大生花フシギバナはギャラドスの猛攻でますます体力が減っていく。

ギャラドスの「あまごい」の効果が切れて、辺りの天候が晴れになった頃。

巨大生花フシギバナは、戦闘不能となって倒れていた。

魔王フシギバナを倒した英雄ギャラドスの元に、美しき戦友ラッキーが走ってくる。

ラッキーは自分の傷を癒すこともしないで、ギャラドスの為に「タマゴうみ」を使った。

こうして、グレイは見事に幸運の家を守り抜いたのである。

16 話目 漆黒の者（裏）

△ i 6 1 7 6 | 3 8 3 1 1 ∇

△ i 6 1 7 7 | 3 8 3 1 1 ∇

時刻は昼頃、ビライ山のふもとに広がる森。

暖かい日が差し込むその森に、1人の少女がいた。彼女の名前はエレナ。グレイと同じ町の出身、同い年の少女である。

エレナの前には、エレナの手持ちポケモンの1体であるアブソルがいる。

白い体毛に覆われた四足獣のポケモンで、顔の横には鋭い鎌の形をした角が片方側だけ生えていて、尻尾も鋭い刃の形やいばをしている。わざわざポケモン。悪タイプのポケモンである。

「もう1回よ。アブソル！ “つじぎり”、“サイコカッター”！」
エレナは目の前のアブソルにそう指示した。

アブソルは頭にある刃の角を振りかぶった。空気を切り裂く音と共に刃の角が振るわれる。一瞬で相手を切り裂く、悪タイプの攻撃技の“つじぎり”である。

さらにアブソルは、刃の尻尾から不思議な色の刃を作り出し、地面に向かって放った。念を实体化させてできた刃を飛ばす、エスパータイプの攻撃技の“サイコカッター”である。

「ダメ！ また攻撃のタイミングが別々になってる！ もう1回！」
エレナは現在、自分のポケモンを鍛えるために、アブソルに技の

練習をさせている。今は2つの攻撃技「つじぎり」と「サイコカッター」を同時に放つ練習をしている。

2つの技を同時に使うことができれば、少ない攻撃チャンスでより多くのダメージを相手に与えることができ、戦いを有利に進めることができる。

しかし、2つの技を同時に操るのは非常に高度な技術である。アブソルは練習では「つじぎり」と「サイコカッター」を同時に放てることがあるが、実戦で使えるレベルには至っていない。

しかし、エレナにとって2つの技を同時に操る事は、習得不可能な現実味の無い技術という感覚では決してなかった。エレナの手持ちポケモンには既に、2つの技を同時に操れるジュカインというポケモンがいるからである。

ジュカイン、みつりんポケモン。草タイプのポケモンで、二足歩行する恐竜のような緑色のポケモンである。ジュプトルの進化後のポケモンである。

エレナのジュカインは、草の剣を生み出して相手を斬りつける「リーフブレード」と、草の銃を作り出して相手を連射する「タネマシンガン」の、2つの技を同時に操れるのである。片手で剣、もう片手に銃、といった具合である。

ジュカインは腕が2本あるから、腕を1本しか使わない技なら2つ同時に操れる。同じ理論で、アブソルは頭と尻尾の2箇所刃があるの、刃1つで放てる技ならば2つ同時に操ることができる。そうエレナは考えていた。

アブソルの頭の刃と尻尾の刃が同時に振るわれる。しかし、「サイコカッター」が放たれたものの。「つじぎり」は失敗に終わった。空気を切り裂く音が聞こえてこないのが証拠である。動作として頭の刃で斬りつけているだけである。

「また失敗ね……でも大丈夫！ アナタなら絶対にできるようになる！ さあ、もう1回やってみましょう！」

エレナに励まされ、アブソルは再び技の練習に入る。「つじぎり」が空を切り、「サイコカッター」が地面に放たれる。しかし今度は、2つの技の時間差が大きく、別々に2つの技を使っている状態になってしまった。

ちなみに、「サイコカッター」を地面に放つ理由は、周りの環境を破壊しないよう配慮した結果である。

最初は森の木をサンドバッグの代わりにしようと考えていたエレナだが、「サイコカッター」で生み出された念の刃が、木の1本にとどまらずに進路上の全ての木を切り裂きながら飛ぶ光景を見て、地面に放つことを決めたのだ。

今エレナがいる森はポケモンバトルが全域で許可されているので、少しくらいの破壊行為には目をつぶってもらえるが、1発放つごとに進路上の木を消滅させる技を何度も放つことはさすがに許されない。

技の練習で疲労がたまっている様子のアブソルを見て、エレナはアブソルを休ませることを決めた。

「アブソル、一旦休憩しましょう」

エレナの言葉を聞いたアブソルは、エレナの方に進み、すり寄ってきた。エレナは両手を広げてアブソルを受け入れる。この時、アブソルの頭の刃には十分に気をつける。

エレナは以前、アブソルとスキンシップをとっている時に、不注意でアブソルの頭の刃で自分の腕をザックリと深く切ってしまった

苦い経験があるのだ。

森の中で見晴らしの良い崖を見つけたエレナとアブソルは、崖の上で休憩していた。心地よい風が吹いている。とても平和な空間であった。

ふとエレナは、自分が座っている崖の下に向かって、遠くから大勢の黒い服の者たちが移動していることに気がつく。全員がそろって漆黒色の服を着ている。

漆黒色の服の集団は、エレナがいる崖の下で止まることなく通りすぎていく。皆が黙々と歩く中で、1人だけ大きな声で喋りながら歩く女と、その女に応答する男だけが声を発している。

エレナがなんとなく見ていると、大きな声で喋っている女だけは漆黒色の服に合わないような派手な装飾をつけていることが分かった。

（なんの集団か分からないけれど、きっとあの女の人が集団の中では立場が1番上なのね）

場の雰囲気と状況で、直観的にエレナはそう思った。

エレナの耳に、女と男の会話が入ってくる。

「まだ着かないのかしら？ いい加減、こんな何も無い森の風景にも飽きてきたわ」

「決められた地点までもう少しですので、辛抱して下さいシャルラ様……」

「だいたい、なんで決められた場所なんてあるのかしら？ なんなら、ここでもいいじゃないのよ。ここでだって目的を達成できるんじゃないのかしら？」

「我々も上から言われている身で……我々の一存では変えられませんが」

「そんな事、分かってるわよ！ 退屈な時間を紛らわそうとしてるのに、退屈な返答をしないでちょうだい！」

「申し訳ありません……」

2人のやりとりを耳にしていたエレナは、先ほどの自分の直観が間違っていなかった事が分かった。大きな声で喋り続ける女は、まるで自分が女王様であるかのような振る舞いをしている。

漆黒色の服に似合わない派手な装飾も、女王様気質な女の性格を知った後だと、むしろ違和感が無いようにエレナには思えた。

女はなお喋り続ける。

「だいたい！ なんでB級戦闘員のアークちゃんがメイン任務の護衛で！ A級戦闘員であるこの私が裏方任務わたくしの護衛なのかしら！？」

「どうなってるのよ！ この組織は！？」

「お言葉ですが……今回の任務に限って言えば、メイン任務の方に戦力はほとんど要りません……シャルラ様ほどの戦力を遊び駒にするという選択肢は無いかと……」

「メインに戦力が要らない！？ それは私たちが頑張るから要らないでしょう？ 何よ、最初から楽な任務みたいに言っちゃって！

私たちの偉大な働きによってメインに戦力が要らなくなるの！」

「申し訳ありません……」

「だいたい！ なんでこんなに回りくどい作戦立てるのかしら！？

A級戦闘員であるこの私が幸運の家わたくしに直接行って、モノの確保も戦闘も両方こなせば良いでしょう？」

「シャルラ様には戦闘に集中して欲しいとのことで……」

「何よ……れ！ だい……いメインの連中……失敗し……ら、この苦……は無駄に……るわよね！？」

「大…た戦闘も無…、モ…の確保…けで失…する…は思え…せんが…」

漆黒色の服の集団は崖の下を通り過ぎていき、2人の会話もエレナには聞こえなくなっていった。

（戦力とか、戦闘員とか、モノの確保とか、何をやる人たちなのかしら？ 害ポケモン駆除でもやるのかしら？ 外来種の凶悪なポケモンが巣を作ってタマゴを生んでしまっ、親の駆除とタマゴの確保をするとか…そういう感じかしら？）

エレナは得られた会話内容から、適当にそう結論付けた。

木々の密度が少なく、動物もポケモンもそんなに多いように見えないこの森で、それほど危険なポケモンがいるとはエレナには思えなかった。

しかし、黒服の集団が何者であるか大して興味が無いエレナは、それ以上深く考えることはなかった。

「さあ、アブソル。技の練習、続きをやりましょう」

エレナはアブソルにそう声をかけた。

エレナが黒服の集団を見てから、しばらく時間が経っていた。

突然、エレナがいる場所の近くの方で激しい爆発音が聞こえた。

アブソルに技の練習をさせていたエレナは、爆発音が聞こえた方向に視線をやった。視線の先では、炎と煙が上がっているのが目に入った。

（さっきの黒い人たちが向かった方向よね。駆除が始まったのかしら？）

最初エレナはそう思った。しかし、立て続けに爆発が起き、火災

も広がる一方で、消火活動をしている様子もない。害ポケモンの駆除にしては、周囲の事を全く考えていないようにエレナには思えた。

「アブソル、ちょっと様子を見にいきましょう！」

エレナはアブソルに呼びかけ、炎が上がっている方向へ進んだ。

エレナが謎の爆発と火災の現場に近づいた時、気がついた事があった。

（この一帯だけ不自然に日差しが強くて乾燥している……きっと、ポケモンの技“にほんばれ”だわ）

“にほんばれ”は、周りを乾燥させて霧や雲を一切除去して天気を変え、強い日差しを発生させる技である。

エレナはさらに炎が上がる方へ近づき、ついに一連の火災の犯人と思われる者を発見した。

黒い犬のような姿をしており、ヘルガーの進化前のポケモン。悪タイプかつ炎タイプで、ダークポケモンのデルビル。そのデルビルが口から炎を吐き、森の木々を燃やしている。

デルビルの後ろでは、先ほどエレナが見た漆黒色の服の者が、デルビルに指示しているのが見えた。

「ちょっと、アナタたち！ 何をしているんですか！？」

「ああ！？ 速いな、もう来たのか？ ってアレ……子供？」

エレナが声をかけた黒服の男は、突然のエレナの登場に驚いている様子であった。

黒服の男は、少し優しい声で諭^{さと}すようにエレナに話しかける。

「なあ、お嬢ちゃん。ここは危ないから早く帰んな。火事に巻き込まれて火傷したくないだろ？ 分かったら、隣のアブソル連れて早

く帰んな」

男は、エレナが間違っってここに迷い込んでしまった子供だと思っ
ているような口ぶりであった。

エレナは、迷い込んだ何も知らない子供という相手の認識を変え
るべく、冷静に相手に話しかける。

「アタシは旅のポケモントレーナーです。さっき、不自然な爆発音
が聞こえて、そこが火事になっているのを見て、何が起こっている
のか確かめに来たんです。何をしているのか、教えてくれませんか？」

エレナの言葉を聞いた男は、エレナに向ける視線の種類が変わっ
た。エレナが最初に、自分がトレーナーだと宣言したことも効いて
いるのであろう。

この状況に限って言えば、自分がトレーナーであるという宣言は、
火災を引き起こしているデルビルを力ずくで止める事もできる、と
いう脅しの意味を言外に含んでいる。

男が口を開く。

「お嬢ちゃん……俺たちは大人の仕事をしているんだよ。子供が大
人の世界に首をつっこむとロクなことにならないぜ。さっさと帰
りな」

「大人の仕事とか、大人の世界とか、大人って言葉でなんでも誤魔
化さないで下さい」

エレナが全く退く気がないことを悟った男は、静かに語りかける。

「お嬢ちゃんがポケモントレーナーで良かったぜ……さすがに、か
よわい女の子に暴力をふるう大人の男になるってのは、任務のため
とは言え気がひけるからな」

さらに男は続ける。

「ポケモントレーナーっていうのは、聞き分けが良くて助かるんだ
よ。人間に直接暴力を振るわなくてもポケモンを倒せば素直に退い

てくれる。ポケモンの恐ろしさを知っている、聞き分けの良い人種だ。頭がお花畑で『ポケモンは友達、ポケモンが人間を傷つける訳がない』って信じてる奴が一番めんどくさいんだ。痛い目を見ないと分からないからな」

途中からは男の愚痴話になっていたが、とにかくポケモンの武力行使でお前を追い出すという男の宣言である。

「デルビル！　「ひのこ」！」

男はデルビルに炎タイプの特攻技「ひのこ」を指示した。デルビルの口から小さな火の球が放たれる。

「右！　そこ「つじぎり」！」

エレナの指示で、アブソルは火の球を避けてから素早くデルビルに近づき、刃の角でデルビルを切り裂いた。アブソルの攻撃はデルビルの急所をとらえ、デルビルを一撃で戦闘不能にした。

「はあ！？　めちゃくちゃ強いじゃねーか！　子供と思って油断したぜ！」

男はさらに新たなポケモンを2体繰り出し、ポケモンにその場を任せて仲間を呼びにいった。

エレナが2体のポケモンを倒すと、男が仲間を引き連れて戻ってきた。

「おい、なんで焼却用のポケモンを倒されてんだよ！　戦う時は戦闘用のポケモンで戦えって言われただろ！」

「焼却係がまさか一撃で倒されるなんて思わなかったんだよ！　それに、もう戦闘用の2体だって倒されてるじゃんかよ！　予想できる訳ないだろ！」

そんな事を言い争いながら、黒服の者たちは次々とポケモンを繰り出した。

対するエレナも、これから始まる戦闘に向けて備えを始める。

「アブソル、"つるぎのまい"よ。ジュカインとチルタリスも出てきて」

エレナは、自分の攻撃力を大幅に上昇させる技"つるぎのまい"をアブソルに指示し、さらにモンスターボールを2つ取り出した。

"つるぎのまい"の効果で、アブソルの攻撃力はぐーんと上がった。さらにアブソルの隣には2体のポケモンが現れる。

まず、二足歩行する恐竜のような緑色のポケモン、草タイプで、みつりんポケモンのジュカイン。

それから、雲のような綿のような白くてフワフワした翼に、空色の体をもつ鳥のようなポケモン、ドラゴンタイプかつ飛行タイプで、ハミングポケモンのチルタリス。

本当はエレナは、もう1体ポケモンを所持しているのだが、出会ってからあまり時間が経っておらず未熟なポケモンなので、この場で出すことはしなかった。

「アブソル、ジュカイン、チルタリス！ 行くわよ」

エレナは自分のポケモンに呼びかけ、指示を出し始めた。

「アブソル後ろ！ 避けて、今！ ああ、ジュカインは囲まれる前に退いて！ チルタリス、攻撃は今よ！」

黒服の者たちのポケモンを相手に戦っているエレナだが、予想以上にポケモンへの指示に苦勞していた。

トラベル地方のポケモンバトルは、ポケモンを1体ずつ戦わせるシングルバトルが主流であり、エレナは同時に3体ものポケモンに指示を出すことに慣れていなかった。

さらに、エレナは自分のポケモンにきっちりと細かく指示を出す

トレーナーである。指示する対象が増えれば、労力の増加も大きい。普段から指示は適当で場合によっては指示を放棄するグレイとは違うのである。

「あなたたち、そんな子供1人に何をモタモタやってるのかしら？」
エレナが黒服の者たちのポケモンを5体倒した時、黒服の者たちの後ろからそう声がかけられた。

エレナがそちらに視線を向けると、漆黒色の服に合わない派手な装飾をつけている女が歩いてくる。女は隣にラフレシアというポケモンを連れている。

ラフレシアは、青い1頭身の体で頭に巨大な赤い花を載せている外見で、草タイプかつ毒タイプの、フラワーポケモンである。

派手な装飾の女が口を開く。

「あのねえ……あなたたち、これから戦闘を控えているっていうのに、大事な戦力を無駄にしたらダメでしょう？」

「申し訳ありません……しかし、この子供がなかなか強くてですね……」

派手な装飾の女はエレナを一瞥してから、他の黒服の者に指示を出す。

「あなたたちは、各自持ち場に戻りなさい。あの子供は私^{わたくし}が何とかするから」

「お手数おかけします……」

一連のやり取りをした後、黒服の者たちは戦闘用のポケモンを戻し、再び森を焼く作業に戻っていった。

派手な装飾の女は、余裕の態度でエレナと対峙する。

この女がこの場で1番偉い人物と結論付けていたエレナは、女に質問を飛ばす。

「何のために森を焼いているんですか？ アタシはその理由を知り

たくてここに来たんです」

「理由？ 今は話せないわねえ。ただ1つ言える事は……善良そうなたが納得するような理由ではないでしょうねえ。環境を守るための伐採とか、そういう類たぐいの話じゃないから」

理由を話さない女に対して、エレナは強気に脅す。

「無意味な環境破壊は通報されても仕方ない事ですよ？ なんならアタシが通報しましょうか？ アナタたちの目的を知らないアタシには、ただの無意味な環境破壊にしか見えませんから」

「あらあら、あなたが警察に連絡してくれるの？ それはそれで構わないわよ？ 今すぐにでもやればいいわ」

女の言葉を聞いたエレナは、多機能な携帯端末ポケナビを取り出して、通報する素振りを見せるが、女は一向に動じない。ついに本気で通報し、警察と実際に会話しても女の態度は崩れなかった。

警察からは「あなたはすぐに現場から離れて下さい」と言われた。おそらく電話対応した警察官は、エレナが遠くから現場を目撃して通報したと思っているのであろう。実際には目の前で会話している状況なのだが。

通報を終えたエレナに、女が声をかけてきた。

「あーあ、通報しちゃったわねえ。こんな山火事を見たら消防も大騒ぎ。しかもポケモンを使って暴れまわる謎の勢力までいるのよ。これで警察も大騒ぎ。この一帯の治安組織は全部ここに釘付けよ……あなたのせいでねえ」

「アナタが何を言っているか全然理解できないわ。そもそもアナタたち、一体何の集まりなのよ？」

エレナの問いに、女は一呼吸おいてから話し始める。

「わたくし私たちは、ライフ団。生命の力について研究する者よ。その中でも、永遠の命を求めるフェニックスっていう派閥……いや、そんな

事はどうでもいいわね」

女は言葉を1回区切ってから話し続ける。

「私の名前はシャルラ^{わたくし}。このライフ団でA級戦闘員を務めているの」
シャルラと名乗った女は、エレナを指でさしながら言葉を続ける。

「私^{わたくし}、ちょっと暇なのよねえ……退屈しのぎに相手をしてくれないかしら？」

そう言ったシャルラは、モンスターボールを2つ取り出し、ポケモンを2体繰り出した。突然の戦闘の流れである。エレナに緊張がはしる。

既にシャルラの隣にいたラフレシアの隣に、マグカルゴとファイアローが現れた。

マグカルゴは、炎タイプかつ岩タイプの、ようがんポケモンである。巨大なカタツムリのような形をしていて、軟体部分が溶岩で殻の部分が岩石のカタツムリといった外見である。

ファイアローは、炎タイプかつ飛行タイプの、れっかポケモンである。ハヤブサのような形をしており、体は橙色と白色の部分が入り交じり、黒色の部分もあり、まるで鳥が燃えていて黒い煙が出ているような模様の外見である。

（マグカルゴにファイアロー……どちらも強そうね……元から女の隣にいたラフレシアは直接的な迫力はないけど、きっと厄介な相手よね）

シャルラのポケモンを見たエレナは、シャルラの実力の高さを確信した。

シャルラが口を開く。

「もしあなたが、私のポケモン^{わたくし}を全て倒すことができたなら、森を焼く作業を止めて帰ってあげるわ。そんな事は不可能でしょうけどねえ」

「アタシがアナタに勝った場合、アナタが行く場所は家じゃなくて警察署よ」

エレナは強気に言葉を返した。

エレナのアブソル、ジュカイン、チルタリス。

そしてシャルラの赤花ラフレシア、軟体溶岩マグカルゴ、烈火鳥ファイアロー。両者が睨み合う。

「さあて、遊んでもらおうかしらねえ。ラフレシア」にほんばれ「よ」

シャルラの言葉で、赤花ラフレシアは「にほんばれ」を発動させる。周囲の空気が極端に乾燥し、日差しが強くなった。

「ファイアロー、上昇して」ソーラービーム」

「ジュカイン！ 銃で打ち消して！」

烈火鳥ファイアローは、周りの光を吸収して相手に放つ、草タイプの特殊攻撃技「ソーラービーム」を発動させた。

「ソーラービーム」は非常に威力が高い技であるが、光を吸収するのに時間がかかるというデメリットを抱えている。しかし、強い日差しが照りつけている影響か、烈火鳥ファイアローは一瞬で光の吸収を完了させ、上空から太い光の束を放った。

銃で打ち消すよう指示されたジュカインは、「タネマシンガン」でタネの弾丸を次々に連射して敵の「ソーラービーム」を打ち消そうとする。

しかし「ソーラービーム」を打ち消しきる事はできず、太い光の束がジュカインを襲った。

（くっ……いきなり強いわね！　とにかくこちらにも攻撃しないと……！！）

エレナも自分のポケモンに指示を出す。

「ジュカイン、銃で撃ち落として！　アブソル、フォームBの「かげぶんしん」でラフレシアに「つじぎり」、これ続けて！　チルタリスは「コットンガード」！」

対してシャルラも新たな指示を出す。

「ファイアローは「ソーラービーム」、ずっと空にいなさい！　マグカルゴは「ドわすれ」よ！　ラフレシアは「ギガドレイン」で抵抗！」

ジュカインは、上空にいる烈火鳥ファイアローを撃ち落とそうと「タネマシガン」を連射する。しかし敵は巧みに連射を避け、「ソーラービーム」でジュカインを攻撃する。

チルタリスは、防御力を大幅に上昇させる技「コットンガード」を発動し、防御力をぐぐーんと上げた。

軟体溶岩マグカルゴも、特防（特殊攻撃に対する防御力）を大幅に上昇させる技「ドわすれ」で、特防をぐぐーんと上げた。

アブソルは「かげぶんしん」で自分の姿を2体に分身させ、2体で並走してラフレシアに向かう。赤花ラフレシアは「ギガドレイン」でアブソルを攻撃するが、狙ったアブソルは偽物であった。アブソルが「つじぎり」で一方向的に攻撃する。

ジュカインVS烈火鳥ファイアロー。

アブソルVS赤花ラフレシア。

この2つの戦いをエレナは分析する。

（アブソルの戦いはこちらが有利ね、このまま任せましょう。ジュカインは空の相手を捉えられていないわ。相手を変えるべきね）

分析したエレナは素早く指示を出す。

「チルタリスがファイアローを「みだれづき」！ ジュカインはマグカルゴを銃で攻撃！」

「マグカルゴ」はじけるほのお！ ファイアローは「ソーラービーム」で遠距離攻撃に専念」

それぞれの指示により、3つの場所で戦いが始まる。

アブソルVS赤花ラフレシア。

「かげぶんしん」で相手を惑わして「つじぎり」で攻撃するアブソルと、「ギガドレイン」で抵抗する赤花ラフレシアの戦いである。状況は「かげぶんしん」で相手を惑わすアブソルが勝っている状態である。

エレナ側が有利である。

ジュカインVS軟体溶岩マグカルゴ。

「タネマシガン」で連射するジュカインと、「はじけるほのお」で攻撃する軟体溶岩マグカルゴによる遠距離攻撃の撃ち合いが展開されている。先ほどの「にほんばれ」の影響で空気が乾燥しており、「はじけるほのお」の威力がとにかく強い。さらに、放たれた炎は地面に当たると広範囲に飛び散るため、ジュカインは敵の攻撃を避けきることができない。

エレナ側が不利である。

チルタリスVS烈火鳥ファイアロー。

「みだれづき」を当てるために相手を追うチルタリスと、逃げながら「ソーラービーム」を撃つ烈火鳥ファイアローによる空の戦いである。烈火鳥ファイアローは非常に素早く、チルタリスは1度も攻撃を当てられていない。

エレナ側が不利である。

（不利な戦場を何とかするべきね、手段はあるわ）

エレナが新たな指示を出す。

「ジュカイン、こうそくいどう」をしてから戦って！ チルタリスは回避が優先、相手が攻撃してこない時だけ追って！」

ジュカインは「こうそくいどう」で素早さを大幅に上昇させた。動きが速くなったことで、軟体溶岩マグカルゴの「はじけるほのお」を避けやすくなり、さらに相手の動きの隙について攻撃を当てやすくなった。

チルタリスは回避行動を優先することによって、烈火鳥ファイアローの「ソーラービーム」が当たらなくなる。これは時間稼ぎの意味が強い。さらにチルタリスは、相手の隙は狙うというポーズは続けているので、相手はチルタリスを無視して他のポケモンに「ソーラービーム」を撃つことはできない。

こうして戦況に変化が生じた。

アブソルVS赤花ラフレシア。エレナ側が有利である。

ジュカインVS軟体溶岩マグカルゴ。互角である。

チルタリスVS烈火鳥ファイアロー。互角である。

（後はアブソルがラフレシアを倒すのを待つだけね。ラフレシアを倒し次第、アブソルを他の戦場にまわして残りも撃破すればいいわ）

エレナは勝利への見通しが立ったことで少し気持ちに余裕が生まれた。視線を戦場だけでなく、敵トレーナーであるシャルラへ向ける。

しかし、エレナが見たシャルラの表情は余裕に満ちあふれており、とても追い詰められている者の表情とはエレナには思えなかった。

エレナはシャルラと目が合った。シャルラが余裕の態度でエレナに話しかける。

「あらあら、あなたのその表情……このままいけば勝てるって思ってる顔ねえ。言っておくけど、私はまだ全然本気を出してないのよ？」

あっさり勝負がついてしまったら暇が潰せないからねえ」

シャルラは戦況をひと通り見た後で言葉を続ける。

「こんな戦況、簡単にひっくり返すことができるのよ？ ちょっとだけ私の本気を見せようかしらねえ……？」

そう言い、シャルラは新たな指示を出す。

「ラフレシアは「あまいかおり」！ マグカルゴは「いわなだれ」をチルタリスに！ ファイアローは「フレアドライブ」をジュカインに！」

まず状況の変化があったのは、アブソルVS赤花ラフレシアの戦場である。

赤花ラフレシアの「あまいかおり」によってアブソルは動きが鈍くなり、「かげぶんしん」による惑わしの効果は薄れ、赤花ラフレシアの特殊攻撃「ギガドレイン」がアブソルに命中するようになった。

ジュカインVS軟体溶岩マグカルゴの戦いは、軟体溶岩マグカルゴがジュカインを完全に無視してチルタリスに攻撃を開始し、代わ

りに烈火鳥ファイアローが割り込んできてジュカインを攻撃し始めた。

これにより、ジュカインとチルタリスの対戦相手が変わった。

先ほどまでは、「ジュカインVS軟体溶岩マグカルゴ」、「チルタリスVS烈火鳥ファイアロー」の戦いであった。

しかし今は、「ジュカインVS烈火鳥ファイアロー」、「チルタリスVS軟体溶岩マグカルゴ」の戦いである。

「チルタリスは「みだれづき」！ ジュカインは剣と銃を両方使って！」

戦況は再び変わり、3つの場所で先ほどとは違う戦いが始まる。

アブソルVS赤花ラフレシア。

アブソルの肉弾戦による直接攻撃や「つじぎり」と、赤花ラフレシアの「ギガドレイン」の撃ち合い。「ギガドレイン」は相手の体力を奪う技であり、攻撃と回復を同時にできる強力な技である。圧倒的な地力の高さのおかげで、まだ若干アブソルがおしている。

エレナ側が少し有利である。

ジュカインVS烈火鳥ファイアロー。

ジュカインによる草の剣「リーフブレード」と草の銃「タネマシンガン」の攻撃と、烈火鳥ファイアローによる炎をまとして全力で相手に突撃する「フレアドライブ」がぶつかり合う激しい戦場。元々のタイプ相性的にも不利であり、さらに空気が乾燥していて「フレアドライブ」でまとう炎がとにかく強い。

エレナ側が不利である。

チルタリスVS軟体溶岩マグカルゴ。

チルタリスによる超強力な連撃「みだれづき」と、軟体溶岩マグカルゴによる「いかなだれ」の撃ち合い。軟体溶岩マグカルゴの防御力が非常に高く、チルタリスは「コットンガード」をしたにもかかわらず、受けたダメージはチルタリスの方が大きい。

エレナ側が不利である。

（ジュカインもチルタリスも体力の消耗が激しいわ。このままじゃジリ貧……どこかを崩さないと……!）

エレナは崩すべき相手を考える。

（相手の3体の中で最も攻撃が弱いのはラフレシア、放置するならラフレシアね。ファイアローは攻撃が強いけれど、空に逃げられてしまえば倒すまでに時間がかかるわ。つまり、崩すべきはマグカルゴ!）

決断を下したエレナは指示を出す。

「アブソル、サイコカッター」でラフレシアを遠距離攻撃で足止め、そのままマグカルゴの方に移動して! ジュカインもマグカルゴに近づいて!」

エレナの指示により、アブソルとジュカインとチルタリスの3体は、軟体溶岩マグカルゴにそろって近づく。

「今よ、マグカルゴを攻撃! アブソルサイコカッター! ジュカイン剣と銃! チルタリスみだれづき!」

軟体溶岩マグカルゴに向かって、3体が一斉に攻撃する。アブソルは「サイコカッター」で離れた位置から攻撃、ジュカインは「タネマシンガン」を連射しながら「リーフブレード」で何度も斬りつ

け、チルタリスは超強力な連撃「みだれづき」で攻撃する。

軟体溶岩マグカルゴも、「いわなだれ」でチルタリスを攻撃して抵抗する。

フリーになった赤花ラフレシアは「ギガドレイン」でアブソルを攻撃する。烈火鳥ファイアローも「ソーラービーム」による太い光の束で、軟体溶岩マグカルゴごとエレナの3体のポケモンをまとめて攻撃する。

エレナのポケモン3体の全力攻撃、さらに烈火鳥ファイアローの「ソーラービーム」も受けて、軟体溶岩マグカルゴはあっという間に体力が減っていく。しかしエレナ側のポケモンの消耗も激しい。シャルラはこの状況を見ながら楽しそうに言葉を発する。

「リスクのある全力攻撃、あなた結構度胸があるわねえ。でも、その程度じゃあ全然ダメ。永遠の命を求める私^{わたくし}たちの命への執念はすごい。それは私^{わたくし}たちのポケモンも同じこと」

もう少しで軟体溶岩マグカルゴを倒せる。そのタイミングでシャルラは新たな指示を出す。

「ラフレシア「こうごうせい」！ マグカルゴ「じこさいせい」！ ファイアロー「はねやすめ」！」

どの技も、自分の体力を回復する技である。特に赤花ラフレシアの「こうごうせい」は、日差しが強いこともあって回復量が尋常ではない。

回復技を使用したことによって、軟体溶岩マグカルゴを倒すまでの時間が増えた。それは、軟体溶岩マグカルゴへの攻撃に集中しているエレナのポケモンが無抵抗に攻撃を受ける時間が増えることを意味する。

ついに、軟体溶岩マグカルゴを倒せないまま、チルタリスの体力

が尽きた。

「よくやったわねえ、マグカルゴちゃん。じゃあ今度はジュカインに“はじけるほのお”で攻撃してちょうだい」

シャルラが余裕の表情でマグカルゴに声をかけた。

敵のポケモンが3体とも回復技が使える事を知り、さらにチルタリスが倒されたことでエレナは焦る。

（チルタリスが倒された……アブソルもジュカインも体力の消耗が激しい……！ どうすればいいの！？ どうすれば？）

しかし、自分が焦っている事に気がついたエレナは、1回小さく息を吐き、冷静に思考を再開する。

（回復技は、1回使った後しばらくは使えない。今やるべき事は、また回復される前に敵を1体でも倒すこと。とにかく攻撃しなければいけない……このコにも、戦ってもらうしかないわ）

エレナは、この戦いには参加させずにいる1体のポケモンが入ったモンスターボールを取り出す。

（この高レベルの戦いに参加させるには未熟だけど、仕方がないわ）
エレナは決心してモンスターボールから1体のポケモンを出した。
エレナの前に、リザードというポケモンが現れる。

リザードは、炎タイプで、かえんポケモン。二足歩行するトカゲのような外見で、橙色の体で、尻尾の先には火が灯っている。

「リザード、あのラフレシアに“ほのおのキバ”！ アブソルとジュカインは、マグカルゴへ攻撃を続けて！」

エレナはリザードに、アブソルへ攻撃し続ける完全にフリーな赤花ラフレシアを止める使命を課した。烈火鳥ファイアローも完全フリーであるが、軟体溶岩マグカルゴを一刻も早く処理したいエレナには烈火鳥ファイアローにかまっている余裕は無かった。

リザードは“ほのおのキバ”で赤花ラフレシアを攻撃する。周囲

が極端に乾燥している影響で、リザードの牙は激しく燃え盛りながら赤花ラフレシアを捉える。

「ラフレシア、そんな奴ほっというて攻撃を続けなさい！ ファイアロー、"ソーラービーム"はもうやめ。"フレアドライブ"でジュカインを攻撃しなさい」

激しく燃える牙で赤花ラフレシアを攻撃するリザードであったが、赤花ラフレシアは"ギガドレイン"でリザードを攻撃し、ダメージでよめいた隙にリザードを振り払い、アブソルへの攻撃を再開する。

また、烈火鳥ファイアローは、激しい炎をまといながら上空からジュカインに襲いかかる。その光景はまるで隕石のようであった。

（まずいわ！ ただでさえマグカルゴの"はじけるほのお"でダメージを受けているのに、炎が苦手なジュカインが、あの威力が高い"フレアドライブ"をくらってはひとたまりもないわ！）

エレナはアブソルに対して厳しい指示を出す。

「アブソルが受け止めて！ "サイコカッター"の手も緩めないで！」
エレナの指示により、アブソルは隕石のごとく迫る烈火鳥ファイアローに向かってジャンプし、ジュカインの身代わりとなって攻撃を受ける。

烈火鳥ファイアローの突撃の勢いで地面に押しつぶされたアブソルは、それでも"サイコカッター"で軟体溶岩マグカルゴを遠距離攻撃することを中断しない。

「相手は無抵抗よ！ 存分に攻撃しなさいファイアロー、"フレアドライブ"！」

再び烈火鳥ファイアローが"フレアドライブ"で突撃し、アブソルが体で受け止める。アブソルは激しく吹っ飛ばされながらも、"サイコカッター"での攻撃を続ける。

また、リザードは赤花ラフレシアを完全に止めることができず、赤花ラフレシアはリザードと戦いながらも時々「ギガドレイン」をアブソルに向けて放ってくる。リザードと赤花ラフレシアの実力差は大きく、リザードもダメージが大きい。

ジュカインも、軟体溶岩マグカルゴの「はじけるほのお」で飛び散った炎を少しずつ受け、ダメージが溜っている。

（アタシのポケモンはもう皆ボロボロだわ……相手のマグカルゴは体力が減ってはいるけど、アタシのポケモンが倒れるのが先ね……）
状況はエレナにとって絶望であった。

そんな絶望の状況の中で、エレナは1つの可能性を思い出した。このまま何もしなければ負ける状況である。エレナはその可能性に賭けるかけることにした。

「アブソル！　「つじぎり」でファイアローを止めて、「サイコカッター」でマグカルゴを攻撃！」

先ほど練習していた、2つの技を同時に操る技術である。

「大丈夫、アナタなら絶対にできるわ！」

エレナに励まされ、アブソルは静かに実行に移す。アブソルは、激しい炎をまとめて迫りくる烈火鳥ファイアローを「つじぎり」で受け止める。同時に「サイコカッター」を軟体溶岩マグカルゴに向けて飛ばした。

シャルラが感心した様子を見せる。

「へえ、2つの技を同時に操るなんて……あなたのジュカインもそうだけど、どこでそんな技術を習得したのかしら？　でも、それだけじゃあ状況は変わらないわねえ」

烈火鳥ファイアローを止めたが、アブソルを攻撃する者は他にもいる。赤花ラフレシアである。

エレナは、次なる作戦実行のためにリザードに真剣に語りかける。
「リザード、今からアタシが出す命令を聞いて欲しいの」

語り終え、エレナは作戦を実行するべく指示を出す。

「アブソル、1発だけ全力で『サイコカッター』をリザードに放つて！ リザードはそれを受け止めて！」

リザードは驚いた顔でエレナを見る。

「リザード！ アタシを信じて！」

エレナの真剣な表情を見て、リザードは覚悟を決めた様子を見せた。アブソルは最初から動揺することなく既に全力の『サイコカッター』を放っていた。

その一連の様子を、シャルラは『気でも狂ったのかしら？』という表情で見ていた。

アブソルの全力の『サイコカッター』がリザードに直撃する。リザードは大きなダメージを受けてよろめく。

エレナが再び指示する。

「リザード！ 『ほのおのキバ』でラフレシアを攻撃！ お願い、今だけは何としてでもラフレシアを止めて！」

リザードは再び『ほのおのキバ』で赤花ラフレシアを攻撃する。

「ラフレシア、さっきまでと同じよ。『ギガドレイン』でさっさとリザードをどかして、アブソルに攻撃するの」

シャルラの指示で、赤花ラフレシアは『ギガドレイン』を放つ。

しかし先ほどとは違い、リザードの『ほのおのキバ』は凄まじい勢いで激しく燃え盛っていた。

『ギガドレイン』と『ほのおのキバ』がぶつかり合った後、一方的に『ギガドレイン』が打ち消され、リザードの『ほのおのキバ』が赤花ラフレシアを襲う。

「何してるのラフレシア！ さっさとリザードをどかしなさい！」

強く命令したシャルラだが、赤花ラフレシアはリザードを振り払うことができない。

戦況に変化が生まれた。

赤花ラフレシアは、リザードに足止めされている。

烈火鳥ファイアローは、アブソルの「つじぎり」で止められている。

軟体溶岩マグカルゴは、アブソルの「サイコカタ―」とジュカインの「リーフブレード」及び「タネマシガン」で集中攻撃されている。

この戦いで初めて、シャルラに焦りの表情が浮かんた。先ほどのシャルラは、軟体溶岩マグカルゴの体力が尽きるよりも先に、アブソルとジュカインが倒れると思っていた。

しかし現在、アブソルにダメージを与える者はいない。赤花ラフレシアはリザードに止められ、烈火鳥ファイアローも「つじぎり」で止められている。さらに、ここにきてジュカインの「リーフブレード」と「タネマシガン」の威力が大きくなり、軟体溶岩マグカルゴの体力の減少速度がさらに速くなっている。

「マグカルゴ！　「じこさいせい」はまだ使えないの？」

シャルラが呼びかけたが、軟体溶岩マグカルゴは「じこさいせい」を使う素振りを見せない。

「マグカルゴ！　とにかく「はじけるほのお」で抵抗して！　生き延びるのよ！」

そうシャルラが叫んだ。

しかし、アブソルとジュカインの猛攻により、ついに軟体溶岩マグカルゴは戦闘不能となって倒れた。

「リザードは戻ってきて！ アブソル、ファイアローに“つじぎり”と“サイコカッター”！ ジュカインも銃で攻撃！」

軟体溶岩マグカルゴを倒した後、エレナは素早く新たな指示を出した。赤花ラフレシアを全力で足止めして限界をむかえたりザードは退却させ、烈火鳥ファイアローに集中攻撃を開始する。

リザードがエレナの元に帰ってきた。

また、相手の烈火鳥ファイアローは、アブソルとジュカインの集中攻撃を受け、たまらず空高くに退散して距離をとった。

「マグカルゴちゃんがやられた……？」

シャルラは啞然とした様子でそう呟いた。しかし次の瞬間、取り乱したように怒りをあらわにして激しい口調で叫び始める。

「よくもやってくれたわねえ小娘がっ！！ 遊びの時間は終わりよっ！！ 私の本気^{わたくし}を思い知るがいいわっ！！！！」

叫び終わるやいなや、シャルラは新たにモンスターボールを一つ取り出し、エレザードというポケモンを繰り出した。

エレザードは、電気タイプかつノーマルタイプの、はつでんポケモンである。エリマキトカゲのような外見で、体は黄色で、首のエリマキ部分より上の部分は黒色である。

「ライフ団のA級戦闘員である私^{わたくし}を舐めるなあっ！！ エレザード、“チャージビーム”！！」

敵の電気^{とかげ}蜥蜴エレザードから、目がくらむ程の光量をもった電気^{とかげ}の束が発射される。

「避けて！ アブソル、ジュカイン！」

ギリギリのところでアブソルとジュカインは“チャージビーム”を避けた。

標的を失った「チャージビーム」は、轟音を伴いながら焼けた森を進み、進路上とその近くにある焼けた木を全て砕き、まだ焼けてない木にも大穴を開け、最後には白い光を激しく発生させながら爆発した。

圧倒的な威力の「チャージビーム」を見たエレナは、思わず目を見開いた。

（なに、あの威力！？ 電気の束が通った場所の木が消滅した！？ しかもあの女、「チャージビーム」って言ったわよね？ 「チャージビーム」って、自分の特攻を上げる効果があるんじゃないのかしら？）

エレナは戦慄した。自分の考えが正しかった場合、次からはさらに威力が上がった電気の束が放たれるという事になる。さらに、まだ「チャージビーム」以外に何を使ってくるかわからない状況である。

「小癪に避けてんじゃないわよ！！ エレザード、近づいて攻撃！！」
シャルラはもはや電気^{とかげ}蜥蜴エレザードにしか指示を出さなくなった。シャルラのポケモンは何を察したのか、赤花ラフレシアも烈火鳥ファイアローも、2体ともシャルラの隣に戻っていく。代わりに電気^{とかげ}蜥蜴エレザードが単体で突っ込んでくる。

「ジュカイン！ 銃で牽制して！」

「無駄よっ！！ エレザード、「あくのはどう」よっ！！」

電気^{とかげ}蜥蜴は、ジュカインの放つ「タネマシガン」を全弾回避してあつという間に距離を詰め、至近距離でジュカインに「あくのはどう」を放った。

「あくのはどう」を受けたジュカインは、そのまま「あくのはどう」に押し出され、焼けた木々をなぎ倒しながら遠くへ吹っ飛ばされた。

遠くで倒れこんだジュカインが起き上がることは無かった。

「くっ！ アブソル、"つじぎり"！」

「舐めるなっ！！ そんなへぼい攻撃でエレザードを捉えられるものかぁ！！ エレザード、奥まで進みなさいっ！！」

アブソルの"つじぎり"を避けた電気蜥蜴エレザードは、エレナとリザードがいる方に向かう。

「くっ！ リザード、"ほのおのキバ"でエレザードに攻撃！」

「あんたはもう既に詰んでるのよ小娘えっ！！ エレザード、"パラボラチャージ"！！」

電気蜥蜴エレザードを中心に、四方八方に不思議な電気が放たれる。

（！？ なに……？ 体が……！）

突然、エレナは全身の筋肉が硬直し、地面に倒れ込んだ。さらに自分の生命力が吸い取られるような気持ち悪い感覚に襲われる。

エレナの隣では、リザードが戦闘不能になって倒れていた。

シャルラは怒りを収め、面白そうにエレナに話しかける。

「ふふ……小娘、エレザードの"パラボラチャージ"をくらった感想はどんなものかしら？ さて、生き残りを始末しようかしらねえ……じゃあエレザード、アブソルに"はかいこうせん"よ」

（避けて……アブソル……）

エレナは指示しようとしたが、全身が硬直して声が出ない。

電気蜥蜴エレザードは、これでもかという程にアブソルに接近し、アブソルの"つじぎり"と"サイコカッター"を受けようが気にせず自分の口をアブソルの体に押し付け、口から圧倒的な威力の光線を撃ち出した。

辺りは凄まじい光にあふれ、光が収まった時にはアブソルは遠くで倒れていた。電気蜥蜴エレザードとアブソルを結ぶ一直線上には

一切の木が存在せず、一直線に地面がえぐれて道ができていた。

「ご苦労様エレザード。まあ、あんな雑魚たちの相手なら当然の結果でしょうけど、一応褒めておくわねエレザード」

言いながらシャルラは、倒れているエレナの方を見る。

「どう？ 私の本気^{わたくし}を思い知ったかしら？」

シャルラが勝ち誇った顔でエレナに言葉をかけた。

「大丈夫ですか？ すぐに病院に着きますからね」

エレナのアブソルが倒された直後、治安組織のポケモントレーナー達が焼けている森の現場に到着した。

現在エレナは、治安組織の1人に連れられて現場を離れている最中である。倒されたエレナのポケモンは全て治安組織の隊員が回収してくれた。^{さいちゅう}

（全力で戦った。なのに全然勝てなかった……アタシは、同期のラボ・チルドレンの中ではトップクラスの実力がある……でも、それが何になるっていうの？ 世界には強くて悪いトレーナーなんていくらでもいる。ラボ・チルドレンの中でトップクラスだったとしても、何も解決できないのでは全く意味がないわ）

ポケモンを悪事に使うような者に敗北したことは、エレナにとって非常にショックなことであり、屈辱的なことであった。

また、治安組織の隊員に連れられている今の状況も、エレナにとって心苦しい事である。

（アタシのせいで、この人は戦線を離れなければならない……アタシのせいで、治安組織の戦力が1人分少なくなっているのよね……）

治安組織への申し訳ない気持ち、悪人に敗北したことの悔しさ、自分を信じて戦ってくれたポケモンへの罪悪感、様々な負^ふの感情が渦巻いてエレナの頭の中はぐちゃぐちゃになっていた。

（ラボ・チルドレンの中でどうか、そんな小さいことじゃあダメよ！ 物事を解決するためには、もっと強くないと……！ もっと、強い力が欲しい……！ ライフ団のシャルラにも勝てるほどの力が欲しい……！）

この苦い敗北の経験は、エレナの考えに変化をもたらすことになった。

「まったく……あの小娘にマグカルゴちゃんを倒されたせいで、こいつら相手に苦戦しちゃったじゃないのよ。苦戦したせいでファイアローちゃんまで倒されちゃうし……」

シャルラは独り言でそう文句を言った。

「まあ、勝てたから全て良しとしましょうかねえ」

シャルラは、目の前で倒れている大勢の治安組織の隊員とポケモンを見ながらそう呟いた。シャルラの隣にも、ライフ団のポケモンが大勢倒れていた。

治安組織との戦いが終わり、やることが無くなったシャルラは、先ほどのエレナとの戦いを思い出していた。

（あの小娘が、自分のリザードを攻撃するようアブソルに指示した

時は何事かと思ったけど、今にして思えば、ピンチになると炎の威力が上がるっていうリザードの特性「もうか」を利用したのね」

シャルラは回想を続ける。

（マグカルゴが倒される前、ジュカインの攻撃力が上がったのも同じね。ピンチだったから特性「しんりよく」で草の威力が上がったのね。計算か偶然か知らないけど、なかなか興味がわくトレーナーだったわね）

「でも、まだまだ未熟よ小娘。戦闘の最中に自分が狙われているって意識が全然無いのよねえ……善良なトレーナーとの真剣なポケモンバトルならそれでもいいけど、世の中には悪いトレーナーだっているのよ。私^{わたくし}のようにねえ……」

いつの間にか思っている事を口に出して喋っていたシャルラの元に、ライフ団のしたっぱ団員がやってきた。

「シャルラ様、報告があります」

「何かしら？」

「アーク様が、幸運の家にてラッキーの奪取に失敗したとの情報が入りました」

「はあ！？」

シャルラは思わず声をあげた。

「失敗！？ どういう事よ？ アークと直接会話させなさい！」

「それが、情報はラッキーの奪取に向かった班からのものでなく、偵察部からのものであります。偵察部によりますと、アーク様は手持ちポケモンを全て倒され、現在は拘束されているとのことです」

「どういうことよ？ この一帯を担当する治安組織は、私^{わたくし}たちの目の前に今倒れているでしょう？ アークは誰に負けたのよ？」

「それが……たまたま居合わせた子供のトレーナーに負けたとの情報です」

「なによそれ。情けないわねえ」

言いながらもシャルラは、自分も子供のトレーナーにポケモンを1体倒されている事を思い出し、腹が立ってきた。

「シャルラ様、アーク様の救出に向かいますか？」

「何？ 私たちが行くの？ 今から？ なんで？」

「ポケモンに勝てるのはポケモンだけです。アーク様に勝ったトレーナーは当然、戦闘可能なポケモンを所持しているはず。現在、戦闘可能なポケモンを所持している班は我々の班だけあります」

「……」

シャルラは少し考え、結論を出す。

「無理よ。どうせ治安組織は、もっと遠くの危険地域を担当してる腕が立つ奴らにも応援を頼んでいるハズ。もし今から行ったら、そいつらと鉢合わせになるわよ？ この状態を見なさいよ」

シャルラは周りに倒れている多くのライフ団のポケモンを指さしながらそう言った。

「もし私が万全の状態なら、私1人でも行って戦えばいいけど、残念ながらマグカルゴとファイアローが戦闘不能なの。だから無理よ」

「ではアーク様を見捨てると？」

「その通り」

「しかしそれでは……我々に責任が問われるのでは……？」

「私たちが責められることは無いわよ。アークが治安組織に逮捕されようと、任務を失敗したアークの自業自得。私たちは、治安組織を引きつける陽動の役割はちゃんと果たしたの。この作戦の失敗は、私たちのせいじゃなくて、アークのせいなのよ」

「承知しました。では撤退という方向で各部門に伝達致します」

ライフ団。命について研究する者たち。彼らの暗躍はまだまだ続くことだろう……

17 話目 武闘派

「ワンリキー！　　からてチョップ！」

「^{ねえ}姐さん！　　メガトンパンチ！」

町外れの道端。グレイはあるポケモントレーナーとバトルしていた。

相手のワンリキーの　　からてチョップ　　と、グレイに「姐さん」と呼ばれたポケモンの　　メガトンパンチ　　がぶつかり合う。

勝ったのは　　メガトンパンチ　　であった。相手のワンリキーの　　からてチョップ　　を打ち消し、そのまま相手にダメージを与えて吹っ飛ばした――。

グレイに「姐さん」と呼ばれたポケモン。幸運の家で「姐さん」と呼ばれていたポケモンと同じ個体である。

2週間前、幸運の家を訪れたグレイが、ライフ団と交戦し、勝利した後の話である。グレイは幸運の家の施設長ゼンに、ライフ団を食い止めたお礼として、「姐さん」と呼ばれていたラッキーを連れていくことを勧められた。

ところで、今グレイの目の前にいる『姐さん』は、ラッキーではない。進化してハピナスになった。

ハピナス。しあわせポケモン。見た目は進化前のラッキーとあまり変わらず、ピンク色でたまごのような丸っこい体に、小さな手足がある。お腹にはカンガルーのようにポケットがあり、たまごが入っている。しかしラッキーに比べると、全体的に体毛がカールして

いたりフワフワしていたりと、触り心地が良さそうな見た目をしている。

戦闘能力で言えば、一般的なハピナスは、異常な程にとっても体力があり、さらに特殊攻撃への耐性も非常に高いポケモンである。反面、力はととても弱く、物理的な攻撃力も、物理攻撃への耐性も異常な程に低いポケモンである。

グレイは、ラッキー（現在は進化後のハピナス）と接するうちに、ラッキーが仲間を護るための強い力を求めている事に気がついた。

仲間を護るために必要な力というのは、仲間を庇い、迫りくる相手を撃退するための肉体的な物理的な力である。

ラッキーは、ギャラドスのように暴れるために力を求めている訳ではない。しかし、ギャラドスの持つ圧倒的な破壊力と強靱な体こそ、ラッキーが求める力に1番近いものであった。

しかし、先で述べたように、ラッキーやハピナスという種類のポケモンは、物理的な力が極端に弱いポケモンである。現実的に考えれば、ラッキーがギャラドスのような力を得ることは不可能である。しかし、それは一般的な考えであり、機械的でデータの考えである。

『データや分類などではなく、ポケモン自身の本質を見抜くことじゃ……』

『チルは鳥ポケモンなのか？ チルはチルタリスというポケモンなのか？ そんな事は関係ないんだよ。だって、チルはチルなんだからね』

グレイに『本質』を教えてくれた者たち。彼らに教えられた事を思い出し、グレイはポケモンの種類としてのラッキーやハピナスではなく、ありのままの「姐さん」を見ていた。そして本質を見抜いたのである。「姐さん」が秘めている力の限りない可能性に。

グレイはラッキーの意思を尊重し、武闘派の路線で鍛えることを決めた。

求める形が実現するかどうかは分からない。しかし、鳥ポケモンなのに空を飛ばずに戦い、なぜか「ドリルくちばし」を使うことができ、なんだかよく分からない「コットンガード」と「アイアンテール」を使う。そんな規格外で常識外れなチルタリスを見たことがあるグレイには、ラッキーが武闘派になり、ギャラドスのような力を得ることが不可能なこととは思えなかった。

目指すべき武闘派ラッキーを現実のものとするために、物理的な攻撃技も新たに覚えさせた。

現在、ラッキーから進化したハピナスが覚えている技は、次の4つである。

「メガトンパンチ」。物凄い力を込めて相手を殴りつけるノーマルタイプの攻撃技。

「カウンター」。タイミング良く発動すれば相手の物理攻撃を倍返しにできる技。

「うたう」。相手を眠らせる技。

「タマゴうみ」。体力を回復させる技。

「ワンリキー！ もう1回」からてチョップ」だ！」

「姐さん！ 「カウンター」を狙ってみろ！」

相手のワンリキーの拳から、「からてチョップ」が放たれる。

ワンリキー。かいりきポケモン。2足歩行で、薄い青色の体をしている。全体的に人間の体に似た見た目をしている。高さ0・8m、重さ19・5kgと小柄なポケモンだが、全身が筋肉になっているらしく、大人の人間を100人投げ飛ばせると言われている。格闘タイプのポケモンである。

「からてチョップ」がハピナスに命中する一瞬前。ハピナスは「カウンター」を発動した。相手のワンリキーの「からてチョップ」がハピナスにダメージを与えるが、ハピナスは「カウンター」でダメージを倍返しした。

「カウンター」を受けたワンリキーは後ろへ勢いよく吹っ飛んだ。「姐さん！ 「メガトンパンチ」！」

吹っ飛ぶ相手を追い、ハピナスは「メガトンパンチ」による拳の一撃をくらわせた。

相手のワンリキーは戦闘不能となって倒れた。

「メガトンパンチ」を高い威力で放てるようになり、発動タイミングが非常にシビアな「カウンター」も徐々に使えるようになりつつある。

その成果として、接近戦を得意とする格闘タイプのポケモンを相手に、接近戦で勝利することができた。

グレイのハピナスは、早くも武闘派としての力を開花させつつあった。

バトルはまだ続いている。

このバトルは、お互い3体のポケモンで戦うことにしている。相手のワンリキーは1体目のポケモンである。まだ相手の最初のポケモンを倒したに過ぎない。

「僕の知識だと、ハピナスって力が弱いポケモンだったと思うんだけど……君のハピナスって、本当にハピナスなのかい？」

相手のトレーナーが、次のポケモンを選びながら、そうグレイに声をかけてきた。

武闘派のハピナスを見た相手がこのように訊いてくることは、グレイの想定内である。その時に返す言葉も事前に考えていた。

「姐さんがハピナスかどうかなんて、関係ないですよ。姐さんは姐さんなので」

「いや、そういうレベルの問題じゃないと思うけど……」

相手トレーナーが困惑気味にそう言った。

グレイの今の言葉は、以前に出会った規格外のチルタリスを連れたトレーナーの言葉を借りたものである。もっとも、同じ言葉を使ったとしても、冗談半分で言っているグレイと本気で言っている規格外チルタリスのトレーナーでは認識に大きな差があるのだが。

規格外のチルタリスを連れたトレーナーは、チルタリスが本来はどのようなポケモンなのか把握しておらず、そもそも考えたこともない。それに対してグレイは、ハピナスが本来は力が弱いポケモンであることを把握しており、自分のハピナスが常識外れの側であることを自覚している。

相手トレーナーは、オオスバメを繰り出した。

オオスバメ。ツバメポケモン。大きな燕^{つばめ}の姿のポケモンである。

ツヤのある羽と、ピンと立っている尾羽が特徴的である。ノーマルタイプと飛行タイプを併せ持つポケモンである。

ハピナスとオオスバメが対峙する。

「姐さん！ 突撃！」

グレイのハピナスは現在、遠距離から相手を攻撃できる技をもっていない。攻撃するにも、補助技を使うにも、まずは相手に近づく必要がある。相手が誰であろうと、突撃あるのみである。

「オオスバメ！ 上昇して空を飛べ！」

「メガトンパンチ」を放つハピナスに対し、オオスバメは上空へと飛び立ってハピナスの攻撃を避けた。

「オオスバメ！ “つばめがえし”！」

ハピナスの攻撃を避けた相手のオオスバメは、素早い動きで相手を翻弄して斬りつける飛行タイプの攻撃技“つばめがえし”を発動する。

技が発動した直後、相手のオオスバメは目にもとまらない程に速い動きで一瞬でハピナスに近づき、自らの羽でハピナスを斬りつけた。

技を空振って隙ができていたハピナスは、相手の素早い攻撃になす術がなかった。

相手のオオスバメは、攻撃を当てた後は素早く空を飛び、空中を飛行し始める。

空に逃げる相手に対し、グレイは新たな指示をハピナスに下す。

「姐さん！ 全力の“メガトンパンチ”！」

ハピナスは、今までの“メガトンパンチ”よりもゆっくりと拳に力を込め始めた。

「よし行け！」

グレイの合図と同時、ハピナスは拳にためた力を一気に解法し、拳を突き出したままの姿勢で、弾丸のような勢いで飛び出して空中のオオスバメに迫る。

「オオスバメ避ける！」

鳥ポケモンであり、空中で自由に方向転換できるオオスバメは、何とかハピナスの「メガトンパンチ」を避けることに成功した。

「今だ！　　つばめがえし！」

「メガトンパンチ」が不発に終わったハピナスの隙をつき、オオスバメは再び、目にもとまらない程に速い動きで一瞬でハピナスに近づき、自らの羽でハピナスを斬りつけた。

ハピナスは地面に落ちた。

オオスバメは追撃してくることなく空中を飛行している。

「君のハピナスでは僕のオオスバメは倒せないよ。空中にいるオオスバメに攻撃してきた時は驚いたけど、避けられないことはない。君から攻撃すれば今のよう^だにダメージを受けるだけだ」

ハピナスが空中のオオスバメに迫ることができたのは、「メガトンパンチ」の威力を跳躍^{ジャンプ}に利用したからであって、元々のハピナスの身体能力では空中のオオスバメに届く程の跳躍^{ジャンプ}は不可能である。

つまり、空中のオオスバメに迫る手段は限られており、相手トレーナーはそれを指摘しているのである。

しかし、グレイも負けじと言葉を返す。

「それなら、相手が攻撃のために近づいてくるのを待てばいいだけだ」

攻撃することなく空を飛び続けるオオスバメを見たグレイは、相手が遠距離攻撃の手段をもっていないと予想していた。

相手トレーナーが言葉を返す。

「僕が待ちに徹したらどうする？」

「待ちに徹する？　そんな考え、次の瞬間には変わってるだろうぜ。姐さん！　　タマゴうみ」だ！」

ハピナスは「タマゴうみ」を発動した。オオスバメから受けた攻

撃のダメージ、さらに先ほどのワンリキーと戦った時のダメージも回復した。

「くっ……しょうがない、オオスバメ！ こっちから攻めるぞ」

回復技を持つ相手と戦う場合、回復が間に合わないよう激しい攻撃で早く倒すのが定石である。じょうせき

ハピナスが先ほどのワンリキーとのバトルで使った技は、「メガトンパンチ」と「カウンター」だけであった。ハピナスが回復技を使えると新たに知った相手トレーナーは、作戦を変えざるを得なくなった。

「オオスバメ！ つばめがえし！」

「姐さん！ カウンター！」

相手の攻撃を倍返しにしようとハピナスが「カウンター」の構えを見せるが、

「オオスバメ！ 今だ！」

相手トレーナーがそう指示した途端、相手のオオスバメは宙返り飛行を披露した。相手の宙返り飛行によって「カウンター」のタイミングを外され、ハピナスは一方的に「つばめがえし」を決められた。

「オオスバメ、とにかく攻撃だ！ つばめがえし！」

「姐さん！ メガトンパンチ！」

グレイは、相手の宙返り飛行によるタイミング外しを警戒し、「カウンター」の指示に慎重になった。

ハピナスの「メガトンパンチ」と、オオスバメの「つばめがえし」がぶつかり合うよりも少し前、オオスバメは相手トレーナーの指示で宙返り飛行をした。ハピナスの「メガトンパンチ」は空振りに終わる。

「今！ カウンター」だ！」

宙返りしてから再びハピナスに襲い掛かるオオスバメを見たグレイは、今度こそ「カウンター」を指示した。

しかし、またも相手トレーナーの指示でオオスバメは宙返り飛行した。完全にタイミングを外されたハピナスは、再び相手の「つばめがえし」を一方的に受けた。

（マジかよ、宙返り飛行2連続でできんのかよ……こりゃ、「カウンター」を決めるのは無理だな。こっちから攻めるしかない）

そう判断したグレイは、ハピナスに指示する。

「姐さん！ 前に出て「メガトンパンチ」！」

グレイの指示を受けたハピナスは、再び迫りくるオオスバメに向かって突撃を開始する。相手のオオスバメは、ハピナスの攻撃のタイミングを外そうと宙返り飛行をしようとするが、宙返りが始まるよりも先にハピナスが距離を詰め切り、「メガトンパンチ」による拳の一撃を食わらせてオオスバメを吹っ飛ばした。

「オオスバメ、もっと早めに宙返りを始めるんだ！ 僕が指示するタイミングで「つばめがえし」を当てるんだ！」

相手トレーナーの指示で、再びオオスバメが迫りくる。ハピナスに近づかれないように、今度は早めに宙返りをし始める。

「姐さん、後ろに下がれ！」

グレイの指示通り、ハピナスは後ろに下がった。

オオスバメが早めに宙返りを始め、さらにハピナスが後ろに下がったことで、両者の距離が開く。ハピナスがオオスバメの動きを見てからでも対応できる程に大きい距離である。

宙返り飛行で1回転したオオスバメは再びハピナスに迫る。

「姐さん、前！ 殴れ！」

グレイはハピナスを前に出させた。相手が再び宙返り飛行をしようとした場合でも、宙返りを始める前に攻撃できるようにする為で

ある。

ハピナスの「メガトンパンチ」と、オオスバメの「つばめがえし」がぶつかり合い、相殺された。

直後、ハピナスは短い脚を巧みに操ってオオスバメに回し蹴りを放ち、さらに頭突きをくらわせた。技による攻撃ではなく肉弾戦である。

肉弾戦の師であるグレイのギャラドスには及ばない威力だが、それでも相手のオオスバメに確実にダメージを与えた。

「くっ、こうなったら……オオスバメ！ あれをやるぞ！」

相手トレーナーがオオスバメに声をかけた。オオスバメは気合の入った鳴き声でそれに応じる。

「行くぞオオスバメ！ 「ブレイブバード」だ！」

「ブレイブバード」。羽を折りたたんで低空飛行で相手に突撃する、飛行タイプの攻撃技である。非常に威力が高い強力な技である。オオスバメは低空飛行でハピナスに一直線に迫る。

「姐さん、「メガトンパンチ」！」

ハピナスの「メガトンパンチ」と、オオスバメの「ブレイブバード」が正面からぶつかり合った。

オオスバメの「ブレイブバード」は、ハピナスの「メガトンパンチ」を打ち破り、ハピナスに大きなダメージを与えた。

しかし、技の競り合いで勝った側のオオスバメもダメージを受けてよろめいた。

「ブレイブバード」は、とても強力な攻撃技である反面、自分も反動でダメージを受けるというデメリットがある。

しかし、相手トレーナーはデメリットを無視してでも「ブレイブバード」を使う必要があった。

宙返り飛行によるタイミング外しが攻略されたため「つばめがえ

し〃を一方向的に当てることはできなくなった。さらに、ハピナスに回復される前に倒し切らなければならない。相手は〃ブレイブバード〃を使うしかなかったのである。

「オオスバメ！　がんがん攻めろ！　〃ブレイブバード〃だ！」
再びオオスバメが低空飛行でハピナスに近づいてくる。

「姐さん、〃カウンター〃」

グレイは冷静にハピナスに指示した。ハピナスは〃カウンター〃の構えに入った。

オオスバメがハピナスに〃ブレイブバード〃を直撃させた。反動のダメージで、オオスバメ自身も傷ついた。

直後、ハピナスの〃カウンター〃により、オオスバメが放った攻撃は倍になってオオスバメ自身に返ってきた。

オオスバメは凄まじいダメージを受けて地面に叩きつけられた。オオスバメを中心に、地面には蜘蛛の巣くものような模様の亀裂が入った。

ハピナスは地面に沈んだオオスバメに素早く〃メガトンパンチ〃を放った。

オオスバメは戦闘不能となった。

「まさかオオスバメが倒されてしまうとはね……僕の自慢のポケモンだったんだけどね、もうこれで最後のポケモンだよ……」

そう言い、相手トレーナーはエーフィを繰り出した。

エーフィ。たいようポケモン。エスパークタイプのポケモンである。4足歩行で紫色の体をしている。長い尻尾は途中から2つに分かれており、額には赤い宝石のようなものが光っている。

「エーフィ！　〃サイケこうせん〃！」

「姐さん、とにかく突撃！」

相手のエーフィから、エスパータイプの特攻技「サイケこうせん」が放たれる。超能力的な光線は真っすぐにハピナスに飛来し、直撃した。

しかしハピナスは「サイケこうせん」に怯まずに、ひたすらエーフィに向かって一直線に進み、「メガトンパンチ」で殴り飛ばした。ハピナスというポケモンは元々、特攻攻撃に対して非常に高い耐性があり、さらに異常な程にとっても体力があるポケモンである。特攻攻撃である「サイケこうせん」はハピナスには大きなダメージを与えられなかった

「エーフィ！ とにかく距離をとりながら「サイケこうせん」
相手トレーナーの指示通り、エーフィは距離をとりながら「サイケこうせん」による超能力的な光線を放つ。しかしハピナスは「サイケこうせん」の軌道に関係なく最短ルートで距離を詰める。

ハピナスが再び距離を詰め、エーフィを殴り飛ばそうとすると、
「エーフィ！ 「すなかけ」だ！」

砂で目を潰して相手の命中率を下げる技「すなかけ」がエーフィから放たれる。ハピナスは「メガトンパンチ」の拳の一撃によって、放たれた砂を弾き飛ばした。

「すなかけ」を防ぐために「メガトンパンチ」を使ってしまったハピナスは、技ではない己の腕力でエーフィを殴りつけ、回し蹴りをくらわせ、頭突きを放った後、追撃として再び「メガトンパンチ」で攻撃する。

相手のエーフィは「サイケこうせん」を、ハピナスにダメージを与える目的ではなく、「メガトンパンチ」の威力を相殺する目的で、ハピナスの拳に向かって集中的に放つ。しかし「メガトンパンチ」が相殺されたハピナスは、肉弾戦でエーフィを攻撃する。決着がつくのは時間の問題であった。

結局、ハピナスは大きなダメージを受けることなくエーフィに勝利した。バトルはグレイの勝利に終わった。

バトルの後は互いを称えあい、いくつか言葉を交わす。

「まさか1体のポケモンに全員倒されるとは思わなかったよ」

相手トレーナーは明るくそう口にした。

（ボロ負けした事にあまり落ち込んでなくてよかったぜ）

相手の様子を確認し、グレイは少しほっとした。

グレイが旅に出てから4ヶ月半。グレイのポケモンは確実に強くなった。

グレイは最初、強いポケモントレーナーを目指してバトルを極めるために旅をしていた訳ではなかった。しかし、戦闘狂ギャラドスの管理責任者になってしまった事、さらにバトルで負けたくないライバルができた事、これらの理由で、いつのまにかバトルの世界にどっぷりと浸かっていたのである。

グレイがライバル意識を燃やして何回か勝負を挑んでいるエレナは、同時期に旅立ったラボ・チルドレン——将来一流のトレーナーになることを期待されて研究所から最初のポケモンをもらった者たち——の中ではトップを争う程の実力をもつと聞く。

そんなエレナに、勝つまではいかなくとも拮抗した戦いができるグレイは、ラボ・チルドレンでない子供でありながら、ラボ・チルドレンの上位陣並みの実力があると言える。

相手トレーナーが口を開く。

「実は僕、この前初めてジムリーダーに勝ってジムバッジをもらったんだ。楽しむことを目的にポケモンと旅している僕だけど、バトルにはかなり自信あったんだけどな」

「実はオレはジムバッジ2つ持ってる」

「ええ？ ジムバッジ2つも持ってるの？ どうりで強いハズだ、こりゃ負けても仕方ないかあ」

（まあ、ジムリーダーに勝ったのは姐さんと出会う前だから、姐さんはジムバッジの数と関係ないけどな）

そう思ったグレイだが、余計な事は言わない。

相手トレーナーと別れた後、グレイは先ほどのバトルを振り返り、ハピナスの強さについて考えていた。

（さっきのバトルでもそうだったが、やはり姐さんはかなり強い！オレの手持ちの中では、KKに次いで地力が高いかもしれない。これなら、エレナにも勝てるかもしれない……）

グレイは、最近はいざらくエレナに挑んでなかった事を思い出し、そろそろ自分のポケモンの力を試す時かと考え始めたのであった。

18話目 湖岸の戦場（前）

エレナは、とあるポケモンセンターの近くの道を歩いていた。

歩いている道の脇は崖になっており、崖の下には湖が広がっている。湖はとても大きく、まるで海のように見える。

歩きながらエレナは、3週間前のライフ団のシャルラとの戦いを思い出していた。特に思い出すのは、敵のマグカルゴを倒した直後にシャルラが繰り出したポケモン、エレザード。戦いを強制終了させるがごとくの圧倒的な力で、残っていたエレナのポケモンをねじ伏せたエレザード。

（シャルラは全然本気で戦ってなんていなかった……アタシがシャルラのポケモンを1体倒せたのは、エレザードがいなかったから。もし、あの戦場に最初からエレザードがいたら、アタシは手も足も出なかったでしょうね……）

エレナが2つ目のジムバッジを手に入れて以降、エレナが道端でのバトルで負けることはほとんど無くなった。また、例え格上の相手とバトルしても一方的に負けるようなことは無かった。

そんなこともあり、エレナは自分のトレーナーとしての実力に自信をもっていた。また、例えポケモンバトルではなく、ポケモンの武力行使であったとしても、滅多な事では一方的に負けたりはしないという自信があった。

そんな中、3週間前のあの日、ライフ団のシャルラとの戦闘があったのだ。

ポケモンを悪事に使うような人間に手加減されても苦戦し、本気

を出されたら手も足もでない。それに加え、トレーナーである自分が狙われているという事を意識から外してしまった自身の考えの至らなさ。

エレナは自分の未熟さを痛感し、より一層、自分とポケモンの鍛錬を厳しく行うようになった。

自分を厳しく鍛錬すること。これは悪いことではないだろう。しかし今のエレナの状態は、シャルラの敗北にとらわれるあまり、自分を見失っている状態であるとも言い換えることができた。

（今のアタシにどれ程の力がついたのか、これからの戦いで確かめさせてもらうわ）

強い思いを抱きながら、エレナは湖に隣接する崖の上の道を歩いていく。

やがてエレナは開けた湖岸にたどり着いた。砂浜には1人の少年が立っていた。

その少年にエレナが声をかける。

「早い到着ね、約束の時間にはまだ早いんじゃないかしら？ グレイ」

「早めに来て、戦場の状況を確かめてたんだよ」
そう返事があった。

1週間前、エレナはグレイから「バトルをしたい」という連絡を受けた。

その時の2人が滞在していたそれぞれの町の位置と、これからの目的地を総合的に判断し、1週間後である今日、この湖畔のどこか

でバトルをすることに決めた。

戦うための場所探しは、エレナよりも1日早く湖畔に到着したグレイが行い、エレナはグレイに指定された場所にやってきたのである。

「ポケモンセンターから近くて、しかも人も動物もポケモンも少ない開けた場所。なかなか良い戦場だろ？」

グレイがそう声をかけてきた。

エレナは、グレイが見つけた湖岸の戦場を見渡す。

2人が立っている場所を含めて砂浜が広がっており、硬い岩が所々に存在している。砂浜に隣接する海のような湖は、陸からすぐに深くなっていた。

（深い水辺……なるほど、アナタのギャラドスが活躍できそうな戦場ね）

エレナは、グレイがこの場所を選んだ本当の理由を察した。しかし、それに文句を言うようなことはしない。

（グレイは確かに手強いトレーナーだと思うわ……でも、グレイが有利な状況でも関係なく勝てるぐらいじゃないと、シャルラには絶対に勝てない……！ これくらいのハンデがちょうど良いわ）

エレナはこのバトルのルールを確認する。

「事前の連絡通り、4対4のバトルなのね？」

「ああ、エレナが持ってるポケモンは4体が増えたんだろ？ オレの持ってるポケモンも4体だ。近くにポケセンあるから、全員で戦っても大丈夫だろ？」

「バトルフィールドの範囲はどこまで？」

「とりあえず砂浜は全部OK。砂浜じゃない所は、あっちはあの崖まで、あそこはあの変な木がある辺りまで。湖の方は、あの島みた

いになってる小さい岩の所まで」

エレナの予想通り、グレイは陸だけでなく湖もバトルフィールドに含めてきた。

「じゃ、早速始めようぜ」

そう言い終わったグレイは、エレナから距離をとってポケモンを出す準備をし始めた。

「準備はいいか？ 最初のポケモンは同時のルールだからな？」

「分かっているわよ」

グレイの言葉通りに、エレナとグレイは同時に1体目のポケモンを出した。

エレナは、最初はリザードンに戦わせることにしていた。

リザードン。炎タイプかつ飛行タイプの、かえんポケモン。手足があり二足歩行、体は橙色。大きな翼と尻尾があり、まるでドラゴンのような外見である。

リザードの進化後のポケモンであり、シャルラに敗れた後、特訓の末に成長してリザードンに進化したポケモンである。

次にエレナは、グレイが繰り出したポケモンに視線を移した。グレイの前には、ハピナスというポケモンが立っていた。

ハピナス。ノーマルタイプで、しあわせポケモン。ピンク色でたまごのような丸っこい体に、小さな手足がある。お腹にはカンガルーのようにポケットがあり、たまごが入っている。全体的に体毛がカールしていたりフワフワしていたりと、触り心地が良さそうな見た目をしている。

（『第2のエースが新たに仲間になった』なんてメールで言っていたから、どんな攻撃的なポケモンかと思ったら……ずいぶん防御寄りのポケモンね）

相手のハピナスを見ながらエレナはそう思った。

エレナとグレイは何回かバトルしているので、お互いに使うポケモンも戦術もある程度分かっている。そんな状況の中、2人とも新たなポケモンを手に入れて最初のバトルである。エレナはハピナスを見るのは初めてであり、グレイもリザードンを見るのは初めてであった。

「お互い、最初っから新しいポケモンを見せ合ってしまうとはな。これでワクワク感は無くなったな」

そう言いながらグレイは笑っている。

（ハピナスは力が弱いポケモン。力技でいきましょう！）

作戦をリザードンに指示する。

「リザードン、相手の真上に飛んでから「ドラゴンクロー」！」

エレナの指示通り、リザードンはハピナスの真上に飛び、巨大な爪の一撃「ドラゴンクロー」を放とうとハピナスに迫る。

「！？ 止め！！ リザードン、攻撃しないで！」

攻撃を放とうとしていたリザードンだが、エレナはそれを止める指示をした。ハピナスがリザードンを引きつけるような動きをするのを見たエレナは、直観的に攻撃するのは危険だと感じたのである。リザードンは、「ドラゴンクロー」による巨大な爪の一撃を空振りさせ、再び空に戻った。

エレナは、グレイが一瞬舌打ちしたような表情をしたのを見逃さなかった。

（やっぱり何かあるのね。あの相手を待つ動き……「カウンター」でも狙っていたのかしら？ 確かめてみましょう）

「リザードン、「ドラゴンクロー」！」

再び指示したエレナ。しかし、リザードンがハピナスに迫ったタイミングで、さらに新たな指示を出す。

「中断して、"エアスラッシュ"！」

エレナの指示で、リザードンは慌てて"ドラゴンクロー"を中断し、空気の刃を飛ばして相手を攻撃する飛行タイプの特殊攻撃技"エアスラッシュ"を放った。

ハピナスはリザードンを引きつけて何か構えをしていたが、無抵抗に"エアスラッシュ"を受けただけで何もしてこなかった。

その光景を見たエレナは結論を出す。

（やっぱり！ "カウンター"を発動していたのね！ あんなに接近したのに攻撃してこないのは、"エアスラッシュ"が特殊攻撃だから"カウンター"が失敗に終わって動けなかったからでしょう？）

エレナは再び同じ指示を出す

「リザードン、"ドラゴンクロー"！」

先程と同じく、最初は物理攻撃技"ドラゴンクロー"で攻めると見せかけて、途中で特殊攻撃技"エアスラッシュ"に切り替える作戦である。

グレイが、このバトルで初めての指示を出す。

「ダメだ姐さん！ もうバレてる！ 殴るしかない！」

グレイの指示を聞いたエレナは、内心で思う。

（無駄よ！ もし"カウンター"を止めるんだったら、そのまま"ドラゴンクロー"で攻撃すればいいもの！）

リザードンの"ドラゴンクロー"による爪の一撃がハピナスに直撃した。

その直後、ハピナスの短い手から凄まじい威力のパンチが放たれた。ノーマルタイプの攻撃技"メガトンパンチ"である。

（えっ！？）

エレナは、ハピナスがリザードンを殴り飛ばす光景を見て、思わず目を見開いた。ハピナスは力が極端に弱いポケモンというエレナ

の知識とは全く異なる光景である。

「姐さん！ もう1発だ！」

「リザードン、空に逃げて！ “ドラゴンクロー”！」

再び拳に力を入れ始めたハピナスを見て、エレナはリザードンに逃げるよう指示した。ハピナスは空に逃げるリザードンに対し、拳を突き出した体勢で跳躍して飛び出し、再び殴りつけた。ハピナスの“メガトンパンチ”とリザードンの“ドラゴンクロー”がぶつかり合い、相殺された。

リザードンは空中に逃げ去り、ハピナスは砂浜に着地した。

思わずエレナはグレイに訊ねる。

「なんなの！？ アナタのハピナス……本当にハピナスなの？」

エレナの問いに対し、グレイが面白そうに答える。

「本当にハピナスかどうかなんて、どうでもいいだろ？ こいつは真正銘のオレのポケモン、『姐さん』さ！」

グレイの返答は、今のエレナにとって理解できないものであった。（ポケモンは、長所を伸ばして長所で戦うものよ。力が極端に弱い種類のポケモンの力を鍛えたって時間の無駄だわ。アタシなら、絶対にそんな育て方はしないわね！ そんなことでは勝てないもの！）

『そんなことでは勝てない』と無意識に思ったエレナ。勝ちたい相手は、今日の前にいるグレイの事ではなかった。

「姐さん！ もう1発殴ってやれ！」

グレイの指示で、ハピナスは助走をつけてリザードンの飛ぶ方向へ走ってくる。

「リザードン、水の上を飛んで！ 遠距離から“エアスラッシュ”！」
指示を受け、リザードンは砂浜から湖の方へ移動し、水上を飛んで“エアスラッシュ”を放つ。

ハピナスは湖の水に阻まれ、ジャンプして近づくことができない。

グレイが声をあげる。

「水の上に逃げるなんて卑怯じゃねえか!？」

「アナタが選んだ戦場でしよう？ 何があってもアナタの責任よ」

エレナは冷たく言い返した。

（そう、どんな状況も有効活用しなければ、シャルラに勝つなんてできる訳がない！ それに、ハピナスの力が異常に強いからって、それがどうかしたの？ その程度で動揺していたら、シャルラのエレザードを倒すなんてできないの!）

リザードンが水上から「エアスラッシュ」で空気の刃を飛ばしてハピナスを攻撃しようとする。しかし、砂浜にいるハピナスは放たれた空気の刃をうまく避けていき、なかなかダメージを受けない。

「リザードン、はじけるほのお」で攻撃！」

今度、リザードンは「はじけるほのお」によって炎を飛ばして攻撃し始めた。

ハピナスは迫る炎を避けるが、炎は砂浜に着弾すると同時にあらゆる方向に広く飛び散った。飛び散った炎まで全て避けることはできないハピナスは、ほんの少しずつではあるがダメージを受けていく。

（「はじけるほのお」……敵に使われると厄介だけど、自分が使うと便利な技ね）

エレナは、シャルラのマグカルゴが使ってきた「はじけるほのお」を思い出しながらそう思った。

しばらくの間、リザードンが「はじけるほのお」でハピナスを一方的に攻撃する状況が続いた。

そんな中、グレイがエレナに声をかけてくる。

「いつまでそんなチマチマと攻撃するつもりだ？ 早く近づいてこ

いよな」

「近づいて欲しいなら、アタシが近づかざるを得ない状況を作ってみなさいよ」

エレナはまたも冷たく言い返した。

グレイは一瞬エレナを不思議そうに見た後、再び口を開く。

「だったら、そうするさ。姐さん！　「タマゴうみ」」

ハピナスが「タマゴうみ」を発動し、自分の体力を回復した。これでリザードンが与えたダメージは全て消え、それと同時に弱い攻撃で少しずつハピナスにダメージを与える事は無駄なことであると判明した。

しかし、この状況を見たエレナは内心で思う。

（残念ねグレイ、それを待っていたの。1度回復技を使えば、しばらく使えないでしょう？）

ハピナスが「タマゴうみ」を発動するのを確認したエレナは、素早くポケモンを入れ替えた。今までリザードンがいた場所に、新たにチルタリスが現れる。ドラゴンタイプかつ飛行タイプのハミングポケモン。雲のような綿のような白くてフワフワした翼に、空色の体をもつ鳥のようなポケモンである。

バトル中にポケモンを入れ替えた場合、新たに出したポケモンは少しの間無防備になり、その隙に好き勝手に攻撃されるリスクがある。しかし今回は、相手のハピナスは砂浜から水上へ踏み出せずにいるため、リスクは無い。

「チルタリス、「コットンガード」！　そのまま相手に近づいて「みだれづき」！」

チルタリスは、自身の防御力を超大幅に上昇させる技「コットンガード」を使った。チルタリスの体を更なるコットンが包み込む。

グレイはなぜか、「あれが本当のチルタリスの「コットンガード」

か……」などと呟つぶやいている。

チルタリスが砂浜に立つハピナスに一気に近づき、ノーマルタイプの攻撃技「みだれづき」を放った。超高威力の連撃技がハピナスを襲う。

ハピナスはグレイに指示されることなく「メガトンパンチ」を發動し、チルタリスを殴りつけた。しかし、「コットンガード」で防御力が超大幅に上昇しているチルタリスには、ハピナスの「メガトンパンチ」があまり効かない。

（力が強いハピナスに最初は驚いたわ。でも、ハピナスにしては攻撃力が強いってだけ。世の中にはもっと力が強いポケモンはいくらでもいるのよ！）

そう思ったエレナが無意識に思い出すのは、シャルラのマグカルゴが使ってきた技「いわなだれ」である。「コットンガード」で防御力を上げたチルタリスも、マグカルゴの「いわなだれ」をくらい続け、最終的には体力を削りきられた。

エレナにとっては、ハピナスの「メガトンパンチ」は、マグカルゴの「いわなだれ」の脅威には及ばないものであった。

グレイが指示を出す。

「姐さん！ 「カウンター」！」

ハピナスは、「みだれづき」で受けるダメージを倍返しにするために「カウンター」を発動するが、「みだれづき」は圧倒的に手数が多く、「カウンター」から漏れた攻撃がかなり多い。

「姐さん！ いつもの感じで、とにかく全力攻撃！」

ハピナスは、拳から放たれる「メガトンパンチ」の他にも、脚での回し蹴り、頭突き、体当たりなどの攻撃を態勢によって組み合わせながら効率的にチルタリスに攻撃してくるが、より多くダメージを受けているのはハピナスであった。

両者の激しい打ち合いの末、相手のハピナスは体力が尽き、戦闘不能となって倒れた。

チルタリスもそれなりにダメージを受けたようだが、まだ戦える様子である。

ハピナスを倒したエレナは、自分の実力が上がっているのだと確信する。

（アタシにとって、リザードンとチルタリスは、4番手と3番手なのよ。それなのに、 그레이が『第2のエース』なんて言っていたハピナスを倒すことができた……これで、厳しくした鍛錬が無駄ではなかったと証明されたわ）

그레이は、倒れたハピナスに声をかけながらハピナスをモンスターボールに戻している。そんな光景を見ながら、エレナは思う。

（でも、『第2のエース』なんて言っても、結局はシャルラのマグカルゴの方が強かった訳なのだから、チルタリスが勝つのは当然のことかしらね……そうよ、 그레이を相手に苦戦するようでは、シャルラに勝つことなんてできないわ！）

チルタリスの勝利が当然の結果。そう思ってしまったエレナは、ハピナスに殴られる痛みに耐えたチルタリスに、ねぎらい 労いの言葉をかけることを忘れてしまっていた。

頑張ったポケモンを労う。例えば当然の結果であっても、相手に勝利したポケモンに一言かける。それは悪人であるシャルラですらやっていることである。

그레이とエレナの戦いは続く。

エレナ側

リザードン (小ダメージ)

チルタリス (中ダメージ)

アブソル (無傷)

ジュカイン (無傷)

グレイ側

ハピナス「呼び方：姐さん」 (戦闘不能)

ギャラドス「呼び方：KK」 (無傷)

ビビヨン「呼び方：ビビ」 (無傷)

レパルダス「呼び方：レパ」 (無傷)

19 話目 湖岸の戦場（中）

グレイ側

ハピナス「呼び方：姐さん」 （戦闘不能）

ギャラドス「呼び方：KK」 （無傷）

ビビヨン「呼び方：ビビ」 （無傷）

レパルダス「呼び方：レパ」 （無傷）

エレナ側

リザードン （小ダメージ）

チルタリス （中ダメージ）

アブソル （無傷）

ジュカイン （無傷）

グレイは、ハピナスが倒された事に焦っていた。グレイにとってハピナスは、ギャラドスに次ぐ新たなエースであったからである。ハピナスならば、エレナのポケモンを最低1体は倒してくれるだろう。そういう考えがグレイにはあった。

（まあ、姐さんはオレのために全力で戦ってくれたんだ……それでも倒されたもんは仕方ないよな、次のことを考えないとな）

グレイはそう思い、気持ちを切り替えることにした。気分を一新

するために周囲の風景を見まわし、そして、ふとエレナの方を見た。
（やっぱり……なんか今日のエレナは、いつもと違うよな……）

エレナの様子を見た 그레이 は、改めてそう思った。

그레이 が最初にエレナの様子に違和感を覚えたのは、ハピナスの放った「メガトンパンチ」に驚いたエレナが声をかけてきた時のやりとりであった。

エレナは真面目な性格で、普段からクールな口調と態度を崩さないが、少しの冗談は通じる人間である。그레이 が何か冗談を言っても、呆れた表情で何かしらの言葉が返ってくることが多い。

しかし、그레이 が冗談半分で『本当にハピナスかどうかなんて、どうでもいいだろ？ こいつは真正正銘のオレのポケモン、『姐さん』さ！』と言った後、エレナは険しい表情をただけで、그레이 に言葉を返してこなかった。

その時エレナは、特別に急いで指示するような状況ではなかったハズである。そもそも先に声をかけてきたのはエレナなのだから。

他にも 그레이 が違和感を覚える場面は何度かあった。

그레이 が冗談半分で軽口を叩いても、返ってくる言葉は冷たく真剣な言葉であり、そもそも 그레이 が冗談で言っていることに気がついていない様子であった。

また、今日のエレナは、バトルを楽しんでいる気配が一切ない。

普段からエレナは、バトルする時は楽しむ気持ちよりも真剣な気持ち強く出しているが、それでも真剣なバトルを楽しんでいた。しかし今日に限っては、楽しむ気持ちが全く表れていない。

今エレナを見た 그레이 は、また1つ違和感が加わった。現在、ハピナスが倒されたことで試合の流れは止まっているにも関わらず、エレナはチルタリスに^{わざ}労いの言葉をかけることなく何か厳しい表情

をしている。

グレイはエレナの様子を見て思う。

（なんというか、『勝つことが全て』っていう考え方が漂ってるんだよな……それも考え方の1つだから、オレは別に否定しないが……冷静に判断してその考え方に至ってるなら文句ないが、自分を見失ってる内にいつの間にかそうなってたって言うなら話は別だろ……）

そしてグレイは1つ決心する。

（何があったか知らんが……このバトルを通して、お前の目を覚まさせてやるよ！ 覚悟しろよエレナ！）

ポケモンバトルは互いの絆を深める儀式であると、古くから言われている。ポケモンバトルを行うと、トレーナーとポケモンの絆が深まり、さらに戦った相手の事も理解できると言われている。

バトルを通じてエレナの違和感を感じ取ったグレイは、今度はバトルを通じて自分の考えを伝えようとしていた。

グレイは2体目のポケモンとしてビビオンを出した。虫タイプかつ飛行タイプで、りんぷんポケモン。きれいな翅はねをもつ蝶ちょうのようなポケモンで、翅はねの一部にドットのような模様があるのが特徴的である。

グレイは、静かにビビオンに話しかける。

「ビビ、今回はちょっと真面目なバトルなんだよ……バトルを楽しんで、トレーナーとポケモンの意思疎通の大切さを示さないとダメなんだ」

真面目に楽しまなければならないバトル。そんな無茶苦茶なグレイの要求に対し、ビビオンは楽しそうに鳴き声を上げて気合を見せる。

グレイは力強くビビョンを送り出す。

「じゃあ頼んだぜ、ビビ！」

ビビョンとチルタリスが、空中で対峙する。

グレイは何度かエレナと戦っているが、最後にエレナと戦った時、目の前にいるチルタリスは進化前のチルットであった。グレイが、エレナのチルタリスの「コットンガード」を見たのもこのバトルが初めてである。

グレイは、相手がさらに新しい技を覚えているのではないかと警戒する。

（前に最後に戦ったときは遠距離攻撃は無かったと思うんだが…）

そう思い、とりあえずビビョンに遠距離攻撃を命じる。

「ビビ、＼サイケこうせん＼！」

エスパ―タイプの特殊攻撃技「サイケこうせん」によって、超能力的な光線がチルタリスに放たれる。

「チルタリス、＼りゅうのはどう＼！」

チルタリスからは、ドラゴンタイプの特殊攻撃技「りゅうのはどう」が放たれる。

（あんのかよ…：遠距離攻撃…）

グレイは落胆した。

「チルタリス！ 今、右！ 左…：1回下がって、右…：そこで上がって、今！ 攻撃！」

さらに、エレナお得意の的確な回避指示も健在であった。エレナの様子がいつもと違って、回避指示の腕が鈍ることは無かった。チルタリスは指示に従うことで被弾を減らしていく。

一方ビビョンは、特性りんぷん、のおかげで命中率が元々高いた

め、無茶苦茶に激しく動きながらも遠距離攻撃を撃てる。逆に言えば、攻撃をしながらでも回避に徹しているのと同レベルの動きを維持できるという事であり、この動きによって被弾を減らしている。特性による恩恵と、トレーナーの指示。両者ともそれぞれ被弾を減らす手段があり、それによって互角の戦いが繰り広げられていた。

ビビヨンとチルタリスによる遠距離攻撃の撃ち合いがしばらく続いた。

ビビヨンは、相手の攻撃をギリギリで避けた時や、自分の攻撃を当たった時など、いちいち 그레이 にドヤ顔でアピールしてくる。 그레이 もそれにいちいち反応してやる。さらにビビヨンは、旅の途中にポケモンサーカス団でバイトした時に習得した「虹色のサイケこうせん」を攻撃に織り交ぜたりしていた。

ちなみに「虹色のサイケこうせん」の効果は、見た目がほんの少しキレイという以外に通常の「サイケこうせん」との違いはない。また、そもそも通常の「サイケこうせん」も虹色なのではないか？ と指摘する者も多い。

このように 그레이 とビビヨンは、撃ち合いの中でもアイコンタクトで会話し、バトルを楽しんでいた。 그레이 の手持ちポケモンの中でも、圧倒的に 그레이 と過ごした時間が長いビビヨンにしかできない事である。

遠距離攻撃の撃ち合いは互角で、ビビヨンとチルタリスはお互い同じくらいのダメージを与え合っていた。

元々チルタリスは、ハピナスの攻撃でダメージが溜っているので、このまま互角に戦えば先に倒れるのはチルタリスである。

そんな中、勝負の流れに変化があった。エレナが、チルタリスを

ビビヨンに必要以上に近づけてくるのである。

そして、エレナが新たな攻撃を指示する。

「今よ！　＼みだれづき＼！」

「やべえ！　避けるビビヨン！」

突如エレナは接近戦をしかけてきた。チルタリスのクチバシから超高威力の連撃技が放たれたが、ビビヨンはギリギリのところで避けた。ビビヨンが 그레이 にドヤ顔を見せる。

그레이 は『今はドヤ顔してる場合じゃねーだろ……』と思うが、ドヤ顔しながらも＼サイケこうせん＼をしっかりと放っているビビヨンを見て、つい許してしまう。

エレナはなお接近戦をしかけてくる。ビビヨンもある程度ダメージを受けており、＼みだれづき＼の連撃をまともに受ければ、あっという間に倒されてしまうだろう。

（姐さんを倒したエレナの方が有利なんだから、そのまま互角に撃ち合うだけでもオレの方が不利な状況で、あえてリスクをとってくるとはな……）

攻撃的なエレナの姿勢を見て 그레이 はそう思った。

エレナの、圧倒的に 그레이 を上回って勝ちたいという考えが、なんとなく 그레이 に伝わってきた。

（なめんなよエレナ！　姐さんを倒されたとは言え、オレはそんなに簡単に負けてやるつもりはねえぞ！）

「ビビ、混乱！　やれ！」

ビビヨンが、相手を混乱させる技＼ちょうおんぱ＼を放つが、チルタリスの＼みだれづき＼で防がれる。しかし、 그레이 が指示の最後に付け足した「やれ！」は、それを続けるという意味を含んでいる。 그레이 と長い付き合いであるビビヨンは 그레이 の意図を察し、＼ちょうおんぱ＼をしつこく放ち続ける。

チルタリスが「みだれづき」を放つくチバシをギリギリで避けた
ビビオンは、チルタリスに下から近づいて「ちょうおんぱ」をねじ
込んだ。

チルタリスは混乱し、訳も分からず自分を攻撃し始めた。

「ビビ、麻痺！」

さらにビビオンは「しびれごな」でチルタリスを麻痺させた。

「よし！ いいぞ、やれビビ！」

ビビオンはグレイに、「ビビオン勝利の舞」という謎の踊りを披露しながら無抵抗なチルタリスに「サイケこうせん」を放ち続ける。

「くっ！ 戻ってチルタリス！ 行ってリザードン！」

「ビビ、麻痺！ そんなで混乱も！」

このままではチルタリスが倒されると判断したエレナは、急いで
ポケモンを入れ替えた。しかし、ポケモンの交代をするには相手との
距離が近すぎた。再登場したりザードンは、ビビオンに「しびれ
ごな」で麻痺させられる。

「リザードン、「ドラゴンクロー」！ 近づいて！」

さらにビビオンは「ちょうおんぱ」を放つ。しかしそれは「ドラ
ゴンクロー」に阻まれる。さらにリザードンはそのままビビオンに
近づく。

「ビビ、離れろ！ 「サイケこうせん」！」

リザードンは至近距離のビビオンに巨大な爪の一撃を放つ。しか
し、ビビオンはリザードンから素早く離れる。「サイケこうせん」
で攻撃することも忘れない。

「リザードン、「エアスラッシュ」！」

エレナの指示で、リザードンは「エアスラッシュ」で空気の刃を
飛ばす。

これにより、ビビオンの「サイケこうせん」と、リザードンの「

エアスラッシュ」による遠距離攻撃の撃ち合いに発展した。

現在の状況

グレイ側

ビビヨン「呼び方：ビビ」 (小ダメージ)

ギャラドス「呼び方：KK」 (無傷)

レパルダス「呼び方：レパ」 (無傷)

ハピナス「呼び方：姐さん」 (戦闘不能)

エレナ側

リザードン (小ダメージ、麻痺状態)

チルタリス (大ダメージ) ※1

アブソル (無傷)

ジュカイン (無傷)

※1 チルタリスは特性「しぜんかいふく」により麻痺は回復している

「ビビ、頑張れ！とにかく滅茶苦茶動いて、なるべく避ける！」
「リザードン！そこで上、一気に前……攻撃！ああ、止まって

はダメよ！」

空中で攻撃を撃ち合うビビヨンとリザードン。しかし、リザードンは麻痺しているため動きが鈍く、完璧な動きを求めるエレナの指示通りに動くことができない。「サイケこうせん」の被弾が多くなり、ビビヨンよりも速いペースでダメージを受けていく。

状況を打開するため、エレナが新たな指示を出す。

「リザードン、「えんまく」よ！」

エレナの指示で、リザードンは「えんまく」を発動し、自分の周りに煙幕をばらまいて視界を悪くした。

リザードンは、ばらまいた煙の後ろに隠れながら「エアスラッシュ」を放ち続ける。

グレイはビビヨンに声をかける。

「どうなんだ、ビビ？ 相手は見えるのか？」

グレイの問いに対し、ビビヨンは『余裕ですぜ隊長』と言いたげな視線とドヤ顔を返してきた。

ビビヨンのもつ複眼ふくがんの能力は非常に高く、ビビヨンの視界は煙に隠れたリザードンの姿を捉えていた。ビビヨンは先ほどと変わらず「サイケこうせん」を煙に隠れるリザードンに放ち続ける。

「そうだビビ、相手に近づいたらどうだ？ お前も煙の中に入ってこいよ」

グレイが面白そうにビビヨンにそう声をかけた。

ビビヨンはグレイのアイデアを受け、リザードンに近づき、煙に隠れた。

これにより、ビビヨンとリザードンによる、煙が漂う空中での撃ち合いが始まった。

しかし、煙を透かして見えるビビヨンと煙に視界を奪われるリザードンでは、全く勝負にならない。さらに、ビビヨンが煙に隠れて

姿を消すことにより、エレナはリザードンに的確な指示を出せずにいた。

状況は圧倒的にビビオンが有利であった。リザードンが一方的にダメージを受けていく。

「くっ、リザードン！ 煙から離れて戦って！」

エレナが指示し、リザードンが煙の漂う宙域から脱出する。しかし、ビビオンはそのまま煙の宙域に居座って戦い続ける。

先ほど「えんまく」を使った直後のリザードンは、煙の後ろに隠れながら戦っていた。しかし、煙を透かして見えるビビオンは完全に煙の中を飛びながら戦っている。

エレナとリザードンは、煙の中を移動し続けるビビオンの位置が捉えられない。それは攻撃を当てられない事と同時に、ビビオンの攻撃がどこから発射されるか予測できない事も意味していた。

煙から離れたリザードンであったが、一方的にダメージを受けていく状況に変化はなかった。

「えんまく」で姿を隠して戦うというエレナの作戦は、結果としては悪手であり、ビビオンの要塞を築いただけであった。

「リザードン、回避に徹して！ 煙が晴れるまで耐えるのよ！」

リザードンは「エアスラッシュ」をやめて、回避に神経を集中させた。これにより被弾は少なくなったが、それでも一方的にダメージを受けていく状況には変わらない。

しばらく経ち、ビビオンが隠れる煙が晴れてきた頃、エレナは再びリザードンに攻撃指示を出した。

これにより、ビビオンとリザードンの遠距離攻撃の戦いが再開された。

しかし、この戦いは元々、麻痺していたリザードンが被弾が多く

不利であるという状況であり、それは先ほどと全く変わらなかった。
リザードンの方がやはり速いペースでダメージを受けていく」
「ダメね、リザードン戻って！ ジュカイン、行って！」

エレナは再びポケモンを入れ替えた。

現在の状況

グレイ側

ビビヨン「呼び方：ビビ」 (中ダメージ)

ギャラドス「呼び方：KK」 (無傷)

レパルダス「呼び方：レパ」 (無傷)

ハピナス「呼び方：姐さん」 (戦闘不能)

エレナ側

ジュカイン (無傷)

リザードン (大ダメージ、麻痺状態)

チルタリス (大ダメージ)

アブソル (無傷)

ポケモンの入れ替えを行ったエレナは、ジュカインを繰り出した。
草タイプで、みつりんポケモン。二足歩行する恐竜のような緑色

のポケモンである。草木の尻尾や、腕についている葉っぱが、草の属性を強調している。

先ほどまでリザードンのいた場所に現れたジュカインは、しばらく無抵抗にビビヨンの「サイケこうせん」を受けてしまうが、たちまち「リーフブレード」で草の剣を右手に生み出し、「サイケこうせん」を弾き跳ばした。

「ビビヨン、むしのさざめき！」

「ジュカイン、いつもと同じ！ 剣と銃で、まずは遠距離！」

それぞれのトレーナーの指示で、それぞれのポケモンは行動を始める。

ビビヨンは、音波で相手を攻撃する虫タイプの特殊攻撃技「むしのさざめき」を遠くのジュカインに放つ。この新たな技「むしのさざめき」は、以前にビビヨンが使っていた「むしのていこう」よりも威力が高い技である。

一方ジュカインは、「リーフブレード」で生み出した草の剣を右手に握り、「タネマシンガン」を発動して左手を大砲の形に変えた。ビビヨンの翅はねから強力な音波が放たれ、ジュカインの左手からタネの弾丸が連射された。

両者の技がぶつかり合うが、「タネマシンガン」の方が圧倒的に手数が上であり、「むしのさざめき」は一方向的に打ち消された。ビビヨンにタネの弾丸が次々に襲いかかる。

「ビビ、もっと頑張って動け！」

グレイが声を大きくして叫んだ。

ビビヨンは激しく動きながらグレイに『こりゃキツイですぜ隊長』と言いたげな視線を送ってくる。

ここでエレナが新たな指示を出す。

「ジュカイン！ 接近戦！」

ジュカインは左手でタネを連射しながら、右手の草の剣を構え、ビビヨンに向かって距離を詰める。

距離を詰められないようにビビヨンは後退しながら「むしのさぎめき」を放つが、ジュカインの「タネマシンガン」に大部分が打ち消さる。さらにエレナの的確な回避指示もあり、あっという間に距離が縮まる。

「今よ！ 斬撃！」

エレナの指示と同時にジュカインはジャンプし、空中にいるビビヨンを草の剣で斬りつけた。

タイプ相性的には、ビビヨンは草タイプに対して二重に耐性をもっているのだが、ジュカインの攻撃力の高さと、ビビヨンの元々の打たれ弱さのせいで、タイプ相性の有利さなどもはや消えていた。

「やべえ、ビビ！ 水の方に逃げろ！」

ジュカインが砂浜に着地している隙に、ビビヨンは湖の空中へと逃げた。

水上のビビヨンをジュカインは追わず、少し試合の流れが止まった。

ここで、エレナが 그레이 に声をかけてくる。

「 그레이 、さっきのリザードンとチルトリスは、アタシにとっては4番手と3番手なの！ そしてジュカインはアタシの2番手よ！

どう？ 格が違うでしょ？」

그레이 も言葉を返す。

「何番手だとか、格だとか、そんなの関係なく1体のポケモンとして、ちゃんと向き合った方がいいんじゃないか？」

「もちろん普段はそうしているわ。でも今は勝負中でしょ。強さを示す場では、強さをもつ者に価値があるの」

エレナの冷たい返答を聞いてグレイは思う。

（『強さを示す場では、強さをもつ者に価値がある』……？ つまり、ポケモンバトルは強さを示す場所って訳か？ もちろん正しい事なんだが……なんか「強さ」っていう基準に執着し過ぎてる感じだよな……強くなることにとらわれてるって感じだ）

ポケモンバトルとは、ポケモンの強さを示す場であると同時に、トレーナーとポケモンの絆を深める儀式でもある。

それを完全に忘れているエレナの目を覚まさせる。そのグレイの決意はますます固くなった。

「ビビ、攻撃開始！」

グレイが攻撃指示を出したことで、再び試合が動き出す。

ビビヨンが「むしのさざめき」を放ち、ジュカインが「タネマシンガン」を放つ。先ほどと同じく、直接ぶつかり合えば「タネマシンガン」の方が勝つが、ビビヨンは激しく動き周ることで様々な角度から攻撃し、ジュカインに少しずつ攻撃を当てていく。

その状況を見て、エレナが口を開く。

「アタシのジュカインはまだ本気じゃないわよ。ジュカイン、「こうそくいどう」！」

ジュカインは、自身の素早さを大幅に上昇させる技「こうそくいどう」を発動し、これまでとは比べ物にならない速さで動き始める。ジュカインは素早い動きでビビヨンの攻撃を避けながら、「タネマシンガン」を放つ。さらに、砂浜を素早く大きく移動し、ビビヨンと同じように角度をつけて攻撃してくる。

これにより、遠距離攻撃の戦いはビビヨンに絶望的な状況となった。

「ビビ、もうダメだ！ このままじゃ勝てん！ なんとか頑張って

近づいてくれ！　オレは何もアイデア無いから近づき方もお前に任せた！」

相変わらずのグダグダなグレイの指示に対し、ビビオンは『いつもの事だよね』と言いたげな視線を返した。

そんなグダグダなグレイの指示に、エレナが反応する。

「グレイ、そんな適当な指示でアタシの2番手に対抗できると思っているの？」

「大丈夫だ。オレたちは絆で通じ合っているからな」

冗談半分で言ったグレイに対し、エレナは何か険しい表情をするだけで言葉を返してはこなかった。

いつものエレナなら呆れ顔で何か言葉を返してくるだろうな、とグレイは思った。

ビビオンは、ジュカインに少しずつ近づく。それにより、ジュカインから受ける銃撃はますます激しくなる。

ビビオンが湖の空中から砂浜の空中に移動した瞬間、エレナが声を上げる。

「ジュカイン！　斬撃！」

「やべっ！　ビビ、下に逃げろ！」

ジュカインが突然、圧倒的な速さにビビオンがいる方向に走り出し、ジャンプして空中のビビオンに迫る。

ビビオンは、指示を放棄したと思われていたグレイの突然の指示復活に驚きながらも、グレイの指示に従い、下に移動した。

ビビオンが急に下に移動したことで、高く跳躍したジュカインの斬撃は空振りに終わった。

ビビオンは下から「むしのさざめき」を放ってジュカインに命をさせる。

「ジュカイン！ 銃撃！」

「ビビ、ジュカインの周りを滅茶苦茶に飛んで攻撃！ 悪い、頑張ってくれ」

ビビオンは 그레이 の意思を受け取り、『やってやるぜ隊長！』と言いたげな視線を 그레이 に送る。ビビオンは、ジュカインの周りをとにかく激しく動きながら「むしのさざめき」で攻撃する。

ビビオンには、 그레이 の「悪い、頑張ってくれ」という言葉に『お前が戦闘不能になるまで、できるだけ相手にダメージを与えてくれ』という非情な意思が込められている事を理解していた。

しかしビビオンは、その 그레이 の非情な意思に従う。全ては 그레이 のために。

ジュカインは周りを飛ぶビビオンに「リーフブレード」を放つが、ビビオンは意地でそれを避けて「むしのさざめき」を放つ。ジュカインは「タネマシガン」でそれを打ち消すが、その隙にビビオンはジュカインに密着して「むしのさざめき」をねじ込んだ。

ジュカインが慌てて「リーフブレード」を放つが、今度はビビオンは一切回避せずに「むしのさざめき」を撃ち続けて少しでもジュカインにダメージを与えようとする。

ジュカインの「リーフブレード」が数回ビビオンに直撃し、ついにビビオンは力尽きた。

그레이 は、戦闘不能になったビビオンをモンスターボールに戻しながら、声をかける。

「よくやった、ビビ。よく頑張ってジュカインにダメージを与えてくれたよ」

言い終わり、 그레이 は1つ後悔の念が生じる。

（そう言えばビビは、チルタリスもリザードンも退かせたんだよね

……指示が暇な時にちゃんと褒めてやればよかったな……遅いかも知れんが、後で褒めよう」

現在の状況

グレイ側

レパルダス「呼び方：レパ」
(無傷)

ギャラドス「呼び方：KK」
(無傷)

ハピナス「呼び方：姐さん」
(戦闘不能)

ビビヨン「呼び方：ビビ」
(戦闘不能)

エレナ側

ジュカイン (中ダメージ)

リザードン (大ダメージ、麻痺状態)

チルタリス (大ダメージ)

アブソル (無傷)

「相手は元々弱っていたわ。弱った相手にとどめを刺すだけで、これだけダメージを受けてしまうとは、まだまだ課題が多そうね」

エレナはジュカインにそう話しかけた。

そのエレナの言葉を聞いたグレイは、ため息をつきながらエレナ

に語りかける。

「何だよその『ジュカインは勝って当たり前』みたいな態度は？
ジュカインだって頑張ってビビヨンを倒したんだろ？ 少しは労ってやれよ……」

グレイは続けて言う。

「だいたいエレナ、オレの姐さんを倒したチルタリスに一言も声をかけてないだろ！ 声をかける時間が無かった訳ないよな！？ エレナは、ポケモンへの感謝が足りないんじゃないか！？」

グレイの言葉を聞いたエレナは、一瞬はっとした表情を見せた。

「……そうね、グレイの言うとおり。アタシにはポケモンへの感謝が足りなかったわ」

エレナはジュカインに向かい、語りかける。

「ジュカインごめんなさい……アナタが強いから、アナタは勝って当然だなんて思っていたわ。アナタの頑張りへの感謝が足りなかった……でも、アタシはもっと強くなりたいの。今のままでは、アタシが目指す所には全然届かないの。それは分かって欲しいわ」

ポケモンへ感謝の気持ちを述べたものの、それでもまだ多くを望むエレナ。そんなエレナを見ながら、グレイは思う。

（ダメだな、エレナは強くなることにとらわれている。強さを求める奴に、弱者が何を言っても届かない……エレナの目を覚まさせるには、オレは強者になるしかない。つまり……）

考えながら、グレイは不敵に笑う。

（つまり、まずはバトルでエレナをボッコボコにしなければ、何も始まらないって事だな）

「じゃあ、バトルを再開するぞ？」

「いつでもいいわよ」

グレイは念のため、3体目のポケモンを出す前にエレナに声をかけた。

グレイは3体目のポケモンであるレパルダスを出しながら素早く指示する。

「レパ！　「ねこだまし」！　「すなかけ」！　「みだれひっかき」！」

悪タイプで、れいこくポケモン。紫色で豹ひょうのような引き締まった体に、猫のような少し可愛い頭をもった外見。

そんなレパルダスは、一瞬でジュカインに近づき、「ねこだまし」で攻撃した。

突然の「ねこだまし」に驚いて動けないジュカインに、レパルダスは相手の命中率を下げる技「すなかけ」を放ち、砂でジュカインの目をつぶした。

突然に視界が奪われたことと、砂が目に入った痛みでパニックになるジュカインに対し、レパルダスは超高威力の連撃技「みだれひっかき」を放ち、ジュカインの体力を一気に削る。

パニックのジュカインに対し、エレナが冷静に指示する。

「ジュカイン、落ち着いて！　まず前進！　振り向きながら斬撃！

3歩後退！　今よ、銃撃！　少し右を撃って！」

エレナの指示で、ジュカインはうまくレパルダスと距離をとり、さらにレパルダスに攻撃することに成功した。

ジュカインが「タネマシガン」を連射し、レパルダスを牽制する。しかし、目をつぶされて視界が定まらないジュカインは銃撃に隙が生まれる。レパルダスはその隙を見逃さない。

レパルダスは多少の被弾は気にせず、一気にジュカインに近づき、後ろに回り込んで首に噛みつき、「みだれひっかき」をくらわせる。

ジュカインは素早く振り払い、草の剣をレパルダスに振るった。レパルダスをとらえた「リーフブレード」は凄まじい威力であり、

レパルダスは大きなダメージを受けて吹っ飛んだ。

ジュカインはすかさずタネの弾丸を連射して追撃する。放たれた

「タネマシガン」もまた、凄まじい威力であった。

砂浜に転がったレパルダスは、素早く体勢を立て直し、ジュカインから大きく距離をとった。

「くっ、ここまで追い詰められるなんて！ ジュカイン、気を引き締めて！」

エレナがそう声をかけた。

ジュカインの「リーフブレード」と「タネマシガン」の威力が急に上がったのは、ピンチの時に草タイプの技の威力が上がる、ジュカインの特性「しんりよく」が発動したからであり、それは同時にジュカインのピンチを意味する事でもあった。

ジュカインは凄まじい威力の「タネマシガン」を連射してレパルダスを追い詰める。

「レパ！ まずは無理せず逃げろ！」

そう指示したグレイであったが、レパルダスはグレイの指示に反してジュカインに近づき始めた。

ジュカインは先ほど受けた「すなかけ」の影響で狙いがずれる。

レパルダスはその隙について一気に距離を詰める。

「いいぞ、レパ！ 「みだれひっかき」！」

「ジュカイン、一旦後退！」

それぞれのトレーナーが、それぞれの指示を出した。

しかし、レパルダスはグレイの指示を無視し、「みだれひっかき」ではなく、「おいうち」を繰り出した。

悪タイプの攻撃技である「おいうち」は、逃げる体勢の相手に攻撃する時に特に威力が高くなるという特徴がある。

エレナの指示通りに逃げる体勢をとるジュカインに、レパルダス

の「おいうち」がクリーンヒットした。

「よし逃がすな、レパ！　「おいうち」」

「ジュカイン、斬撃よ！」

エレナは、逃げれば「おいうち」でさらに不利になると判断し、ジュカインに攻撃命令を出した。

しかし、レパルダスはまたもやグレイの指示を無視し、今度は「みだれひっかき」を繰り出した。目がつぶれているジュカインの攻撃の隙をつき、レパルダスは超高威力の連撃技をジュカインにくらわせた。

ジュカインは体力が尽きて倒れた。

「レパ、よくやった！　頑張ったな！」

グレイはレパルダスに労いの言葉をかけた。

グレイには、自分の指示が無視された事への怒りは無い。レパルダスが相手を騙すためにあえて指示と違う行動をとっている事はグレイは知っている。グレイはレパルダスのその行動を不快とは思わず、受け入れていた。

現在の状況

グレイ側

レパルダス「呼び方：レパ」　（中ダメージ）

ギャラドス「呼び方：KK」　（無傷）

ハピナス「呼び方：姐さん」　（戦闘不能）

ビビヨン「呼び方：ビビ」 （戦闘不能）

エレナ側

リザードン （大ダメージ、麻痺状態）

チルタリス （大ダメージ）

アブソル （無傷）

ジュカイン （戦闘不能）

「まさか、ジュカインがやられるなんて……」

エレナは啞然とした様子でつぶやいた。

それを聞いた 그레이 は、エレナに話しかける。

「元々ジュカインはダメージを受けてた。驚くような結果じゃない
だろ？ レパにそれなりにダメージを与えてから倒れた。それだけ
の話だろ？」

「それなりのダメージではダメなのよ！ レパルダスを倒すぐらい
でなければ！」

エレナのその言葉を聞いた 그레이 は、聞き捨てならないという様
子で強めの言葉でエレナに話しかける。

「おいおい、それはオレのレパルダスが弱いって言いたいのか？
さっきから思ってたんだが、この勝負、エレナはオレに圧勝したい
って思ってるだろ！？ 『 그레이 程度に苦戦するようではダメだ』
っていう考えが伝わってくるんだよ！」

그레이 の言葉に対し、凶星をつかれたエレナは黙ったままであっ
た。

「エレナがオレを格下と思ってるなら……まずはその認識を改めてやるよ……！」

グレイは静かにそう言った。

エレナはリザードンを繰り出した。

「リザードン、＼はじけるほのお＼！ そのまま水の方に逃げて！」
エレナの指示により、リザードンは＼はじけるほのお＼を発動する。

ピンチの時に炎技の威力が上がる特性「もうか」により、リザードンの放った＼はじけるほのお＼は凄まじい威力となってレパルダスに襲いかかった。

迫りくる炎を避けたレパルダスであったが、放たれた炎は砂浜に着弾した瞬間、四方八方に激しく弾け飛んだ。

レパルダスが飛び散る炎に手間取っている間に、リザードンは水上に飛んで移動した。

エレナが指示を出す。

「リザードン、そのまま＼はじけるほのお＼で攻撃し続けて！」
砂浜に立つレパルダスに向けて、リザードンは一方的に攻撃を放つ。

しかし、リザードンは麻痺している影響で、一瞬動きが止まった。レパルダスはその隙を見逃さず、一気に走り出して跳躍し、リザードンに向かって飛びかかる。リザードンの翼に噛みつきながら、レパルダスは＼みだれひっかき＼で攻撃した。

リザードンは力尽きて飛ぶ力を失い、レパルダスと共に湖の中に落ちた。

「リザードン！」

エレナが叫んだ。

一瞬後、力尽きたリザードンを背中に乗せながら犬掻きで泳ぐレパルダスの姿が見えた。

レパルダスは、多少強引にリザードンの体を引きずり、駆け寄ってきたエレナの前に差し出した。

「リザードン！ ああ、良かった……尻尾の炎はちゃんと燃えているわ……」

安堵した様子でリザードンを抱きしめるエレナを見て、 그레이は思う。

（さすがに、この状況で「もっと相手にダメージを与えられたでしょ、役立たずね」とか言う程にエレナがこじらせてなくて良かったぜ……）

リザードンを救助したレパルダスは、 그레이に『敵を助けるうち、イケメンやろ？』と言いたげな視線を送ってくる。

「ああ、レパは立派な奴だ。それに、よくリザードンを倒してくれたよ。ありがとな」

そう言いながら 그레이はレパルダスを撫でる。

ただし撫でながらも、悪戯好きなレパルダスに荷物の中を漁られないよう 그레이は決して油断はしない。

現在の状況

그레이側

レパルダス「呼び方：レパ」（中ダメージ）

ギャラドス「呼び方：KK」（無傷）

ハピナス「呼び方：姐さん」 （戦闘不能）
ビビヨン「呼び方：ビビ」 （戦闘不能）

エレナ側

チルタリス （大ダメージ）

アブソル （無傷）

ジュカイン （戦闘不能）

リザードン （戦闘不能）

「チルタリス、頼んだわ！」

エレナはそう言い、チルタリスを繰り出した。

「レパ、＼みだれひっかき＼！」

「チルタリス、＼りゅうのはどう＼よ！ そのまま水の上に移動」

先ほどのリザードンと同じく、エレナは水の上から一方的に攻撃する戦法をとった。

チルタリスは遠距離攻撃でレパルダスの進攻を防ぎながら水の上に移動した。

先ほどのリザードンとは違い、チルタリスは特性「しぜんかいふく」によって麻痺が治っており、レパルダスに隙を見せない。

「レパ、退け！ 砂浜の奥に移動しろ」

水際で相手の隙を伺っていたレパルダスは、グレイの指示に従って水際から離れ、砂浜の奥へと移動した。

しかし、チルタリスはそれに釣られて前進することは無く、変わらず水上から＼りゅうのはどう＼で遠距離攻撃してくる。

両者の距離が離れたことで、チルタリスの攻撃はレパルダスに到達しにくくなった。

「レパ、お前はよくやってくれた。少し休んでくれ」

グレイはそう言い、ポケモンの入れ替えを行った。

今までレパルダスがいた場所に、新たにギャラドスが現れた。

水タイプかつ飛行タイプの、きょうあくポケモン。長い胴体をもつ青い龍のような外見をしながらも、体の一部にヒレがあったりして魚の特徴が残っているのが印象的なポケモンである。

「KK！ 突撃！」

ギャラドスは、チルタリスが「りゅうのはどう」を放ってくることもお構いなく、一直線に水上にいるチルタリスに向かって飛行して近づく。

ギャラドスは、水をまとして相手に突撃する水タイプの攻撃技「たきのぼり」を発動し、チルタリスの「りゅうのはどう」を一方的に打ち消し、チルタリスを吹っ飛ばした。

吹っ飛ばされながらも、チルタリスは「りゅうのはどう」でギャラドスに抵抗する。

しかしギャラドスは、長い胴体でチルタリスの首にまきつき、締め上げ、そのまま下の湖の中にチルタリスを引きずり込もうとする。

「みだれづき」で抵抗するチルタリスであったが、ギャラドスはチルタリスのフワフワな翼に噛みつき、引き千切る程の勢いで下方向に全力で引っ張る。

翼を封じられたチルタリスは、なす術なく水中に引きずり込まれた。

進化する前は魚のポケモンであったギャラドスは水中も自由に動ける。元々弱っていたチルタリスは、水中に引きずり込まれた後はギャラドスに一切抵抗できない。

突如、湖に巨大な水柱が発生した。ギャラドスがチルタリスを、
「たきのぼり」で天高く突き上げた時に発生したものである。

とどめ、と言わんばかりにギャラドスは尻尾でチルタリスを叩き
付け、チルタリスを砂浜に墜落させた。

チルタリスは戦闘不能となっていた。

現在の状況

グレイ側

ギャラドス「呼び方：KK」 (小ダメージ)

レパルダス「呼び方：レパ」 (中ダメージ)

ハピナス「呼び方：姐さん」 (戦闘不能)

ビビヨン「呼び方：ビビ」 (戦闘不能)

エレナ側

アブソル (無傷)

ジュカイン (戦闘不能)

リザードン (戦闘不能)

チルタリス (戦闘不能)

「チルタリス、このままでは、まだアタシの目指す場所には届かな

いわ。でも、アナタだって頑張っているのよね。アタシのために戦ってくれてありがとう」

エレナは、チルタリスをモンスターボールに戻しながらそう言った。

さらにエレナは、グレイに向かって話しかける。

「アタシ最近、もっと強くなるために鍛錬を厳しくしていたの……その中で、ポケモンがアタシのために戦ってくれる事が当たり前じゃないって事を忘れてしまっていたわ。グレイ、その事をアタシに思い出させてくれて、本当にありがとう」

エレナの言葉を聞いたグレイは思う。

（確かにポケモンに対して、労いと感謝はしてるが……それでもまだ何か強くなる事にとらわれているな……）

グレイは、エレナに語りかける。

「エレナ、お前が何を目指していて、どこを見ているのか知らないが、これだけは言っておく……今、目の前のバトルに向き合わない限り、KK……オレのギャラドスには絶対に勝てないぞ」

そしてグレイは、自分がやるべき事を確認する。

（エレナが、強くなることにとらわれ過ぎている事に自分で気づけるかどうか、それは本人の問題だ……今のオレにできることは、このバトルを通してエレナに語りかけること、これだけだ）

20話目 湖岸の戦場（後）

『何番手だとか、格だとか、そんなの関係なく1体のポケモンとして、ちゃんと向き合った方がいいんじゃないか？』

『エレナは、ポケモンへの感謝が足りないんじゃないか！？』

『エレナ、お前が何を目指していて、どこを見ているのか知らないが、これだけは言っておく……今、目の前のバトルに向き合わない限り、KK……オレのギャラドスには絶対に勝てないぞ』

（アタシは、自分のポケモンに向き合わず、強さだけで判断している……？ アタシは、ポケモンへの感謝を忘れて……？ アタシは、目の前の戦いから目を背けている……？）

エレナは、このバトルでグレイから言われた事について考えていた。

（確かに、自分のポケモンに感謝することは忘れてしまっていた……それは反省すべき点だと思うし、それに気づかせてくれたグレイには感謝しているわ）

グレイに言われた事を一部は認めながらも、エレナは心の中で反論する。

（気楽に旅するグレイとは違って、アタシは一流のポケモントレーナーを目指しているのだから、ある程度は強さにこだわっているのは確かな事よ！ でも、強さだけでポケモンの価値を決めているなんてことは無いわよ……！ それに、目の前のバトルだって真剣にやっているわ……！）

エレナとグレイはこれまでも何度か戦っているが、グレイは試合中に冗談や挑発の言葉を口にすることはあっても、説教めいた言葉をエレナに言うことは一度も無かった。

グレイがなぜ今日になって突然、エレナに向かって説教めいた言葉を送るようになったのか、その理由はエレナにも分かっていた。（アタシがシャルラに負けて、自分の考えの甘さに気づいたのが3週間前……最後にグレイと会ったのは、それよりも前……きつとグレイは、甘い考えを改めたアタシの変化に戸惑っているのよ……）エレナはこの3週間を振り返る。

以前よりもポケモンの鍛錬を厳しくした。自分自身のトレーナーとしての鍛錬も厳しくした。

それらの鍛錬では常に、シャルラという強敵を想定した。ポケモンの強さ、技、動き、戦術を考える時、それらがシャルラに通用するかどうかをまず最初に考えた。いくらポケモンを強く鍛えたとしても、それがシャルラに通用するものでなければ意味がない、そういう考えの元でやってきた。

（アタシのポケモンは3週間前より確実に強くなっている！アタシのやり方は間違ってるんじゃないわ！それにシャルラに勝つことを真剣に考えるなら、こんな所でグレイに負ける訳にはいかないの！）

エレナは、最後に残ったポケモンであり自身のエースでもあるアブソルの入ったモンスターボールを取り出す。

白い体毛に覆われた四足獣の外見で、顔の横には鋭い鎌の形をした角^{つの}が片方側だけ生えていて、尻尾も鋭い刃の形をしている。悪タ-ipで、わざわざポケモンのアブソルが姿を現した。

現在の状況

エレナ側

アブソル (無傷)

ジュカイン (戦闘不能)

リザードン (戦闘不能)

チルタリス (戦闘不能)

グレイ側

ギャラドス「呼び方：KK」 (小ダメージ)

レパルダス「呼び方：レパ」 (中ダメージ)

ハピナス「呼び方：姐さん」 (戦闘不能)

ビビヨン「呼び方：ビビ」 (戦闘不能)

エレナのアブソルと、グレイのギャラドスの戦いの火蓋が切られた。

「アブソル、"つるぎのまい"！」

「KK、"あまごい"！」

エレナはアブソルに"つるぎのまい"を指示した。

アブソルは即座に"つるぎのまい"を発動し、自分の攻撃力を大幅に上昇させた。

一方グレイは、ギャラドスに"あまごい"を指示した。

ギャラドスは何か不満そうな表情をしながら「あまごい」を発動した。辺りに急激に雲が発生して日差しを遮り、湖岸のバトルフィールド全体に局地的な雨が降り始めた。

「アブソル、"かげぶんしん"！ フォームA！」

「KK！ 技は"たきのぼり"を使い！ 後は好きにしろ！」

アブソルは"かげぶんしん"を発動し、自分の虚像を作り出して見かけ上は2体に分身した。見かけ上2体のアブソルは、互いに正反対の方向に走り出し、別々の方向からギャラドスを囲もうとする。対するギャラドスは、素早く片方のアブソルに狙いを付けて一直線に向かう。

何回か戦ったことがある2人は、お互いにどのような戦法で攻めてくるかが分かっている。

エレナは、 그레이のギャラドスがとにかく攻撃的で、GOサインが出されたら一直線にアブソルに向かってくることを知っており、その対策として"かげぶんしん"で惑わせることにしている。

一方 그레이は、過去に何度か2体に分身したアブソルの内のどちらが本物なのか、本物と偽物の特徴や法則を見つけようと努力したが全く無駄だった経験がある。その経験を踏まえて、偽物判別を完全に諦めてギャラドスの勘に任せることにしている。

ギャラドスは、水をまとして相手に突撃する水タイプの攻撃技"たきのぼり"を発動し、アブソルに全力で突っ込んだ。ギャラドスのまとう水は、周りの雨粒を全て吸収し、凄まじい水量となってアブソルを襲う。

しかし、狙いをつけたアブソルは虚像の偽物であり、ギャラドスの攻撃を受けた瞬間に消え失せた。

「今よ、アブソル！」

反対側にいる本物のアブソルは、念を実体化させた刃を飛ばすエ

スパークタイプの攻撃技の「サイコカッター」を発動した。アブソルの頭の刃から不思議な色の刃が次々に発射され、ギャラドスに襲いかかった。

ギャラドスは再びアブソルに向かって一直線に飛んだ。

「かげぶんしん」！フォームA！」

再びアブソルは2体に分身し、互いに正反対の走り出し、ギャラドスから見て右と左に分かれた。

ギャラドスは即座に左側のアブソルを追った。当然、当てずっぽうの勘である。

再びギャラドスが、周りの雨粒を吸収した凄まじい水量の「たきのぼり」でアブソルに迫る。

「アブソル！ 今！」

エレナがそう指示した瞬間、アブソルは頭の刃から「つじぎり」を繰り出し、尻尾の刃から「サイコカッター」を飛ばし、迫りくるギャラドスに対抗する。狙われた方が本物のアブソルだったのである。

アブソルの「つじぎり」と「サイコカッター」、ギャラドスの「たきのぼり」がぶつかり合い、相殺された。

（「つじぎり」と「サイコカッター」を同時に使っても引き分けに終わるなんて……！）

動揺するエレナだが、指示の口を休めることは無い。

「かげぶんしん」フォームA！」

突然の「たきのぼり」の消滅で攻撃を中断させられたギャラドスが一瞬動きを止めた隙に、アブソルは分身して再び互いに正反対の方向へ行く。

「すげえな！ なんだ今の！？」「つじぎり」と「サイコカッター」を同時に使ったのか！？」

グレイが驚いた様子でそう声をかけてきた。

（そうよね……アブソルが「つじぎり」と「サイコカッター」を同時に操れるのは、当たり前的事なんかじゃないのよね……感謝を忘れてるって、グレイに指摘されたばかりよね）

そう思ったエレナは、アブソルに声をかける。

「アブソル、2つの技、良い調子ね！ その調子でお願いね！」

どちらが偽物の分身か相手に悟られないために、アブソルの目を見て声をかけることはエレナにはできない。しかし一瞬、2体のアブソルが同時に自分に視線を送ってきたのを見たエレナは、自分の感謝と励ましがアブソルに伝わっていると確信した。

再びギャラドスがアブソルに迫る。

ギャラドスは「たきのぼり」でアブソルを攻撃したが、今度は偽物であった。

先ほどと同じく、ギャラドスが襲った偽物とは反対側にいるアブソルは「サイコカッター」でギャラドスを遠距離攻撃する。

木をまるで豆腐のように切断する程の威力をもつ「サイコカッター」が、次々にギャラドスにダメージを与える。

（ギャラドスが当たりを引いたら、「つじぎり」と「サイコカッター」で防ぐ。ギャラドスがハズレを引いたら「サイコカッター」で遠距離攻撃。このままダメージを与えていけば勝てるわ……「かげぶんしん」を一瞬で発動できるよう訓練した成果ね！）

エレナは、アブソルに課した厳しい鍛錬の成果が出ていると実感した。

（アタシはシャルラのエレザードを倒すのよ！ そう、グレイのギャラドスは通過点に過ぎない！ 負ける訳にはいかないの！）

その強い思いを抱きながら、エレナは指示を続ける。

再びギャラドスがアブソルに迫る。本物のアブソルが狙われているのを見たエレナは、本物の側が狙われた場合の対処の、「つじぎり」と「サイコカッター」での防御に意識を切り替え、指示のタイミングを見計らう。

ギャラドスは今までよりも高く飛びながらアブソルに迫り、自重の力をかりて空中から真下に向かってアブソルに落下しながら攻撃した。

「アブソル、今！」

エレナの指示で、ギャラドスとアブソルの技がお互いにぶつかり合い、相殺された。

しかし、高い場所から勢いをつけて攻撃した影響か、互いの技が相殺された後、ギャラドスはアブソルに急接近していた。

ギャラドスは、再び「かげぶんしん」で2体に分身しようとするアブソルに一瞬で近づき、アブソルの背中に自身の鋭い牙を食い込ませて噛みついた。

この状況でアブソルが「かげぶんしん」で虚像を生み出そうとも、ギャラドスの牙で捕えられているアブソルが本物で、ギャラドスの牙から逃れているアブソルが偽物であるのは自明の理である。

ギャラドスは素早く「たきのぼり」を発動し、アブソルを湖へと強く吹っ飛ばし、自身もアブソルを追って湖へ移動する。

「アブソル、「サイコカッター」！」

空中を吹っ飛ばすアブソルは、迫るギャラドスに「サイコカッター」を放って抵抗するが、ギャラドスはお構いなく一直線に迫る。

「アブソル、2つ同時……今！」

アブソルの「つじぎり」と「サイコカッター」と、ギャラドスの「たきのぼり」がぶつかり合って相殺された。

アブソルはそのまま湖の中に落下した。

ギャラドスも水中に潜り、アブソルに襲いかかる。

「アブソル！　「かげぶんしん」を使いながら、とにかく脱出して！」

アブソルは「かげぶんしん」で虚像を作り出すが、見せかけの2体の距離が近い。

ギャラドスは2体とも尻尾で1回薙ぎ払って本物を確認するや否や、アブソルに激しく攻撃を始める。

水中で自由に動けず、沈まないように犬掻きをしなければならず、さらに湖底に引きずり込もうとするギャラドスに抵抗しなければならぬアブソル。

対して、水中も空中も自由に移動でき、アブソルを立体的にさまざまな方向から好き勝手に攻撃できるギャラドス。

どちらが有利なのか、誰が見ても明らかであった。

「KK！　「こおりのキバ」！」

ギャラドスに対してほとんど指示しない 그레이 が、珍しく指示を出した。

ギャラドスは 그레이 の指示で、冷気をひめた牙で噛みつく氷タイプの攻撃技「こおりのキバ」を発動し、アブソルの背中を冷気を伴う牙で噛みついた。

アブソルを捕える冷気の牙は、その周囲の湖水を局部的だが一瞬で氷に変え、その氷でアブソルの背中を凍りつかせた。

さらにギャラドスは水中に潜り、アブソルの下に回り込もうとする。

「アブソル、「サイコカッター」で抵抗し続けて！　ギャラドスに対しては背中を向け続けて！　絶対に脚を凍らせてはダメよ！」

エレナの指示により、アブソルは自身の脚が凍結させられないよう守りながら抵抗し、湖底に引きずり込まれないように戦い続ける。

しばらく水中でもつれながら戦っていたアブソルとギャラドス。
しかし、抵抗するアブソルに業を煮やしたギャラドスは、「こおりのキバ」を止めて水中からアブソルの下に回り込み、上にいるアブソルに「たきのぼり」を繰り出した。

降り続ける雨と湖水を吸収し、ギャラドスは圧倒的な水量をまといながら凄まじい勢いでアブソルを突き上げた。

ギャラドスが繰り出した「たきのぼり」によって、湖に太い水柱が発生した。

水中で背中を凍結させられながら溺死と戦っていたアブソルは、水柱に激しく叩きつけられ、突如として空中へ放り出された。

この状況の変化をエレナは見逃さなかった。

「アブソル、「かげぶんしん」！」

空中に放り出されながらも、アブソルは「かげぶんしん」で見かけ上は2体に分身した。

「アブソル！　なんとかギャラドスにしがみついて！」

分身したアブソルの偽物を潰そうと、ギャラドスが2体のアブソルを尻尾でまとめて薙ぎ払おうとする。

アブソルは、自分を薙ぎ払おうとするギャラドスの尻尾に必死にしがみついた。

もしアブソルがギャラドスの尻尾を手放した場合の行先は、湖底に引きずり込もうとする水龍に襲われ溺れながら戦うという地獄の湖である。それを理解しているアブソルは、激しく振り払われようともギャラドスの尻尾に必死で食らいつく。

「ギャラドスを蹴って！　砂浜に跳んで！」

アブソルは、自身に巻きつこうとするギャラドスの胴体を蹴り、その反動で砂浜の方へ跳躍した。

「アブソル！　「つじぎり」だけ！」

跳んだアブソルを追いかけ、ギャラドスは「たきのぼり」で水をまともにアブソルに突撃した。

アブソルの「つじぎり」と、ギャラドスの「たきのぼり」がぶつかった。アブソルの攻撃は、ギャラドスの攻撃を打ち消すことはできず、攻撃を弱めるにとどまった。

相殺しきれなかったギャラドスの「たきのぼり」がアブソルに直撃した。ギャラドスの攻撃の勢いにより、アブソルは強く砂浜の方へ吹っ飛ばされた。

ダメージを受けたものの、アブソルはなんとか地獄の湖から砂浜へと脱出を果たした。

（ギャラドスに捕まったら、また水中に引きずり込まれてしまう……！ とにかくギャラドスに近づかれてはダメね！）

判断したエレナは即座に指示する。

「アブソル、「かげぶんしん」！ 水から離れながら分かれて！」
アブソルは、湖水と砂浜の境界線から斜めの角度に進むことで、ギャラドスから見て左右に分かれながら同時に湖からも離れる。

ギャラドスは、左側の斜めに逃げるアブソルを追い、「たきのぼり」で攻撃しようとする。

「アブソル、「つじぎり」だけ！ その後「かげぶんしん」フォームAのエスケープ！」

ギャラドスの攻撃とアブソルの攻撃がぶつかり合う。威力の強さではギャラドス側が勝ち、アブソルは吹っ飛ばされる。

アブソルは素早く態勢を立て直し、2体に分身して互いに正反対の方向へ進む。ただし今までは違い、ギャラドスを囲む動作はせずに互いに正反対方向に直進し続ける。

ギャラドスは適当に右に行くアブソルを追いかけ始めた。

エレナは、現在実行中の作戦を振り返る。

（ギャラドスに近づかれては終わり……！　だから、ギャラドスが本物を攻撃してきた時は技のぶつかり合いでわざと負けて、飛ばされて距離を離す……！　もし偽物を攻撃してきた場合は、正反対の遠くに行った本物のアブソルで遠距離攻撃……！）

しかし様子を見ていたエレナは、作戦が上手くいっていない事に気づく。

（ダメね……アブソルが相手に与えるダメージに対して、相手から受けるダメージの方が大きい……！）

逃げながら遠距離攻撃に徹し、正面の攻撃のぶつかり合いはあえて負ける。その作戦をとっているため、アブソルの「つじぎり」と「サイコカッター」を同時に操るという特技が生かせずにいた。

（グレイに負ける程度では……シャルラには勝てない！　絶対に勝つ！　アブソルには頑張ってもらえないわ！）

エレナはアブソルに新たな要求を出す。

「アブソル！　「サイコカッター」は、頭の刃と尻尾の刃の両方から同時に放って！」

「つじぎり」と「サイコカッター」を同時に操れるならば、「サイコカッター」を2つ分同時に操ることも可能。エレナはそう考えたのであった。

アブソルは、頭の刃と尻尾の刃で同時に念の刃を作り出そうとした。しかし尻尾で作った念が消えてしまい、発射された念の刃は1つだけであった。

さらに、2つ同時に操ろうとすることで念の刃を作り出す時間がいつもより増え、結果的にギャラドスが近づくまでに発射できた念の刃の数はいつもより少なくなってしまった。

エレナがアブソルに叫ぶ。

「アブソル！ なんとしても2つ同時に操って！ 今「サイコカッター」を2つ同時に操れないようでは、求める所には全然届かないでしょう！」

エレナの求める所とは、シャルラのエレザードに対抗する力を得る事である。

エレナの認識の中では、シャルラのエレザードは 그레이のギャラドスよりも強い。ならば求める所に到達するには、ギャラドスを余裕で倒せることが望ましい。ましてやギャラドスに勝つことなど最低限の条件である。

今「サイコカッター」を2つ同時に操る技能は、その最低限の条件を達成するために必要な力であり、これが達成できなければ、そもそも前提から崩れてしまうのである。

エレナの想いに応えるべく、アブソルは必死に「サイコカッター」を2つ同時に操ろうとするが、それでも上手くいかない。

そんなエレナとアブソルの様子を見た 그레이は、エレナに話しかけてくる。

「おいおい、ずいぶんと無茶な要求してるな！ さっき「つじぎり」と「サイコカッター」を同時に操ってたのは凄いが、さすがに同じ技を2倍の量で放つのは無理だろ！ そんな事できるなら、とっくにKKの「たきのぼり」だって威力が2倍になってるぜ？」

自分のギャラドスに指示しないので口が暇な 그레이は、さらに余計な言葉をエレナに投げつける。

「エレナは現実逃避してるんだよ」

（なんですって……！？）

그레이の言葉に、エレナはムツとした表情を浮かべながら言葉を発する。

「アタシのどこが現実逃避しているのよ!？」
「サイコカッター」を2つ同時に操れなんて要求してる事がそう
だろ!　なんか高い目標を目指してるのか知らんが、現状で不可能
な事に期待して他に何も考えないなんて、現実逃避以外の何物でも
ないだろ!」

『エレナ、お前が何を目指していて、どこを見ているのか知らない
が、これだけは言っておく……今、目の前のバトルに向き合わない
限り、KK……オレのギャラドスには絶対に勝てないぞ』

この戦いが始まる前に 그레이 に言われた言葉がエレナの脳裏に浮
かんだ。

今エレナが直面している状況、 그레이 の言葉、この2つが結び合
わさった瞬間、頭の回転が速いエレナは 그레이 の言葉を一瞬で消化
した。

(그레이 が言いたかった事は……そういう事だったのね)

高い目標をもつこと、これは悪いことではない。

高い目標を設定すれば、その通過点に低い目標が自然に発生する
こともあるだろう。

しかし高い目標に執着することで、低い目標を達成できていない
自分から目を逸らしてしまうのは間違いである。

低い目標を1個ずつ達成することの積み重ねによって、高い目標

がクリアされるのである。

シャルラのエレザードを倒すことを目標にしたからと言って、グレイのギャラドスが自然と倒せるようになる訳ではない。

グレイのギャラドスを倒すという試練を全力で越えてこそ、その先にシャルラのエレザードの打倒が見えてくるのである。

エレナはその事に気がついた。

（もし「サイコカッター」を2つ同時に操ることができれば、目標に近づいている証拠になる。でも、現状はそれに届いていない。今アタシがやるべき事は、ないものねだりをする事ではなく、今をどう乗り切るか現実的に考える事よ！）

頭を切り替えたエレナは素早く新たな戦法を考え始めた。

（今やるべき事。湖に引きずり込まれないよう注意すること、なるべく被ダメージを減らして与ダメージを増やすこと。この2つ。それを踏まえた作戦は……）

わずか3秒で結論を出したエレナはアブソルに指示し始める。

「アブソル、接近戦を展開するわ。動き方はアタシが指示する。厳しい戦いになると思うけど頑張りましょう！」

エレナはアブソルに指示を開始し、アブソルはエレナから届く指示を忠実に実行する。

「たきのぼり」で圧倒的な水をまよって迫りくるギャラドスに対し、アブソルは「つじぎり」と「サイコカッター」で突撃を防ぐ。

勢いが止まったギャラドスの懷にアブソルが入り込む。

アブソルは再び「つじぎり」と「サイコカッター」を繰り返そうとする。また、技が発動するまでの僅かな時間も、頭と尻尾の刃や脚の爪で直接切り裂いたり、噛みついたりして積極的に攻撃をしかけていく。

対するギャラドスも「たきのぼり」が発動するまでの時間で、鋭い牙で噛みついたり、太い尻尾を叩きついたりと激しく応戦する。殴られる前に殴るべし、攻撃が最大の防御という法則が成立する展開の中、アブソルにダメージを受けさせない事は不可能である。この激しい肉弾戦が展開する中で、エレナは相手の攻撃を全て防ぐのではなく、防ぐべき攻撃を取捨選択し、効率良くダメージを与えられるようにアブソルに動きを指示していた。

さらにエレナは、アブソルとギャラドスの位置にも気をつけて指示していた。

アブソルが湖に引きずり込まれないように、なるべく内陸で戦いが展開されるように仕向けていた。

また、ギャラドスの激しい攻撃によって湖に押し出されないように、アブソルがギャラドスよりも内陸側に位置する状態になるように動きを指示していた。

陸上でも互角の戦いである今の状況では、アブソルが湖に引きずり込まれる事はアブソルの敗北とほぼ同じ意味であった。

激しい展開が続き、アブソルとギャラドスは両者とも大きく体力が削られていた。

そんな中、ギャラドスがアブソルに激しく噛みつき、そのまま宙に放り投げる場面が訪れた。

この状況にエレナは焦る。

（まずい！ アブソルが宙を舞っている間に陸側をとられたわ！）さらに、ギャラドスは「たきのぼり」を発動しようとしていた。

このまま空中のアブソルが「たきのぼり」を受ければ、湖に吹っ飛んでしまう状況である。エレナは急いで言葉を発する。

「同時技は防御に使って！」

アブソルは「つじぎり」と「サイコカッター」を、横から迫るギヤラドスに向けて放った。

しかし、ギヤラドスは横からアブソルに攻撃することではなく、アブソルの上に回り込んだ。結果的にアブソルの2つの技は空振りに終わった。

アブソルの上に回り込んだギヤラドスは、上から「たきのぼり」で突撃した。一瞬前に技を放ってしまったアブソルにはそれを防ぐ手段がない。せめてもの抵抗で頭と尻尾の刃を向けるがギヤラドスは動じない。^{どう}

ギヤラドスの「たきのぼり」が上から直撃し、アブソルは激しく砂浜に叩きつけられた後大きくバウンドして再び宙を舞う。

ギヤラドスは空中のアブソルに素早く巻きつき、「こおりのキバ」で攻撃しながらアブソルを胴体から牙に持ち替え、砂浜に点在する固い岩に向かってアブソルを叩きつけた。アブソルが叩きつけられた岩は砕け散って粉々になった。

「攻撃してから右に移動！」

指示を続けるエレナだが、アブソルの動きがいつもより鈍い。エレナの指示を即座に実行できなかったアブソルは再びギヤラドスに捕まってしまう。

（！　しまった！）

エレナはアブソルの動きが鈍くなった理由に気がついた。

アブソルはギヤラドスの「こおりのキバ」を受けた際に、1本の脚が凍らされていたのである。

エレナが原因に気がついた時にはもう遅かった。アブソルはギヤラドスに捕まり、湖の方へ運ばれ、湖に放り投げられた。

「アブソル！　これ以上脚を凍らされてはダメよ！　ギヤラドスに

背中を向けながら「サイコカッター」で攻撃し続けて！」

そう指示したエレナだが、ギャラドスはアブソルが水中に落下したのと同じタイミングでアブソルに巻きついた。

もはやアブソルに逃げ場は無い。そう判断したエレナは賭けにでる。

「アブソル！ 全力で攻撃！ ここで倒しきるしかない！」

アブソルは、頭の刃で「つじぎり」、尻尾の刃で「サイコカッター」を繰り出し、脚の爪でひっかき、噛みついて、体力が減っているギャラドスを全力で攻撃する。

ギャラドスは抵抗するアブソルを激しく締め上げ、さらに「こおりのキバ」の冷気を伴う牙でアブソルの首に噛みついた。

アブソルの喉と首に、ギャラドスの鋭い牙が深く食い込み、さらに周りの湖水が凍り付いてアブソルの首回りを凍結していく。

その状態でギャラドスはアブソルの頭を水中に沈めた。首が凍り付いたアブソルは水中から頭を上げることができない。

酸素を求めて激しく抵抗を続けるアブソルに対し、ギャラドスはアブソルの前脚に「こおりのキバ」をくらわせた。湖水が氷に変化してアブソルの前脚を覆う。

ついにギャラドスはアブソルを湖底に引きずり込み始めた。首と前脚が凍り付いたアブソルはそれに抵抗することができない。

エレナが悲痛な叫びをあげた時、両者の姿は砂浜の2人のトレーナーからは見えなくなっていた。

結果

エレナ側

アブソル (戦闘不能)

ジュカイン (戦闘不能)

リザードン (戦闘不能)

チルタリス (戦闘不能)

グレイ側

ギャラドス「呼び方：KK」 (大ダメージ)

レパルダス「呼び方：レパ」 (中ダメージ)

ハピナス「呼び方：姐さん」 (戦闘不能)

ビビヨン「呼び方：ビビ」 (戦闘不能)

バトル後にポケモンセンターに戻り、ポケモンの体力を回復させたエレナとグレイは、ポケモンセンターの休憩所にいた。

椅子に座り、テーブル越しに向き合う2人。語る少女と聞く少年の雰囲気は真剣なものであった。

「アタシね、焦っていたのよ。自分がポケモントレーナーとして未

熟な事にね。そのせいで色んなことを見失って……ポケモンへの感謝も忘れて……ポケモンの小さな成長に喜ぶことができなくなって……」

語るエレナの雰囲気は暗く、2人の会話はなんとなく重い空気が漂っていた。

「でも……アタシは強いポケモントレーナーになりたいの！ ポケモンに感謝することは大切なこと、小さな成長を喜ぶことも大切なこと。それは分かっているわ。でも……強くなりたいという想いは変わらないのよ！」

エレナは 그레이の目を真剣に見ながら 그레이に問いかける。

「ねえ 그레이……どうしたら、ポケモンへの優しさと、ポケモンの強さを両立できるの？ アタシはどうしたらいいの……？」

エレナの真剣な雰囲気に 그레이は完全に吞まれていた。

그레이はエレナの目から視線を逸らしながら何とか言葉を返す。

「な、何でそんなこと……オレに……聞くんだよ……？」

「アナタは一流のポケモントレーナーを目指している訳でもないのに……！ 厳しい鍛錬をポケモンに課している訳でもないのに……！」

そんなにも強いじゃない……！ アナタは答えを知っているのでしょう……！……？」

僅かに嫉妬を含むエレナの真剣な視線に耐えられなくなった 그레이は、自分のポケモンに助けを求めるべくモンスターボールを取り出した。

그레이の横にハピナスが現れた。

「エレナ、とりあえず姐さん……オレのハピナスを撫でて落ち着いてみるよ……」

エレナは納得のいかない表情を浮かべながらも、그레이の言葉通りにハピナスを撫でた。

（なに……これ……！　　すごく……幸せな気分……ね……）

ハピナスの不思議な癒しの力が、フワフワな体毛を通じてエレナに伝わっていく。ハピナスを撫でる度にエレナは幸福感に包まれる。

ハピナスのおかげで場が柔和な雰囲気にゅうわに包まれたところ、 그레이が口を開く。

「強くなる方法だけどな……答えなんて、オレだって知らないぜ。正解なんて人それぞれだと思うしな」

「そんな事は分かっているわ。アタシが聞きたいのは、アナタがどう考えているか。アナタにとって正解は何なのかを聞きたいの」

ハピナスを撫でながら問いかけるエレナ。その視線が真剣であることは変わらないが、先と比べてエレナの視線は少し穏やかなものであった。

「オレは、自分のポケモンに向き合って、自分のポケモンを理解することが1番大事だと思ってる」

「自分のポケモンを理解すること？」

「そうだ。それに、自分のポケモンのことを理解すれば、強さを引き出す方法も分かるかもしれない」

「アナタはその方法で強くなれたって言うのね。……でも、そんなに簡単にポケモンのことを理解できるのかしら？　ポケモンと向き合っても理解できなかった場合はどうすればいいの？」

「そんな事オレに言われてもな……答えなんてオレだって分からないし……オレが強くなったのだって偶然というかKKのせいというか……」

그레이の更なる返答を期待するエレナと、エレナの期待する答えを用意できなくて困った顔で悩む 그레이。

しかし、 그레이は何か思いついたといった表情を浮かべ、再び口

を開く。

「オレが1番大事だと思うことは、自分のポケモンを理解する努力を続けること！ これだな！ 確かに、そんな簡単に自分のポケモンのことが分かれば苦労しない。だから努力を続けるんだよ」

グレイは自分を例にして語りつづける。

「オレだって、自分のギャラドスのことが理解できなくて困ってる。戦闘狂で暴れるのが好きとか、そういう表面的なことは分かる。でも、なんで戦いが好きなのか、オレの事をどう思ってるのか、アイツの心は全く読めない。それでもオレは理解しようと努力してる……今のところ努力は報われてないけどな……」

グレイは、ため息をついているエレナを見て、少し複雑な表情をしながらエレナに問いかける。

「オレの話は的外れだったか？」

「ああ違うの。ゴメンなさい。アナタの話に呆れていたのではなくて、自分の愚かさを嘆いていたのよ……。自分のポケモンを理解する努力を続けること、こんな基本的なことを忘れていた自分が情けなくてしょうがないわ……」

エレナはハピナスを撫でるのを止め、自分の手を組みながら語り出す。

「アタシだって最初、研究所でポケモンを貰って旅立った頃は、ポケモンのことを理解する努力をしていたわ。いえ……前にアナタと会った時まではそうだった。でも……ちょっとね、自分が未熟だと痛感させられる出来事があったね……強くなるにはどうしたらいいか、そのことで頭がいっぱいになって……」

エレナは語りながら大きくため息をついた。

「ため息をつくとき幸せが逃げやすいな」

「……今、真剣に話している途中なんだけど！」

「すみません……」

威圧されて心が傷ついたグレイを見て、ハピナスがグレイに寄ってくる。グレイはすかさずハピナスを撫でて心を癒した。

エレナは語り続ける。

「それでね、未熟な自分に焦って……強くなる方法を考える内に、ポケモンと向き合うことを忘れて……独りよがりな考えになって……それで、こうなったのよ……」

エレナはグレイを見ながら言葉を続ける。

「今日、アナタに負けてよかったわ。ポケモンのことを理解する努力をして、それで強くなれることを証明してくれてありがとう。手本を見せてくれてありがとう」

「おう、悩みが解決してよかったな」

2人の会話はそこでいったん途切れた。

すこし間をおいてから、エレナがグレイに話しかける。

「グレイ。アタシ、あらためてアナタをライバルだと思うことにするわ」

「あらためて……？ 前からオレのことライバルだと思ってたのか？」

「あら、初めてバトルした時に宣言したと思うけど」

「んん……？ そうだったけ？ まあいいや。オレもエレナのことライバルだと思ってる。なんだよ、両想いだったのか！」

「そうね。グレイと両想いになれて、とても嬉しいわ」

「ちょっ！ 大声で両想いとか言うなよ！ 誤解されるだろ」

「アナタが先に言ったんでしょ！？」

「いや、それはそうだが……まさかエレナが冗談を即座に返してくるとは思わなくて……」

「アナタが冗談ばかり言うせいで耐性がついたのよ。まあ当然よね。アナタとは両想いだったんですもの！」

「ぐっ……！　そうだな、オレたち……両想い……だもんな！」
エレナが躊躇なく両想いという言葉を使うのに対し、グレイには若干の恥ずかしさがある。この言葉の戦いは不利だと判断したグレイが、話題を無理やりすり替える。

「まあ、あれだエレナ。いつでもバトルの挑戦は受けてやるよ。ライバルだからな」

しかし、その言葉にエレナが反応した。

「いつでも……？　じゃあ今からお願いしてもいいのかしら？」

「いやいや！　今からはさすがに冗談だろ！　もう少し期間を開けろよ！」

「決して冗談ではないわ。アナタに負けた悔しきで今夜は眠れないと思うわ。この悔しき、アナタに勝って今すぐ発散したいの」

「オレに勝てる前提かよ、おい！　さっき、『アナタに負けてよかったわ』とか言ってただろ？　自分の言葉に責任もてよ！」

「それは、アナタに負けたことで自分の過ちあやまに気づけて良かったという意味よ。負けることが嬉しいなんて意味では全くないわ」

「……姐さん、撫でるか？　心が落ち着くぜ？」

「遠慮しておくわ」

バトルをやるのかやらないのか揉め始めるエレナとグレイ。

彼らは、ポケモンを理解することで強さを引き出す方法を選んだ。それが正しい方法なのか、あるいは間違っている方法なのか、その答えを知る者はいない。

ポケモントレーナーにとって、ポケモンとは何なのか？

崇めるべき神のような存在、畏怖すべき恐怖の対象、そのような人間よりも上位の存在なのだろうか？

あるいは、心を通わせる友達、運命を共にする相棒、利害関係が一致しただけの他者。そのような対等な関係なのだろうか？

それとも、一方的に命令ができる道具や奴隷なのだろうか？

ポケモンとは何か？ その問いは、ポケモントレーナーにとって永遠の問いかけであり、その問いに対する絶対的な答えを知る者は誰もいない。

21 話目 古代の生命1

「害ポケモンの駆除か……」

グレイは掲示板に貼られた1枚の紙を見ながらそう呟いた。^{つぶや}

湖岸でエレナとバトルしてから約1週間。グレイが旅立ってから約5ヶ月が経過していた。

グレイは現在、ヒヨワタウンという小さな町のポケモンセンターにいる。その場所にある掲示板に、ポケモン駆除の補助員募集を伝えるお知らせが掲載してあったのだ。

そのお知らせには、普段は山奥に生息しているリングマというポケモンがヒヨワタウンの近くに出没している現状のことが書かれており、その下には募集要項が書いてある。

募集要項には、危険を伴う作業のためジムバッジを所持している者に募集を限ること、なるべく大きくて強そうなポケモンを連れていることが好ましいこと、が書かれていた。

（ジムバッジを集めるような奴が、こんな場所に来ると思えないな……応募すれば採用確実だろこれ）

ここヒヨワタウンは、2つの都市を結ぶ街道から山側へ分岐した道を進んだ先にある小さい町である。道はヒヨワタウンで行き止まりになっているため、ヒヨワタウンを経由してどこかに行くことはできない。

さらに、街道からは離れているため、都市を行き来する者がヒヨワタウンを休憩地点として利用することもできない。

これらの理由から、ヒョウタウンに訪れる者など目的なくブラブラ旅している者だけであり、実力あるトレーナーが訪れることなど滅多に無いだろうとグレイは思っていた。

町に1つしかないボロくて寂れたポケモンセンターが、この町に訪れるトレーナーが少ないことを物語っていた。

グレイはジムバッジを2個所持しており、さらにギャラドス（高さ6・5m）を手持ちに連れている。求められている要素は十分に満たしていると思ったグレイは、応募することに決めた。

△ i 6 2 9 6 | 3 8 3 1 1 ∇

（暇なトレーナーがオレ以外にもいるとはな……）

指定された時間、集合場所に到着したグレイは、駆除作業のリーダーの男の他に、自分よりも身長が低い少年がいるのを見てそう思った。

その少年は既に駆除作業用の制服を着ていたが、年齢的に考えて、仕事でこの町で野生ポケモン対策を行っているとは思えられず、旅のトレーナーであることは明らかであった。

「お前、歳いくつだ？」

自分よりも身長がひと回り小さい少年に、グレイは思わず聞いて

しまった。

聞かれた少年は、露骨に不快そうな表情を浮かべながらグレイに返答する。

「……14歳だ」

「はあ？ 14歳！？ 義務教育終わってないじゃねえか。家出したのか？ 不良なのか？ だいたいポケモン扱えるのかよ？」

グレイは続けざまにそう質問を口にした。

少年はますます顔をしかめ、不快であることを露骨にアピールしながら口を開く。

「……アンタ、ずいぶんと失礼な奴だな。歳より先に聞くことは無いか？ 俺がアンタの立場だったら、まず名前を聞くね。その後に、持っているジムバッジの数を聞く」

少年はグレイを睨みながら話を続ける。

「……俺もアンタもトレーナーだってことはお互い想像がつくことだ。それに、これからポケモン使って仕事するんだ。だったら、歳なんかよりもトレーナーとしての実力を先に確認するべきだろ……？ 違うか？」

その少年の態度と言葉に対して、グレイは言葉を返す。

「ああ！？ オレはお前の歳が気になったから聞いたんだよ！ 気になったこと聞いて何が悪いんだよ？ それにトレーナーの腕なら聞いただろ？ 『ポケモン扱えるのか』って」

「……なんだ、その人を見下した聞き方は？ この作業に採用されただから、ジムバッジを持ってるに決まっているだろ？ アンタは人を見下しすぎだ」

「見下してる！？ 悪いかよ？ オレはお前よりも歳上だ。むしろお前の方がオレに生意気な態度とってるんだよ！」

「……ポケモントレーナーは実力の世界だ。歳は関係ない」

「勝手に決めんなよ」

最初の接触が悪かったのか、それとも2人の相性が悪いのか、傍^{はため}目から見ればグレイと少年の関係は良好とは言えないものであった。

2人の雇い主である駆除作業のリーダーは、2人が言い争うのを見て見ぬフリをしている。仕事さえやってくれば良いという態度である。

リングマの駆除と言っても、リングマを戦闘不能にしたり殺処分にしたりという話ではない。あくまでも山奥に帰ってもらうことが目的であり、大きなポケモンを求めたのはリングマに町の戦力を見せつけるためである。

ちなみに、一般的なリングマは高さが1・8mと言われている。

グレイは、高さ6・5mのギャラドスを出して、どこにいるか分からないリングマに戦力をアピールする。

一方、少年は高さ9・2mのハガネールを出した。

ハガネール。てつへびポケモン。鋼タイプかつ地面タイプである。複数の鉱石が連結して大蛇となった外見は、鉄蛇の名に恥じない姿である。

（ハガネールか、実物を見るとでかいな……！　KKよりでかいポケモンなんて、めったに見ないからな）

グレイはハガネールを見ながらそう思った。

突如、ギャラドスがハガネールに向かって好戦的な態度をとり、今にも攻撃を始めそうな姿勢を見せた。ギャラドスは、ハガネールをバトル相手だと勘違いしたのである。

グレイは大慌てでギャラドスを制止した。

「……アンタ、ギャラドスの躰しつけがなってないな」

ギャラドスを制止するグレイの様子を見て、少年がそう言った。
グレイもすかさず言い返す。

「もしオレのギャラドスがハガネールを攻撃してたらそうかもな！
だが、オレはギャラドスをちゃんと止めた。躰しつけはなってるだろ！？」

「……本当に躰ができていれば、そもそも俺のハガネールをいきなり攻撃しようとはしないだろ？」

「それは躰とは関係ないな！ 個性だろ個性！ オレのギャラドスは戦うのが好きだから、いきなり攻撃しようとするのはしょうがない事だ」

「……体が大きいポケモンには好戦的なヤツが多い。その好戦的な性質をコントロールしてこそ、実力あるトレーナーだ。……実力が足りないのにギャラドスみたいな大きいポケモンを扱うからそうなるんだ」

「ああ！？ 遠回しに自分のこと実力が高いトレーナーってアピってんのか！？」

「……自分の実力の高さをアピールしたつもりはない。アンタの実力の低さを指摘しただけだ」

「ああ！？ ムカつくなお前！ ガキのくせに」

「……アンタだってそう変わらない歳だろ！？」

再び口論が始まる2人。

駆除作業のリーダーは、先と変わらず2人の言い争いは見て見ぬフリをする。

傍目はためから見ればグレイと少年の関係は悪く、険悪な雰囲気が漂っているように見える。しかし実のところグレイは、内心でこの少年との言い合いを楽しんでいた。

普段旅をしている中で、他のポケモントレーナーと喧嘩になることなどほとんど無い。遠慮なく言い争いができる相手を、グレイは密かに求めていたのである。

「明日も参加してくれると嬉しいけどね。まあそれは君たちの自由だ。今日の分のお金はちゃんと払うから安心してね」

駆除作業のリーダーが2人に向かってそう言いながら、バイト代の入った封筒を渡した。

時刻は夕方。夜間の作業は危険ということで、リングマの駆除作業は終了となった。

目撃情報がある地点は全て巡回したが、結局今日の作業中にリングマが出現することは無かった。

「じゃあ、今日はこれで。解散していいよ」
そう言い残し、駆除作業のリーダーは去っていった。

その場に残ったのは、グレイと少年だけである。

「……じゃあ、俺はこれで」

「ああ、ちょっと待てよ」

無愛想に挨拶して帰ろうとする少年をグレイは引き留める。

不機嫌そうな表情を浮かべながら少年が口を開く。

「……まだ何かあるのか？」

「お前、ジムバッジ持ってるトレーナーなんだろう？ バトルしてくれよ」

「……3個だ」

「あ？ 何が？」

「……俺が持っているジムバッジの数だ」

「ああ、そうなのか。オレは2個」

「……引き下がるつもりはないのか？」

「あ？　なんでだよ？　ジムバッジ持ってる数が違ったらバトルしちゃいけないのか？」

グレイの問いかけに対し、少年は小さくため息をついた。

少年は静かに口を開く。

「……アンタ、知らないのか？　ジムバッジの所持数は、2個と3個じゃあ実力に大きな隔たりがある。ジムバッジ3個持ってる奴はな、普通は道端でバトルなんかしないんだよ。一般人とは実力が違いすぎるからな」

「へえ、3個持っているとそんなに違うのか」

「……もしかしてアンタ、他の地方から来た人か？　このトラベル地方はな、トレーナーの数が多いせいで、他の地方に比べてジムバッジ取得のハードルが高いんだよ。トラベル地方のジムバッジを3個持ってる奴は、もはや一般トレーナーじゃないんだよ」

「いや、オレ普通にトラベル地方出身だけど。普通に知らなかったが」

「……アンタ、けっこう常識のない人だな」

「あ？　義務教育終わってねえのに旅してるお前の方が非常識だろ！？　ああ、そういえば1人で旅に出てもいい歳ってその地方によって違うって聞いたことあるな。お前こその他の地方から来たのかって」

「……俺もトラベル地方の出身だ」

「やっぱりお前も大概非常識……ああ、もう何でもいいからオレのギャラドスと遊んでくれよ。オレの名前はグレイ。よろしく。さっさとバトルできる場所探すぞ！」

話が進まないと思ったグレイは、強引にバトルする方向に話を

進める。

「……俺の名前はイザルだ」

グレイの強引な話に対し、イザルと名乗った少年は拒否の意思を示さなかった。

グレイは、イザルと共にヒヨタウンの町外れに移動した。

夕方であり、日が沈むまであまり時間が無いので、バトルはポケモン1対1で戦うことになった。

グレイは宣言通りにギャラドスを出した。

イザルは、先ほどのリングマ駆除作業で連れていたハガネールを繰り出した。

ギャラドス（高さ6・5m）とハガネール（高さ9・2m）が対峙する光景は、迫力あるものであった。

「じゃあ、準備はいいか？」

「……ああ大丈夫だ。アンタの指示を合図に始めていいぜ」

「ああ分かった……KK！ 突撃！」

「……“あなをほる”！」

グレイの合図で、ギャラドスがハガネールに一直線向かう。

一方ハガネールは、地中から相手を強襲する地面タイプの攻撃技

“あなをほる”を発動し、地面を勢いよく掘り進み、地中に潜った。

イザルが“あなをほる”を指示したのを見たグレイは、相手に声をかける。

「おいおい、ギャラドスは飛行タイプ。地面技は効かないぜ？」

「……攻撃技は攻撃にしか使えないって思ってるのか？ アンタ、発想が貧弱だな。……ハガネール“ロックカット”！」

イザルが大声で地中にいるハガネールに指示した。

「ロックカット」は、岩や鉱石でできた体を磨くことで摩擦を減らし、素早く動けるようになる補助技である。

ハガネールは地中で、ギャラドスに邪魔されることなく、「ロックカット」で自身の素早さを大幅に上昇した状態にした。

「……飛び出せハガネール！　「がんせきふうじ」！」

ハガネールは地中で助走をつけ、勢いよく地上から空中へ飛び出し、空中にいるギャラドスよりも上の位置から、岩石を投げつける岩タイプの攻撃技「がんせきふうじ」で攻撃する。

ギャラドスに巨大な岩石が複数降り注ぎ、ギャラドスにダメージを与えた。

さらに、ギャラドスに命中した岩石は、ギャラドスの体にしつこく張り付いて剥がすことができない。岩石に封じられてギャラドスの動きが遅くなった。

「KK、負けるな！　攻撃！」

「……「あなをほる」だ！」

イザルの指示により、ハガネールは空中から地面に降り立った勢いのまま地中に潜った。これによりギャラドスの攻撃は空振りに終わる。

「……飛び出せハガネール、　「がんせきふうじ」！」

「KK、　「たきのぼり」！　捕まえろ！」

再び地中で助走をつけ、勢いよく地上から空中へ飛び出したハガネールは「がんせきふうじ」で上の位置からギャラドスに岩石を降らせる。

しかし、ギャラドスは「たきのぼり」を発動し、水をまとめて全力で上に位置するハガネールに突っ込んだ。

グレイのギャラドスが使う「たきのぼり」は、上方向へ突撃する

時に特に威力が高くなるという特殊な性質がある。ギャラドスの「たきのぼり」は、「がんせきふうじ」を弾き飛ばしてそのままハガネールに直撃した。

重さが400・0kgもあるハガネールは、ギャラドスの「たきのぼり」でダメージを受けるものの、大きく吹っ飛ぶことは無く、両者の距離が縮まった。

ギャラドスは長い胴体でハガネールに巻きついて締め上げ、「こおりのキバ」をくらわせ、食い込ませた自身の牙をグリグリと動かしてハガネールに痛みを与える。

ハガネールもギャラドスの胴体に噛みつきながら、「アイアンテール」で鋼鉄の尻尾を叩きつけてギャラドスを攻撃する。

空中で絡み合うギャラドスとハガネールだが、ギャラドスはハガネールの重さを支えきれず、やがて両者は墜落しそうになる。

そのタイミングでグレイもイザルも新たな指示を出す。

「……あなをほる」！ 地中に逃げろ！」

「逃がすな！ 「たきのぼり」！」

地面が近づき、地中に逃げようとするハガネールに対し、ギャラドスは「たきのぼり」でハガネールにダメージを与えつつ上方向に押し出す。ギャラドスの肉弾戦による攻撃が再び始まる

ハガネールは地中に潜る体勢をとっていたため、ギャラドスの攻撃への対応が遅れ、その隙にダメージがたまる。

しかしすぐにハガネールも体勢を立て直してギャラドスへの攻撃を開始する。

「……今！ 「あなをほる」」

イザルはタイミングを見計らってハガネールに指示した。

ハガネールは再び地中に潜った。

今度ハガネールは、上方向へは勢いをつけずに、素早く地面から

這い出して、ギャラドスよりも下側から「がんせきふうじ」でギャラドスに攻撃する。

岩石にまとまりつかれているギャラドスは動きが鈍く、素早く避けることができずに「がんせきふうじ」が直撃した。

しばらく両者の戦いが続いた。

ハガネールは地中を上手く使って自分を守りながら、ギャラドスへ「がんせきふうじ」と「アイアンテール」で攻撃を加えていた。

ギャラドスは、ハガネールの僅かな隙を逃さずに積極的に肉弾戦をしかけながら「たきのぼり」や「こおりのキバ」でハガネールにダメージを与えた。

体力の消耗は両者とも同じくらいであった。

「……あなをほる！」

イザルの指示により、ハガネールは地中に身を潜めた。

このタイミングで、グレイが新たな技を指示する。

「KK！　あまごい！」

ギャラドスは「あまごい」を発動し、周囲に局地的な雨を降らせた。

ハガネールは、ギャラドスが「あまごい」を使っている隙に地上に出て、「がんせきふうじ」で攻撃し、ダメージを加える。

ギャラドスは「あまごい」を終えた瞬間、「たきのぼり」でハガネールに突撃した。

周囲の雨粒を吸収して凄まじい威力になった「たきのぼり」がハガネールに直撃し、大きなダメージを受けた。

「……あなをほる！」

イザルの指示でハガネールは地中に潜った。

イザルがグレイに向かって口を開く。

「……アンタ、何で最初から「あまごい」を使わなかった？ 俺のハガネールを舐めていたのか？」

「違う違う！ KKはな、破壊力のない技を使うのが嫌いだな、機嫌の良い時しか使ってくれないんだよ」

「……今は機嫌が良いのか？」

「そういう事だ」

「……機嫌に左右されるとは、もったいないな。……アンタの実力が足りないせいで、ギャラドスの力を100%引き出せてないんだな」

「ああ！？ この期に及んでそれかよ！ だったら100%の力を出してないギャラドスを相手に手間取ってるお前はなんなんだ？」

「……うるさいな！ 俺の方こそハガネールの力を引き出せていないって言いたいんだろ！？ そんな事、言われなくても分かっているんだよ！」

（あ？ 別にそんな事、言おうとしてないし思っていないんだが……あいつ、あんな生意気な態度とってるけど、意外と悩んでんのかね？）

イザルは、グレイとの会話は終わりだということ表示をするかのようにハガネールに指示を出す。

「……ハガネール！ 這い出て「がんせきふうじ」」

イザルは、雨が降っている影響で威力が高い「たきのぼり」を警戒し、ギャラドスの下から攻めることに決めた。

グレイは新たな指示はしなかった。

ハガネールを視界に捉えたギャラドスは自主的にハガネールに向かって突撃する。

ギャラドスはうまくハガネールの体に絡みつくことに成功し、再び肉弾戦が始まる。激しい肉弾戦は状況が次々と変わるため、イザルは適切な指示を出せないでいる。

「KK！　＼にらみつける＼！」

突然、グレイが指示を出した。

ギャラドスは＼にらみつける＼によって、ハガネールを睨みつけて不思議な念を送った。これにより、ハガネールは防御力が下がった状態になった。

「よしKK！　＼たきのぼり＼で吹っ飛ばせ！」

グレイの指示で、ギャラドスはハガネールを地面に投げ飛ばしてから＼たきのぼり＼で水をまとしてハガネールに突撃した。

雨粒を吸収して凄まじい威力になった＼たきのぼり＼が、防御力の下がったハガネールに直撃し、大きなダメージを与えてハガネールを弾き跳ばした。

「……くっ、ハガネール　＼あなをほる＼！」

「逃がすなKK！」

ハガネールが地中に逃亡しようとするが、ギャラドスはハガネールの尻尾に噛みついて逃亡を妨害し、その隙に再び絡みついて肉弾戦へと発展させる。

肉弾戦も、防御力が下がったハガネールに不利な状況であった。

「KK！　＼たきのぼり＼！」

激しくもつれあう両者の距離が少し開いたタイミングでグレイが指示した。

ギャラドスの＼たきのぼり＼がハガネールに直撃した。

ハガネールはその場に倒れ、動かなくなった。戦闘不能となったのである。

両者の戦いは、グレイとギャラドスの勝利に終わった。

バトルを終え、グレイとイザルの2人はポケモンセンターに向かって歩いていた。

歩きながらイザルがグレイに向かって呟く。

「……まさか、ジムバッジ2個の奴に負けるとはな。……強いな、アンタのギャラドス」

「もう分かってんだよ、その後にお前が言う言葉。『ギャラドスは強くて、お前は実力が足りないな』って続くんだろう？」

「……いや、もうそんな事は言わないさ。敗者である俺にそんな事は言えないさ」

「なんだよ？ 負けた途端に急におとなしくなって、張り合いねえなあ。1対1バトルなんだから、たまたま強いポケモンを1体持つてる奴に負けることもあるだろう？」

「……ハガネールは、今の俺のポケモンの中では1番強い奴だ。……負けてはいけないバトルだったのさ」

「じゃああれだ。お前が弱かった訳じゃなくて、オレが強かったっていう解釈でいいだろ？ ジムバッジを2個しか持っていないからといって、ジムバッジ2個程度の実力とは限らないだろ？ ジムに挑戦してないだけかも知れないしな」

「……そうじゃない。確かにジムバッジの個数で劣る奴に負けた事もそうだが、俺がショックなのはギャラドスに負けたことなんだよ！」

グレイは黙ったまま、イザルの話を聞くことにした。

イザルが言葉を続ける。

「……俺は、体が大きいポケモンの扱いに関しては相当な自信があるんだ。……扱いていうのは、バトル中の指示だけでなく、調教や育成方法も含んでいる。……とにかく、体が大きいポケモンの扱いに関しては一流に近いレベルがあると自負しているのさ」

イザルはグレイを睨みながら話し続ける。

「……ハガネールで戦ってギャラドスに負けたって事は、俺はアンタよりも巨体のポケモンの扱い方が劣っているということだ。……ギャラドスを完全に従わせる事すらできないアンタみたいな奴よりもな。……自分に失望したね」

「おい、やっぱり言葉にトゲがあるぞお前」

黙って聞いていたグレイは思わず口に出した。

再び言い合いの喧嘩になる2人。しかし、その雰囲気は先と比べていくぶん和やかなものであった。

「……おいアンタ、ちょっとあれを見てみるよ！」

軽口を叩きあいながら歩いていたグレイとイザルであったが、イザルが突然山の方を指差してそう言った。

グレイはイザルが指^さしている方向に目を向けた。山から何か大きな翼をもった生物が飛び立つのをグレイは見た。

「ああ、なんかいるな。もう辺りが暗くてよく見えないが、ポケモンか？ 見たことないポケモンだな」

グレイはのんきにそう答えながらイザルの方を見た。

イザルは何やら真剣な目で大きな翼をもつ生物を見ている。

そのイザルの真剣な様子を見たグレイは、何かあるのかと思い、再びその生物の方を見る。

（灰色の体、紫の翼……それ以外何も変わったことはないと思うが、イザルは何をそんなに真剣に見てるんだ？ ああ、珍しいポケモンだから捕まえようとしてるのか。確かに、体が大きそうなポケモンだしな。巨体のポケモンの扱いが得意とか言うイザルが欲しがるのも自然だな）

眺めていると、その大きな翼をもつ生物は甲高い声で叫びながらヒョワタウンの方に近づいてくる。

「イザル、良かったな。こっちの方に近づいてくるから、捕まえられるかも知れないぜ」

グレイの言葉に対し、イザルは『何言ってるんだコイツ』と言いたげな少し苛立いらだった表情を浮かべながらグレイに口を開く。

「……あのなグレイサン、あいつはプテラっていうポケモンなんだよ！」

「へえ、プテラってポケモンなのか。見たことないな。珍しいポケモンなのか？」

「……何言ってるんだ！ プテラは大昔に絶滅したポケモンさ！」

「あ？　なんでそんな絶滅したポケモンをお前が知ってるんだよ？」

「……ああ、もう！　話が通じない人だなアンタ！　科学の進歩で、化石から古代のポケモンを復活させる技術があることは知っているだろ？　もっとも、復活させられる化石は、見つかっている化石の中でもごく一部の種類だけだな。……とにかく、化石を復活させることに成功した古代ポケモンの内の1つが、あのプテラなのさ！」

言いながら、ヒョワタウンに向かってくるプテラを指さすイザル。

プテラはすぐそこまで迫っていた。

イザルが言葉を続ける。

「……そして、プテラは凜猛なポケモンで、空の王者だったと推測されるポケモンなんだよ」

プテラと2人の距離はさらに縮まる。

「おい、そのプテラってポケモン、オレたちの方見てるんだが……」

グレイがそう呟いた。

突如、プテラは甲高い声で叫びながら、大きな口を開けてノコギリのようなキバを見せながらグレイとイザルに襲いかかってきた。

2人はとっさにモンスターボールを取り出し、グレイはギャラドスを、イザルはコモルーを出した。

ギャラドスは敏感に戦いのおいを察知し、グレイの指示を待つことなく空中のプテラに飛びかかり、プテラを道路に投げ飛ばした。町の中で舗装された道路のアスファルトにプテラが勢いよく叩きつけられ、アスファルトにヒビが入った。

自分のポケモンに指示しようとしていたイザルだが、その前にプテラとギャラドスによる1対1の戦いが始まってしまった。

指示のタイミングを逃したイザルは、代わりにグレイに話しかける。

「……アンタのギャラドス、ずいぶんと良い躰しっけがされているみたいだな」

「おい、言ってることがさっきと違うぞ」

「……トレーナーの指示なく、自主的にトレーナーを守るとは大した忠誠心だな」

「いや、違うと思うんだが。単に自分が戦いたいだけだろ……」

先ほどハガネールと戦って消耗していることなど忘れたかのよう
に、ギャラドスは生き生きとしながらプテラを痛めつけていた。

再びギャラドスがプテラを投げ飛ばした。

木造の小屋のようなボロい建物にプテラが叩きつけられ、大きな音と共にボロい建物が崩壊した。

派手に戦う両者。その騒ぎを聞きつけ、何事かと確かめるために
周辺の住民たちが集まってきた。

ギャラドスに痛めつけられ、空に逃亡するプテラ。そのタイミン
グでグレイが口を開く。

「KK、"たきのぼり"」

ギャラドスが、空に逃亡するプテラに向かって、水をまとして突
撃した。

プテラは天高く吹っ飛び、やがて重力にしたがい落下し始め、道

路に墜落した。プテラは動かなくなっていた。

野次馬からグレイとギャラドスに拍手が送られる。

「……なあ、あれは誰が弁償するんだ？」

イザルが、先ほどプテラがぶつかって粉碎された木造の建物を指差しながら、そう口にした。

「いや、オレ悪くないだろ？ 野生ポケモンによる被害だろ？ 野ポケ保険とか、そういう何かが払ってくれるんだろ？」

「……巨体のポケモンで町の中で戦う場合は、周りに配慮しながら戦うべきなのさ。……やっぱりアンタ、ポケモンの扱いがなってないな」

「うるせえな。褒めたり貶^{けな}したり、ころころと意見を変えるなよ」

2人が言い争っている内に、ヒヨワタウンの治安組織のトレーナーが現場に到着し、プテラの戦闘不能確認と生存確認を行いながら後処理を開始した。

グレイとイザルは事情聴取のために警察署に行くことになった。

22話目 古代の生命2

「こっちの方でよかったかな？」

「……はい、この方向です」

治安組織の男コオルがイザルに問いかけ、イザルがそれに答えた。日時は、グレイとイザルがプテラに襲われた日の翌朝。場所は、ヒヨワタウンに隣接する緑豊かな山。

その山の中に、登山道を外れて歩く者が3人いた。イザル、グレイ、そして治安組織のトレーナーのコオル。

また、グレイの横には蝶のようなポケモンのビビヨンが飛んでいる。

コオルが先頭を歩き、イザルとグレイが後に続くかたちで3人は山を進んでいた。

「いや、しかし君たちも大変だねえ。プテラを目撃しちゃったばかりに、案内までさせられちゃってね」

「……気にしてません」

「いや、それにしてもさ、断ってもよかったんだよ？　ぶっちゃけヒヨワタウンの安全なんて、君たちにとってはどうでもいい関係のない話……あ、ごめん。また頼むね」

喋っていたコオルは、行く先に野生のポケモンが立ちはだかっているのを見て、グレイとイザルの後ろに下がった。

グレイはビビヨンに威嚇射撃を指示した。

ビビヨンは特殊攻撃技「むしのさざめき」を、野生のポケモンの手前にある岩に向かって放った。

巨大な音波で発生した衝撃波によって、野生ポケモンの目の前に

ある岩が砕けた。しかし、岩が砕ける様を見ていた野生のポケモンはそれでも退く様子を見せない。

やむを得ず、グレイはビビヨンに指示して野生のポケモンを攻撃して戦闘不能にした。

倒れた野生のポケモンを脇に捨て置き、3人は再び山を進む。

再びコオルが喋り始める。

「いや、さすが！ ジムバッジ3個は格が違うね！」

「ジムバッジ3個はオレじゃなくてこいつ」

グレイがイザルを指差しながら、うんざりした顔でそう言った。

「あれ？ そうだったけ？ いやあ、僕さ、人の顔覚えるのも苦手で、名前を覚えるのも苦手で、しかもポケモンで上手く戦えないし……あれ？ 僕、良い所無いねえ」

コオルの言葉に対し、グレイとイザルは何も答えない。2人とも内心では全く言葉の通りだと思っていた。

昨日の夕方、グレイとイザルはプテラに襲われた時の状況を警察に詳しく説明した。

ヒョワタウン内でプテラが飛び立つその瞬間を見た者はイザルだけであり、イザルの目撃証言は警察にとって価値あるものであった。

警察は、プテラはどこかの研究施設から逃げ出した個体であると推測し、他にも逃げ出した複数の古代ポケモンが山に潜んでいる可能性を指摘した。

そして警察は、ヒョワタウン周辺の安全確保のために、プテラが飛び立った場所の周辺に他の古代ポケモンがいないか調査する方針を立てた。

プテラの目撃者として、イザルとグレイはプテラが飛び立った場所へ治安組織のトレーナーを案内することになったのである。

そして今日の朝。

グレイとイザルは、ヒヨワタウンで治安組織のトレーナーを務める者の一人、コオルを目撃場所へ案内することになった。

最初グレイとイザルは、治安組織のトレーナーということで、コオルが強いトレーナーであると期待していた。

山の中で野生のポケモンと遭遇した際、グレイとイザルは、コオルがどんなポケモンの扱いをするのか注目した。

コオルはモンスターボールをいつ取り出したのか分からない程の流れるような素早い動作で、子猫のようなポケモンのエネコを繰り出し、エネコの「ねこだまし」で野生のポケモンを怯ませ、「うたう」で野生ポケモンを眠らせた。その手際の良さにグレイとイザルは舌を巻いた。

しかし、コオルの手際が良かったのは最初だけであった。奇襲攻撃は成功したが、すぐに倒すことはできず、目を覚ました野生ポケモンに苦戦することになった。一般的な野生ポケモンを相手に苦戦するコオルの姿は、とても治安組織のトレーナーには見えなかった。見かねたグレイは、野生のポケモンとの戦闘は自分に任せて欲しいと名乗り出た。この時点でコオルに向けられる2人の視線は尊敬の念を含むものではなくなった。

また、このコオルという男、非常にお喋り好きで2人にしつこく話しかけてくるのであった。さらに若干天然っぽい所がある。

見方によっては、コオルは非常に愛嬌ある男性とも表現できる。

しかし残念ながら、グレイとイザルは2人とも、愛嬌というものが理解できないタイプの人間であった。

コオルに向かられる2人の視線は、やがて冷たいものになった。

そして現在。

何回か野生のポケモンと遭遇しながら、山を進み続ける3人。

コオルは相変わらず喋り続けるが、グレイとイザルは最早ほとんど反応しない。しかしコオルの喋りは、独り言の性質も兼ね備えており、反応する者がいなくても1人だけで会話が進む構造になっていた。

グレイはコオルの言葉を聞き流し、どうでもいい事を考えながらボーっと歩いていた。

（どうせ治安組織のおっさんは戦えない訳だし、もし古代ポケモンが現れても、戦うのはオレとイザルなんだよな……おっさん居る意味なくね？ オレとイザルの2人だけでいいじゃねえか……いやイザルと2人だけとか、それこそ全く意味ねえか。つまり、誰もここにいて意味のある奴はいない……？ ああー……おっさんうるせえ……帰りてえ……）

グレイはふと、隣を歩くイザルの顔を見る。

（イザルの奴……帰りたいオーラが露骨に顔に出てるぞおい！ まあ、あのおっさんが表情に気づく訳ないから大丈夫か）

3人は歩き続ける。

やがて3人は、昨日プテラが飛び立った場所へとたどり着いた。周囲に凶暴な古代ポケモンがいる様子は無い。野生のポケモンが

のんきに寝ている光景が、その証拠となっている。

しかし古代ポケモンの姿は無かったが、怪しいものはあった。

「なんだろうね、これ。何の施設かな？ 山の中にこんな建物があるなんて、ずっとヒヨワタウンに住んでるけど知らなかったね」
そうコオルが口にした。

3人の前には、造りは簡素だがかなり最近に建てられたと思われる建物があった。時間の経過を物語るような汚れは見当たらない。

「いや、怪しいよね、この建物。ちょっと中に入ってお話を聞いてこようかね」

「立ち入り禁止って書いてあるけど」

グレイは建物の入り口の看板を指でさしながら言った。

「大丈夫、大丈夫。僕、治安組織のトレーナーだし」

「確かに」

コオルが治安組織の者であることなどグレイはとくに忘れていた。

（おっさん、初めて役に立ったな）

そう思いながら、グレイは建物に入ろうとするコオルに続いた。
後からイザルも入ってくる。

施設内は電気が点いていなかった。

朝の時間帯であり、建物の外から光が入ってくるので歩くには困らない。しかし、ここが何かしらの施設であることを考えると薄暗く、建物内で何か活動をしている様子には見えなかった。

「まあ、とりあえず片っ端から怪しいものを探してどうか！ 古代ポケモンとかが隠れてるかも知れないし！」

流石にそれは無いだろう、と思いながらもグレイとイザルは、コオルの後についていく。

施設内を歩くコオル、グレイ、イザルの3人は、やがて地下へと続く階段がある広い空間へたどり着いた。

しかし、3人ともその場で立ち止まり、階段を下ることはしなかった。否、できなかった。

「あなたたち、もしかして文字が読めないのかしら？ 入り口に立ち入り禁止って書いてあったでしょ？」

地下へ続く階段の前に行く手を阻む者がいた。漆黒色の制服を着ている者が2人。男が1人、女が1人である。

その男女が着ている制服は、グレイにとって見覚えのあるものであった。その事実を確認するべくグレイが口を開く。

「お前ら……ライフ団じゃないか？」

「ええ！？ ライフ団だってえ？」

グレイの言葉に反応したのは、漆黒色の制服を着た2人ではなくコオルであった。

コオルは言葉を続ける。

「ライフ団といえば！ 最近このトラベル地方で色々な騒ぎを起こしてる、今警察内で話題の組織じゃなか？」

コオルは漆黒色の制服を着た男女を指さして言い放つ。

「君たち！ 町で古代ポケモンが暴れた事件への関与の疑いあり！ ヒヨワタウンの警察署まで同行願おう！」

「言いがかりですね。断らせていただきます」

男の方が即答した。

コオルは負けじと言葉を続ける。

「ならば！ その階段で通じている地下を調べさせてもらおうかな！」

「それも断ります。何の権限があってそんな事ができるんですか？」

言いながら男はモンスターボールを2つ取り出し、ポケモンを繰り出した。

男の前に、ネンドールとポリゴン2が現れた。

ネンドール、どぐうポケモン。地面タイプかつエスパータイプ。高さ1・5 m。

土偶のような形をした化け物で、8個ある目と口が顔を1周するように配置されているおぞましい外見である。

古代の泥人形が怪光線を浴びて生命を宿したと噂されるポケモンである。

ポリゴン2、バーチャルポケモン。ノーマルタイプ。高さ0・6 m。

体は青色と赤色で、アヒル人形のような形をしている。

人工的に作られたポケモンである。

「地下を調べたかったら、ぼくを倒してから行くことですね。もつとも、ライフ団で戦闘員を務めるこのぼく、オコトを倒せたらの話ですがね」

オコトと名乗ったライフ団の男がそう言い放った。

「言っておくけど、この私、ナオミも戦闘員なのよ」

ライフ団の女の方、ナオミが続けてそう口にした。

「うむう……イザル君、グレイ君、ここはひとまず撤退しよう」

コオルが、グレイとイザルにそう提案した。

3人は施設の外に出た。

ライフ団の2人は追って来る気配はない。

イザルが不満そうな表情を浮かべながらコオルに話しかける。

「……おっさん、なんで退いたんだ？ あのライフ団とかいう黒服の奴ら、地下に何か隠している様子だっただろ！？ 例えおっさんが戦力外でも、俺とグレイサンなら2対2で、あいつらと戦えたぞ！」

コオルがそれに答える。

「確かに、あの地下に何かがあるのは確かだ……しかし、ライフ団は強いポケモンを数多く所有し、実力あるトレーナーも多数抱えている危険な組織！ ジムバッジを持っていると言っても、子供の一般トレーナーである君たちには荷が重すぎる！」

さらにコオルはグレイにも視線をやりながら話を続ける。

「もうこの事件はね、単なる野生ポケモン駆除のようなレベルの話じゃないんだ。僕はこれから仲間の応援を呼ぶ。治安組織の中でも、戦い得意とする人たちにね！ 君たちは各自で山を下りてくれ。君たちほどの実力なら、この辺りの野生のポケモンに殺されることはないだろう」

言いながらコオルは、多機能携帯端末ポケナビの電話機能を使って連絡をとろうとするが、圏外の表示が出るだけで電話ができない。「うーん、困ったねえ、まさかライフ団が絡む事件だなんて思わなかったから、無線も持ってきてないし、圏外じゃない場所を見つけて連絡するしかないか」

そう言い残し、コオルは走りながら山の中へと消えていった。

グレイとイザルがその場に残った。

「さあイザル、オレたちは帰るぞ。後は治安組織に任せればいいだろ」

そう言ったグレイだが、イザルは不満気な顔をして帰ろうとしな

い。

イザルが口を開く。

「……なあグレイサン。俺とアンタの2人なら、あのライフ団の2人にも勝てると思わないか？」

「ああ？ お前、あいつらと戦うっての？ やめとけ。ポケモンバトルと裏世界の戦いを一緒にしない方がいい」

「……その口ぶり、裏世界の戦いを知っているような口ぶりだな？ アンタ、そういう戦いを経験したことがあるんだろ？」

「だったら何だよ？」

「……グレイサン、俺はポケモンバトルだけじゃなくて、ポケモンの武力行使で戦う術にも知識があるんだ。俺は将来、治安組織のトレーナーになることを目指していてな。そういう事に関しては素人じゃないのさ」

「いや、目指してるって言っても。誰に教わったんだよ、そんな事」

「……俺はな、ジムリーダーの息子なんだよグレイサン。だからポケモンに関する知識に関しては事欠かないんだ」

「ジムリーダーの息子！？ ……マジか」

「……ああ」

グレイはイザルがジムリーダーの息子と聞いて、イザルが義務教育未終了にも関わらず旅に出られる理由を察した。親の権力とコネによって、立派なポケモントレーナーになることに通じる事は何でも許されるのであろう。

「……グレイサン、俺はな、こう見えても悪事を働く奴が許せないんだ。……そして、悪事を止める力がありながら悪事を見て見ぬフリをする人間も許せないし、そういう人間にはなりたくないんだ！」

突如、イザルがグレイに向かって頭を下げた。何事かと思ってグレイはぎょっとした。

「……頼む、グレイサン。俺と一緒にライフ団と戦ってくれ！ コオルのおっさんが仲間を連れてくるって言ってたが、そんなのいつになるか分からない。奴らに逃げられてしまう！ 悪が見逃されるのが俺には許せないんだ！」

初めてこのようなイザルの姿を見て、グレイは少なからず驚いていた。

（ああ！ くそっ……イザル、お前はずるくて卑怯な奴だな。普段はあんなクソ生意気な態度のくせに、ここぞという場面で殊勝な態度とりやがって……）

グレイは少しの間、黙ったままイザルを見ていたが、イザルは頭を上げる気配がなくグレイの返答を待っている様子であった。

「ああ、分かった、分かった！ 一緒に戦ってやるよ」

「……本当か！？」

「ああ。ただし1つ条件がある。一緒に戦うとは言ったが、あくまでも個人個人が自己責任でやることにしろ」

「……どういう事だ？」

「つまり、お互いを助ける義務はないって事だ。オレはヤバいと思ったらお前の事は考えずに逃げるし、お前もヤバいと思ったらオレの事は考えずに逃げる、って事」

「……分かった、そうしよう。……そういう提案が出てくるあたり、やっぱりアンタは慣れているな」

「慣れてる訳あるかよっ！」

施設内でも少し開けた広い空間にて、地下へ続く階段の前に立つ
ライフ団の2人の男女。

男の方がオコト、女の方がナオミである。

「治安組織のおっさん、多分仲間を連れてくると思うわ……間に合うかしらね？」

ナオミがそう口にした。オコトがそれに答える。

「どうですかねえ？ セキイシ様の進捗しんちよくの状況によるとしか」

2人が会話していると、地下から階段を上ってくる者があった。

漆黒色の制服の上に白衣を着た初老の男性である。

ナオミが白衣の男性に声をかける。

「どうかしましたか？ ドクター・セキイシ」

ドクター・セキイシと呼ばれた白衣の男性が答える。

「いや、待ち時間なのだよ。データが出るのは8分23秒後だからね。少し外の空気を吸おうと出てきたのだよ」

今度はオコトが口を開く。

「セキイシ様、最終的な結果が出るのは後どのくらいですか？」

「いや、その8分12秒後に出るデータさえまとまれば、この施設は用済みさね……この、どのくらいの質量の化石があれば古代ポケモンを復活させることができるかを調べるための施設はね」

「分かりましたセキイシ様。では、データがまとまり次第、我々もこの施設を立ち去るとしましょう」

「うむ……結局、現在のライフ団の科学力では、化石全体の質量の半分だけで古代ポケモンを復活させることは不可能、という算出に終わりそうだよ。すなわち、損傷率0%の化石を半分に割ってから復活させても2体の古代ポケモンのクローンは残念ながら得られな

い、ということですか」

一呼吸おいて、再びドクター・セキイシが口を開く。

「それにしても、本当に君たちには迷惑かけているよ。本来なら他の団員みたいに昨日の時点で退避すればいいものを、私がわがまま言うせいで護衛の君たちまで付き合わせてしまったね……さっきもモニターで見えていたよ。なんか治安組織が来てみたいだね」

ドクター・セキイシの言葉に、今度はナオミが答える。

「治安組織の者はおそらく、我々と戦うには戦力が足りない判断して仲間を呼びにいったと思われます。しかしデータもすぐにまとまるのであれば、治安組織が仲間を連れてここに来るまでには我々も脱出できるでしょう」

「いやいや、本当に悪いね。もしあれだったら逃げても良かったんだよ？ さすがにB級戦闘員の2人じゃあ、治安組織のトレーナー複数を同時に相手するのは難しいでしょうに」

「逃げるなんてとんでもない！ このリザレクション、特にあなたには恩があります。あなたの護衛を放棄して逃げるなんてあり得ません！」

「おお、そうか。ここまで忠誠心をもたれると、さすがに嬉しいねえ……おや、治安組織のトレーナーと共にいた2人の子供が施設内に戻ってきたようですね」

「え！？」

ナオミは慌てて、ドクター・セキイシが持つモニターを見る。

「本当ね、まさか私たちを倒して地下に進む気？」

ナオミの眩きに対し、オコトが口を開く。

「可能性はあるかと……さて、セキイシ様。我々はあの子供と戦闘になるかも知れません。もし戦闘になった場合は、戦いながらこの施設を派手に壊して逃げ道を作りますので、どうぞ先にお逃げ下さ

い」

オコトの言葉にドクター・セキイシが答える。

「そうかい？ 悪いねえ。部下を残して1人逃げることは、あまりしたくないけどねえ」

オコトが言葉を返す。

「セキイシ様は、これからもリザレクションに必要なお方、そのくらいは当然ですよ」

「そうかい？ そう言ってもらえると嬉しいねえ……さて、私は戻るとするよ」

そう言い残し、ドクター・セキイシは階段を下っていった。

ドクター・セキイシが階段を下りたのを見送ってから、オコトが口を開く。

「セキイシ様は本当にできた人間ですね。セキイシ様の下について正解でした」

「本当ね。まあ、ドクター・セキイシの下でなくとも、リザレクシヨンはまともな人間が多いけどね」

「まともじゃないのはフェニックスだけですよ。そういえば1ヶ月くらいも前の話ですが、フェニックスの奴ら、ラッキーを強奪しようとして逮捕者が出たらしいですね」

「その話は知ってるわよ。しかも、ラッキーの強奪っていうのも何か思いつきだったらしいわね。研究にどうしても必要だとかそういう事じゃなく、なんか生きる力を分け与えるラッキーを観察すれば新たなアイデアが生まれるかも、的な」

「なるほど、その計画性の無さ、野蛮さ、頭の悪さ、まさにフェニックスらしいですね。無計画な作戦に駆り出された戦闘員がかわいそうですかね」

「ライフ団を私物化してテロリストの集団にしてしまったフェニックスの連中に同情の余地なんかないわよ。さ、2人の子供が来るわよ。準備してオコト」

「ああ、分かっていますよナオミ」

23 話目 古代の生命3

再び山奥にある謎の施設に舞い戻ったグレイとイザル。2人はライフ団のオコトとナオミがいた広い空間を目指して歩く。

2人はやがて先ほどの広い空間へとたどり着いた。先ほどと同じく、そこにはライフ団のオコトとナオミが、地下へ通じる階段を塞ぐように立っていた。

オコトの前には、先ほど出した2体のポケモンが浮いている。ネンドールとポリゴン2である。

ネンドール、どぐうポケモン。地面タイプかつエスパータイプ。高さ1・5m。

土偶のような形をした化け物で、8個ある目と口が顔を1周するように配置されているおぞましい外見である。

古代の泥人形が怪光線を浴びて生命を宿したと噂されるポケモンである。

ポリゴン2、バーチャルポケモン。ノーマルタイプ。高さ0・6m。

体は青色と赤色で、アヒル人形のような形をしている。人工的に作られたポケモンである。

「何をしに戻ってきたのかしら？」

ライフ団のナオミが、グレイとイザルに問いかけた。

イザルが答えて言う。

「……アンタら、プテラが暴れた事件に何か関係があるんだろ？
しかもアンタらライフ団は、ずいぶんとトラベル地方で暴れている
組織みたいだな。ここでおとなしく捕まってもらうぜ」

「あらあら、治安組織のおっさんも無しに、どうやって私たちを捕
まえるって言うのかしら？ ポケモンで力づくでやるのかしら？」
そう言いながら、ナオミもモンスターボール2つ取り出してアー
マルドとユレイドルを繰り出した。

「……おいおい、アーマルドとユレイドルだと！？ ……アンタ、
もう隠す気ないだろ、どっちも古代ポケモンじゃないか！ どう考
えてもアンタら、プテラのことを知っているだろ！？」

「あらあら、何の話かしら」

イザルの言う通りアーマルドとユレイドルは、どちらも古代の化
石から復元されるポケモンである。

「さて、力づくで私たちを止められるかしら？」

イザルも自分のポケモンを出し、ナオミに対抗する。

こうして、イザルとライフ団のナオミの戦いが始まった。

一方、グレイとライフ団のオコトは、すぐに戦いを始めることな
く、隣で始まったイザルとナオミの戦いから離れつつ会話していた。

「グレイ君と言いましたね。あっちのナオミと戦っている彼につい
ては聞きましたが、君は何をしにここに戻って来たんですか？」

「まあ……付き添いだな。あの隣で戦ってるイザルって奴が、悪が
許せないって言うからな。それに、オレもライフ団には個人的に迷
惑かけられたからな。八つ当たりでもしようかと思ってな」

「ほう？ ライフ団に迷惑をかけられた？ 何をされたんです？」

「幸運の家って知ってるか？ あそこのラッキーを強奪しようとす
るお前たちと戦ったんだよ！ 命を研究してるとか言ってた気がす

るが、ずいぶんと野蛮な組織だなライフ団は」

グレイの言葉を聞いて、オコトは少し驚いたような顔をした。

「ほう……まさかラッキー強奪事件を阻止した人物が目の前に現れるとはね、噂をすれば影……なんとも興味深いですね。しかし、ライフ団が野蛮だという認識は変えていただきたいですね」

オコトはグレイに説明するような口調で話しはじめる。

「グレイ君、一口にライフ団と言っても、その考え方や行動は派閥によってまるで違うのですよ。単に自分が死にたくないという自分本位な考えで永遠の命を求める野蛮で低俗な派閥もあれば、命をデーター化することで永遠に存在を保存する研究をしているちょっと頭が変わった方々が集う派閥もあります」

オコトの説明に対し、グレイが質問する。

「へえ。それで、他の所の悪口を散々に言ってるお前は何なんだよ？」

「我々リザレクションは、死者の蘇生を主な研究テーマとして活動しています。化石からの古代ポケモンの復元もこの一環ですね。それから主流の研究ではないですが、無機物からの生命の創生……分かりやすく言えば、人工的に命を作りだす研究ですね。これもやっています」

オコトは、自分のポケモンであるポリゴン2を指差しながら言葉を続ける。

「このポリゴン2は、元々は人工的に作られたポケモンです。しかし生物か無生物かと問われれば無生物でしょう。もちろん、賛否分かれる所ではありますがね。しかし我々が作りたい命は、ポリゴンのような無生物ではありません。我々は、誰もが生物と認める命を作りたい。究極的には人間を人工的に作りたいのです」

楽しそうに説明するオコト。説明を聞いてグレイがドン引きしている事も気づかずに、オコトはグレイに問いかける。

「どうですかグレイ君？ 命を作り出す研究。これは主流の研究ではないですが、リザレクションは崇高な研究をやっているでしょう？ リザレクションに興味は湧きませんか？ もし君がライフ団に入りたいと言うなら、入れてあげてもいいですよ？ もちろん、所属派閥はリザレクションとしてね」

引きつった表情をしながらグレイが口を開く。

「おいおい……永遠の命も、命のデータ化も、死者の蘇生も、命を作りだすのも……全部ヤバイだろ！ お前らも含めてどれも頭のネジがぶっ飛んでるとしか思えないけどな！」

グレイの返答を聞いた瞬間、オコトは露骨に失望したといった表情を浮かべた。

オコトが諦めと失望が混ざった声でグレイに話しかける。

「そうですか。この崇高なりザレクションを、よりもよって低俗なフェニックスと同一視しますか……。頭が悪すぎて崇高か低俗かの区別すらできないのですね。ラッキー強奪を阻止した子供ということで期待していたのですが……。もう君に興味はありませんよ。ポリゴン、"チャージビーム"」

「なあ！？」

突如としてグレイに向けて発射された"チャージビーム"による電気の束。グレイはとっさに自分の前にハピナスを出現させて電気の束を防いだ。

「すまん姐さん！ 突然出して盾に使ったりして！」

グレイの謝罪に対して、ハピナスは優しい笑顔を返した。

先ほど戦いを始めたイザルとライフ団のナオミは、戦いながら場所を移動しており、既にグレイの近くにはいなかった。

オコトのポリゴン2が"チャージビーム"を放ったことで、グレイも完全に戦う流れである。グレイはハピナスの他にもビビヨンと

レパルダスを出した。

本当はグレイはギャラドスも出して戦わせたかった。しかし屋内おくないの天井が低い場所で、空中を飛行して移動し、さらに高さが6・5mもあるギャラドスを戦わせることはできないとグレイは判断した。

グレイのビビヨン（高さ1・2m）とレパルダス（高さ1・1m）とハピナス（高さ1・5m）。

オコトのネンドール（高さ1・5m）とポリゴン2（高さ0・6m）が対峙する。

グレイは敵のポケモン2体を観察する。

（オレの勘だが、2体とも物理的な攻撃よりも特殊攻撃が得意そうだな。なんか浮いてるし、超能力的な感じだろ。種族の常識にとらわれない姐さんみたいな規格外の可能性も0じゃないが、そんな奴そうそういないだろ……KKを戦わせられないのは厳しいが、特殊攻撃に強い姐さんがいれば何とかなるだろ）

相手を観察するグレイに対し、オコトがさっそく自分のポケモンに攻撃指示を出す。

「ネンドール、"げんしのちから"。ポリゴン、"チャージビーム"。どちらも狙いはビビヨンです」

グレイも素早く指示する。

「姐さん、受け止めながら進んで殴れ！ レパは後に続け！ ビビはここで"むしのさざめき"！」

ビビヨンに向かって飛ばされる2つの技。

原始の力を解放して岩を浮かせて飛ばす、岩タイプの特殊攻撃技"げんしのちから"。

電気をためて自分をパワーアップさせながら、同時に電気の束を相手に発射して攻撃できる、電気タイプの特殊攻撃技"チャージビ

ーム”。

これら2つの攻撃を、ビビヨンに代わってハピナスが受け止めた。ポリゴン2の”チャージビーム”を受けようとも気にせず前に進むハピナスであったが、ネンドールの”げんしのちから”を受けた時にはダメージでよろめいた。

（まじか！ あの姐さんが特殊攻撃でよろめくとは……あのネンドールどれだけ強いんだよ！）

「姐さん！ あのネンドールから先に殴れ！」

グレイはネンドールへの警戒度を一気に高め、先に処理することに決めた。

さらに”チャージビーム”を飛ばそうとするポリゴン2を、ハピナスの後ろに隠れていたレパルダスが”ねこだまし”で怯ませて止める。

「ネンドール、”コスモパワー”です」

ネンドールは、自身の防御力と特殊防御力を上昇させる技”コスモパワー”を発動した。

直後、ネンドールはハピナスの”メガトンパンチ”で殴り飛ばされたが、防御が強くなったネンドールはダメージをあまり受けなかった。

ライフ団のオコトが口を開く。

「もう面倒くさいですね。戦場を新しくしましょうか。ネンドール、”だいちのちから”」

”だいちのちから”は、相手の足元から大地の力を放出して攻撃する、地面タイプの特殊攻撃技である。

ネンドールの”だいちのちから”によって、建物の床から土が勢いよく噴き出され、床のタイルを突き破る。

土が噴き出した部分の床は穴になり、穴の下には地下フロアが広

がっている。

グレイとビビヨンがいる場所の足元の床からも土が勢いよく噴出した。さらに、グレイの足元からも地面が噴き出し始める。

「このクソ野郎がっ!!」

叫びながら何とか噴き出す土を避け、素早く立ち上がったグレイ。グレイの周囲に限らず、あちこちの床から土が噴出している。

グレイの足元から何やらミシミシと音がする。何かと思つて周囲を見渡すグレイは、自身が立っている床の周りに無数の亀裂が入っていることに気がつく。

突如、グレイの立っている床が自由落下を始めた。

「は？」

無数の穴が開き、グレイを支えることができなくなった床が落ち始めたのである。

間拔けな声と共に、グレイは地上階から地下1階へと落下した。

体が痛むのを我慢し、グレイは素早く回りを確認する。

「だいちのちから」により、グレイとオコトが戦っていた地上階の戦場のほとんどの床が消えていた。

浮くことも飛ぶこともできないハピナスとレパルダスも地下階に落とされていた。オコトもいつの間にか地下へ降りている。

浮けるネンドールとポリゴン2、飛べるビビヨンが後から降りてくる。

「さあネンドール、だいちのちから」を続けなさい」

オコトの指示で、ネンドールは再び「だいちのちから」を放つ。床だけでなく、壁や天井からも土が勢いよく噴き出す。土が噴き出した壁や天井はボロボロになって崩れ、降ってくる。

「おいおい！ お前、地下を守ってたんじゃないかよ！」

グレイは思わずオコトに向かって叫んだ。

「もういいんですよ。この施設は用済みです」

オコトが答えた。

グレイにとって、オコトの行動原理は謎であった。

先ほどまでは地下を守っていたはずなのに、今は自ら地下を破壊している。用済みと言うからには目的は達成されたのかも知れないが、それにしても自分が逃げるような素振りもない。

そんな事を考えているグレイは、再び足元の異変に気がついた。

またもやグレイが立っている床に無数の亀裂が入っている。

「おい、まさか……」

グレイに未来予知の力はない。しかしグレイにはこれから起こることがハッキリと分かった。

グレイは床ごと地下1階から地下2階へと落下した。

2度にわたって落とされたグレイは、体の痛みにイライラしながら足元の瓦礫がれきを蹴り飛ばした。

（人を何度も落としたりがってあのクソ野郎！！ ビビの「むしのさざめき」で鼓膜ぶち破って、レパの爪で目ん玉えぐり出してやるぞクソ野郎！！）

グレイはその光景を想像する。

目と耳を手で押さえながら痛みでのたうち回り苦しむオコトを想像できたグレイは、ひとまず怒りを収めることに成功した。

地上階、地下1階、地下2階、の3フロアがぶち抜かれたことで、グレイの目の前には天井が高い戦場が広がっていた。

いつの間にか地下2階に降りて来たオコトが、新たなモンスターボール取り出しながら口を開く。

「さて、これだけ広くなれば使えますかね。ゴルーグ！」
ライフ団のオコトは、新たにゴルーグ（高さ2・8m）を繰り出した。

ゴルーグ、ゴーレムポケモン。地面タイプかつゴーストタイプ。
2本の脚で立ち、2本の腕がある。ロボットのような外見である。
古の時代に人工的に作られたポケモンだと噂されている。

ゴルーグを繰り出したオコトに対し、グレイも強気に言葉を返す。
「狭い場所では出せなかったポケモンがいるのは、こっちも同じなんだよ！」

言いながらグレイはモンスターボールを取り出して、ギャラドス（高さ6・5m）を出した。

「KK！ あいつと遊んでこい！」

ネンドールを指でさしながらグレイはそう言い放った。

ギャラドスはすぐさまネンドールに向かって飛び出した。

「ポリゴン、あのギャラドスに“チャージビーム”」

「姐さん、受け止めろ！」

ポリゴン2からギャラドスに向かって“チャージビーム”による電気の束が発射される。しかしハピナスがそれを受け止め、“メガトンパンチ”による拳の一撃でポリゴン2を殴り飛ばした。

その間にギャラドスはネンドールのもとに到達し、ネンドールに向かって“たきのぼり”で水をまといながら突撃する。ネンドールも対抗して“げんしのちから”で岩を飛ばして抵抗する。

「ゴルーグ、“てっぺき”を使った後、ネンドールに加勢。攻撃は“シャドーパンチ”を軸に攻撃です」

オコトの指示により、ゴルーグは自身の防御力を大幅に上昇させる技「てっぺき」を発動した。

「てっぺき」で防御力が大幅に上昇した状態になったゴルーグは、「シャドーパンチ」でギャラドスを殴りつつ、技の合間にはごつい脚で蹴りを放ってギャラドスを攻撃する。

ゴルーグは、特性てつのこぶし、というパンチ技の威力が上がる特性をもっており、凄まじい威力で「シャドーパンチ」が放たれる。対してグレイも指示する。

「ビビ、狙撃でKKを援護。レパは姐さんを盾にしてあのアヒルみたいなやつと戦え！」

ビビョンはその場で「むしのさざめき」を飛ばして、ギャラドスと戦っているネンドールとゴルーグを遠距離から攻撃し始める。

また、レパルダスはハピナスと共にポリゴン2と戦い始める。

△ i 6 4 0 8 | 3 8 3 1 1 ∇

現在、大きく分けて3つの場所でポケモンが戦っている。

1つ目は、グレイの隣。

ここにはビビオンがいる。

ビビオンは「むしのさざめき」で敵のネンドールと敵のゴルーグを遠距離攻撃している。

2つ目は、グレイから見て左側。

ここにはレパルダス、ハピナス、敵のポリゴン2がいる。

ポリゴン2は「チャージビーム」でレパルダスとハピナスを攻撃しようとするが、攻撃は全てハピナスに命中している。

ハピナスは、ポリゴン2の「チャージビーム」を全て受け止めながら、肉弾戦による攻撃を駆使しつつ「メガトンパンチ」でポリゴン2を攻撃している。

レパルダスは、ハピナスを盾にしつつポリゴン2の隙をうかがい、隙について「みだれひっかき」で攻撃している。

総括的に見れば、特殊攻撃を主に使いながら戦うポリゴン2は、特殊攻撃に強いハピナスとは相性が悪く、体力の削り合いで先に倒れるのはポリゴン2であると言える。

3つ目は、グレイから見て右側。

ここにはギャラドス、敵のネンドール、敵のゴルーグがいる。

ギャラドスは、「たきのぼり」や肉弾戦を駆使して主にネンドールと戦いながら、手が空いた時にゴルーグにも攻撃している。

ネンドールは、「げんしのちから」を使ってギャラドスと正面からぶつかり合っている。また、ビビオンから「むしのさざめき」で狙撃されている。

ゴルーグは、ギャラドスがネンドールとぶつかり合っている隙に「シャドーパンチ」や蹴りでギャラドスに攻撃している。ビビオンからは「むしのさざめき」で狙撃されている。

総括的に見れば、ビビヨンの援護狙撃も含めて、グレイ側とオコト側の戦力は互角であると言える。

大きな戦場が2つあって、1つは有利な戦況、もう1つは互角である。状況を見たグレイは、自分が有利な状況であることが分かった。

（相手のネンドールは確かに強い……だが、残念ながら異常に強いポケモンを連れてるのはお前だけじゃないんだな、これが。このまま放っておけば、そのうちポリゴンとか言うアヒル野郎が倒れるだろうから、そしたら姐さんとレパを加勢させて終わりだ）

自分に余裕ができたことで、グレイはイザルの戦いが心配になってくる。

（確かイザルは、でかいポケモンの扱いが得意とか言ってた気がするが、……この狭い場所で十分に戦えるのか？　くそっ、地下に落とされたせいで、イザルとあの女の戦いがどうなってるか全く分からない……）

今からでもイザルに加勢するべきか悩むグレイだが、その余裕ある状況はオコトの新たな作戦により覆されることになる。

「ゴルীগはギャラドスを止めて。ネンドールはこちらに」

オコトの指示で、ネンドールはギャラドスから離れてオコトの隣に帰っていく。それを追うギャラドスをゴルীগが邪魔する。

とりあえず強い相手を殴ればそれで満足なギャラドスは、標的をゴルীগに移した。

「ゴルীগ、"じゅうりよく"を使いなさい」

オコトが新たな技"じゅうりよく"をゴルীগに指示した。

突如、ゴルীগの周囲の重力が異常に強くなった。強い重力に押しつぶされてギャラドスは飛行することができなくなり、瓦礫の散

乱する床でヘビのように這いつくばることになった。

先ほどギャラドスとゴルーグから離れたネンドールは、強い重力の影響を受けることなく浮き続けている。

「さあネンドール、＼だいちのちから＼で攻撃。ゴルーグは＼じしん＼です」

ゴルーグは、這いつくばるギャラドスを自身のゴツい脚でグシャリと踏みつけ、地面を伝う衝撃波を発生させて攻撃する地面タイプの攻撃技＼じしん＼でギャラドスを攻撃する。

さらにネンドールが＼だいちのちから＼でギャラドスの下側から激しく土を噴出させて攻撃する。

どちらも地面タイプの技で、普通なら飛行タイプのギャラドスには効かない技である。しかし、地に這いつくばる今のギャラドスに飛行タイプの特徴などどこにも無かった。

ギャラドスは＼たきのぼり＼で水をまとして、自身を踏みつけるゴルーグに突撃する。しかし、ゴルーグ（330・0kg）による踏みつけの押さえの力は、強い重力に影響もあり、なかなか引き剥がすことができない。

さらに、オコトが新たな指示を出す。

「ポリゴン、＼ワンダールーム＼です」

オコトの指示により、ポリゴン2が＼ワンダールーム＼を発動した。ポリゴン2の周囲に摩訶不思議な空間が作り出された。

「さあポリゴン、＼チャージビーム＼です」

オコトの指示により、ポリゴン2が＼チャージビーム＼で電気の束を飛ばした。先ほどまでと同じく、ハピナスが盾となって技を受ける。

しかし、先ほどと違い、ハピナスは電気の束を受けた途端にダメ

ージでよろめいた。ハピナスは踏ん張ることができず、後ろに押し出され、"チャージビーム"による電気の束がハピナスの後ろにいたレパルダスにまで及んだ。

グレイは知らないことであるが、"ワンダールーム"で作り出された不思議空間の中にいるポケモンは、防御力と特殊防御力が入れ替わった状態になる。ハピナスは普段は特殊攻撃に強いポケモンであるが、"ワンダールーム"の不思議空間の中にいる間は物理攻撃に強いポケモンとなり、特殊攻撃に強いという特徴は消し去られるのである。

「姐さん！ その変な場所の外で戦え！」

"ワンダールーム"の効果は知らないが、突然ハピナスが大きなダメージを受けたのは作り出された不思議空間が原因だと断定したグレイは、不思議空間の外に行くよう指示した。

しかし、ポリゴン2は不思議空間に真ん中に居座って"チャージビーム"で攻撃してくる。

「姐さん！ 力づくでアヒル野郎を引きずり出せ！ 全力の"メガトンパンチ"！！！」

ハピナスは"メガトンパンチ"を発動し、自身の拳にゆっくりと凄まじい力を込める。ポリゴン2から"チャージビーム"による電気の束が放たれてハピナスにダメージを与えるが、ハピナスは動かない。

次の瞬間、拳にためた力を一気に解法し、ハピナスは拳を突き出したままの姿勢で弾丸のような勢いで飛び出してポリゴン2に迫り、殴り飛ばした。

吹っ飛ばされたポリゴン2は、その勢いで不思議空間の外に放り出され、瓦礫の山に突っ込んだ。瓦礫の山が音を立てて崩れる。

「無駄ですよ。ポリゴン、"ワンダールーム"」

しかし、不思議空間から引きずり出されたポリゴン2は、再び「ワンダールーム」で自分を中心として2個目の不思議空間を作り出した。

例えポリゴン2を不思議空間から追い出しても、また新たな不思議空間を作られるだけである。グレイの作戦は失敗に終わった。

「レパ！ 姐さんを盾にするのはもう止めだ！ レパも姐さんも、ばらけて別々に攻撃しろ！」

グレイの指示により、レパルダスとハピナスは2手の分かれて別々の方向からポリゴン2に迫ろうとする。

しかしオコトが新たな技を指示する。

「ポリゴン、"でんじほう"で壁を作るのです」

ポリゴン2は、大砲のような電気を発射するという、非常に威力が高い電気タイプの特殊攻撃技"でんじほう"を発動した。

"でんじほう"により放たれた電気の塊は、不安定な軌道と遅い速度でハピナスに迫った。

電気の塊に向かって、ハピナスが"メガトンパンチ"による凄まじい拳の一撃を放った。しかし、拳の一撃は電気の塊を弱めたただけで消し去ることはできず、電気の塊がハピナスに着弾して大爆発を引き起こす。

その隙にレパルダスがポリゴン2に攻撃するが、すぐさま"チャージビーム"の電気の束でレパルダスは押し出され、"でんじほう"の電気の塊で壁を作られる。

ポリゴン2は次々に"でんじほう"で不安定な軌道で遅く進む電気の塊を撃ち出し、レパルダスとハピナスの接近を防ぐ。さらに時折"チャージビーム"の電気の束で遠距離攻撃してくる。

グレイは自分が不利な状況になるのを感じつつ、周りの状況を見渡す。

△ i 6 4 1 0 | 3 8 3 1 1 ∇

まず、グレイから見て左側の戦場。

レパルダス、ハピナス、敵のポリゴン2が戦っている場所である。先ほどは、特殊攻撃に強いハピナスが有利に戦っていた。

しかし現在は、ポリゴン2の「ワンダールーム」の不思議空間によって、ハピナスの特殊攻撃への強さは消し去られた。

ポリゴン2は不思議空間の真ん中に居座り、「でんじほう」で電気の塊を自身の周囲に発生させて防御しながら、「チャージビーム」の電気の束で攻撃することで、有利に戦っている。

レパルダスとハピナスは、ポリゴン2の「でんじほう」を一撃で打ち消す程の強力な技をもっていないため、不安定な軌道でどの方向に進み出すか分からない「でんじほう」を迂回して進まざるを得ない。

グレイ側が不利な状況である。

次に、グレイから見て右側の戦場。

ギャラドスと、敵のゴルークが戦っている。また、遠距離からビ

ビヨンと敵のネンドールの攻撃が飛来している。

先ほどは、遠距離からの援護も含めて、互角な戦いが繰り広げられていた。

しかし現在は、ゴルグの「じゅうりょく」による強い重力の影響により、ギャラドスは飛ぶことができずに地を這いながら戦っているため、本来の力を発揮できていない。

こちらもグレイ側が不利な状況である。

また、ライフ団のオコトの隣。

ここではネンドールが「だいちのちから」で土を噴出させて、ギャラドスを攻撃している。ネンドールによる「だいちのちから」は非常に強力で、ギャラドスのダメージ源は主にネンドールの攻撃である。

最後に、グレイの隣。

ここではビビヨンが「むしのさざめき」で音波を飛ばしてゴルグを攻撃している。

しかしビビヨンの攻撃は、敵のネンドール程の強い威力で放たれている訳ではない。

（何個かの戦場に分かれて、どの戦場でもオレが不利……なんか覚えてある光景だよな……）

グレイは、約1ヶ月前のライフ団のアークとの戦いを思い出していた。

（あの時も何とかなったし、今回も頑張れば何とかなるだろ。もし何とかならなくても逃げればいいしな。あの時とは違ってオレは守る側じゃないし……あ、いや、イザルがいたな。逃げるのはナシだ

な)

グレイは、お互い自己責任でやろうと事前にイザルと約束したものの、それはイザルが戦っている時に自分だけが先に逃げることを想定した約束ではない。その約束は、イザルが逃げざるを得なくなった時に、迷うことなく逃げてもらうための約束である。

もちろんイザルが逃げたその時は、グレイも全力で逃げるつもりである。ライフ団をどうしても捕まえたいという意識はグレイには無い。

(イザルが勝ってるなら、多少不利でもこのまま戦って時間稼ぎだけすればいい……もしイザルが負けてるなら、勝つために戦況を変える必要があるんだが……イザルの方がどうなってるか分からんから困るな……)

グレイは少し考えて、

「KK! "あまごい"！」

イザルが負けていることを想定して、勝つために戦況を動かすことに決め、新たな指示を出した。

心行くまで強者と殴り合うことができるこの遊び場を満喫して機嫌の良いギャラドスは、グレイの指示に従って"あまごい"を発動させた。

あちこちに穴が開いている地上階の壁から、不自然に大量の雲が施設内に進入し、屋内にも関わらずグレイとオコトが戦う場所にバケツをひっくり返したような大雨が降り始めた。

ギャラドスの"たきのぼり"は、周囲の水を吸収してより強力な技となり、自身を踏みつけて押さえるゴルーグを転倒させるに至った。

ギャラドスは地を這いながらもゴルーグの体に自身の牙を食い込

ませ、凄まじい怪力によってゴルークを投げ飛ばし、再び「たきのぼり」で水をまとして突撃する。

「屋内に雨を降らせましたか！ 随分と無茶をしますねえ。ポケモンの技というのはある種、魔法のようなもので、物理法則よりも優先される自然の理ことわりなどと言っていたポケモン研究者がいましたが、言いかえで妙ですねえ！」

オコトは楽しそうに興味深そうに言葉を発した後、再びネンドールとゴルークに向かって指示を始める。

グレイは次なる作戦を指示する。

「ビビ、狙撃はもう止めだ、麻痺をまき散らしに行ってくれ！ 姐さんは「タマゴうみ」で自分を回復、その後でレパとビビの盾となって一直線にアヒル野郎に突撃！ レパは隙を見て攻撃！」

オコトは、「あまごい」で強くなったギャラドスの対策のためにネンドールとゴルークに意識を割いているため、ポリゴン2への指示を出していない。グレイにとってはチャンスであった。

ハピナスは「タマゴうみ」で自身の体力を回復し、後ろにビビヨンとレパルダスを隠してポリゴン2に向き直った。

「よし姐さん、スマンが行ってくれ！」

グレイの号令を合図に、ハピナスは後ろにビビヨンとレパルダスを隠したままポリゴン2へ一直線に迫る。放たれる「チャージビーム」による電気の束は「メガトンパンチ」の拳の一撃で砕き、進路上に漂っている「でんじほう」の電気の塊はハピナスがその体で受け止める。

電気の塊がハピナスに当たり、轟音を伴いながら電気が弾け飛んでハピナスにダメージを与えるが、怯むことなくハピナスは進み続ける。

「よし今だ！」

ハピナスがポリゴン2に十分に近づいたタイミングで、グレイは合図を送った。

ハピナスの後ろから、ビビヨンとレパルダスが素早く飛び出す。レパルダスは「みだれひっかき」による連続で繰り出される強力な引っ掻き攻撃でポリゴン2にダメージを与える。ビビヨンは、レパルダスと敵のポリゴン2がもつれ合う場に、「しびれごな」による麻痺効果のある粉をまき散らした。

ビビヨンのまき散らした粉がレパルダスと敵のポリゴン2に降り注いだ。

これにより、ポリゴン2は麻痺して動きが鈍くなった。一方レパルダスは特性じゅうなん、により麻痺状態にならない。

動きが鈍くなった敵のポリゴン2に対し、ビビヨン、ハピナス、レパルダスの3体が一斉に攻撃する。

ふとグレイは、ハピナスもポリゴン2と同様に動きが鈍くなっていることに気がついた。

（姐さん、麻痺してるのか……？ 相手の電気技をくらった影響か、ビビの「しびれごな」に巻き込まれたか、まあどっちでも関係ないがな……）

「姐さん、こっちに戻ってこい！ アヒル野郎の相手はビビとレパに任せろ！」

グレイの帰還命令により、ハピナスは戦場を離れてグレイの元に帰っていく。

グレイは、自分の隣に戻ってきたハピナスを1回モンスターボールに戻し、再びモンスターボールから出した。

特性しぜんかいふく、というモンスターボールに戻ることによって状態異常が治るという不思議な特性をもつハピナスは、この一連の動作

によって麻痺を回復した。

ポケモンを入れ替える訳でもなく単にモンスターボールに戻して再び出すという行為は、通常のポケモンバトルではルール違反である。しかし、ポケモンバトルではないこの戦いにはルールなど無いのである。

「さあ姐さん、引き続き頼むぜ」

グレイの指示で、ハピナスは再びポリゴン2を殴るべく戦場に戻っていった。先ほどの無理な突撃によりハピナスの体力は減っているが、ポリゴン2の方が先に倒れるとグレイは判断した。

現在、敵のポリゴン2に対してグレイ側は、ビビヨン、レパルダス、ハピナスの3体がかかりで攻撃している状況である。

（とりあえず、ポリゴンとか言うアヒル野郎は何とかなりそうだな）
そう思ったグレイは、全く放置していたギャラドスの方に意識を向けることにした。

ギャラドスの方へ視線を向けたグレイは、驚きの光景を目の当たりにすることになった。

ギャラドスは、無抵抗にネンドールとゴルグの攻撃を受けていた。

ゴルグがギャラドスを蹴り上げ、"シャドーパンチ"で殴るが、ギャラドスは抵抗しない。

先ほどは遠距離攻撃をしていたネンドールは、今はギャラドスに接近した場所に立ち、"げんしのちから"で岩をギャラドスに飛ばして攻撃している。それに対してもギャラドスは動かず、抵抗しない。

ちなみに、ネンドールは強い重力の影響により浮くことができないため、床に立ちながら攻撃している。

「おいKK！ やられたらやり返せよ！ なんで攻撃しねえんだ！？」
ギャラドスが無抵抗に殴られているというという異常な光景を見たグレイは、驚きながらそう叫んだ。

グレイの言葉にも反応しないギャラドスに代わり、オコトがその疑問に答える。

「無駄ですよ。ネンドールの「ふういん」によって、君のギャラドスの動きを封じました。ギャラドスはしばらく動けませんよ……普通はそう簡単に成功する技ではありませんが、トレーナーの指示なく暴れるだけのギャラドスが相手ですのでね」

「ふういん」は、相手の動きを一定時間封じる技である。

「ふういん」で無抵抗となったギャラドスは、ネンドールとゴルグによるリンチによって速いペースで体力を失っていく。

「ビビ！ アヒル野郎の相手は止めて狙撃！」

例えばポリゴン2を倒しても、ギャラドスが倒されてしまっただけは、一気にも不利になる。そう判断したグレイは、相手の意識をギャラドスから外させるためにビビヨンに攻撃命令を出した。

ビビヨンが「むしのさざめき」による音波の衝撃波で、遠くのネンドールとゴルグを攻撃する。

しかしネンドールとゴルグは、ビビヨンの攻撃に対して反応しない。ビビヨンの攻撃でダメージを受けながらも、構わずギャラドスに攻撃を続ける。

「くそっ！ ビビ、近づいて麻痺させろ」

ビビヨンは「しびれごな」を命中させるために、ネンドールとゴルグに向かって飛ぶ。

しかしグレイは失念していた。ゴルグの周りには強い重力がはたらいている事を。ビビヨンは突如、強い重力に押しつぶされて飛ぶことができなくなった。

「ネンドール、ビビオンに"げんしのちから"です」

「やべえ！ ビビ、頑張って防げ！」

地面を這っていて動きが遅いビビオンに向かって、ネンドールが
"げんしのちから"で岩を飛ばして攻撃する。

ビビオンも"むしのさざめき"による音波で、相手の"げんしのちから"で飛んでくる岩に対抗する。しかし、ネンドールの"げんしのちから"は凄まじい威力であり、"むしのさざめき"を打ち破ってビビオンにダメージを与える。

「姐さん、ビビの援護頼む！ レパは守りを捨ててアヒル野郎とにかく攻撃！」

グレイの指示により、ハピナスはポリゴン2と戦うことを止めて、急いでビビオンの方へ向かう。レパルダスは"みだれひっかき"により、ひっかき攻撃を連続で繰り出してポリゴン2に攻撃する。

レパルダスが守りを捨てて攻撃することで、レパルダスとポリゴン2は共に速いペースでダメージを受けていく。

ハピナスが、ビビオンと敵のネンドールの間に割って入った時、ビビオンは既に大きなダメージを受けていた。岩タイプの攻撃は、虫タイプにも飛行タイプにも効果が抜群であるため、ビビオンは岩タイプが二重に苦手なのである。

「姐さんはネンドールを止めろ！」

「ゴルーグ"じしん"です」

ネンドールに向かうハピナス。そこに、ゴルーグが"じしん"を発動した。

ゴルーグの周りには強い重力が発生しており、飛んだり浮いたりできる者は存在しない。敵のゴルーグが放った"じしん"による地面を伝わる衝撃波は、敵のネンドールも巻き込みながら、ビビオン、

ハピナス、ギャラドスにダメージを与える。

衝撃波によって床が激しく損傷し、床にたまっている水が激しく飛び散り、床はますます瓦礫まみれになる。

次の瞬間、「ふういん」の効果が解けたギャラドスが「たきのぼり」を発動して水をまとい、床の水たまりや周囲の雨粒を吸収しながら凄まじい勢いでゴルグに突撃した。

あまりの威力にゴルグは怯んで「じしん」を中断させられ、体勢を崩して転倒した。

「ビビ！ 今！」

転倒したゴルグに向かって、ビビオンが「しびれごな」で麻痺効果のある粉をあまり広がらないように撒いてゴルグを麻痺させた。

さらに、ギャラドスが転倒したゴルグにのしかかりながら「こおりのキバ」による冷気をまとった牙で攻撃する。

「ゴルグ、とにかく「じしん」です！ ネンドールは「だいちのちから」！」

「とにかく攻撃！」

ゴルグは転倒した体勢のまま無理やり「じしん」を発動する。再びネンドールも巻き込んでビビオン、ハピナス、ギャラドスにダメージを与える。

対してグレイは、防御よりも攻撃を指示した。あちこちの地面から土が噴き出しながら、さらに衝撃波も飛び交うという混沌とした状況では回避をしても意味が無いとグレイは考えたのである。

ビビオンは「むしのさざめき」、ハピナスは「メガトンパンチ」でネンドールをそれぞれ攻撃する。ギャラドスはゴルグに襲いかかる。

「KK、「にらみつける」！」

「無駄です。ゴルグ、"てっぺき"」

ギャラドスが「にらみつける」で、ゴルグを睨みつけることで不思議な念を送ってゴルグの防御力を下がった状態にした。しかし直後にゴルグは「てっぺき」で体を硬くして自身の防御力を大幅に上昇した状態に戻した。

ゴルグの防御力を下げてもすぐに打ち消される。さらにギャラドスは、直接的な破壊力をもたない「にらみつける」を何度も使ってくれる訳ではない。相手の防御力を下げて戦うというグレイ方法は失敗に終わった。

少しの間、混沌とした激しい攻撃の撃ち合いが続いた。

しかし、ハピナスは元々ポリゴン2に無理に突撃した時にダメージがたまっており、ビビオンはそもそも打たれ弱いポケモンである。ついにビビオンとハピナスは戦闘不能となって倒れた。

グレイは一瞬、レパルダスと敵のポリゴン2の戦いに目をやった。すると、ちょうどポリゴン2を倒し終わったレパルダスが、ギャラドスに加勢に向かうのが見えた。

現在、場に残っているポケモンは、ギャラドス、レパルダス、敵のネンドール、敵のゴルグ、の合計4体である。

ギャラドスは、先ほどネンドールとゴルグの2体を食い止めていた影響で、大きく体力が減っている。

レパルダスは、ポリゴン2を捨て身で攻撃した影響で、体力が減っている。

敵のゴルグは、「てっぺき」で防御力が大幅に上昇しているとはいえ、ビビヨンの狙撃やギャラドスの激しい攻撃に晒されて、大きく体力が減っている。

敵のネンドールは、ビビヨンの狙撃やギャラドスの攻撃を受けているものの、元々の地力の高さで、「コスモパワー」による防御力と特殊防御力の上昇によって、場にいる4体の中では最も体力が残っている。

状況を確認しながら、 그레이は素早く思考する。

（まずはゴルグを一刻も早く倒して、2対1の有利な場面を作るべきだ。ゴルグを殺す！）

「ゴルグを狙え！ K K たきのぼり」！ レパ「おいうち」！
そう指示した 그레이。

しかし 그레이は、オコトが不敵な笑みを浮かべながらネンドールに何か指示しているのを見て、自身の勘が直観的に何かヤバいと告げているのを感じた。

「レパ！ ネンドールに攻撃！」

何となく焦りながら、 그레이はそう指示した。自分が何に焦っているのかは分からなかった。

그레이の焦った声を聞いたレパルダスは、「おいうち」の標的をゴルグからネンドールに向けた。

直後、レパルダスの「おいうち」による攻撃が、ネンドールから放たれた不気味な魔法陣を打ち消して、ネンドールにダメージを与えるのが見えた。

オコトが驚いた声を上げる。

「君！　なぜぼくが「ふういん」を命じていると分かったのですか？」
オコトの言葉に、逆に 그레이が驚く。

（マジかよあいつ！　「ふういん」なんて指示してたのかよ！）

그레이は、オコトが「ふういん」を指示していることなど知らなかった。直観的に何となく指示して、その結果「ふういん」を止められたのである。論理的な思考回路しか持たないオコトには理解できない現象である。

ゴルーグを集中狙いしては、動きを封じる技「ふういん」をネンドールに使われてしまう。그레이は、ゴルーグとネンドールに對して、1体ずつ分散させて戦わせざるを得なくなった。

ギャラドスとゴルーグ。レパルダスとネンドールが戦うことになった。

「ネンドール「げんしのちから」

「レパ、頑張って避ける！」

그레이には、敵のネンドールの強さが分かっており、自分のレパルダスがともに戦って勝てる相手ではないことも分かっていた。あくまでもレパルダスは、ネンドールの「ふういん」封じの役目であり、ネンドールと1対1の戦いで勝つ必要はないと 그레이は判断していた。

ついに、ギャラドスの猛攻に耐えられなくなったゴルーグが、戦闘不能となって倒れた。それと同時に、ゴルーグの周りの強い重力は消えた。ギャラドスは再び空中へ舞い上がり、ネンドールも浮き始める。

これにより 그레이側は、大きなダメージを負っているとは言え、ギャラドスとレパルダスの2体のポケモンが残り、對してオコト側

はネンドール1体となった。

「KK、存分に遊んでこい！ レパは隙について攻撃、なるべく相手の攻撃は避ける！」

「ネンドール、"げんしのちから"です。その後、左に移動してレパルダスに攻撃」

戦闘狂のギャラドスも、相手の隙を見つけるのが上手なレパルダスも、両者とも 그레이おのおのが細かく指示しなくても戦える者たちである。そのため 그레이おのおのは各々の判断に任せる。

対してオコトは、指示する対象が1体しかないなので、ネンドールに対して細かく指示を出すようになった。

先ほどまで地を這っていたギャラドスは、今までの鬱憤うっぷんを晴らすかのように勢いよくネンドールに飛びかかる。

ネンドールが"げんしのちから"によって岩を浮かせるが、浮かせた岩が飛ばされるよりも早くギャラドスがネンドールに頭突きを食らわせて吹っ飛ばす。

さらにギャラドスは、浮いているネンドールに"こおりのキバ"による冷気の牙でネンドールに噛みつき、そのままネンドールを床の瓦礫に向かって引き倒した。

ネンドールが瓦礫に叩きつけられた次の瞬間には、今度は天井に向かって激しく投げ飛ばされていた。

ネンドールは、崩れかけた地下2階の天井をぶち破り、地下1階部分の壁に激しく衝突した。

オコトの指示により、ネンドールは"だいちのちから"で壁から土を噴出させてギャラドスの目をくらませる。その隙にギャラドスから離れてから"げんしのちから"で浮かせた岩を飛ばしてギャラドスを攻撃する。

岩をぶつけられたギャラドスは、ダメージを倍返しにする勢いで「たきのぼり」で水をまとして激しく突撃してネンドールを壁にめり込ませ、噛みつきながら頭を大きく振ってネンドールを投げ飛ばし、長い胴体の遠心力を利用した尻尾の一撃を叩きつける。

オコトの指示により、ネンドールも攻撃技の合間に頭突きを放ったり、体から独立して動く2つの手で攻撃したりと、肉弾戦を織り交ぜて戦い始める。

ネンドールの隙について攻撃しようと準備していたレパルダスだが、もはやこの激しい戦いに、ダメージを受けない事を重視する守りの姿勢のレパルダスが介入する余地は無かった。

しかし、ギャラドスの体力は減っており、さらにオコトの指示によってネンドールは激しい肉弾戦に何とか耐えている。このままレパルダスが何もせずにギャラドスと敵ネンドールが1対1で殴り合えば、先に倒れるのはギャラドスである。

レパルダスにダメージを受けさせず、なおかつレパルダスを使って戦況を変えたい。

そんな2つの要求を一気に解決する外道な手段を、 그레이は思いついた。

自分の思いついた手段を実行するか一瞬迷うが、 그레이は迷いを振り切って実行を決意した。

「レパ、」すなかけ」！」

そう指示しながら、 그레이は対象を指差した。 그레이が指差した対象はオコトであった。

ポケモンに指示して人間を攻撃させる事は犯罪行為であるが、もはや 그레이には構っている余裕はない。それに、 그레이には2つの言い訳がある。

1つ目は、そもそも先に人間を攻撃してきたのはオコトであること。

2つ目は、"すなかけ"は攻撃技ではないので命に関わる事態にはならず、最悪の場合でも失明に留まることである。

レパルダスは、オコトに向かって"すなかけ"によって大量の砂を発射する。

オコトはレパルダスに背中を向けることで、自身の目を何とか守る。しかし、砂の強い勢いに押されてオコトは倒れ込んでしまう。

ギャラドスが無理やり屋内に降らせた雨のせいで、瓦礫まみれの床には水がたまっており、レパルダスから発射される砂は泥になってオコトに襲いかかる。オコトは素早く起き上がって横に転がることで発射される砂をやり過ぎすが、すぐに狙いをつけたレパルダスから新たに砂が発射させる。

もはやオコトは、ネンドールに指示を出せる状態ではなかった。オコトの指示が無くなったことにより、ギャラドスとネンドールの殴り合いの戦いは、ギャラドスが有利に展開を進めていくことになった。

ギャラドスが有利になり、このままいけば勝てるとグレイは思っていた。

しかしここで、グレイにとって思わぬ誤算が発生することになった。

ネンドールが攻撃のために"げんしのちから"で浮かせた岩を飛ばした。

その時、突如としてネンドールの体が不思議な光に包まれた。

不思議な光が収まった次の瞬間、ネンドールは今までよりも速い動きでギャラドスに攻撃し始めた。さらに、その攻撃も先ほどに比べて明らかに威力が高くなっている。

グレイは知らない事であるが、"げんしのちから"を使うと、攻撃力、防御力、特殊攻撃、特殊防御、素早さ、の5種類の能力が全部一斉に上昇することが、ごく稀にある。

超パワーアップを遂げたネンドールは、劣勢の状況をひっくり返し、ギャラドスにダメージを与えていく。

「KK！ 頼む、"にらみつける"を使ってくれ！ レパも全力で攻撃！」

ネンドールと激しく殴り合いながら、ギャラドスは"にらみつける"でネンドールを睨みつけて不思議な念を送り、ネンドールの防御力を下げた状態にした。

さらにそこへ、守りを捨てたレパルダスが全力で攻撃を開始する。

激しい殴り合いの末、ついにギャラドスは力尽き、戦闘不能となって倒れた。

「負けたよ」

そう言い、オコトは観念した様子で両手を上げた。

ギャラドスが倒れた直後、レパルダスの攻撃によってネンドールも倒れたのである。

今、この場に残っているポケモンはレパルダスだけである。しかし弱ったレパルダスでさえ、身体能力において人間が勝つことはで

きない。

オコトが両手をダルそうに上げながら言葉を続ける。

「さあ、煮るなり焼くなり、好きにすると良い。もっとも、ぼくに攻撃する時に「すなかけ」を命じた君が、ぼくを煮たり焼いたりする覚悟があるとは思えませんがね」

グレイが、オコトを本気で殺したりはできない事は戦いの中でバレている。もし覚悟があれば、オコトを攻撃する時にレパルダスに「すなかけ」ではなく攻撃技を指示して、さっさとオコトを処理して戦いを終われば良かったのである。

自分が殺される訳ないと余裕の態度でいるオコトにムカついたグレイだが、今は先にやることがあった。

「オレは今からイザルと女の戦いに加勢する。レパルダス1体だけでもやれる事はあるはずだ。戦えるポケモンがない無能なお前はここで大人しくしてればいい」

そう言い残し、グレイは戦闘不能となって倒れている自身のポケモンをモンスターボールに回収し、辛うじて残った崩れかけの階段を上って地上階に移動し、イザルを探すことにした。

イザルとナオミを探すために、施設の壁や天井が激しく損傷するなどの戦いの痕跡が残る方向へとグレイは歩いていた。

施設の端の方では、壁や天井はほとんどが崩れ、屋外と言っても差し支えない状況が広がっていた。

「動かないで！！」

突如として聞こえた声に、グレイは思わず立ち止まった。

声のした方向から、イザル、ライフ団のナオミ、さらに手が鎌の

形をしている二足歩行のポケモンが姿を現した。

「……すまん 그레이サン……負けちゃった」

イザルが悲痛な顔で小さくその言葉をもらした。

現在、手が鎌の形をしているポケモンが、イザルの首筋に鎌を当てている状態である。イザルの言葉を聞かなくても、イザルが負けたのだと言うことが 그레이には理解できた。

ライフ団のナオミが口を開く。

「この状況、分かるでしょ？ あなたが下手な動きをすれば、私のカブトプスがこの子の頭と体を分離するわよ？」

그레이は、この場にはいないオコトとは戦いを通じて何となく通じ合い、外法な組織のライフ団とは言えオコトが本気で人を殺すような人間ではないことが何となく分かっていた。

しかし、目の前にいるライフ団のナオミがどんな人間なのか、 그레이には分からない。下手な動きをすれば本気でイザルが殺される可能性も十分あり、 그레이は慎重にならざるを得なくなる。

「分かった……下手な動きはしない。お前の要求は何だ？」

그레이は慎重に、相手を刺激しないように言葉をかける。

「まずは、あなたのレパルダスをボールに戻しなさい。話はそれからよ」

그레이は一瞬躊躇する。 그레이は、密かにレパルダスに相手を攻撃させてイザルを奪還する事を考えていた。レパルダスをモンスターボールに戻せば、いよいよ解決の手段は相手の要求を100%呑むこと以外に無くなってしまう。

「早く」

ナオミの冷徹な声に合わせて、カブトプスの鎌の手がイザルの首に強く押し当てられる。イザルの表情が歪む。

「分かった！ 分かったからやめろ！」

観念したグレイは、レパルダスをモンスターボールに戻した。

ナオミが口を開く。

「オコトはどこかしら？」

「ここにいますよ」

あっちだ……とグレイが、指差す前に、オコト本人が姿を現しながらそう言った。

「あら、生きててよかったわ。その子が1人で歩いてきたから殺されたのかと思ったわ。もしくは、私を見捨てて1人で逃げ出したか」

「ナオミを置いて1人で逃げたりはしませんよ。セキイシ様の退避状況を確認していたんですよ」

ここにきてグレイは、オコトを人質にとっておけばよかったと後悔するが、それはもう遅いことであった。

「セキイシ様の姿はなく、研究データや器具も全て破棄破壊されていました。おそらくセキイシ様は無事に退避したかと」

「そう、なら後は私たちが逃げるだけね」

2人で話しているオコトとナオミに向かって、グレイが口を開く。
「お前たちの要求は何だ？ ……どうすればイザルを解放してくれるんだ？」

グレイの質問に対し、ナオミが答える。

「あなたに対する要求は何も無いわよ。この子は、治安組織に追われた時に保険として人質にしているだけよ」

「そうすると、イザルはお前たちのアジトまで連れていかれることになるのか？」

「そうね、よく考えるとそういう事になるわね。でも、そしたら私たちのアジトがバレちゃうわね……結局はこの子を殺すことになるのかしら？」

殺す。その言葉に焦るグレイ。イザルも顔色を少し蒼くしている。

しかし、そこで口を開いたのはライフ団のオコトであった。

「殺してはダメですよ、馬鹿ですなナオミは！　 그레이君、イザル君、安心して下さい。ここで抵抗しなければ、イザル君の命は絶対に助けますから」

なぜオコトが味方をしてくれるのか分からず、驚く 그레이とイザル。

それはナオミも同じであつたらしくオコトに抗議の言葉を送る。

「ちょっと！　なんでオコトがそっちの肩をもつのよ！？　戦って友情でも芽生えちゃったのかしら？」

「そんな訳ないですよ……ナオミ、よく考えて下さいよ。結局最後に殺されることが分かっているなら、人質がここで抵抗してもしくても利得が変わらないことになります。それでは人質が成り立たないんですよ。ここでは、人質が抵抗しないという選択をした方が人質の利得が高くなる状況設定をしなければ」

「オコトの言うことはいつも難しくて分からないわよ！　じゃあどうすれば良いのよ！？」

「簡単ですよ。メモリーの連中に頼んで記憶を操作してもらえば良いのです。これなら殺さなくて済みますし、この事件に関することを忘れても今後の生活に支障はないでしょう？」

「私……メモリーの連中、苦手なのよね……フェニックスみたいな野蛮さは無いけど、倫理観が無いっていうか……」

「倫理観が足りないのは、ぼくたちリザレクションも同じですよ」
言い終わったオコトは、 그레이の方を向き、 그레이に言葉を発する。

「ぼくたちはこれから引き上げますが、君が追ってこなければイザル君の命は保証しますよ。まあ……イザル君が実際に解放されるまで何日かかるか分かりませんが、死ぬよりは良いでしょう？　しかし

しその前に……グレイ君、レパルダスをぼくたちに渡してもらいましょうか」

「なっ!?!」

グレイは、自分の考えが見抜かれた事に驚いた。

グレイは、ライフ団の2人がイザルを連れて逃げた後、こっそり後を追ひ、レパルダスで隙についてイザルを奪還する事を考えていた。

「君のレパルダスの「ねこだまし」による奇襲は、僕たちの逃亡にとって脅威です。さあグレイ君、早くレパルダスを渡してください。レパルダスを渡さないのであれば、イザル君の命はここまでのモノとなりますよ?」

「ぐっ……」

「何も、君のポケモンを全て渡せと言っている訳ではありませんよ。レパルダスさえ貰えばいいんですよ? 渡すのが嫌なら、レパルダスの入ったボールを崖の下の方に落としても良しとしましょう。後で君が回収できない状況になれば何でもいいですよ」

「くっそ……」

何も解決策は無い。グレイは観念することにした。

「ちょっと待った!?!」

突如、少し間抜けで大きな声が、対峙するグレイと、オコトとナオミの横から聞こえた。

何事かとナオミが横を向いた瞬間、イザルを人質にとっているカブトプスの前に子猫のようなポケモンが1体現れて、カブトプスに攻撃した。

突然の攻撃に怯んだカブトプスに向かって、子猫のようなポケモンは新たな技を放ち、カブトプスを眠らせた。

それと同時に、声の主である男性が、素早くカブトプスの懐に潜り

こんでイザルを奪還した。

「何！？」

突然の状況の変化に驚くナオミに対し、子猫のようなポケモンはナオミとオコトに向かって技を放ち、2人を眠らせた。

「やあ2人ともく危ないところだったね！」

「おっさん！？」

グレイとイザルの窮地を救ったのは、この施設まで一緒に来て、今は仲間を呼びに行っていた頼りない治安組織のトレーナーのコオルであった。

コオルの後から、複数の治安組織のトレーナーがやってくる。

「どうだったかな～！？ 僕のエネコの、"ねこだまし"からの"うたう"の手際！ そして僕の身のこなし！ 戦闘は苦手だけど、奇襲攻撃の初撃と人質の奪還では評価の高い僕だよ！ 見直したかい？」

「ああ、本当に。すげえなおっさん！！」

「……コオルさん、助けてくれて……本当にありがとうございました」

手のひらを返したようにコオルを褒めたり感謝したりするグレイとイザルであった。

24 話目 同盟強攻

「……グレイサン、本当に迷惑をかけて悪かった……ライフ団なんかに負けて、人質にされて……完全にアンタの足を引っ張ってしまったな」

「何とかなった訳だし、もう気にするなよ。別に誰が悪いとかって問題じゃないだろ」

ライフ団のオコトとナオミとの戦闘を終え、グレイとイザルの2人はヒヨワタウンのポケモンセンターに戻ってきた。

ポケモンの体力を回復させ、2人で何となく先のライフ団とのやり取りについての反省会をしている内に、いつのまにか強さについての話題に変わっていた。

「……なあグレイサン、アンタは持ってるジムバッジが2つとか言ってたが、実際はそれ以上の実力を持ってるんじゃないか？ どうやってそんなに強くなった？」

「ポケモンを戦わせてる内に自然に強くなったけどな」

「……そんな当たり前の事は分かっているのさ！ ……どこのバトルクラブに所属してるのかを訊いているのさ！」

ここで、グレイは聞きなれない単語を耳にして、思わず聞き直す。「バトルクラブ？ 何だよそれ？」

そのグレイの言葉を聞き、イザルは呆れの表情を浮かべながら言葉を返す。

「……アンタ、バトルクラブも知らないのか!? ……そんなんで、よくここまで強く……いや、アンタはそういう人間だよな。だんだんアンタの事が分かってきた気がするな」

なに1人で勝手に納得してんだ、と思わず言いたくなったグレイだが、バトルクラブについて情報を引き出すために我慢して説明を促すことにする。

「そのバトルクラブってのは何なんだ？」

「……バトルクラブっていうのは、その名の通り、ポケモンバトルをするために人が集まるクラブのことさ。まあ、バトルができる以外にも、トレーニングルームがあったり、クラブ所属者に向けた講習会があったりと、とにかくポケモンを強くするための設備が整った場所なのさ」

「へえ、でもなあ……ただバトルして強くなりたいだけなら、普通に道端のトレーナー相手にバトルすればいいんじゃないか？」

「……真剣に強くなろうとしてる奴は、実力がついてきたらバトルクラブでバトルするようになるのが普通なのさ。だから、強いトレーナーと数多く戦いたいなら、バトルクラブに所属すれば良いという訳さ。……もっとも、クラブには同じような実力の者が集まりやすいから、本当に強い相手と戦う機会が少なくなるかもしれないかな」

イザルの説明を聞いたグレイは、バトルクラブに魅力を感じた。強いトレーナーが多く集まる場所ならば、戦闘狂のギャラドスの遊び相手も簡単に見つかると思ったからである。

熱心に話を聞くグレイに、イザルが提案をする。

「……興味があるなら、俺と行ってみるかい？」

「本当か？ 案内してくれよ」

「……ああ、分かった。このヒヨワタウンにいる俺の親戚に頼んで、

車で近くのバトルクラブまで送ってもらおう」

「親戚？ お前の親戚がこの町にいるのか？」

「……そうさ、俺は親戚に会うためにヒョウタウンに来たのさ。……そんな事でもなければ、こんな行き止まりの町に用事なんか無いだろ？ ……そう言えばアンタは、何の用でこの町に来たんだ？」

「いや、別に用があって来た訳じゃなくてな……都市間を結ぶ街道を歩いてたら、舗装がロクにされてないボロボロの道があったから、面白そうだからその道を歩いてたらこの町に着いたんだよ」

「……アンタ、暇人なんだな」

「言うな！ 自分でも分かってんだよ！」

イザルの親戚に車で送り届けてもらい、グレイとイザルは、その日の夕方にとあるバトルクラブの前に立っていた。

グレイが看板の文字を読み上げる。

「バトルクラブ『ハーフ・シリアス』第18号支部……『ハーフ・シリアス』っていうのが、このクラブの名前か？」

「……ああ。数多くの支部が各地にあって、トラベル地方では有名なバトルクラブの1つだな。……ハーフ・シリアスの理念は、『アソビ半分、マジメ半分』だ。道端の気楽なバトルとは違う勝敗を気にする真剣なバトルがしたい。だが、別に一流のトレーナー目指してバトルを極めたい訳ではない。趣味の真剣バトル……そういう中途半端な者のために開かれたのが最初らしい」

「じゃああんまり真剣にバトルしてる奴は少ないのか？」

「……そんな事はない。今まで道端でのバトルしか経験が無いアンタから見れば、十分に真剣にやってるように見えるハズさ。それに、

今では一流のトレーナーへの通過点としてハーフ・シリアスを利用する人も多い。……俺もその内の1人さ」

「へえ、でもそれだと、アソビ半分マジメ半分の理念に反するぐらいの強い奴が現れるんじゃないか？」

「……それも心配無用だ。このクラブに所属できるトレーナーは、トラベル地方のジムバッジ所持数が1個から5個のトレーナーだけなのさ。6個目のジムバッジを手に入れば除籍される、つまり卒業という訳さ。……まあ俺の説明を聞くより、とにかく入ってみればいいさ」

イザルに言われ、グレイはとりあえず入ることにした。

グレイは受付でジムバッジを2つ見せ、クラブ会員のイザルの紹介ということでゲストとして中に入るようになった。

グレイは施設の案内図に目を通す。バトルができる場所の他にも、施設内ポケモンセンター、トレーニングルーム、図書館、さらに食事処や簡易的な宿泊施設などもある事が書いてあった。

「ん？」

グレイは、その案内図の中に気になる場所を発見した。

「ワークインフォメーション？　もしかして仕事を紹介してくれるのか？」

「……ああ。バトルクラブにはそれなりに実力あるトレーナーが集まるし、アンタのように金に苦労しながら旅してるトレーナーも多いからな。ポケモントレーナー向けの仕事を紹介しているのさ」

「へえ、興味あるなそれ。まあでも、それは後で見ればいいか」

グレイは、まずは誰かとバトルしたいと思い、とりあえずバトルフィールドが多数設置されているフロアへと足を運ぶことにした。

「あら？ グレイじゃない」

突然に声をかけられ、グレイは声のした方向へ振り返った。

声の主はエレナであった。突然のエレナの登場にグレイは少し驚いた。

「こんな所で偶然ねグレイ。あら、そちらの男の子は？」

エレナがイザルの方に視線を向けながらそう訊ねた。

「エレナ、こいつはイザル、訳あってオレたちよりも年下で旅してるんだ。そしてイザルよ、あいつはエレナだ、オレと同じ町の出身だ」

そう言いグレイは、エレナとイザルが互いに自己紹介する手間を省くために仲介の役割を果たした。

「イザル君……いえ、イザルでいいかしら？ よろしくお願いするわ」

「……ああ、エレナサン。よろしく」

互いに挨拶した後、イザルがエレナに訊ねる。

「……エレナサンは、グレイサンとはどういう関係なんだ？」

「どういう関係？ グレイとはお互いにライバルよ……これで答えになっているかしら？」

「……ライバルか。……なあ、ライバルってどういう感じなんだ？ アイツにだけは負けたくないとか、そういう感情になるのか？」

「そうね……本人の目の前で言うのもアレだけど、グレイにだけは死んでも絶対に負けたくないと思うわ。グレイに負けると、他の誰に負けた時にも感じたことがない程に悔しい気持ちになるの。別にグレイを嫌っている訳ではないのに不思議なのよね」

そのエレナの言葉に、イザルが目を見開いた。

「……俺も昨日グレイサンにバトルで負けて、すごく悔しい思いをしたんだ。……その悔しさで昨日はよく眠れなかった。他の誰に負けた時にも、こんなに悔しいと思ったことはないんだ……なあエレナサン、俺はグレイサンをライバルだと思ってるって事なのか？」

「そうね、アナタはグレイをライバル視していると思うわ。ちなみに、アタシも1週間前にグレイに負けた時、悔しくて2日間くらいロクに眠れなかったわ」

「……そうか、俺はグレイサンをライバルだと思っているのか」

そのイザルとエレナの会話を、グレイは若干引きながら聞いている。

（いやいや……負けた悔しさで眠れないとか、どんだけオレに負けるのが嫌なんだよ！ オレはエレナには何回か負けてるが、悔しさで夜眠れなかったことは流石に無いぞ！？ ……もしかして、実はエレナがオレのことをライバルだと思ってる程には、オレはエレナのことをライバルだとは思ってないのか？ というかイザルがライフ団に負けたのって寝不足が原因なんじゃないか？）

グレイが1人であれこれ考えている時、突如エレナがイザルに提案をし始める。

「ねえイザル、アタシと同盟を組むのはどうかしら？ 打倒グレイ同盟よ」

「……なるほど、敵の敵は味方って訳だな。分かった、その話に乗らせてもらう」

「おい、ちょっと待てお前ら！ 本人の前で堂々と何やってんだよ！？」

知り合い2人の仲を引き合わせたら、突如2人して自分に敵対し始めるという急展開にグレイは驚きを隠せない。

「安心してグレイ。べつにアナタを仲間外れにしてイザルと2人で仲良くなろうとしている訳ではないわ。アナタに勝つために情報交

換をしたり、作戦を練ったりするだけよ」

「いやそれは分かるって！ オレが言いたいのは、お前らだけ同盟組んで不公平だって話！ オレも打倒イザル同盟をエレナと組んだり、打倒エレナ同盟をイザルと組んだりしたいんだが」

グレイのその言葉を聞き、エレナとイザルは顔を見合わせた。

そして再度グレイに向き直り、それぞれ口を開く。

「申し訳ないけれど、アタシはイザルのことをライバルだとは思っていないから、アナタと同盟を組む必要を感じないわ。もちろん、アナタがイザルとどう戦えばいいのか相談したいと言うなら、いつでも相談には応じるわよ」

「……悪いが、俺もエレナサンのことはライバルだとは思っていないな。だからグレイサンと同盟を組む必要は無いと思うな」

「お前らけっこう酷い奴らだな、おい！」

そして、疎外感による寂しさを強がりごまかで誤魔化すために、グレイはつい余計な一言を放つことになる。

「お前ら、『打倒グレイ同盟』なんて言ってるが、要するにオレに負けた奴の集まりってことだろ？ 『グレイ敗者の同盟』に改名した方がいいんじゃないか？」

言い終わってからグレイは後悔した。2人の目つきが怖かったからである。

グレイは冗談のつもりで言ったのだが、普段はクールな態度でも実は極度の負けず嫌いという共通点をもつエレナとイザルにとって、グレイの言葉は聞き流せるものではなかった。

「へえ……ずいぶんと言ってくれるじゃないのグレイ……！」

エレナはイザルと視線を合わせた後、グレイに指を向けながら言い放つ。

「グレイ！ 今からアタシたち打倒グレイ同盟は、アナタに勝負を

挑むわ！ ルールは、アタシとイザルがそれぞれ自分のポケモンを1体ずつと、 그레이が自分のポケモン2体で戦うダブルバトルよ！」イザルも口を開く。

「……もし俺達が負けたら、これから俺達は『 그레이敗者の同盟』と名乗ることにしよう。……だが、俺達が勝った場合には『 그레이勝者の同盟』と名乗ることにする。……当然、 그레이サンにもそう呼んでもらうからな……？」

「いやいや！ さっきの言葉は冗談だから！ 本気にすんなよ！？」冗談で済む内に早く謝ろうと思った 그레이だが、

「 그레이……まさかとは思うけど、この勝負から逃げたりはしないわよね？」

「……逃げた場合は 그레이サンの不戦敗ということになるが？」

エレナとイザルにとって 그레이の言葉は既に冗談で済むものではなかったらしい。 그레이に逃げ道は無い。

「分かった……勝負するからそんな睨むなよ……怖いから、マジで」

バトルフィールドがあるフロアの天井はとても高く、飛行するポケモンが十分に戦えるように配慮されていた。

3人は空いているバトルフィールドを借りて、 그레이と、エレナ&イザルの、それぞれの陣営に分かれて向かい合っていた。

「じゃあ、2人いて有利なアタシたちから先にポケモンを出すわ」エレナはそう言い、モンスターボールを取り出した。エレナの隣のイザルも同じくモンスターボールを用意している。

「頼むわ、アブソル！」

「……リベンジだ、ハガネール……！」

エレナとイザルはそう言い、それぞれ自分のポケモンを繰り出した。

（アブソルにハガネール……やっぱ2人とも戦闘能力に1番自信があるやつを出してきたな）

グレイはどのポケモンで戦うべきか考える。

グレイの手持ちポケモンの中で戦闘能力が飛びぬけて高いギャラドスは決定である。しかし、もう1体をどうするのか、グレイは悩んでいた。

戦闘能力で言えば、ギャラドスの次に強いのはハピナスである。

しかし、直接的な戦闘能力では表せない「ちょうおんぱ」（相手を混乱させる）や「しびれごな」（相手を麻痺させる）などの搦め手を使うビビヨンにも魅力はある。さらにビビヨンはグレイとの絆が深く、グレイの意思を敏感に読み取ってグレイの望む行動をしてくれる。

また、相手に隙があればトレーナーの指示を待たずに攻撃できるレパルダスにも一考の価値がある。特に、ギャラドスが暴れることで戦場の状況が激しく変化することが予想される中では、その価値は高いと言える。

（だが、KKの他に誰を戦いに出したとしても、相手はまずKKと1対2で戦える状況を作るために、もう一方のポケモンを集中的に攻撃して手早く倒そうとするハズだ。集中的に狙われることが分かっているなら、「カウンター」で物理攻撃を倍返しにできて、さらに「タマゴうみ」で体力回復できる姐さんが適任だろ）

グレイはそう考え、ギャラドスとハピナスで戦わせることに決めた。

グレイがギャラドスとハピナスを出した直後、エレナとイザルは

素早く耳打ちで何か情報交換を始めた。ギャラドスとハピナスが覚えていた技を互いに教えあったり、作戦を立てているのだろうとグレイは検討をつけた。

（昨日イザルと戦った時にKKの技は4つとも全部使ったから、Kの最新情報はバレてんだろな。姐さんの技は……どうだろうな？

1週間前にエレナと戦った時に「メガトンパンチ」と「タマゴうみ」は間違いなく使ったな。「カウンター」は……直接決めてはないが、見破られてた感があるから多分バレてる。見せてないのは「うたう」だけか……）

ハピナスの「うたう」（相手を眠らせる技）が、この勝負の重要な要素になるとグレイは感じた。

グレイは自分のギャラドスに視線を移す。戦闘狂のギャラドスは、戦いを始めたくてウズウズしており、その感情は待たされる事によってイライラに変わってきていることがグレイには分かった。

エレナは、そんなギャラドスをちらちら見ながらイザルに耳打ちしている。

（ああ、KKを焦^じらすのも作戦って訳か……その作戦、見事に当たってるよ……こりゃKKに最初から「あまごい」とか「にらみつける」を使わせるのは無理だな……）

人間にもポケモンの技「ちょうはつ」が使えるんだな、などと下らない事をグレイが考えていると、やっとエレナから声かけられる。

「待たせたわねグレイ、じゃあ勝負を始めましょうか。アナタの指示を合図に勝負を始めていいわよ」

「KK、もう攻撃していいぞ、しばらく好きに暴れてくれ」

グレイのGOサインを聞き、ギャラドスは即座にハガネールに向

かって全力で飛び立った。グレイは「好きに暴れてくれ」と言ったが、例えグレイが攻撃以外の指示をしたとしてもギャラドスは一切聞かなかっただろう。

「アブソル、"かげぶんしん"フォームA！　そして"つるぎのまい"！」

「ハガネール、"あなをほる"だ！　地中で"ロックカット"」

エレナとイザルも、それぞれ指示を開始した。

ギャラドスはハガネールに向かって"たきのぼり"で水をまわって全力で突撃したが、ハガネールが地中に逃げたために攻撃は空振りに終わった。

その隙にアブソルは"かげぶんしん"で自身の虚像を作り出し、さらに"つるぎのまい"で自身の攻撃力を大幅に高めた。

ハガネールも地中で"ロックカット"を発動して自身の素早さを大幅に高めた。

「姐さん、全力の"メガトンパンチ"の準備だ」

グレイは、相手がハピナスを集中的に攻撃してくることを予想し、相手の側からハピナスに近づいてくることを想定して技の準備を示した。

ハピナスはいつもよりゆっくりと拳に力を込め始めた。

「アブソル、二刀で攻撃！」

「ハガネール、這い出て"がんせきふうじ"だ！」

エレナとイザルは共に攻撃指示に移行した。

グレイは注意深くアブソルと地中にいるハガネールに意識を向け、ハピナスの全力"メガトンパンチ"を放つタイミングを伺う。

アブソルは、頭の刃で"つじぎり"、尻尾の刃で"サイコカッター"を扱いながら相手に攻撃するべく向かって行く。

ハガネールも地中から這い出て、"がんせきふうじ"で岩を飛ば

して遠距離から攻撃を始めた。

「あれ……？」

グレイは疑問の声をあげた。

アブソルもハガネールも共に、暴れているギャラドスを相手に攻撃を開始した。

アブソルが「かげぶんしん」でギャラドスを惑わしながら、肉弾戦を交えながら「つじぎり」と「サイコカッター」でギャラドスと近距離で戦っている。ハガネールは「がんせきふうじ」で遠距離からギャラドスを攻撃している。

ハピナスが集中狙いされると予想していたグレイは、ハピナスが完全に放置されているこの状況に戸惑っていた。

「姐さん！　「メガトンパンチ」で攻撃！」

グレイは慌てて攻撃指示を出した。

ハピナスは拳に込めた力を一気に解放し、拳を突き出した体勢のままハガネールに向かって勢いよく飛び出した。

ハガネールはハピナスの攻撃を全く避けようとしなかったため、ハピナスの全力の「メガトンパンチ」による拳の一撃がハガネールに直撃した。

しかし、ハガネールは大したダメージを受けた様子はなく、ギャラドスに攻撃を続ける。

ハピナスの攻撃がほとんど効いていないことに驚くグレイに対し、イザルが口を開く。

「……俺のハガネールを物理攻撃で倒そうなんて、無理がある話じゃないかグレイサン？　……俺のハガネールの物理的な防御力の高さを舐めてもらっちゃ困るな。……アンタのギャラドスが物理攻撃で俺のハガネールにダメージを与えられる理由は、タイプ相性が良いのと、単にアンタのギャラドスが規格外なだけさ」

イザルの言葉通り、ハピナスは何度も「メガトンパンチ」をハガネールに放つが、ハガネールは大きなダメージを受けている気配がない。

またハガネールはギャラドスへの攻撃に集中し、ハピナスには攻撃してこないため、ハピナスは「カウンター」を狙うこともできない。

「だったら、姐さん！ アブソルに「メガトンパンチ」だ！」

「……無駄さ。ハガネール、進路を塞げ」

ハピナスは狙いをアブソルに変えるが、「ロックカット」の効果で素早い動きのハガネールがハピナスの進む先を封じるため、アブソルに近づくことができない。

「だったら姐さん、「うたう」だ！」

グレイがハピナスに「うたう」を指示したのを聞き、イザルが慌ててハガネールに「がんせきふうじ」で防ぐように指示するが、それよりも早くハピナスの「うたう」がハガネールに命中した。

ハガネールは眠ってしまった。

「姐さん！ アブソルに「メガトンパンチ」！」

ハピナスは、眠っているハガネールを乗り越えてアブソルの方へ向かう。

現在アブソルは「かげぶんしん」で虚像を作り出している。見かけ上2体いるアブソルの片方を、ギャラドスが追っている。ハピナスはギャラドスが追っている側とは別のアブソルに狙いをつけた。

「アブソル、今！ 二刀で攻撃！」

エレナの指示により、見かけ上2体のアブソルが「つじぎり」と「サイコカッター」を同時に放った。

ギャラドスの「たきのぼり」と、ハピナスの「メガトンパンチ」が、見かけ上2体のアブソルのそれぞれに向かって放たれた。

本物のアブソルは、ハピナスが狙いをつけた方であった。ギャラドスの「たきのぼり」とぶつかり合ったアブソルは消え失せた。

ハピナスの「メガトンパンチ」と、アブソルの「つじぎり」&「サイコカッター」が正面からぶつかり合った。

しかし、ハピナスの「メガトンパンチ」は、アブソルが同時に放つ2つの技の内の1つである「つじぎり」さえも完全に相殺するこ
とができなかった。アブソルの「つじぎり」がハピナスに一方的に
ダメージを与え、同時に「サイコカッター」が放たれてハピナスに
更なるダメージを負わせた。

アブソルの攻撃をともに受け、ハピナスは大きなダメージを受
けてよろめいた。

さらにエレナが指示を出す。

「アブソル、二刀でハガネールを起こして。手加減はいらないわ」
ダメージを受けてよろめくハピナス、追って来るギャラドス、そ
のどちらも無視してアブソルは眠っているハガネールに近づいてい
く。

次の瞬間、アブソルは眠っているハガネールに向かって、頭の刃
から「つじぎり」、尻尾の刃から「サイコカッター」を放ち、同時
に脚の爪でもハガネールを切り裂いた。

突然に強力な攻撃を受けたハガネールは、大きなダメージと痛み
に驚いて目を覚ました。

直後、アブソルを追ってきたギャラドスの「たきのぼり」によっ
てアブソルは派手に吹っ飛ばされた。

しかし、すかさずハガネールが「がんせきふうじ」を放ってギャ
ラドスにダメージを与える。

イザルが、エレナに向かって口を開く。

「……手荒な目覚ましをどうも」

「眠る度^{たび}に手荒く起こすわよ。それが嫌なら眠らせないように戦ってちょうだい」

「……ああ、もう眠らせはしないさ」

再びアブソルがギャラドスの相手をし始め、ハガネールはギャラドスに遠距離から攻撃しつつハピナスの進路を邪魔してハピナスの攻撃がアブソルに届かないように立ち回り始めた。

再びハピナスが「うたう」でハガネールを眠らせようとするが、
「……ハガネール！　「がんせきふうじ」で防げ！」

イザルが素早く指示することで、ハピナスの「うたう」はハガネールの「がんせきふうじ」に一方的に打ち消された。

「がんせきふうじ」によって放たれた岩石は、ハピナスにダメージを与えるだけでなく、岩石がハピナスの身体にまわりついてハピナスの動きを鈍くした。

ハピナスの攻撃はハガネールには効果が薄いため、グレイは何とかしてハピナスの攻撃をアブソルに当てようとしたが、全てハガネールに邪魔されて上手くいかない。そこでグレイは、ギャラドスを動かすことで状況を動かす作戦に切り替える。

「KK！　アブソルじゃなくて、ハガネールを狙え！」

グレイの命令にとりあえず従い、ギャラドスは標的をアブソルからハガネールに切り替え、ハガネールに向かって飛ぼうとした。

しかしエレナはアブソルに指示して、しつこくギャラドスにまわりついて挑発するようにアブソルを仕向けた。

戦闘狂のギャラドスにとって、目の前に存在するアブソルという殴れる対象の誘惑に勝つことは難しい事であった。ギャラドスはグレイの命令をあっさり放棄し、再びアブソルに向かって本能のままに攻撃を加え始めた。

「くっそ！ だったらKK、＂あまごい＂だ！」

グレイは、雨を降らせることでギャラドスに有利な状況を作り出そうと考えた。

しかし、ギャラドスはグレイの指示を無視してアブソルへの攻撃を続ける。ハガネールから＂がんせきふうじ＂で遠距離攻撃されようともお構いなしである。

トレーナーの指示を無視して好き勝手に暴れるギャラドスを見ながら、イザルがエレナに話しかける。

「……ギャラドスが制御不能な内になるべくダメージを与えというアンタの作戦は、どうやら当たりだったようだなエレナサン。……ハガネールそこで＂がんせきふうじ＂！」

「そうね。グレイのギャラドスは……アブソル右にジャンプして二刀！ 暴れ足りない状態ではグレイの言う事をほとんど聞かないから……アブソル左、そのまま攻撃！ その間に倒してしまえばいいのよね……アブソル下がって受け止めて右！」

「……もっとも、指示を聞かない状態でも恐ろしく強いがな。あのギャラドスと対等に戦えるアンタのアブソルあっての作戦だな。……ハガネール、攻撃はギャラドスに向けろ！ ハピナスに惑わされるな！」

「あのハピナスの攻撃を受け止めながら攻撃できるアナタの……アブソルかがんで避けて下から二刀！ アナタのハガネールあってこそその作戦でもあるわよ……アブソルかまわず肉弾戦、今よ二刀！」

現在の状況は、アブソルとギャラドスが至近距離で戦い、ハガネールが遠距離からギャラドスを攻撃し、ハピナスはハガネールに足止めされている。

グレイは、攻撃指示しか聞かないギャラドスを能動的に動かすこ

とはできないため、ハピナスを動かして状況を変えようと努力した。しかし、イザルはハガネールに指示して、ハピナスの動きを適切に対処していた。

ハピナスが「メガトンパンチ」を繰り出した場合は、動きが素早いハガネールが「メガトンパンチ」を身体で受け止める。また、ハガネールが遠距離のギャラドスへ放つ「がんせきふうじ」を中断することもない。

ハピナスが「カウンター」を繰り出した場合は、ハガネールは特に何も対処せず遠距離のギャラドスに攻撃を続ける。当然、受けていないダメージを倍返しすることは不可能なので「カウンター」は不発に終わる。

ハピナスが「うたう」を繰り出した場合は、ハガネールは攻撃技をハピナスに放って「うたう」を一方的に打ち消しつつ、ハピナスにダメージを与えてくる。

グレイの考えは、ハピナスがハガネールにほとんどダメージを与えられないので、ハピナスの攻撃を何とかしてアブソルに当てたいというものであった。しかし、どう頑張ってもハピナスは、「ロックカット」で素早い動きになったハガネールを通り過ぎてアブソルの方へ向かうことはできなかった。

仕方なくグレイは、ハピナスとにかく攻撃するように指示し、ハガネールにダメージを与えることにした。しかし、ハピナスが攻撃し続けても、高い防御力をもつハガネールをすぐに倒すことはできなかった。

しばらく同じ状況——アブソルとギャラドスが至近距離で戦い、ハガネールが遠距離からギャラドスを攻撃し、ハピナスはハガネールに足止めされている——が続いた。

アブソルは、ギャラドスと死闘を繰り広げたことによって体力が減っていた。

しかしギャラドスは、2体がかかりで攻撃され続けたことによってアブソル以上に体力の消耗が激しかった。

（そろそろKKを回復させた方がいいよな……）

そう考えたグレイは、ハピナスの「タマゴうみ」をギャラドスに使うために、再度ギャラドスを動かそうと決意する。

「KK、今度はアブソルじゃなくてハガネールと戦ってくれ！ 姐さんは「タマゴうみ」の準備！」

グレイの指示に対し、再びエレナはアブソルに指示して、しつこくギャラドスにまとわりついて挑発をするようにアブソルを仕向けた。

しかし今度は、ギャラドスはアブソルの誘いには乗らず、ハガネールの方に向かって飛び立った。アブソルはギャラドスを追った。

「……ハガネール、「アイアンテール」で吹っ飛ばせ。……その後「あなをほる」」

イザルはハピナスを指差しながら、そうハガネールに指示した。

ハガネールは「アイアンテール」で鋼鉄の尻尾をハピナスに横方向から激しく叩きつけ、ハピナスを吹っ飛ばした。

さらにハガネールは「あなをほる」で地中に逃げてギャラドスの攻撃をやり過ごした。

標的を失ったギャラドスに、追ってきたアブソルが攻撃を再開した。これによって再びギャラドスは標的をアブソルに移し、アブソ

ルを攻撃し始めた。

吹っ飛ばされたハピナスは、「タマゴうみ」をギャラドスに使うためにギャラドスに近づくが、ハガネールが「あなをほる」で地中からハピナスを強襲してそれを防ぐ。

「イザル、もうハガネールの援護は無くてもギャラドスを倒すことはできるわ。イザルは今の内にハピナスを攻撃して」

「……ああ分かった」

短い作戦会議の後、イザルは、積極的にハピナスを攻撃するようにハガネールに指示した。

指示を受けたハガネールは、「タマゴうみ」をギャラドスに使うとするハピナスに向かって「アイアンテール」で攻撃し始めた。

ハピナスは何とか「アイアンテール」を避けてギャラドスに近づくが、今度は「あなをほる」でハガネールに地中から強襲されて足止めされた。

ついに、ギャラドスは戦闘不能となって倒れた。

グレイは、ハピナス1体だけで、アブソルとハガネールの2体を相手に戦わなければならなくなった。

ハガネールは、ハピナスの攻撃ではほとんどダメージを与えられない強敵である。

またアブソルは、1回の攻撃チャンスで「つじぎり」と「サイコカッター」の2つを同時に放つことができ、さらにその攻撃の威力も非常に高い強敵である。先ほどハピナスが「メガトンパンチ」を放った時には、同時に放たれる技の片方である「つじぎり」ですら打ち消すことができなかった。

戦力差は非常に大きく、グレイには絶望的な状況であった。

「……ハガネール、"アイアンテール"」

「アブソル今よ、二刀！」

ハガネールが"アイアンテール"で鋼鉄の尻尾を叩きつけてハピナスを攻撃する。

ハピナスは"カウンター"で、受けたダメージをハガネールに倍返しにしたが、その直後にアブソルの"つじぎり"と"サイコカッター"が同時に放たれ、さらにアブソルは脚の爪でハピナスを切り裂いた。

ダメージの限界を超え、ハピナスは戦闘不能となって倒れた。

エレナとイザルが互いに片手でハイタッチしている光景を見て、グレイは自分が負けた事を実感した。

（ああ……負けた時のこの感覚、悔しさ、何か久しぶりだな……）

グレイは、自分が何故エレナをライバル視していたのか思い出した。単純に、負けた時に悔しかったからである。

エレナには1週間前に勝ち、イザルには昨日勝っている。勝ちが続いたからこそ、グレイは負けることの悔しさを忘れていた。

グレイはバトルを振り返り、どこかに勝ち筋は無かったのかと考える始める。

（姐さんがKKを回復させるために"タマゴうみ"を使おうとした時から、ハガネールは姐さんに積極的に攻撃してきた。その時に"タマゴうみ"を諦めて"カウンター"でハガネールを早めに攻撃していれば結果は変わったか……？）

さらに様々な考えがグレイに浮かぶ。

（いや、そもそも最初の方で姐さんがハガネールに足止めされた時に、姐さんの「うたう」でハガネールを釘付けにすれば良かったんだ！ 姐さんが「うたう」を使った時だけはハガネールはKKへの攻撃を止めて姐さんに攻撃してたどろ！ 当然、姐さんはダメージを一方的に受けるだけだけど、その間だけはKKはアブソルと1対1の状況になってたどろ！ だから、姐さんの「うたう」でハガネールを釘付けにして、KKがアブソルを倒すのを待てば良かったんじゃないか？）

さらにグレイは、エレナとイザルが自分のポケモンを労^{ねぎら}っている様子を見ながら思う。

（もしオレが、KKに言う事を聞いてもらえるくらい立派なトレーナーだったら……もしKKが最初からオレの言う事を聞いてくれれば……この勝負にも勝てたかもしれないな……）

自分のギャラドスと言う事を聞かないポケモンである、という事で今まで納得していたグレイだが、自分のギャラドスを従わせたいという思いが不意に浮かんだ。

なお、グレイが敗北したことによって「打倒グレイ同盟」は「グレイ勝者の同盟」へと改名されようとしたが、グレイの必死な懇願により、エレナとイザルの2人とそのポケモンの飯代を奢るという代償によってその改名は回避された。

イザルが巨体のポケモンを複数所持していたため、飯代による出費はグレイの想像を大きく上回った。

25話目 猛獣使い

「……なあ 그레이サン、俺の親と戦ってみないか？」

「お前の親あ！？ 何でだよ？」

イザルの突然の提案に、 그레이は理解が追いつかずに聞き返した。

그레이が、エレナとイザルの共同戦線に敗れた日の夜。

그레이とイザルの2人は、バトルクラブ「ハーフ・シリアス」の宿泊施設に泊まることになった。

相部屋になった2人が会話している中で、突如イザルからその話が出たのである。

聞き返した 그레이に対し、イザルが真意を説明する。

「……俺の親がジムリーダーだっていう話はしたよな？ 그레이サンは今、ジムバッジを2つ持ってるんだろ？ だから、3つ目のジムバッジを俺の親から奪ったらどうだ、という話さ」

「ああ、そういう話。確かにバッジが増えれば得だし、悪い話じゃないんだが……イザルの親がやってるジムってどこにあるんだ？ ここから近いのか？」

「……近くはないな。……だが、もし 그레이サンが俺の親とのバトルを望むなら、ジムのスタッフがここまで車で迎えに来てくれると言っている」

「マジか。そりゃ嬉しいけど、何でそんな話になったんだ？ もしかして、イザルの親って暇人なのか？ ジムに人が来なくて廃業寸前とかなのか？」

「……アンタ、失礼な奴だな！？ そんな訳あるか！ ……俺の親

がアンタの事が気になるって言うから紹介しただけさ」

「お前、いつの間に親と連絡とってんだよ？」

「……1日に1回は親に連絡するようにしてるのさ。……連絡をよこさないと親がうるさいからな」

「へえ」

「……それで、どうするグレイサン？ 俺の親と戦うか？ ……嫌なら別に断っていいんだぜ？」

「いや、せっかくだし戦わせてくれよ」

「……分かった、そう伝えておく。……明日の朝に、この施設に迎えに来てくれるらしい」

「ああ分かった。ところで、お前の親は強いのか？ オレが勝てそうな相手か？」

「……それは意味の無い質問だな。……ジムリーダーは、挑戦者のジムバッジの所持数に相応の強さのポケモンしか出さないことになっているからな。……ジムバッジ3個所持程度の実力があれば勝てる」としか言いようがないな」

「ああそう……」

「……ちなみに、俺の親は猛獣使いのジムリーダーだ。獣のポケモンを扱っている以外には特徴が無いからな、タイプ相性で対策することは無理だ」

「猛獣使いねえ、確かに対策のしようがないな」

「……対策ができないジムとか、ジムとしてどうなんだって感じはするがな」

その後、会話は少し続いたが、明日のことを考えて2人とも早めに寝ることにした。

翌日の早朝。

グレイとイザルがハーフ・シリアスの入り口に向かうと、そこには既にジムのスタッフを名乗る者が立っていた。

「……じゃあ、せいぜい頑張ってくれ。……まあ、アンタの実力はジムバッジ2つ程度のものじゃないと思うから、アンタが負けることは無いと思うけどな」

「あれ？ お前は来ないの？」

「……なんでわざわざ自分の親に会わないといけないのさ？ 俺は今日はこのクラブの図書館にこもることに決めているんだ」

「ああ、そうなの」

イザルをその場に残し、グレイを乗せた車はバトルクラブ「ハーフ・シリアス」を後にした。

3時間程車に揺られたグレイは、サアドシティという都市にあるポケモンジムに到着した。

ジムの前では、イザルの母親を名乗る人物がグレイを迎えてくれた。

「へえ、あなたがグレイちゃんかい！ 息子がお世話になったみたいねえ。さあさあ、どうぞこっちへ」

イザルの母親は、グレイをジムの奥に案内しながら、グレイに次々と喋りかけてくる。

「ねえグレイちゃん？ うちの息子って外ではどんな感じなんだい？

ちゃんと他のトレーナーと会話できてるのかい？ 意地っ張りな性格は旅に出ても治らないのかねえ？ グレイちゃんはどうやって

息子と仲良くなったのさ？ あの子素直じゃないから全然友達できないのに珍しいね 그레이ちゃん？」

「ああ……えっと……」

1つ質問された事に対して 그레이が答えようとすると、答える前にさらなる新しい質問が追加される。どちらの質問から答えようか迷っていると、また新しい質問が追加される。こうして未回答の質問が際限なく溜っていく。

그레이は、圧倒的な手数 of 質問攻めを受け、バトルする前から疲れを感じ始めた。

（イザルが帰りたいがらない理由がなんとなく分かった気がするな……）

やかましく喋り続けるイザルの母親を見て、그레이はそう思った。

그레이はイザルの母親に案内されて、ジムの奥にあるバトルフィールドにたどり着いた。

直方体のバトルフィールドは、地面は平らに整備され、遮蔽物や障害物が一切なかった。お互いに逃げ場がない闘技場を思わせるバトルフィールドであった。

「じゃあ、早速バトルしちゃおうか！ ルールは3対3のシングルバトルだね」

「ん？ あなたと戦うんですか？」

「そうよ？ 私がこのサアドシティのポケモンジムでジムリーダーを務めているサンヨウだよ。どうもよろしくね！」

イザルの母親は、自らをジムリーダーのサンヨウと名乗った。

その事に 그레이は驚き、口を開く。

「猛獣使^{こわもて}って聞いてたから、てっきり強面な男がやってるもんだと……イザルの親父がジムリーダー^{こわもて}をやってるかと思ってました」

「あっははは！ 女にだって猛獣使いは務まりますとも！ じゃあ、審判の用意もできたみたいだし、握手してからバトルを始めちゃおっか」

「ああ、どうもよろしくー」

グレイは握手しようとしてサンヨウの右手に視線を移し、一瞬動きを止めた。

そのグレイの様子に、サンヨウが口を開く。

「何か気づく事があった？」

「あの、右手の……小指はどうしたんですか？」

サンヨウの右手には、指が4本しか存在しなかった。本来は小指が位置する部分には、指の代わりに痛々しい傷があった。

「右手の小指はね、ポケモンに噛み千切られちゃったのよ」

サンヨウはそう明るく答えた。

「その手の傷、隠したりはしないんですか？」

「本当なら隠すのが良いんだろうけどね。私は猛獣使いのジムリーダーとして、ポケモンは時に人を傷つける場合があるって事を伝えなきゃと思ってね！ もちろん人とポケモンは互いに助け合う存在さね。でも、ポケモンは人にとって危険な存在という側面もあることを伝えたい訳よ」

サンヨウのその言葉を聞きながら、グレイは自分のポケモンがもつ脅威について何となく考える。

（オレがKKに噛み殺される場面は簡単に思いつくけど……よく考えればビビだって「むしのさざめき」で岩を砕けるんだもん。ビビがふざけてオレに軽く攻撃しただけで、オレは命に関わるんだよな……）

真剣な顔で考え込むグレイに、サンヨウが声をかける。

「でもねえ、ポケモンを怖がっちゃダメなのよ。ポケモンを怖がっ

ていたらポケモンに舐められちゃうからね！　どんな怖いポケモンでもかわいいと思えるくらいの度胸と余裕を持つことが大事さね！
さあ、さっさとバトルしちゃうか？」

「さあ、私の1体目のポケモンはこの子だよ！」

そう言い、ジムリーダーのサンヨウは、カエンジシを繰り出した。カエンジシは、炎タイプかつノーマルタイプの、おうじゃポケモンである。四足歩行でライオンのような姿をしており、体は黒色や茶色で、首周りは炎のような立派な鬣たてがみで覆われている。

グレイは知らない事であるが、カエンジシというポケモンは、♂の個体は首周りに立派な鬣たてがみをもち、♀の個体は頭から長く伸びた鬣をもつ。ジムリーダーのサンヨウが繰り出したカエンジシは首周りに鬣をもつ個体であるため、性別は♂である。

グレイは、サンヨウが繰り出したカエンジシを見ながら考える。
（明らかに炎タイプな見た目だよな。だったら水タイプのKKが有利だな）

グレイはモンスターボールを取り出し、ギャラドスを出した。
現れたギャラドスは圧倒的なオーラと鋭い目つきによってカエンジシを威嚇し、カエンジシの攻撃力を下げた。

さて、今まで様々なトレーナーと道端でバトルを重ねてきたグレイは、慣れた手つきでポケモンを繰り出してバトルを始めようとしていた。しかし、ここでグレイはある事に気がつく。

（あれ？　これってジム戦だよな……？　オレって戦わせるポケモン決めたっけ？）

サンヨウは先ほど、『ルールは3対3のシングルバトル』と言った。当然、戦いに参加するポケモンの数は、それぞれの側で3体ず

つということになる。

現在サンヨウが身につけているモンスターボールの数は3個であるため、サンヨウは戦いに参加させる3体のポケモンは既に決まっていることが分かる。

しかし 그레이の現在の手持ちポケモンは、ビビヨン、ギャラドス、レパルダス、ハピナス、の計4体である。

（これって相手のポケモンを見てから、こっちの戦わせる3体を選んでいいってことか？）

그레이が考えていると、サンヨウが声をかけてくる。

「いい勝負にしようね 그레이ちゃん！ 楽しみにしてるからね」

サンヨウは既にバトルを始める姿勢を見せていた。

（まあ挑戦者へのハンデって事なんだろう）

わざわざ確認するのが面倒に思えた 그레이は、適当にそう思うことにしたのであった。

審判の合図により、그레이とジムリーダーのサンヨウの戦いが開始された。

「KK、突撃！」

그레이の声と同時に、ギャラドスは「たきのぼり」で水をまといながらカエンジシに向かう。

「マロンちゃん、＼にほんばれ！」

サンヨウに「マロンちゃん」と呼ばれたカエンジシは、技＼にほんばれ＼を発動し、周囲の空気を極端に乾燥させた。

その隙にギャラドスが「たきのぼり」を直撃させてカエンジシを吹っ飛ばした。炎タイプをもつカエンジシに、水タイプの攻撃技「たきのぼり」は効果が抜群である。

しかし、＼にほんばれ＼による空気の極端に乾燥により、ギャラ

ドスの「たきのぼり」は威力を弱められていた。カエンジシはそれほど大きなダメージを受けることはなかった。

吹っ飛ばされて不安定な体勢のカエンジシに向かって、ギャラドスが太い尻尾を使ってカエンジシを薙ぎ払おうとする。しかし、
「マロンちゃん、おんがえし！」

サンヨウの指示により、カエンジシは「おんがえし」を発動して、後ろ脚から凄まじい威力の蹴りを繰り出してギャラドスの尻尾を弾き飛ばした。

「KK、もう1回「たきのぼり」だ！」

「マロンちゃん、おんがえし！」

ギャラドスは「たきのぼり」で水をまわってカエンジシに突撃する。しかし、周囲の極端な乾燥により威力は弱められる。

対してカエンジシは「おんがえし」を発動して、今度は凄まじい威力の頭突きを繰り出してギャラドスの「たきのぼり」を相殺した。

「おんがえし」ってどういう技なんですか？」

激しい戦闘中にも関わらず、グレイはジムリーダーのサンヨウに質問を飛ばした。

ジムリーダーのサンヨウは、嫌な顔をすることなくグレイの質問に答える。

「おんがえし」って技は、ポケモンがトレーナーのために全力で相手を攻撃するって技だよ。ノーマルタイプの技さ。よく見ておきなね！……マロンちゃん、おんがえし」を見せてやりな！」

サンヨウの指示でカエンジシは「おんがえし」を発動し、今度はギャラドスの胴体に向かって激しく噛みついた。

カエンジシの「おんがえし」を見ながら、グレイはさらに質問を続ける。

「蹴ったり、頭突きしたり、噛みついたり……結局「おんがえし」

ってどういう攻撃なんですか？」

「トレーナーへの感謝を力に変えて攻撃する技だから、そのポケモンによって攻撃方法は様々だね！ マロンちゃん、＼おんがえし＼！」

「KK、＼たきのぼり＼だ！」

ギャラドスの＼たきのぼり＼による水をまとった突撃と、カエンジシの＼おんがえし＼によるタックルがぶつかり合い、相殺された。

「＼にほんばれ＼で弱めても勝てないかい。だったら、マロンちゃん＼ふるいたてる＼！」

カエンジシは＼ふるいたてる＼を使い、自身の攻撃力と特殊攻撃力を上昇させた。

その間にギャラドスは＼たきのぼり＼の勢いでカエンジシを押しつぶし、さらに胴体で殴りつけたり尻尾で叩きつけたりしてカエンジシを痛めつけた。

カエンジシは相当なダメージが蓄積されているのか、少しフラフラしている。

「さあ、やられた分を返しなマロンちゃん、＼おんがえし＼！」

ギャラドスの＼たきのぼり＼と、カエンジシの＼おんがえし＼がぶつかり合った。

カエンジシの攻撃力が上昇している影響により、今度はカエンジシの＼おんがえし＼がギャラドスの＼たきのぼり＼を撃ち破ってギャラドスに一方的にダメージを与えた。

ダメージは受けたものの、ギャラドスは素早くカエンジシに近づいて、技ではない肉弾戦による攻撃を加え始める。

「よしKK！ そのまま倒しきれ！」

「そうはいかないよ！ マロンちゃん、＼ワイルドボルト＼だ！」

＼ワイルドボルト＼は、電気をまとって相手にぶつかるという、電気タイプの攻撃技である。

サンヨウの指示によりカエンジシは、殴りつけてくるギャラドスに向かって「ワイルドボルト」で電気をまとってぶつかった。

電気タイプの攻撃技は、水タイプにも飛行タイプにも効果抜群である。水タイプかつ飛行タイプのギャラドスは、二重に苦手である電気技を受けたことで大きなダメージを受けた。

（おいおい！ 炎タイプかと思ってたら電気技も使えるのかよ！）
グレイは驚きながら、カエンジシの使う「ワイルドボルト」への警戒を強めた。

「さあマロンちゃん、もう1度「ワイルドボルト」！」

「KK！ 「たきのぼり」！」

ギャラドスが「たきのぼり」で水を、カエンジシが「ワイルドボルト」で電気を、それぞれ体にまとって互いに激突した。

威力で勝ったのはギャラドスの「たきのぼり」であった。結果としてカエンジシが一方的にダメージを受けることになった。

（「たきのぼり」と「ワイルドボルト」のぶつかり合いなら勝てるのか！ だったら……）

「KK、とにかく「たきのぼり」で攻めろ！」

グレイは、これ以上ギャラドスが「ワイルドボルト」を受けないように警戒し、「ワイルドボルト」の競り合いで勝てる「たきのぼり」を連打するように指示した。

「だったらマロンちゃん、「おんがえし」！」

しかし、今度サンヨウは「おんがえし」を命じた。

ギャラドスの「たきのぼり」と、カエンジシの「おんがえし」がぶつかり合った。その結果カエンジシの「おんがえし」が打ち勝ち、ギャラドスにダメージを与えた。

（「たきのぼり」を連発すれば相手の1番ヤバイ「ワイルドボルト」は防げるが、相手の「おんがえし」とぶつかったら勝てない……だ

が肉弾戦を展開すれば、激しいやり取りの中で「ワイルドボルト」を受ける可能性がある……どっちにしても大きなリスクがあるな。何か他に、リスクがない良いアイデアはないのか？」

グレイは少し考えた後、腹を決める。

（やっぱKKにはゴリ押ししかないな）

決心したグレイは口を開く。

「KK、肉弾戦だ！ 暴れてくれ！」

自分のギャラドスが守りには向かない性質であることを考えたグレイは、相手の「ワイルドボルト」の恐怖を無視して突撃を命じた。ギャラドスはカエンジンと技をぶつけ合った後、素早くカエンジンに接近する。カエンジンが牙で抵抗してくるが、ギャラドスは力づくでカエンジシの頭を潰してカエンジンに襲いかかった。

「そんなに近づいちゃって、いいのかい？ マロンちゃん「ワイルドボルト」！」

「吹っ飛ばせKK！」

カエンジンが「ワイルドボルト」で電気をまとい始めるが、それよりも早くギャラドスは頭突きでカエンジシを突き飛ばし、太い尻尾で薙ぎ払ってカエンジシを横に激しく押し出した。

「ワイルドボルト」を空振りしたカエンジンに向かってギャラドスが「たきのぼり」で突撃した。無防備な状態で攻撃を受けたカエンジシは強く吹っ飛ばされた。

「KK！ 「あまごい」！」

ギャラドスがそろそろ暴れることに満足した頃ではないかと考えたグレイは雨を降らせる技「あまごい」を指示した。

しかし残念ながらギャラドスはグレイの指示を無視してカエンジンに突撃した。

「今だよマロンちゃん！ 「ワイルドボルト」！」

突っ込んでくるギャラドスに対して、カエンジシの「ワイルドボルト」が直撃した。

審判のホイッスルが鳴り響いた。戦う者のどちらかが戦闘不能となった時の合図である。

ギャラドスはカエンジシの「ワイルドボルト」を受けたことで大きなダメージを受け、ボロボロの状態で浮遊していた。戦闘不能となったのはカエンジシであった。

「どういことだ……？」

攻撃をした側のカエンジシが倒れている理由が分からず、 그레이 はそう呟いた。
つぶや

それに対してジムリーダーのサンヨウが答える。

「「ワイルドボルト」は、攻撃の反動で技を使った者にもダメージが返ってくる負担の大きい技なのさ。マロンちゃんは体力がかなり削られていたからねえ、反動に耐えられなかったんだろうさ」

現在の状況

グレイ側

ギャラドス「呼び方：KK」 （大ダメージ）

？

？

ジムリーダー・サンヨウ側

カエンジシ「呼び方：マロンちゃん」 （戦闘不能）

？

？

場の状態

・ "にほんばれ" による極度の乾燥

「それにしても、ギャラドス対策のためにメンバーに加えていたマロンちゃんが、まさかギャラドスに倒されちゃうとはねえ……さすがだよ 그레이ちゃん」

「ん……？」

サンヨウの言葉に引っかけを感じた 그레이 は、サンヨウに聞き返す。

「ギャラドス対策？　なんでオレがギャラドスを持ってるって知ってるんですか？」

「そりゃ息子に聞いたからさ！　 그레이 ちゃんが強いギャラドスを連れてるって息子が言ってたもんだから、まずはギャラドスをどうにかしないとダメだと思ってね、炎タイプでギャラドスをおびき出して電気技の奇襲で倒そうと思ってたのよ」

サンヨウの発言に対して、 그레이 は思わず問いかけをする。

「え……？　公式戦でジムリーダーが挑戦者を対策していいんですか……？」

「ん……？」

2人の間に少しの沈黙の時間が流れた。

自分が何か変な発言をしたのかとグレイが思い巡らしていると、突如サンヨウが衝撃の言葉を放つ。

「あれ？　言ってなかったっけねえ？　これは正式なバトルじゃないよ」

「は？」

理解が追いつかず、グレイは間抜けな声をあげた。

「正式なバトルじゃない……？　どういう事ですか？　ジムバッジと無関係って事ですか？」

「いやいや、グレイちゃんが勝てたら、ちゃんとジムバッジはあげるよ！　ただし今回の私のポケモンは、ジムバッジ所持数が2個の挑戦者と戦わせるポケモンじゃなくて、私がプライベート用に育てているポケモンたちって事さ。まだ育てている途中で未熟だけど、そこらのトレーナーのポケモンには負けにくいくらいの力をもってるから安心するといいよ」

「安心して……そもそも、なんでバッジ2個の挑戦者用のポケモンじゃないんですか？」

「だってグレイちゃんって強いんでしょ？　ジムバッジの数2個の挑戦者と戦わせるポケモンじゃ絶対に物足りないと思ってねえ」

「いやいや、なんでオレをそんなに強いトレーナーだと思ってんですか！？」

「だって息子が『グレイってトレーナーは俺と同じくらい強い』なんて言ってたからねえ。

あの捻くれ者でいいっぱりな息子が言う『同じくらい』なら、息子よりも遥かに強いトレーナーに違いないと思ってねえ」

「いやいやいや！　本当に同じくらいの強さですって！　あんたの

息子はそこまで他人を認められない程の子供じゃないですよ」

「そうかねえ……？ ああ、捻くれ者でいいじゃない、泣き虫なイザルがねえ……？ うちの息子もグレイちゃんを見習って、しっかり者になって欲しいんだけどねえ……」

猛獣使いとしてポケモンの扱いが上手だからといって、自分の子供の成長度合いを見極められる訳ではないのだとグレイは感じた。それと同時に、自分の成長を全く親に認めてもらえないイザルに少し同情の念が湧いたグレイであった。

サンヨウが口を開く。

「まあいいさ。ジムバッジってのは死闘の末に手に入れるものさ。今は余計な事は考えずに全力で私を倒しにきな！ KKって言ったか、グレイちゃんのギャラドスも次のバトルを今か今かと待ち構えているからねえ」

そう言い、サンヨウは新たなポケモンを出した。

サンヨウが2体目に繰り出したポケモンは、ライボルトであった。ライボルトは、ほうでんポケモン。電気タイプである。四足歩行で、全体的に青色の体毛で、垂直に逆立った黄色の鬣たてがみをもっている。その鬣は常に放電しており、パチパチと小さな火花を作り出している。

（あからさまに電気タイプなポケモンだな……これもギャラドス対策ってことなのか？）

ギャラドスが二重に苦手とする電気タイプのライボルトを見て、グレイはそう思った。

「じゃあ早速いくよ！ レモンちゃん、＼かみなりのキバッ！」
サンヨウにレモンちゃんと呼ばれたライボルトは、電気を帯びた

牙でかみついて攻撃する電気タイプの攻撃技「かみなりのキバ」を発動した。

「「たきのぼり」だKK！」

対してギャラドスは、水をまとい、迫るライボルトに突撃した。

先ほど、既に戦闘不能となったカエンジシが使った「にほんばれ」の効果は続いており、ギャラドスの「たきのぼり」は、不自然な空気の乾燥によって威力を弱められた状態でライボルトの「かみなりのキバ」と正面からぶつかり合った。

それでも威力ではギャラドスの「たきのぼり」が打ち勝ち、ライボルトを後ろに弾き飛ばした。

「このまま正面突破は無理そうだね！　ならレモンちゃん、「エレキフィールド」！」

サンヨウの指示により、ライボルトは「エレキフィールド」を発動した。ライボルトの足元を中心に電気が広がっていき、バトルフィールドの地面全体に電気がかけめぐった状態になった。

ライボルトが「エレキフィールド」を発動している間に、ギャラドスはライボルトに接近して、「たきのぼり」を直撃させてライボルトを強く吹っ飛ばした。それと同時に、グレイはギャラドスに指示を送る。

「KK！　「あまごい」」

「レモンちゃんは「かみなりのキバ」！」

ギャラドスはグレイに従い、「あまごい」を発動して屋内のバトルフィールドに無理やり不自然な雨雲を発生させて雨を降らせた。

ギャラドスの攻撃によって強く飛ばされたライボルトは、ギャラドスが「あまごい」を発動している隙に「かみなりのキバ」を届かせることはできなかった。

再び、ギャラドスの「たきのぼり」と、ライボルトの「かみなり

のキバ"がぶつかり合い、そして再びギャラドス側の攻撃が威力で上回った。先ほどのまでの空気の乾燥は雨によって打ち消され、さらにギャラドスの"たきのぼり"は周囲の雨を吸収して威力が上がった状態になっていたのである。

（このままKKで2体目も倒せるんじゃないか？ いけるだろこれ！）

そう思い、グレイはさらにギャラドスに突撃を命じた。

「グレイちゃんのギャラドスは本当に強いねえ。こりゃあ最後の手段しかないねえ。レモンちゃん、静電気だよ！」

サンヨウが指示した瞬間、ギャラドスと殴り合っていたライボルトは突如動きを止め、無抵抗にギャラドスの攻撃を受け始めた。

ギャラドスは、無抵抗のライボルトの後ろ脚を"こおりのキバ"による冷気の牙で捕え、勢いをつけて地面に叩きつけ、地面からの跳ね返りの勢いを利用してさらに地面に叩きつける。

ゴムマリで遊ぶかのようにライボルトを地面に何度も叩きつけていたギャラドスだが、一瞬ギャラドスの体が硬直して動きが止まった。

「今！ "おんがえし"！」

その隙にライボルトは"おんがえし"を発動し、後ろ脚から凄まじい蹴りを繰り出してギャラドスの"こおりのキバ"を相殺し、脱出を果たした。

「よし！ レモンちゃん"かみなりのキバ"！」

「KK、"たきのぼり"！」

再びギャラドスとライボルトの技のぶつかり合いが始まるかに思えた。しかし、ギャラドスは一瞬動きが止まり、僅かな隙ができる。

「レモンちゃん！ 避けてから攻撃！」

隙をつかれ、ギャラドスの"たきのぼり"はライボルトに避けら

れて空振りした。

その直後、ライボルトの「かみなりのキバ」による帯電した牙の一撃がギャラドスに直撃した。

ギャラドスは戦闘不能となった。

現在の状況

グレイ側

ギャラドス「呼び方：KK」 （戦闘不能）

？

？

ジムリーダー・サンヨウ側

カエンジシ「呼び方：マロンちゃん」 （戦闘不能）

ライボルト「呼び方：レモンちゃん」 （大ダメージ）

？

場の状態

・「あまごい」による降水

・「エレキフィールド」によるエレキフィールド

「何か質問があれば受け付けるよ？」

グレイが疑問に満ちた表情をしているのを見て、サンヨウはそう言った。

「KKがいつの間にか麻痺してたんですけど、何したんですか？」

ギャラドスが倒される直前、ギャラドスが硬直して体の動きが止まった場面を思い出しながら、グレイはそう質問した。

「おや、麻痺してる事には気づいていたのかい。ギャラドスが麻痺したのは、レモンちゃんの特性「せいでんき」によるものさ。特性「せいでんき」は普通、接触してきた相手をたまに麻痺させるものだけどレモンちゃんは特別だね。特別な素質をもちながら特殊な訓練をやることで、特性「せいでんき」で相手を狙って麻痺させることができるようになったのさ」

「狙って麻痺させる……？　じゃあ、そのライボルトに触っただけで麻痺するって事ですか！？」

「そうなるのが理想なんだけどね、そう上手くはいかないさ。今の所は技を使うことと能動的に特性を発動させることが両立できないからね。技を使わないで集中している時だけ、触れた相手を確実に麻痺させる事ができるのさ」

そのサンヨウの言葉を聞き、グレイは次なるポケモンを考える。（確かレパは麻痺しない特性をもっていたハズ……姐さんも一度ボールに戻れば麻痺を治せる……でも、そもそも触らなければ麻痺しないならビビに狙撃させるのもありか……）

さらにグレイは、先ほどライボルトが使った技「エレキフィールド」の影響で、バトルフィールドにかけめぐり電気に注目し、サンヨウに質問する。

「さっき「エレキフィールド」って技使ってましたけど、何なんですかこれ？」

「これは電気技の威力を上げて、さらにポケモンが眠らなくなる特殊な電気網さ。ああ、ただしその効果を受けられるのは地面に接しているポケモンだけだよ」

サンヨウの答えを聞き、グレイは再び思考する。

（つまり今のライボルトは電気技が強くなって、さらに眠らない状態ってことか。打たれ弱い上に電気が苦手なビビはこの状態じゃあ一撃で倒される可能性あるし、姐さんの「うたう」が効かないのもつらい。ここはレパシかないな！ 相手は弱ってるし速攻で片付けよう）

結論を出したグレイはレパルダスに戦わせることにした。

「レパ！　「ねこだまし」で「みだれひっかき」！」

グレイの指示の下、レパルダスは「ねこだまし」でライボルトを攻撃して怯ませ、その隙に「みだれひっかき」で超強力な連撃を繰り出してライボルトにダメージを与えた。

相手のライボルトはあっさりと戦闘不能になった。

「麻痺しなかったところを見ると、グレイちゃんのレパルダスは特性じゅうなん、だね」

倒れたライボルトをモンスターボールに戻しながら、サンヨウが

そう口にした。

「もしかしてライボルトが攻撃してこなかったのは、レパの「ねこだまし」で怯んだ訳じゃなくて、さっき言ってた確実に麻痺させる特性を使ってたんですか？」

「最初はもちろん怯んでたよ。「ねこだまし」はそういう技だからね。でも倒れる直前は怯みから回復して動ける状態だったけど、あえて攻撃しないでレモンちゃんの特別な特性を発動させてたのさ」

サンヨウの言葉に対し、グレイは少し挑発気味に言葉をかける。

「せっかく特性を決めたのに、オレのレパルダスの特性がじゅうなんで残念でしたね」

「そうでもないさ。特性かるわざ、じゃない事が分かっただけでもグレイちゃんのレパルダスの底が知れたさ」

サンヨウは余裕の態度でその言葉を返した。

『底が知れた』というサンヨウの若干の挑発も気になるが、それは無視してグレイは情報収集のために言葉を返す。

「もし特性かるわざ、だったら何だったんですか？」

「それはこれから私が使うポケモンを見てくださいれば分かることさ」

そう言い、サンヨウは最後のモンスターボールを取り出した。

「さあ頼むよ！ ブドウちゃん！」

サンヨウが繰り出したポケモンは、レパルダスであった。

グレイのレパルダスと同じく、紫色で四足歩行の豹のように引き締まった体と、猫のようなかわいい頭をもっている。

グレイとサンヨウ。互いに同じポケモンで対峙することとなった。

「猛獣使い……レパルダス……？」

サンヨウが繰り出したポケモンを見て、グレイは思わず呟いた。

猛獣使いのジムリーダー・サンヨウ。その人がプライベートで育

成中のポケモンということで、最後には恐ろしい風貌の獣が出てく
ると思っていたグレイ。しかしグレイの想像とは違い、最後に出て
きたのはレパルダスであった。

「確かに猛獣と言われればそうだけど、なんか猛獣使いの想像とは
違うポケモンですね」

そのグレイの言葉に、サンヨウは笑いながら答える。

「おやおやグレイちゃん。レパルダスを舐めてるね？ 言っとくけ
ど、さっき戦ったマロンちゃんとレモンちゃんの2体を倒してやっ
と半分って感覚だよ？ ブドウちゃんはそのくらい強いよ」

サンヨウの言葉と表情から嘘は感じられない。しかしグレイはい
まひとつ相手のレパルダスを警戒することができない。

「レパ、"みだれひっかき"」

「ブドウちゃん！ "ねこだまし"！」

レパルダス同士のバトルが始まった。

グレイのレパルダスが"みだれひっかき"を当てようとサンヨウ
のレパルダスに近づく。

しかし次の瞬間、サンヨウのレパルダスが"ねこだまし"でグ
レイのレパルダスを攻撃して怯ませた。

その光景を見てグレイは気づくことがあった。

（今……"ねこだまし"を同時に2発放った……？ いや見間違え
か？）

気を取り直してグレイは指示を下し、サンヨウも指示をする。

「レパ！ とにかく"みだれひっかき"で攻撃！」

「ブドウちゃん、こっちも"みだれひっかき"！ 格の違いを見せ
つけな！」

グレイのレパルダスとサンヨウのレパルダスは、互いに密着して

「みだれひっかき」で相手を攻撃しあった。「みだれひっかき」による圧倒的な手数 of の引っ掻き攻撃は、時にぶつかり合い、時に相手の体へと届いてダメージを与えた。

しかし、同じ技であるにも関わらず、両者の攻撃の手数には大きな隔たりがあった。

（なんだよあの攻撃速度！？ あり得ねえだろ！）

サンヨウ側の「みだれひっかき」は手数でグレイ側を圧倒し、より速いペースでグレイのレパルダスの体力を削っていたのである。

現状をどうにかしようと、グレイはあわてて指示する。

「レパ！ なんとか「すなかけ」を当てろ！」

「無駄さ！ ブドウちゃん、「ダメおし」！」

サンヨウのレパルダスが、グレイのレパルダスに向かって「ダメおし」を繰り出した。

グレイのレパルダスは強く宙を舞い、地面に落ちて動かなくなった。戦闘不能となったのである。

現在の状況

グレイ側

ギャラドス「呼び方：KK」 （戦闘不能）

レパルダス「呼び方：レパ」 （戦闘不能）

？

ジムリーダー・サンヨウ側

カエンジシ「呼び方：マロンちゃん」 （戦闘不能）

ライボルト「呼び方：レモンちゃん」 （戦闘不能）

レパルダス「呼び方：ブドウちゃん」 （小ダメージ）

（最初の「ねこだまし」……最後の「ダメおし」……やっぱりどちらも2発分の攻撃を出してるように見えたな……。今思えば相手の「みだれひっかき」の連続攻撃の頻度も、レパの「みだれひっかき」の2倍だったような気が……）

考えるグレイに向かってサンヨウが声をかけてくる。

「どうだいグレイちゃん！ 私のレパルダスは強いだろう？ おや、そんな考え込んだ顔してどうしたんだい？ 何か気づく事でもあったかい？」

『気づく事でもあったか』。そのサンヨウの言葉は、サンヨウのレパルダスには何か強さについて重大な秘密があるという事を物語っているようにグレイには思えた。

グレイは、自身で導き出した1つの仮説の答え合わせをするべく、サンヨウに訊ねる。

「サンヨウさんのレパルダス……技を2つ同時に繰り出してませんか？」

「おや、2回攻撃に気づいたかい！ さすがだよグレイちゃん！ 気づいたグレイちゃんには特別にタネ明かしをしようかねえ」

そう言い、サンヨウは自分のレパルダスの強さについて語り始める。

「まずブドウちゃんは特性かるわざ。かるわざは普通、身軽な状態の時に素早さが上がるっていうものだけど、ブドウちゃんはそれだけじゃないのさ！」

先ほど、ライボルトが通常の特性よりも強力な能力をもっていた例があるので、グレイは自然とサンヨウの言葉に真剣に耳を傾けることになった。

「元々特別な才能を持っているブドウちゃんに、さらに特殊な訓練を施していてね。ブドウちゃんの「かるわざ」は、体の動きが速くなるだけじゃなく、攻撃頻度も上がるのさ」

「攻撃頻度が……上がる……？」

「そうさ。まあ分かりやすく具体的に言えば、ブドウちゃんは特性かるわざ発動時には2回攻撃ができるのさ！ 最初に放った「ねこだまし」も2回分の攻撃をしたし、「みだれひっかき」も普通の2倍の手数で攻撃できる。もちろん最後の「ダメおし」も2回分の攻撃が当たっているはずさ！」

技を2回分同時に使っているという考えが当たっていた事が判明したグレイ。しかし重要な事は、その相手をどう倒すかという事であった。

攻略の手がかりを掴むために、グレイはサンヨウに質問を飛ばす。

「その特性かるわざが発動したら2回攻撃できるって言ってましたけど、その特性が発動する条件は何なんですか？」

「特性かるわざの発動条件は、ポケモンが身軽な状態であることさ。逆に身軽じゃない状態っていうのは、ポケモンに木の実を隠し持たせていたり、アクセサリを身につけさせている時さ」

いまいち欲しい情報が得られなかったグレイは、もはやヒントを聞き出す構えではなく、答えを聞き出す構えで質問を投げる。

「その2回攻撃を防ぐ方法は？ どうしたら2回攻撃を防げるんで

すか？」

「防ぐ方法は無いよ」

そう即答した。サンヨウはさらに言葉を続けて言う。

「ブドウちゃんには何も隠し持たせてないし、余計に伸びた体毛も頻繁に切っている。常に身軽な状態、常に2回攻撃できる状態さ」

「マジかい……じゃあ、あれだ！　せめて覚えてる技を教えて下さい！　そのレパルダスが覚えてる技！」

「おやおや、いくらジムリーダー相手とは言え対戦相手にそれを聞くかい？　まあいいさ、特別に教えてあげようかねえ。ブドウちゃんの技は、「ねこだまし」、「みだれひっかき」、「ダメおし」、「おんがえし」この4つだよ。何か知らない技はあるかい？」

「ダメおし」は知らないです」

「そうかい。「ダメおし」は悪タイプの攻撃技でね。直前にダメージをくらっているポケモンに命中させた場合、威力が大幅に高まるという特殊な効果もあるね」

「え……？　じゃあ「ダメおし」も2回連続攻撃できるってことは……2回目の攻撃はいつも威力が高い……？」

「その通りさ、よく気づいたね！　さて、もう聞きたいことはないかい？」

サンヨウから得た様々な情報を整理するべく、グレイは思考する。（「ねこだまし」は最初に1発だけ出せる技だからもう関係ない……おそらく「みだれひっかき」が主なダメージ源だろう、レパもそうだから多分同じハズ……「ダメおし」も2連続ヒットしたら半端じゃないダメージを受けるな……オマケにどんな体勢からでも繰り出せる「おんがえし」まである。……でも、どれも近距離の物理攻撃ばかりだ。狙撃に徹すればあるいは……！）

グレイはモンスターボールを取り出し、その手に握った。

「頼むぜ、ビビ！」

その言葉とともに、グレイは最後のポケモン、ビビヨンを出した。振り向いて視線を合わせてくるビビヨンに対し、グレイは冗談っぽくジェスチャーを送り始める。両手で蝶の形を作り、その場所を猫の手の形を作った右手で切り裂き、最後に突き立てた親指で首を横に斬った。

ビビヨンは苦笑いのような表情をグレイに返した。ジェスチャーは『攻撃されれば死ぬ』の意味をもっており、防御力の弱いビビヨンが相手レパルダスの攻撃を受けたら一撃で倒れるという警告のメッセージである。

グレイは再び相手レパルダスを見ながら考える。

（相手は悪タイプのポケモン……ビビの「むしのさざめき」は効果抜群だが、「サイケこうせん」は全く効かない……つまり肉弾戦ができないビビは攻撃方法が「むしのさざめき」1種類だけってことになるな。あとは「しびれごな」と「ちょうおんぱ」をどう使うかだ。そう、相手はレパと違って特性「じゅうなん」じゃないから麻痺させることができるのを忘れたらダメだな）

思考を終え、グレイは使うべき戦法を決定した。

審判の合図により、お互い最後のポケモンによるバトルが開始された。

「ビビ、狙撃だ！ 近づかれたら死ぬと思え！」

グレイの指示でビビヨンは「むしのさざめき」を遠くのレパルダスに向けて発射した。

「ブドウちゃん、「おんがえし」で防ぎな！」

レパルダスは、飛来する「むしのさざめき」による音の衝撃波に

向かって「おんがえし」を繰り出して攻撃した。「おんがえし」は飛来する「むしのさざめき」の威力を完全に消滅させた。

「ブドウちゃんの2発分の「おんがえし」の方が威力が強いようだね！　じゃあブドウちゃん、相手に近づくんのだ！」

レパルダスはビビヨンに向かって走り始める。ビビヨンが「むしのさざめき」を放つ度にレパルダスは「おんがえし」で打ち消した。障害物が全くない闘技場のようなバトルフィールドには逃げ場がなく、レパルダスとビビヨンの距離はすぐに縮まっていく。

「ビビ、壁作戦だ！」

グレイの指示に対して、ビビヨンは戸惑いの表情を返してきた。その理由に気づいたグレイは早口で言葉を投げる。

「ビビ、大丈夫だ。そのレパルダスはレパとは違って「しびれごな」が効くんだよ！」

グレイの所持するレパルダスの特性は「じゅうなん」であるため「しびれごな」は効果が無い。そのためビビヨンは『レパルダスには「しびれごな」が効かない』という刷り込みがあったのである。

グレイが間違った指示を送っている訳ではないと分かり、ビビヨンは壁作戦を行うために急上昇して空中静止する位置を高くした。

「なんだい、空に逃げたって無駄だよ？　レパルダスは全力でジャンプすればバトルフィールドの天井まで届くからね。グレイちゃんもレパルダスを連れてるなら、そのジャンプ力は分かるだろう？」

「逃げただけじゃないんだ、これが。まあ見てて下さいよ」
グレイはビビヨンを指しながらそう言った。

サンヨウが視線を移すと、ビビヨンが高い位置で「しびれごな」を発動して麻痺効果のある粉をばらまいている光景が目映った。

「そんなもの当たらないさ。ブドウちゃん、後ろに避けるんだ！」
サンヨウの指示でレパルダスは一旦後退して「しびれごな」が降

ってくると推測される場所から退いた。ゆっくりと落下する“しびれごな”が地面に落ちるまでには十分な時間があった。

改めて攻撃指示を出そうとするサンヨウは再びビビヨンに目を移し、そして眩^{くら}く。

「なるほどねえ、『しびれごな“の壁”』って訳かい」

ビビヨンは“しびれごな”の後ろに陣取り、ゆっくりと落下する“しびれごな”に合わせてビビヨンもゆっくりと地面に移動し、常にレパルダスとビビヨンの間に“しびれごな”が存在するように位置取りをしていた。

“しびれごな”がある程度地面に近づいた頃、ビビヨンは上に向かって新たな“しびれごな”をまき、素早く急上昇して新たな“しびれごな”の後ろに陣取り、再び同じ動きを始めた。

「なるほどねえ、その動きを繰り返せば壁はいつまでも維持できる訳かい。じゃあその戦法の強度をお手並み拝見といこうかねえ。ブドウちゃん、粉に向かって“おんがえし”！」

レパルダスが、ビビヨンとその途中にある『しびれごな“の壁”』に向かって力強く高くジャンプしながら“おんがえし”を発動する。

“しびれごな”自体には威力は無いため、レパルダスの2発分の“おんがえし”によって『しびれごな“の壁”』は跡形もなく散り散りになり消滅した。

しかしその直後、“おんがえし”による攻撃を終えたレパルダスに、ビビヨンの“むしのさざめき”が直撃した。

レパルダスは大きなダメージを負い、また空中で踏ん張りがきかないこともあって“むしのさざめき”に押し出されてビビヨンとの距離が開いた。

「よし！ ビビ、狙撃だ」

「“おんがえし”だよ！ そのまま近づきな！」

ビビヨンから放たれた「むしのさざめき」を「おんがえし」による引っ掻き攻撃で打ち消したレパルダスは、そのままビビヨンに向かった走る。

「ビビ、壁作戦！」

ビビヨンは再び高い位置で「しびれごな」を発動して麻痺効果のある粉をばらまいて、レパルダスとの間に『「しびれごな」の壁』を作り上げた。

「またそれかい？ 麻痺しないためには攻撃技で『壁』を壊さなきゃなんない。でも攻撃技を『壁』に使うとビビヨンからの攻撃を防げない。よく考えられてるさ。……でも、少し甘いんじゃないかい？

さあブドウちゃん、「みだれひっかき」だよ！」

今度レパルダスは、「みだれひっかき」を発動しながら高くジャンプして、ビビヨンとその途中にある『「しびれごな」の壁』に迫った。

レパルダスによる超「みだれひっかき」によって『「しびれごな」の壁』はかき消された。その直後、空中のレパルダスに向かってビビヨンの「むしのさざめき」が飛来する。

しかし、レパルダスの「みだれひっかき」による連続攻撃はまだ続いており、『「しびれごな」の壁』に続いて「むしのさざめき」も完全に相殺した。

互いに技を使い終わった直後、空中のレパルダスは最初のジャンプの勢いを維持したままビビヨンに飛びかかるが、ギリギリの所でビビヨンはそれを避けた。

レパルダスが着地する瞬間のタイミングを狙ってビビヨンが「むしのさざめき」を放った。不安定な姿勢のレパルダスに「むしのさざめき」が迫る。

「「おんがえし」だよブドウちゃん！」

しかし隙を狙った「むしのさざめき」は、レパルダスの「おんがえし」による尻尾の薙ぎ払い攻撃によって相殺された。

一歩間違えば今の時点で負けていたとグレイは思った。レパルダスの飛びかかり攻撃を避けることができたから良かったものの、もし捕らえられていたらビビオンは地面に引きずり下ろされ、次の瞬間にはレパルダスの強力な2回攻撃で倒されていただろうと。

『「しびれごな」の壁』による、麻痺かダメージかの2択を強いる戦法は、相手の連続攻撃という手段によって2択の枠を超えられて失敗。

さらに着地の無防備な瞬間を狙った一撃も、どんな体勢でも繰り出すことができる「おんがえし」によって防がれて失敗。

グレイは新たな戦法を求められる状況になってしまった。

しかし、そう簡単に新しい戦法など思いつくものでもない。

グレイはその場しのぎで、とりあえず『「しびれごな」の壁』を再びビビオンに作らせることにした。

先と同様、レパルダスは超「みだれひっかき」で『壁』と「むしのさざめき」を強引突破しつつビビオンに飛びかかった。

しかしグレイが何も打開策が無いことを察してか、ビビオンは守りに徹する姿勢を見せていたためレパルダスの攻撃をギリギリで回避することができた。

さらにビビオンは、レパルダスが着地する瞬間の無防備な体勢を狙って「むしのさざめき」を放った。しかしそれも先と同様、レパルダスの「おんがえし」で防がれた。ビビオンは上昇しつつ再び「しびれごな」を発動し、壁作戦を継続する。

その様子を見つつグレイは思う。

（オレがタイミングとか指示しなくても、壁作戦とか、着地の隙を狙うとか、勝手にやってくれるんだよなビビは。結構ビビって学習能力高いよな。さっきもレパルダスには「しびれごな」は効かないんじゃないかって抗議の視線を送ってきたし……何ならオレが間違った指示を出しても勝手に修正してくれるんじゃないか？ ……あ！）

突如として作戦を思いついたグレイは、作戦のタイミングを計るためにバトルの状況に目を移す。

状況は、レパルダスの飛びかかり攻撃を危なっかしく避けたビビヨンが、レパルダスの着地の瞬間を狙って「むしのさざめき」をちようど発射した瞬間であった。

「ビビ、後ろに逃げろ！ 壁際までいっばいだ！」

グレイの指示により、ビビヨンはバトルフィールドの壁際まで後退してレパルダスとの距離をとった。

「壁際に逃げたって無駄さ！ フィールドの端なんかじゃ、これ以上の逃げ場は無いからねえ！」

サンヨウの言葉を見無視し、グレイは指示を続ける。

「ビビ、狙撃！」

「「おんがえし」で防ぐ！ そして近づきなブドウちゃん！」

ビビヨンから発射される「むしのさざめき」は、やはりレパルダスの「おんがえし」によって防がれる。

互いに攻撃技を使った直後、レパルダスは素早くビビヨンの方へ走り、距離を詰めた。

壁際のビビオンがレパルダスの進攻を止めるために「むしのさざめき」を発射するが、その度にレパルダスは「おんがえし」でそれを防いだ。

（まだ育成途中で未熟とは言え、やっぱりグレイちゃんには強すぎたかねえ？ ブドウちゃんを戦わせたのはマズかったかも知れないねえ……）

サンヨウは目の前の状況を見ながらそう思った。

ついにレパルダスはビビオンに接近し、ビビオンを完全に追い詰めた。

（これで「みだれひっかき」で詰みだね。……1発ごとにそれなりの威力がある引っ掻き攻撃が連続で放たれる。しかもブドウちゃんはそれを2倍の手数で放てるんだ。……例えグレイちゃんのビビオンが「むしのさざめき」で抵抗したとしても延命にしかないねえ。……でも、手を抜くつもりはないさ。全力でグレイちゃんのビビオンを潰しにいくとしようかね）

ここでサンヨウは、バトルの最後にグレイがどのような態度でどのような指示をするか注意深く見ることにした。

グレイに限った話ではない。全ての挑戦者に対してサンヨウは、バトルで負けが決まった時にトレーナーがどのような指示を出すのか注意深く見ることにしていた。

（「むしのさざめき」で「みだれひっかき」に抵抗して、少しでも戦う時間を長くする努力をするかい？ あるいは奇跡を信じて、普通では絶対にやらないような突拍子もない指示をするかい？ それとも素直に負けを認めて、もう何も指示をしないかい？ グレイちゃんはどれなんだろうねえ……？）

その選択に優劣は無く、どの選択が良い悪いという話でもない。しかし、どれを選んだかによって、このポケモンバトルをどのように解釈しているのか分かることもある。

ポケモンバトルが絆を深める儀式と考える者ならば、例え勝てなくても少しでも長く戦う努力をするかも知れない。あるいは楽しむ場と考える者ならば、最後に突拍子もないことを試すかも知れない。勝利を求める者ならば、勝つ見込みのないバトルに指示することを無駄と考えるかも知れない。

「さあブドウちゃん、"みだれひっかき"だよ！」

指示したサンヨウは、グレイの下す指示を注意深く聞いていた。

「ビビ、混乱させろ！ "サイケこうせん"だ！」

グレイが指示した"サイケこうせん"とは、超能力的な光線を相手に発射して攻撃し、さらに命中した者をたまに混乱させることもあるエスパークタイプの攻撃技である。

この土壇場で下されたグレイの指示に対し、サンヨウは素早く指示内容を変更する。

「まだだ、ブドウちゃん！ それを受け止めてから攻撃開始！」

レパルダスは悪タイプのポケモンであるため、エスパークタイプの攻撃技"サイケこうせん"はレパルダスには全く効かない。つまり、当たっても害の無い"サイケこうせん"に向かってわざわざ"みだれひっかき"を当てて威力を相殺させる必要は無い。

手加減なく相手と戦うサンヨウは、最も速く相手を倒せる方法を選んだのである。

"みだれひっかき"の繰り出しを遅らせながらビビヨンの技に突っ込んで行くレパルダスを見ながら、サンヨウは思う。

（なぜ"サイケこうせん"なんだい？ 延命狙いの抵抗か、奇跡を信じた突飛な行動か、何とも判断し難いね^{がた}）

しかし次の瞬間、サンヨウはレパルダスの様子を見て異変に気づく。

（いや！ あれは「サイケこうせん」じゃないね！？）

レパルダスはフラフラしながら明後日の方向に向かって攻撃をしている。その状態を見たサンヨウは、レパルダスが混乱しているのだと察することができた。

「よし、やれビビ！」

グレイのその言葉を合図に、ビビヨンから「むしのさざめき」が次々と発射され、レパルダスに襲いかかった。

（こりゃあ私の負けだねえ）

そう思いつつサンヨウはふと考える。

（負けが決まって指示を放棄した私は、バトルをどう解釈してるんだろうねえ？）

自身のレパルダスが戦闘不能となって倒れた時、サンヨウは自らの問いに対する答えを見つけることになる。

（きっと私にとってバトルは、相手がどんなトレーナーか知るための行為なんだねえ。相手がジムバッジを渡すに値するトレーナーだと分かれば、私にとってバトルの目的は果たされている訳だ。こりゃジムリーダーの職業病かも知れないねえ……）

結果

グレイ側

ギャラドス「呼び方：KK」（戦闘不能）

レパルダス「呼び方：レパ」 （戦闘不能）
ビビヨン「呼び方：ビビ」 （無傷）

ジムリーダー・サンヨウ側

カエンジシ「呼び方：マロンちゃん」 （戦闘不能）
ライボルト「呼び方：レモンちゃん」 （戦闘不能）
レパルダス「呼び方：ブドウちゃん」 （戦闘不能）

サアドシティのジム。そのジムリーダーであるサンヨウに勝った証、ビーストバッジを受け取りながらグレイは最後の場面に何が起こったかサンヨウに解説した。

曰く、「ビビに「ちょうおんぱ」を指示する時はいつも「混乱」と指示している」と。さらに、「ビビは『レパルダスに「サイケこうせん」が効かない』ということを知っていた」と。だからこそ、あの場面の指示でビビヨンは「ちょうおんぱ」を選んだとグレイは語った。

グレイは表情には出さないものの、ビビヨンとの絆を確かめられたことが嬉しい様子でそれを語った。

「ところでグレイちゃん。ビビヨンやレパルダスとはうまく付き合い合っているけど、ギャラドスの扱いには随分と苦労してるんじゃないかい？」

サンヨウの指摘に、グレイはうなずきながら答える。

「そうなんですよ。でも、それでも良いんじゃないかって最近は思ってます。ポケモンと心が通じ合わなくても、とりあえず利害関係を築いてポケモンを制御できればいいんじゃないかって感じで。：そう言えばサンヨウさんのポケモンは、3体とも「おんがえし」を覚えてましたね。感謝を力に変える技でしたっけ？ 凶暴なポケモンとも利害関係じゃなくて心を通じ合わせられるんですね」

そのグレイの言葉に、サンヨウが反応した。

「いや、それはむしろ逆さ。私は利害関係を築いてポケモンを制御するために「おんがえし」を覚えさせているのさ。私がポケモンに「おんがえし」を覚えさせる理由は3つあってね……」

右手の親指をたたんで4のポーズを作りながらそう語るサンヨウ。小指が欠けているので、立っている指の数は3本である。

「まず1つは、私への感謝を強制させることさ。凶暴なポケモンってのはね、多かれ少なかれ強い力を求めているもんさ。ところが、私に感謝してないポケモンは「おんがえし」で強い威力を出すことができない。私に感謝する方がより強くなれるって状況を作っているのさ」

サンヨウはさらに語り続ける。

「2つ目の利点は、「おんがえし」の威力の強さでポケモンとの信頼関係が計れることさね。そして最後3つ目は……これはジムリーダーの中でも意見が分かれる所だからオフレコでお願いしたいんだけどね……いいかい？」

グレイは、他の人には言わないとサンヨウに約束して続きを催促した。

サンヨウは少し小さい声で話し始める。

「「おんがえし」の利点3つ目。……それは、万が一ポケモンに反逆されて襲われた時に、少しでも脅威を減らすためさ。トレーナー

に襲いかかるような状態のポケモンがトレーナーに感謝することなんてできないからねえ、反逆される時には「おんがえし」は威力を発揮しない訳さ」

語り終えたサンヨウは、もう一度釘を刺すようにグレイに話しかける。

「いいかい？ ジムリーダーのサンヨウが反逆対策のために「おんがえし」を覚えさせてるなんて言ったらダメだよ？ ポケモンを信頼するのがトレーナーの正しい姿勢で、ポケモンが反逆するなんて考えるとはジムリーダー失格だ！ なんて言う人もいるからね」

「分かってますって！ 誰にも言わないですよ」

グレイにとっては、ポケモンが反逆することを想定することがジムリーダーの資質を疑われる行為であるように思えなかったが、とりあえず誰にも言わないことを再度約束した。

ジムの入り口まで送ってもらっている途中、グレイはサンヨウにたずねる。

「ところでその「おんがえし」って技、ギャラドスでも覚えられる技なんですか？」

「なんだいグレイちゃん？ ギャラドスに「おんがえし」を覚えさせたいのかい？」

「はい」

「よし分かった。この後はジム戦が何件か入ってるから、また夕方に来てくれるかね？ そしたらギャラドスに「おんがえし」を教えてやるさ」

「ありがとうございます。また夕方に来ます」

「気にすることないよ。じゃあまた夕方にね」

こうして、ジムリーダーのサンヨウとの戦いは幕を下ろした。

グレイは3つ目のジムバッジを手に入れ、さらにギャラドスに「おんがえし」を覚えさせるといふ新たな制御方法を学んだのであった。

11話目～25話目の設定紹介

11話目～25話目までの簡単なおさらい、名前のある登場人物及び手持ちポケモンを紹介します。

あらすじ

成長（11話目、12話目）

- ・主人公の少年グレイと、トラベル地方のジムリーダーの1人であるゴンとのバトル。
- ・グレイのチョコロネコがレパルダスに進化。
- ・ポケモンを分類やタイプだけで判断してはいけなとゴンからアドバイスされる。
- ・ゴンに勝利し、初めてのジムバッジを入手。
- ・グレイのギャラドスが「たきのぼり」を習得。

本質（13話目）

- ・規格外なチルタリスを連れたトレーナーとのバトル。
- ・分類では測れないポケモンの本質について、グレイは自分なりの答えを見つける。

（13話目と14話目の間）

- ・グレイは2個目のジムバッジを入手。

漆黒の者（14話目、15話目）

- ・ポケモン保護施設「幸運の家」にて、生命について研究しているという謎の組織「ライフ団」と接触。
- ・グレイと、ライフ団のB級戦闘員アークとの戦い。
- ・「幸運の家」のポケモンであるラッキーの力をかりて辛勝する。
- ・グレイの手持ちにラッキーが加わる。

漆黒の者（裏）（16話目）

- ・もう1人の主人公エレナの視点。
- ・エレナと、ライフ団のA級戦闘員シャルラとの戦い。
- ・エレナは全力を尽くして戦うが、シャルラの本気の前に敗北。
- ・ライフ団のシャルラは、エレナに勝利した後に治安組織のトレーナーとも交戦して勝利。ただし作戦自体は失敗し、シャルラ及びライフ団は撤退。

（15話目と17話目の間）

- ・グレイのラッキーはハピナスに進化。

武闘派（17話目）

- ・再びグレイの視点に戻る。
- ・ポケモンを分類で判断せず、本質を見極めるというゴンの教えを実践してきたグレイ。
- ・ハピナスは本来は極端に力が弱いポケモン。しかしグレイは本質を見極め、ハピナスを武闘派として育てた。
- ・武闘派ハピナスが無双する話。

湖岸の戦場（18〜20話目）

- ・グレイとエレナによるバトル。
- ・人間にとってポケモンとは何なのか？

古代の生命1（21話目）

- ・巨体ポケモンの使い手イザルとの出会い。
- ・グレイとイザルの簡易なバトル。
- ・バトル後、グレイとイザルは現代では絶滅した古代ポケモンのプテラと接触。

古代の生命2（22話目）

- ・危険な古代ポケモンを駆除するために、グレイとイザル（と治安組織の人）は山へ。
- ・山奥で怪しい施設を発見。中でライフ団の姿を目撃。

古代の生命3（23話目）

- ・グレイとイザルは、ライフ団のオコトとナオミと戦う。
- ・グレイと、ライフ団のオコトによる戦い。

同盟強攻（24話目）

- ・イザルに案内されて、グレイはバトルクラブに足を運ぶ。
- ・グレイは偶然エレナと会う。
- ・グレイと、エレナ&イザルによるマルチバトル。

猛獣使い（25話目）

- ・イザルの母親でもあり、トラベル地方のジムリーダーの1人でもある、猛獣使いのサンヨウとのバトル。
- ・サンヨウに勝利し、グレイは3個目のジムバッジを入手。

・ギャラドスが「おんがえし」を習得。

登場人物紹介

ポケモンの種族名の横で「」で囲まれているものはニックネームを表す

グレイ

手持ちポケモン：ビビヨン／ギャラドス／チヨロネコ（11話まで）→レパルダス（12話以降）／ラッキー（15話）→ハピナス（17話以降）

・主人公の少年。

・元不良（今も不良？）だが、根は善人で比較的素直な性格。

・本人は無自覚だが、自分のポケモンと目を合わせるだけで考えを少し読み取れる能力をもっている。ただし自分のポケモンの考えしか分からない。

・自分のポケモンは大切にしているが、ポケモン愛好家という訳ではない。

・言うことを聞かないギャラドスを連れているせいか、人間がポケモンを完璧に制御することは不可能という考えをもっている。

種族：ビビヨン「ビビ」

タイプ：虫／飛行

技（11～17話）： ちょうおんぱ／しびれごな／むしのていこう／サイケこうせん

技（18～25話）： ちょうおんぱ／しびれごな／むしのさぎめき／サイケこうせん

特性： ふくがん（命中率が上がる）

性別： ♀

・グレイの相棒。

・グレイの言うことを素直に聞き、グレイを困らせることは無い。

・バトルでは基本的に狙撃に徹して遠距離から一方的に攻撃するスタイル。狙撃だけでは戦えない場合は相手を麻痺させたり眠らせたりと、搦め手を使っていく。

・弱点は、非力で打たれ弱い所。

・地域によって異なる模様をもつビビヨンだが、このビビヨンは「みやび模様」。

種族： ギャラドス「KK」

タイプ： 水／飛行

技（11～12話）： にらみつける／たいあたり／かみつく／りゅうのいかり

技（13話）： にらみつける／たいあたり／かみつく／たきのぼり

技（14～25話）： にらみつける／あまごい／こおりのキバ／たきのぼり

技（25話終了時）： にらみつける／あまごい／おんがえし／たきのぼり

特性： いかく（威嚇して相手の攻撃力を下げる）

性別： ♂

・ ミスター戦闘狂。

・ 強いけど言うこと聞かない系キャラ。

・ 戦闘狂でバトルを求めるコイツがグレイをバトルの世界に引きずり込んだ。

・ 戦闘スタイルは、真正面から相手に突っ込んでいくゴリ押しな戦い方。攻撃技の他にも、長い胴体、鋭い牙、硬い頭、太い尻尾など、全身を利用した肉弾戦が得意。

・ 攻撃的な指示には常に従うが、防御寄りな指示は気分次第では無視することがある。

・ 弱点は特にないが、指示無視によって不要なダメージを受けることが問題点。

種族（11話）： チョロネコ

種族（12話以降）： レパルダス「レパ」

タイプ： 悪

技（11～12話）： なきごえ／すなかけ／みだれひっかき／
おいうち

技（13～25話）： ねこだまし／すなかけ／みだれひっかき
／おいうち

特性： じゅうなん（麻痺にならない）

性別： ♀

- ・ 意表を突くハンター。
- ・ 相手の隙を見つけたらトレーナーの指示を待たずに攻撃する。
- ・ 弱点は打たれ弱い所。

種族（15話）： ラッキー「姐さん」

種族（17話以降）： ハピナス「姐さん」

タイプ：ノーマル

技（15話）：タマゴうみ／リフレッシュ／うたう／マジカルシャイン

技（17話～25話）：タマゴうみ／メガトンパンチ／うたう／カウンター

特性：しぜんかいふく（ボールに戻ると状態異常が治る）

性別：♀

・武闘派ハピナス

・本来は非力なポケモンであるはずのハピナスだが、なぜだか武闘派に成長。規格外ポケモンの1体。

・ただし、本当に力強い相手との正面のぶつかり合いには力負けする。

エレナ

手持ちポケモン ジュカイン／アブソル／チルタリス／リザード（16話）→リザードン（18話以降）

・ライバル兼ヒロイン兼もう1人の主人公の少女。

・真面目な性格。

・頭の回転が速く、それに加えて努力家でもある。

・ポケモンに対しては、愛情を伴う厳しさをもって接している。

種族：ジュカイン

タイプ：草

技：こうそくいどう／リーフブレード／タネマシンガン／にらみつける

特性：しんりよく（ピンチの時に草タイプの技の威力が上がる）

性別：♂

・エレナの相棒。

・エレナの最初のポケモン。ポケモン研究所の出身。

・「リーフブレード」と「タネマシンガン」を同時に操ることができ、右手に草の剣、左手に草の銃を持つ戦闘スタイルで相手を攻める。

・弱点は特にない。

種族：アブソル

タイプ：悪

技：つるぎのまい／つじぎり／サイコカッター／かげぶんしん

特性：きょううん（攻撃が相手の急所に当たりやすい）

性別：♀

・エレナのエース。

・エレナへの忠誠心が非常に強い。

・「つじぎり」と「サイコカッター」を同時に操ることができる。

・弱点は、エレナの指示がないと100%の力を引き出せないこと。

種族：チルタリス

タイプ：ノーマル／飛行

技（16話）：みだれづき／ついばむ／コットンガード／うたう

技（18話以降）：みだれづき／りゅうのはどう／コットンガード／うたう

特性： しぜんかいふく（モンスターボールに戻ると状態異常が治る）

性別： ♀

・ 万能なるモフモフ。

・ 連続攻撃技、遠距離攻撃技、防御技、補助技と、何でもできそうな万能感がすごい。

種族（16話）： リザード

種族（18話以降）： リザードン

タイプ（16話）： 炎

タイプ（18話以降）： 炎／飛行

技（16話）： えんまく／ほのおのキバ／りゅうのいかり／ドラゴンクロー

技（18話以降）： えんまく／はじけるほのお／エアスラッシュ／ドラゴンクロー

特性： もうか（ピンチの時に炎タイプの技の威力が上がる）

性別： ♂

・ 新入りの炎竜。

・ 未熟で戦闘スタイルの方向性があまり決まっていない。

イザル

手持ちポケモン（登場済のみ） ハガネール／コモロー／

種族：ハガネール

タイプ：鋼／地面

技：ロックカット／アイアンテール／あなをほる／がんせきふうじ

特性：がんじょう（一撃で倒れない）

性別：♀

・イザルの相棒兼エース。

・身体が重いハガネールだが、「ロックカット」によって素早い動きが可能。

・「あなをほる」を利用した地中と地上を複雑に行き来する戦い方が得意。

・非常に高い防御力をもち、このハガネールを物理攻撃だけで倒し切ることは困難。

ゴン

手持ちポケモン（登場済のみ） ミニリュウ／クリムガン／ギャラドス

・トラベル地方に8人いるジムリーダーの内の1人。ドラゴン使い。
・本人曰く、ドラゴン使いの「ドラゴン」とはドラゴンタイプの事では無く、本当の意味でのドラゴンを指す。

・ポケモンについて既存の分類に疑問をもっており、タイプによる分類やタイプ相性の正確性に疑問をもっている。

種族：ミニリュウ

タイプ：ドラゴン

技：りゅうのはどう／アイアンテール／でんじは／はかいこうせん

特性：だっぴ（状態異常が自然回復する）

性別：♀

・破壊光線による一撃。

・「でんじは」で相手を鈍らせて「はかいこうせん」を直撃させることを狙う。

種族：クリムガン

タイプ：ドラゴン

技：ドラゴンクロー／アイアンテール／ほのおのキバ／あくのはどう

特性：さめはだ（触れた相手を傷つける）

性別：♂

・鈍いが硬い。

・「ドラゴンクロー」で爪を横を振り抜き、その流れで「アイアンテール」の尻尾の一撃を放つ。

・遠距離攻撃として「あくのはどう」も備えている。

種族：ギャラドス

タイプ：水／飛行

技：たきのぼり／かいりき／かみくだく／りゅうのいかり

特性：いかく（威嚇して相手の攻撃力を下げる）

性別：♂

・グレイのギャラドスが超えるべき壁。

・グレイのギャラドスの「たいあたり」に対して「かいりき」、グレイのギャラドスの「かみつく」に対して「かみくだく」と上位互換の技で立ちはだかった。

アーク

手持ちポケモン フシギバナ／ヘルガー／ランクルス／スターミー／スターミー

- ・ライフ団のフェニックス派。B級戦闘員。
- ・チームワークで攻める戦術をとる。
- ・手持ち全員が何かしらの回復手段をもつ。

種族 : フシギバナ

タイプ : 草／毒

技 : やどりぎのタネ／ギガドレイン／こうごうせい／ねむりごな

特性 : しんりょく（ピンチの時に草タイプの技の威力が上がる）

性別 : ♂

・他人を犠牲にして自らの命を永らえさせる、というライフ団（のフェニックス派）の思想を体现するポケモン。

種族 : ヘルガー

タイプ : 悪／炎

技 : ゆめくい／あくのはどう／れんごく／かぎわける

特性： はやおき（眠りから早く目覚める）

性別： ♂

・アークのポケモン全員が回復技を覚えているようにしたかった為、申し訳程度に「ゆめくい」を搭載。フシギバナの「ねむりごな」からのコンボで回復させる予定だったが結局描写なし。

種族： ランクルス

タイプ： エスパー

技： じこさいせい／サイコキネシス／シャドーボール／めいそう

特性： マジックガード（攻撃以外ではダメージを受けない）

性別： ♀

・攻防共に隙が無い。

・結局グレイのギャラドスにゴリ押しされて倒された感がある。

種族： スターミー

タイプ： 水／エスパー

技： じこさいせい／まもる／ハイドロポンプ／リフレクター

特性： しぜんかいふく（モンスターボールに戻ると状態異常が治る）

性別： 不明

・体力供給タンク。

・ぶっちゃけスターミーである必要はなかった。

種族： スターミー

タイプ： 水／エスパー

技： じこさいせい／まもる／ハイドロポンプ／ひかりのかべ

特性： しぜんかいふく（モンスターボールに戻ると状態異常が治る）

性別： 不明

・ 体力供給タンク。

・ ぶっちゃけスターミーである必要はなかった。

シャルラ

手持ちポケモン ラフレシア／ファイアロー／マグカルゴ／エレザード

・ ライフ団のフェニックス派。A級戦闘員。

・ 女王様気質。

・ 快晴時には凄まじい強さを発揮する。

種族： ラフレシア

タイプ： 草／毒

技： あまいかおり／こうごうせい／ギガドレイン／にほんばれ
特性（通常の効果）： ようりよくそ（日差しが強い時、素早さが上昇する）

特性（規格外特性）： ようりよくそ（非公開）

性別： ♀

・ シャルラの主力で相棒的存在。

・ 実はまだ本気を出していない。

種族：ファイアロー

タイプ：炎／飛行

技：にほんばれ／ソーラービーム／フレアドライブ／はねやすめ

特性：ほのおのからだ（触れた者に火傷を負わせることがある）

性別：♀

・補助技、何かと便利な遠距離技、激しい特攻技、ライフ団が好んで使う回復技。という技構成。

種族：マグカルゴ

タイプ：炎／岩

技：じこさいせい／はじけるほのお／いわなだれ／ドわすれ

特性：ほのおのからだ（触れた者に火傷を負わせることがある）

性別：♂

・ライフ団基本の回復技を搭載。

種族：エレザード

タイプ：電気／ノーマル

技：チャージビーム／パラボラチャージ／あくのはどう／はかいこうせん

特性：サンパワー（日差しが強い時に、体への強い負担と引き換えに特攻が上昇する）

性別：♂

・シャルラの切り札。今までの話で実際に登場したポケモンの中では最強。

・「パラボラチャージ」という回復手段はあるが、特性の関係で持久力がないのでシャルラはあまり積極的には使いたがらない。

・特性サンパワーで体力が尽きる前に「パラボラチャージ」で相手から体力を奪い続けなければならない。他人を犠牲にして自らの命を永らえさせるというライフ団を姿を表しているポケモンとも言える。

オコト

手持ちポケモン ネンドール／ポリゴン2／ゴルーグ

・ライフ団のリザレクション派。B級戦闘員。

・手持ちポケモンは、何となく人工物っぽいポケモンで固められている。

種族 ： ネンドール

タイプ ： 地面／エスパー

技 ： コスモパワー／だいちのちから／げんしのちから／ふういん

特性 ： ふゆう（常時浮遊状態）

性別 ： 不明

・オコトのエース、切り札。

種族 ： ポリゴン2「ポリゴン」

タイプ ： ノーマル

技 ： チャージビーム／でんじほう／でんじは／ワンダールーム

特性 ： ダウンロード（攻撃か特攻が上昇）

性別：不明

・電気技が多い。

種族：ゴルーグ

タイプ：地面／ゴースト

技：てっぺき／じゅうりよく／シャドーパンチ／じしん

特性：てつのこぶし（拳を使った攻撃が強い）

性別：不明

・"じゅうりよく"&"じしん"で誰にでも攻撃できる。当然ながら味方も巻き込む。

ナオミ

手持ちポケモン（登場済のみ） アーマルド／ユレイドル／カブト
ブス

・ライフ団のリザレクション派。B級戦闘員。
・化石ポケモンの使い手だが戦闘描写はない。

サンヨウ

手持ちポケモン（登場済のみ） カエンジシ／ライボルト／レパル

ダス

- ・トラベル地方に8人いるジムリーダーの内の1人。猛獣使い。
- ・イザルの母親。
- ・ポケモンに噛み千切られたせいで右手の小指が無い。
- ・登場した手持ちポケモンは全員「おんがえし」を覚えている。
- ・イザルから情報を引き出し、明らかなグレイ対策を行ってバトルするという大人げなさもある。

種族 : カエンジシ「マロンちゃん」

タイプ : 炎／ノーマル

技 : にほんばれ／ワイルドボルト／おんがえし／ふるいたてる

特性 : どうそうしん（同じ性別の相手に強い）

性別 : ♂

- ・明らかなグレイのギャラドス対策。
- ・ギャラドスが苦手とする電気技「ワイルドボルト」を搭載。
- ・ギャラドスの特性いかくも「ふるいたてる」で対策。
- ・グレイのギャラドスが性別♂であるので、特性ふるいたてるもハマル（特性については描写なし）。
- ・炎タイプの攻撃技を使えないのに「にほんばれ」を覚えているという、徹底したグレイのギャラドス対策。
- ・技は一晩でサンヨウが覚えさせた。

種族 : ライボルト「レモンちゃん」

タイプ : 電気

技 : かみなりのキバ／エレキフィールド／おんがえし／かみくだく

特性（通常の効果） : せいでんき（触れた者を麻痺させること

がある)

特性(規格外特性) : せいでんき(任意のタイミングでのみ、触れた者を確実に麻痺させる)

性別 : ♂

・電気タイプ。ギャラドス対策であると推測できる。

・"エレキフィールド"は、グレイのハピナスの"うたう"対策かと勘繰ってしまうが、さすがにそれは疑いすぎであろう。多分。

種族 : レパルダス「ブドウちゃん」

タイプ : 悪

技 : ねこだまし／みだれひっかき／ダメおし／おんがえし

特性(通常の効果) : かるわざ(身軽な時に素早さが上昇する)

特性(規格外特性) : かるわざ(身軽な時に技を発動する際、2回分の技を同時に使える)

性別 : ♂

・通常の特性とは異なる規格外特性により、身軽な時に素早さ上昇だけでなく技を2回同時に使える強力なポケモン。

・規格外特性により、"ダメおし"を効果的に使える。

・規格外特性により、"みだれひっかき"が驚異的な技となる。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~18068

トラベル・トラベル・ポケモン世界
2017年02月24日 23時06分発行